

紀要

沖縄埋文研究 3

論考

- 沖縄貝塚時代集石遺構集成安座間 充 (1)
宮古・八重山諸島のグスク時代出土の骨鍔様製品考盛本 勲 (15)
先島諸島出土の骨製品について久貝 弥嗣 (29)

報告

- ジュンゴン骨に関する出土資料の集成(補遺・1)盛本 勲 (39)
南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査(II)
—海洋採集遺物からみた海上交通—
.....宮城 弘樹・片桐 千亜紀・比嘉 尚輝・崎原 恒寿 (43)
本部町瀬底島アンチ浜海底発見の礎石
.....片桐 千亜紀・比嘉 尚輝・崎原 恒寿 (61)
首里城跡木曳門地区出土の土師器と思われる土器皿瀬戸 哲也 (71)
沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理
付. 14～16世紀の青磁の様相整理メモ新垣 力・瀬戸 哲也 (79)
多良間島の集落遺跡について山本 正昭 (99)
日本復帰後33年間の県内埋蔵文化財発掘調査
1972(昭和47)～2005(平成16)年安里 嗣淳 (107)
琉球考古学文献散歩(3)安里 嗣淳 (121)

2005年

沖縄県立埋蔵文化財センター



写真1 遺跡遠景



写真2 石列遺構



写真3 集石遺構

砂辺サーク原遺跡（すなべさーくばるいせき）

砂辺サーク原遺跡は中頭郡北谷町字砂辺小字加志原、村内原の標高15m前後の石灰岩台地上に形成される貝塚時代後期からグスク時代初め頃にかけての遺跡である。

沖縄県教育庁文化課によって1985年、発掘調査が実施されており、その際にグスク時代に相当する柱穴、石列遺構、集石遺構が確認されている。主な出土遺物としては玉縁白磁碗の口縁部、カムイヤキ、滑石製石鍋、グスク土器といったグスク時代初め頃の様相を示す遺物が出土している。調査区が南北2m×東西108mと限られていたため、建物プランを把握することはできないが、径が小さい柱穴の密集域、径の大きい柱穴の分布域、遺構の空白域というように当該期における集落の様相をある程度、窺い知ることができる。他に、柱穴の根石に石皿を使用するといった稀有な再利用事例や、鉄滓や羽口が出土していることから鍛冶跡が想定される点などが注目される。

近年、とりわけグスク時代の開始時期に関する問題が取り上げられ、当該期における集落遺跡の発掘事例も増加していることから、集落内における様相を窺い知る上で今一度、再評価を加えるべき遺跡と思われる。

（山本正昭）



写真1 調査区全景（遺構検出状況）



写真2 50号・58号竪穴住居跡

シヌグ堂遺跡（しぬぐどういせき）

シヌグ堂遺跡は、うるま市（旧与那城町）の宮城島（字上原小字万川原・仲原）に所在する沖縄貝塚時代中期（縄文時代晩期）の遺跡で、島の中央部に位置する石灰岩丘陵上（標高97～112m）に立地している。

1982年から1984年にかけて発掘調査が行われ、5段の海岸段丘上に形成された大規模な集落遺跡であることがわかった。また、東側崖下には貝塚も形成されていることが確認された。3カ年にわたる調査では40軒にも及ぶ竪穴住居跡を主体に礫床住居跡（12軒）、炉跡、柱穴、土留め石積みなどの遺構が検出されている。竪穴住居跡は基盤の琉球石灰岩を壁面などにうまく活用している。また、住居跡の重複（切り合い）関係も把握され、各住居跡が時間差をもって存在していたことがうかがえる重要な資料となっている。

出土遺物では仲原式土器と称される尖底の深鉢形土器が主体をなし、他に石斧や磨石・石皿・石鏃などの石器類、骨針・骨錐・イヌ、イノシシ、サメの歯製有孔製品などの骨牙製品、スイジガイ製利器やヤコウガイ製貝匙、貝製容器、貝輪、サメ歯状模造貝製品など多種多様の遺物が出土している。

当該遺跡は沖縄貝塚時代中期（縄文時代晩期）を代表する集落遺跡で、集落形態や住居形態、出土遺物等をとおして当時の社会的・文化的状況を解明していくうえで欠くことのできない重要な遺跡である。 （岸本義彦）



写真3 チャート製石鏃

沖繩埋文研究

第 3 号

目 次

巻頭カラー図版

- 砂辺サーク原遺跡
シヌグ堂遺跡

論考

- 沖繩貝塚時代集石遺構集成安座間 充 1
宮古・八重山諸島のグスク時代出土の骨鏃様製品考盛本 勲 15
先島諸島出土の骨製品について久貝 弥嗣 29

報告

- ジュンゴン骨に関する出土資料の集成（補遺・1）盛本 勲 39
南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査（Ⅱ）
—海洋採集遺物からみた海上交通—宮城弘樹・片桐千亜紀・比嘉尚輝・崎原恒寿 43
本部町瀬底島アンチ浜海底発見の礎石片桐千亜紀・比嘉尚輝・崎原恒寿 61
首里城跡木曳門地区出土の土師器と思われる土器皿瀬戸 哲也 71
沖繩における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理
付. 14～16世紀の青磁の様相整理メモ新垣 力・瀬戸哲也 79
多良間島の集落遺跡について山本 正昭 99
日本復帰後33年間の県内埋蔵文化財発掘調査
1972（昭和47）～2005（平成16）年安里 嗣淳 107
琉球考古学文献散歩（3）安里 嗣淳 121

沖縄貝塚時代集石遺構集成

Compilation of Stone Clusters in Okinawa Shell-mound Period

安座間 充

AZAMA Mitsuru

ABSTRACT: A number of Late Jomon Period (Late Okinawa Shell-mound Period) sites have been reported in the Okinawa Archipelago district; however, their contents have not been studied in detail. In this paper, a compilation of stone clusters from the Okinawa Shell-mound Period is carried out in order to establish a data base for the future analysis. The author also makes an attempt to compare the stone clusters of Okinawa and Amami districts.

1. はじめに

奄美・沖縄諸島地域では縄文時代後期・相当期(沖縄編年の貝塚時代前期)を検出数上の盛期に集石遺構の検出例が徐々に蓄積されつつあるが(表2), その内容的な検討はあまりなされていないと思う。今回, 沖縄諸島地域における貝塚時代早・前・中期(縄文時代相当期)および同後期(概ね弥生時代~平安時代併行)を対象に既報告資料の集成を行い¹⁾, 今後の継続的研究にむけた基礎データとしたい。

概念の整理) 今回集成の前提としてまず集石遺構の概念整理を行う必要がある。一般に「集石遺構」として扱われる遺構は, 縄文時代草創期・早期によくみられる被熱破碎・赤化した礫が1箇所に集積された(あるいは一定の範囲が観取される)ものを指す場合が多く(表1参照), 2003年2月行われた第13回九州縄文研究会宮崎大会(テーマ・九州の縄文時代集石遺構と炉穴)でも, 集石遺構を「人為的な加熱による破碎・赤化礫が集積した遺構」の共有認識により集成を行っている(九州縄文研究会編2003)。

沖縄考古学においても同様「集石遺構」と聞きまず連想されるのは, 宮古島浦底遺跡(南琉球新石器時代後期; Shijun.A1990)や沖縄島伊武部貝塚(縄文時代後期相当; 沖縄県教委1983)における検出遺構のような調理施設的性格が類推される「集石遺構」「集石炉」であろう。だが一方で機能的内容的には不詳だが, 礫が集中した状態から「集石遺構」と報告されるケースも少なくない。徳永貞昭氏(徳永1990)も述べるように, 被熱破碎礫や構成礫の分布範囲, 遺物内容等から, その機能的性格的な推測幅がある程度狭め得るものは「焼礫集積遺構」「集石炉」などと呼び分けるのが望ましいように思う。やや回り道をした感も否めないが, 本稿では報文記載に「集石遺構」とあるものも包括的に集成した。

作業前提) 集石遺構は遺構規模=礫範囲や被熱の有無等から機能的性格的な類推も概ね可能である。今回の集成の作業前提として, まず県内既報告資料の報文記載にみる分類を参考にみることにする。沖縄県内では九州本土でみられるような集石遺構の検出例は少なく, 各構成要素・属性による分類も殆ど行われていない状況にある。伊武部貝塚では遺構規模・構成礫の状況および掘込の有無等から「集石炉」「土壙集石遺構」「石敷集石遺構」というように機能・性格を意識した名称を用いている(沖縄県教委1983)。集石遺構が15基以上確認された宮古島アラフ遺跡では, 構成礫の粗密状況や掘込の有無から分類, A類(掘込なし)とB類(掘込あり)に類別している(アラフ遺跡発掘調査団2003)。

集石遺構属性表(表2)は, 基本的には九州縄文研究会編2003の集成表を参考に, 出土遺物の内容も報告書記載からでき得る限り遺構単位にまとめた。以下に表中の各属性について簡記しておく。

表1. 主な概説書および主要論文にみる「集石遺構」の定義・説明

文献名 執筆者	集石遺構
『世界考古学事典』 平凡社 1979年	径1~2mの範囲に大小さまざまな礫が多数あつまり見られる遺構。たんに礫群とよぶこともある。その性格や用途は必ずしも明確ではない。集石の下に土壌のあるもの、集石の下がくぼんでいる程度のも、土壌がなく礫の積まれただけのもの、礫自体が火熱を受けて焼石群となっているもの、また焼石や炭化物などの、火を用いた痕跡がまったくないものなどさまざまな形態がある。礫の多少もまちまちである。前述のように性格は明らかではないが、焼石や焼土、炭化材の存在するもののあることなどから、調理場としての性格も考えられ、ポリネシアなどにみられる、いわゆるストーン・ボイリングstone boilingとの比較も試みられている。日本では先土器時代のほか、縄文早期にしばしばみられる。礫がまとまりをもたずに漠然とした範囲の中に集められている場合にも集積遺構とよぶことがある。
『日本考古学用語辞典』 学生社 1998年	先土器時代・縄文時代早・前期にみられる特殊遺構。焼けた拳(こぶし)大ぐらいの石塊がほぼ円形に集まって、径二~三mぐらいの円状をなす。石を焼きその熱により食物を蒸したものと考えられている。しかし近年その対象の範囲は広く、石塊などを一つの区域にまとめて配したものを呼称するようになった。
『最新日本考古学用語事典』 柏書房 1996年	人為的に集められた石の集合体。特定の形を呈することはないが、特に円形に集中するものに対して、そこに人為を読み取り、遺構として判断する場合が多い。配石遺構との区別もそれほど明確になされぬままに使用されているが、配石遺構に使用される石の大きさに比べて、より小さな石からなるものを指す傾向がある。先土器時代では礫群という用語を使用し、集石遺構と呼ぶことはまれである。
『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994年	礫が集合状態にある遺構で、礫が意図的に配列されたり組石などになっているものは配石遺構と呼んで区別している。集石遺構には、礫だけが集合状態にあるものと、土坑内に礫が集合状態にあるものと大きく分けられる。また集合状態にある礫が、自然の礫からなっているものと、礫が火熱を受けて赤色化し、多くが破碎されている、いわゆる被熱破碎礫からなるものがある。特に後者の場合には、礫に煤やタール状の付着物がつくものや、遺構内から炭化物が検出されることが多い。この被熱破碎礫からなる集石遺構のうち、土坑をともなわないで礫だけが集合状態にあるものは構成礫群と呼び、主に岩宿時代に蒸焼きや石焼き調理の施設として使われたものである。それに対して、土坑内に被熱破碎礫が集合状態にあるものは集石土坑と呼び、縄文時代に蒸焼きや石焼き調理の施設として使われたものと考えられている。また、自然の礫だけが集合状態にあるものは、様々な機能・用途が想定されるが、それらは個々の遺跡の実態に即した検討が必要であって、一般に機能や用途を規定しない包括的な呼称として集石あるいは集石遺構が用いられることが多い。
徳永1990(九州縄文時代の集石遺構)	人為的な加熱に因ると思われる赤化や破碎などの状態を示す礫が径約1m前後の範囲に集中する(九州で殊に縄文時代早期に普遍的に検出される)狭義には上田則男氏や谷口康浩氏が主張するように「焼礫集積遺構」が妥当であると考えられるが、受熱の有無は明らかでないが形態的に区別できない遺構も含めて扱うため、より包括的な用語として「集石遺構」を採用する。
八木澤1994(南九州の集石遺構)	他の地点と比べて直径1m前後の範囲に礫が集中する遺構とし、受熱の有無は明らかでないが、形態的には区別できない遺構をも含める。
九州縄文研究会(編) 2003	人為的な加熱による破碎・赤化礫が集積した遺構。

(表2における集石遺構属性 凡例)

- 遺跡番号および遺構番号：後者は報告書記載にある遺構名・番号。
- 帰属時期：遺構内・周辺出土の土器型式等から導かれる帰属年代観。
- 礫範囲・平面観：長軸×短軸(単位m)および平面観。
- 断面観：
- 礫個数・重量：報告書記載に構成礫個数・重量計測がある場合記載。
- 深度：掘込みの深さ。掘込み無し(もしくは認められない)場合「×」。
- 礫密度：密(>やや密)>やや疎>疎 で表現。
- 炭化物の有無：○(一定量),△(僅量だが確認),×(全く認められず)。
- 出土遺物：集石遺構内から得られた遺物の内容(土器その他の製品, 獣魚骨・貝類等の自然遺物)。
- 備考等：構成礫の材質・分布状況や調査者・報告者による遺構内容(機能・性格等)に関する所見など。

2. 沖縄貝塚時代の集石遺構—概要—

沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構を概観するにあたり、同じ琉球列島中部圏内にある奄美諸島地域の集石遺構についても触れる必要がある。該地域の縄文時代集石遺構については八木澤一郎氏が「鹿児島県下の縄文期集石Ⅱ」で集成・検討しており、そのなかで九州南部・大隅諸島地域との比較からその地域的特徴について言及している(八木澤1993)。重要な指摘なので以下箇条書きに整理する。

①九州南部・大隅諸島地域と奄美諸島地域における検出数・帰属時期の差異

大隅諸島地域は九州同様縄文時代早期に検出数のピークがあるが、奄美諸島地域では縄文時代中期～後期(相当期)にほぼ収束され縄文時代前期より遡る例は未検出。

②集石遺構の検出遺跡における遺跡立地の差異

九州と異なり奄美諸島地域では内陸性高地に立地する縄文晩期相当遺跡では住居跡に伴う検出例はほぼ皆無であり、11遺跡例すべて臨海砂丘・旧砂丘にある状況から調理対象は魚類・貝類と類推。

③集石遺構検出数と礫・石材産出地域の関係

当該島嶼地域における集石遺構検出例は奄美大島(10遺跡)および徳之島(1遺跡)にほぼ限定され、この島嶼間にみられる差異は堆積岩・火成岩の産出に起因する蓋然性が考えられる。

なお、九州縄文研究会編2003の集成表に該地域の集石遺構検出数の増加はみられず、上記の地域的特徴はそのまま変わらない。以上を踏まえて沖縄諸島地域における貝塚時代の集石遺構を概観する。

沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構は管見で18遺跡あるが^{註2}、土器型式から類推される帰属年代をみると、伊波・荻堂式土器主体期である貝塚時代前期(縄文時代後期)中葉がかなり多く、貝塚時代中期(縄文晩期相当)、貝塚時代後期(弥生～平安時代併行期)は各期ともに1～数例程度である。遺跡立地も、大半は海岸線砂丘や後背沖積地に立地する遺跡の検出だが、古我地原貝塚(沖縄県教委1983)や苦増原遺跡(具志川市教委1977)のように内陸部の石灰岩台地に立地した遺跡での検出例も僅かだがある。面積的規模や掘込み・被熱礫の有無など遺構要素・属性にバリエーションも観取される。

つづいて各報告書記載にみる集石遺構について、遺構内容および調査者・報告者所見を(私見も若干付しながら)整理する。ストーンボイリングや地床炉・礫床炉など調理施設の機能・性格が考えられる集石遺構と、それ以外の性格が考えられる(非調理施設の)集石遺構に分けてまとめた。

調理施設の機能・性格が考えられる集石遺構 伊武部貝塚では集石炉(3基)、土壙集石遺構(5基)、石敷集石遺構(1基)に、遺構遺棄後に破壊されたとみられる集石(3基)の計12基が確認されている。帰属年代観は伊波式土器主体の時期幅に概ね収束される。留意されるのが、遺構間で遺構規模や出土遺物の内容・量的な差異を明確に認める点である。[F12:4](F12グリッド検出遺構4)では複数種類の動物骨魚骨が際立って多く、調査時の状況も炭化物は殆ど認められなかったが被熱破碎礫や焼土が複数みられたという。北原貝塚検出の集石遺構(1・2号)はともに明瞭に掘込を認め、礫分布もきわめて平面的で特徴的である。被熱とみられる破碎礫や煤に似た付着物がみられ、調査者は炉的機能の可能性を推量している。1・2号ともに掘り込みの断面観は略「U」字状を呈すが深度に差異がみられ気になる。南琉球新石器時代の遺跡に似たような内容の集石遺構も確認されている(江上ほか2004)。アラフ遺跡検出の円礫集積遺構(径約0.45m)は、サンゴ石灰岩からなる構成礫中に被熱破碎礫もあるが炭化物は無く、掘込みをもつが礫分布はきわめて平面的で密に敷き詰められた観である。当該期の沖縄諸島地域と宮古諸島を含む先島諸島地域は一般には「別個の文化圏」との共有認識にあるなかで、両島嶼地域との関係を積極的に評価する訳ではない。ただ、両島嶼地域には共通・類似した遺物もあり(盛本1992)、より広汎にその類似性・共通性を考えるうえで興味がひかれる。調理施設の性格が類推される集石遺構のなかで、石灰岩地帯の地域的特性を色濃く反映する例が具志堅貝塚検出の集石遺構であろう。当該遺構で特徴的なのは構成礫が微小貝・小礫を核に石灰分が凝結した「ケイブボール」と呼ばれる径2～3cm程度の小型円礫からなる点である。報文記載によれば、調査区が立地する砂丘地では形成されないことから遺跡外からの持ち込みとみられ、構成礫に被熱を認めるが近接して検出された貝殻一括廃棄では貝殻自体に被熱を認めない状況から、調査者はストーン・ボイリング的な

性格を推量している。検出面の帰属時期は貝塚時代後期前葉(浜屋原式土器期)である。考古学年代上ほぼ同時期の例として真志喜安座間原第一遺跡・第二遺跡検出の集石遺構、阿波蓮浦貝塚Ⅳ層面での被熱礫集中がある。前者の安座間原第一遺跡は貝塚時代前・中期の埋葬遺構群および同後期前葉の集落遺構群の複合遺跡で、被熱礫・軽石を集積した炉址状集石遺構が複数基検出されており、報文記載によれば構成礫は径2～5cm程度の小礫であり、具志堅貝塚例との類似性も想起され興味深い。あわせて、掘込みを伴う拳大程度の礫・軽石からなる集石遺構も10数基検出されているが、調査者所見によれば被熱礫は僅量で、その機能・性格については不詳である。安座間原第二遺跡でも軽石・サンゴ礫・石灰岩礫からなる集石遺構が複数基検出されている。土坑(掘り込み)内に集石されたものと層面(生活面)に集石されたもの(マウンド状?)の二者があり、前者の掘込みを伴う集石遺構はいずれも堅穴遺構に近接して集中的にあり、被熱礫は殆どみられないようである。

その他の機能・性格が類推される集石遺構)ここでは、ストーン・ボイリング(焼石煮沸)やアース・オープン(地炉)といった調理施設の機能・性格の蓋然性が薄い(調理施設以外の機能・性格が類推される)集石遺構および広義での集石遺構に包括されるものをまとめた。伊是名貝塚では堅穴住居覆土上で検出された集石遺構について、調査者は面積的規模や礫被熱が軽度でタール等付着物がみられない状況は、「日常的な加熱施設(調理施設の機能・性格)とみるのは不自然であり、少数回使用後に一括廃棄された大型加熱施設例えば土器焼成施設の可能性」をみている。そして、「住居廃絶後に大型加熱施設として再利用された」可能性を指摘している点は重要である。奄美・沖縄諸島地域の集石遺構を集成すると、堅穴住居遺構と面積的に同規模(径2m以上)の遺構が複数あることに気づく。伊是名貝塚同様堅穴住居遺構覆土上に構築された集石遺構は吹出原遺跡でも確認されている(7号A集石遺構)。住居廃絶後の掘込み・凹面構造を別施設に再利用した可能性も十分考えられるのだが、明らかな被熱・石灰に似た灰固結を伴う例やさほど火熱の痕を残さない例、構成礫の粗密・分布状況などに差異性も観取でき、今後類例をあわせた具体的検証が行う必要がある。吹出原遺跡でも堅穴住居や屋外炉とともに集石遺構が複数確認されているが、集石範囲(面積的規模)およびその平面観から堅穴利用の蓋然性がある集石遺構もある(第2号集石遺構)。遺構内容は不詳だが、報文記載による限り検出時に被熱礫や炭化物など加熱施設的な様相を窺え得る痕跡はあまりみられなかったようで、石器・石材が比較的ある状況から堅穴廃絶後は別施設に利用せず短期間で埋められた印象を報告者は述べている。

大型加熱施設として特記されるのが宇地泊兼久原第一遺跡検出の集石遺構である。現在整理途上で詳細は不詳だが、密に詰め込まれた観を呈する多量の被熱した石灰岩礫、炭化物・灰があり、床構造および壁部の土留めも認められる。気になるのが被熱礫を覆うようにある遺構下部の灰固着層で、他の既報告資料にも例がなく、遺構構造もあわせてその機能的性格的内容を考える上で留意される。他方で、埋葬行為との関係性が類推・思量される集石遺構も、複数の遺跡の報告書記載にみられる。大原貝塚検出の集石遺構(SH01)も構成礫分布は密で面積的にも大きい(長軸約7～8m・短軸約3～4m)。被熱礫・炭化物はみられず面積的規模ともあわせて加熱施設的な性格ではない模様である。平面検出後埋め戻しのため掘込や構成礫分布など断面構造の詳細は不詳だが、実測図・写真からは堅穴遺構廃棄後何らかの意図で礫を密に詰めた観を呈する。比較的広範囲に構成礫の面的分布する集石遺構は具志川島遺跡群南地点の例などがある。なお大原貝塚例では遺構に近接して人骨が検出されており、調査者は埋葬に関係した機能・性格をみている。同様に埋葬行為に関わる可能性がある集石遺構として安座間原第一・第二遺跡検出の集石遺構がある。報文記載によれば安座間原第一遺跡では上位埋葬(貝塚前期中葉～中期前葉頃)に付随してサンゴ円礫を方形状(面的)に敷き均した集石遺構や石灰岩角礫を積上げた積石遺構などがあるという。第二遺跡の層面検出の集石遺構は性格は不詳だがイヌ(家

犬)埋葬遺構の近縁で検出されており、何らかの関係性がある可能性も考えられる。同市内にあるヌバタキ遺跡でも堅穴住居遺構内(仲原式土器期)に掘込を伴わずマウンド状に礫が集積された集石遺構が検出されている。遺構性格は不詳だが人骨(ヒト歯)やシャコガイが確認されており示唆的である。

3. おわりに

今回、沖縄諸島地域における貝塚時代(縄文時代相当～平安時代併行期)の集石遺構を集成した。本稿は以前に筆者が徳之島面縄第2貝塚の発掘調査で集石遺構を目の当たりにした経験が契機のひとつとなっている。また、今年度(2005年)2月に沖縄県をはじめ含めた九州縄文研究会第15回大会が開催された。同研究会では第13回大会テーマ「集石遺構と炉穴」で九州全体での集成を行っているが、該資料における沖縄諸島地域の追補も今回の目的であった。調理施設の集石とそれ以外の機能・性格が考えられる集石遺構で暫定的に線引きをし整理したが、今後より具体的な検討を要することは言を待たない。宮古島地域など南琉球新石器時代の集石遺構集成など残された地域・課題もあわせて今後も継続的に取組み補遺していくつもりである。

成稿に際し下記の先生方にご教示・ご助言を頂きました。殊に当時の調査担当者・報告者の方には検出状況や遺構解釈等に関する話が伺え、筆者の疎い報告書の読解だけでは心もとなかったですが、お蔭で内容的な幅を加え得たと思います。末文ですが記して謝意を表します。(あ～お順・敬称略)

上原 静, 江上幹幸, 岸本義彦, 當銘由嗣, 豊里友哉, 比嘉賀盛, 盛本 勲, 八木澤一郎

(あざま みつる: 調査課 嘱託員)

註

1. 杉井健氏も沖縄貝塚時代前期～近世期までの住居遺構・火処の集成のなかで炉的機能・性格が考えられる集石遺構について集成作業を行っている(杉井2001)。あわせて参照を勧めたい。
2. 1962(昭和37)年に行われた琉球政府文化財保護委員会による山下町第一洞穴遺跡第1次調査でⅢ・Ⅴ層の木炭層において被熱した石灰岩礫が動物骨・魚骨とともに検出されたとある(高宮1968)。

引用・参考文献(編著者名あ～お順・刊行年順)

(論文・レポート等)

木崎甲子太郎(編著).1985.『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社.

九州縄文研究会(編).2003.『第13回九州縄文研究会宮崎大会 九州縄文時代の集石遺構と炉穴-発表要旨・資料集-』九州縄文研究会・宮崎考古学会.宮崎.

杉井 健.2002.「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」.木下尚子(編)『先史琉球の生業と交易-奄美・沖縄の発掘調査から-』.熊本大学木下研究室.

徳永貞紹.1990.「九州の縄文時代集石遺構-研究の現状と課題-」『肥後考古』第7号.肥後考古学会.

八木澤一郎.1992.「鹿児島県下の縄文期集石Ⅰ」『南九州縄文通信』No6.南九州縄文研究会.鹿児島.

———.1993.「鹿児島県下の縄文期集石Ⅱ」『南九州縄文通信』No7.南九州縄文研究会.鹿児島.

———.1994.「南九州の集石遺構」『南九州縄文通信』No8.南九州縄文研究会.鹿児島.

(発掘調査報告書) 文献Noは表2の遺跡番号と一致.

1・2.岸本義彦ほか.1994『具志川島遺跡群-発掘調査報告-』村文化財調査報告第9集.伊是名村教育委員会.

3.林 徹.2001.「3-2.伊是名貝塚の集石」.伊是名貝塚学術調査団(編)『伊是名貝塚—沖縄県伊是名貝塚の調査と研究—』勉誠出版.東京.

4.岸本義彦(編).1986.『具志堅貝塚-発掘調査報告-』町文化財調査報告書第集.本部町教育委員会.

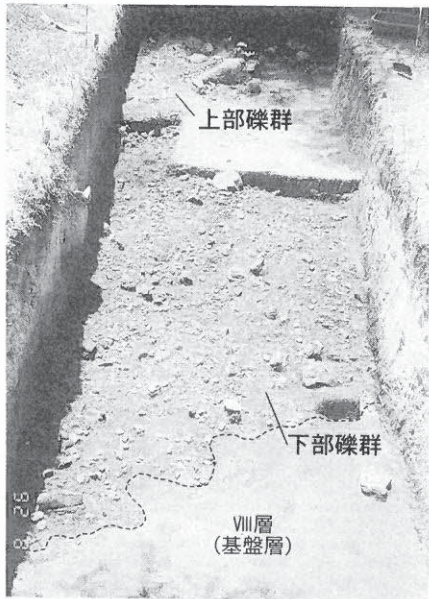
5. 岸本義彦(編).1988.『知場塚原遺跡-発掘調査報告-』町文化財調査報告第5集.本部町教育委員会.
 6. 仲宗根禎・新城卓也(編).2002.『部瀬名南貝塚-市道・部瀬名線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告-』.市文化財調査報告15.名護市教育委員会.
 7. 上原 静(編).1983.『伊武部貝塚発掘調査報告書-国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査- 遺構・貝製品・石器・貝殻編』県文化財調査報告書第51集.沖縄県教育委員会.
 8. 仲宗根求・古堅勝美(編).1990.『吹出原遺跡-個人住宅建築に伴う緊急発掘調査報告書-』村文化財調査報告書第9集 読谷村教育委員会.
 9. 鳥袋 洋(編).1987.『古我知原貝塚-沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)-』(本文編・図版編).県文化財調査報告書第84集.沖縄県教育委員会.
 10. 新田重清・ほか.1977.『苦増原遺跡-沖縄県企業局導水管工事に伴う発掘調査報告書-』市文化財調査報告書第1集.具志川市教育委員会.
 11. 安里嗣淳・島 弘(編).1987.『北谷町 砂辺サーク原遺跡-北谷浄水場への導水管敷設工事に伴う緊急発掘調査報告書-』県文化財調査報告書第81集.沖縄県教育委員会.
 12. 比嘉 聡・ほか(編).1999.『喜友名貝塚・喜友名グスク-宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(I)-』県文化財調査報告書第134集.沖縄県教育委員会.
 13. 『喜友名東原ヌバタキ遺跡 第四次発掘調査記録-商業用店舗建設に係る緊急発掘調査の概要-』市文化財保護資料第39集.宜野湾市教育委員会.
 14. 宜野湾市教育委員会(編).2002.『宇地泊兼久原第一・第二・第三遺跡発掘調査記録-宇地泊第二地区土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査[図録集]-』宜野湾市文化財保護資料第53集.
 15. 松川 章(編).1992.『城間遺跡-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告Ⅲ-』市文化財調査報告書第19集.浦添市教育委員会.
 16. 高宮廣衛・中村 愿・知花一正・山城安生・玉城京子・山城直子・西久保淳美.1999.『沖国大考古』第12号(渡嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告).沖縄国際大学文学部考古学研究室.宜野湾.
 17. 當眞嗣一・上原 静(編).1980.『大原-久米島大原貝塚群発掘調査報告-』県文化財調査報告書第32集. 沖縄県教育委員会.
 18. 盛本 勲(編).1995.『北原貝塚発掘調査報告書』県文化財調査報告書第123集.沖縄県教育委員会. 一. 呉屋義勝・大城 広江・宮城ゆりか(編).1989.「36.真志喜安座間原第一遺跡 37.真志喜安座間原 第二遺跡」『土に埋もれた宜野湾』市文化財調査報告書第10集. 宜野湾市教育委員会.
- Shijun Asato."THE URASOKO SITE—A Sketch Of the Excavation in Photographs—" The Gusuk - ube Town Board of Education. 1990.
- 江上幹幸・松葉 崇(編).2003.『アラフ遺跡調査研究 I -沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告-』アラフ遺跡調査団・六一書房.
 - 金武正紀(編).1985.『シヌグ堂遺跡-第1・2・3次発掘調査報告-』県文化財調査報告書第67集 沖縄県教育委員会.
 - 高宮廣衛.1968.「山下町第1洞」『那覇市の考古資料』(那覇市史資篇第1巻1).那覇市史編集室.

今年度で退職される安里嗣淳所長との最初の接点は、非常勤講師で担当されていた「考古学特講Ⅲ」を学部3年に受講した時である。南洋諸島の吹き矢を持参・実演するなど講義はユニークで和やかな雰囲気だった。どうかいつまでもお元気で。また瀬底の別邸に伺える日を楽しみにしています。

表2. 沖繩貝塚時代集石遺構

No	遺跡名	遺構番号	属層時期 土器型式	サイズ		断面観	掘込の 深度(m)	礫の 密度	配石 有無	炭化物 の有無	その他備考 礫材質・分布状況等
				礫範囲(m)/平面観	礫個数/ 重量(kg)						
1	具志川島遺跡群西地点	—	貝塚後期前半 弥生時代併行	—	—/—	—	—	疎	—	△	トレンチ壁面で確認。
2	具志川島遺跡群南地点	—	縄文後期中葉 (伊波式土器)	—	—/—	—	—	密	—	—	Ⅷ層下部で検出。検出面埋戻しのため詳細は不詳。堅穴状遺構の可能性もあり。
3	伊是名貝塚	1号集石 (PC1)	縄文後期中葉 (伊波式・荻堂式土器)	一辺2.5~3.0mの不整形な略三角形ないし台形状	—/—	—	—	密	×	×	1号住居址覆土上面で検出。構成礫はチャート、砂岩、石灰岩の角礫(拳大程度)主体で面的な分布。礫自体に軽度の被熱認められるが調理施設の機能には否定的。
4	具志堅貝塚	FHⅢ	貝塚後期前半 弥生時代併行 (浜屋原式主体)	1.7×1.3m/不整形な略円形南端に 径0.4m/略円形の土坑	—/—	鍋底状	0.2~0.25 (土坑)	やや疎	×	△	石灰岩礫(数cm大の球状礫)。土坑から掻き出された状態。礫床炉(直接的調理施設)と異なる性格と調査者は解釈。
5	知塚原遺跡	1号土壙	縄文晩期前葉 (宇佐浜式主体)	径0.9m/ほぼ円形	—/—	鍋底状	0.50m	密	×	×	調査者は貯蔵穴の機能も類推。
6	〃	2号土壙	縄文晩期前葉 (宇佐浜式主体)	0.75×0.6m/卵形	—/—	鍋底状	0.15m	疎	×	×	掘込は基盤岩盤まで達している。調査者は貯蔵穴の性格も類推。
7	〃	5号土壙	縄文晩期前葉 (宇佐浜式主体)	0.6×0.5m/略楕円形	—/—	鍋底状	0.15m以下	疎	×	×	掘込は基盤岩盤まで達している。調査者は貯蔵穴の性格も類推。
8	部瀬名南遺跡	—	縄文後期中葉	1.8×1.6m/やや略楕円形	—/—	—	0.35m	やや疎	×	×	構成礫は砂岩、千枚岩が主。掘込もやや不明瞭。
9	伊武部貝塚	第1号土壙 集石遺構	縄文後期中葉	2.5×4.0/楕円形	—/—	鍋底状	0.7m	疎	—	下層○	構成礫は黒色片岩、サンゴ礫、河原石
10	〃	第2号土壙 集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	土壙内基底部から伊波式土器、嘉徳Ⅰ式土器、礫石(砂岩製)2。貝類は、陸産マイマイなど陸産2種1g、海産31種29560g以上。一オオベッコウカサ2・アマオブネ9など潮間帯7種90g、マガキガイ43・シャコウ2・シラナミ10など潮間帯下16種22200g、サラサバタイ5・チョウセンサザエ7・ヒレジャコ3など潮間帯下(リーフ外)8種2720g一多量に検出。	—/—	鍋底状	—	やや密	—	—	
11	〃	第3号土壙 集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.6×1.1m/不整形な長楕円形	—/—	鍋底状	0.25m	疎	—	—	Ⅱ層下部で検出。覆土はⅡ層で宇佐浜式土器を検出。
12	〃	第4号土壙 集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.5×1.0m範囲に不整形	—/—	鍋底状	0.12m	疎	—	—	構成礫は小礫主体。
13	〃	第5号集石 遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.4×1.1m範囲に不整形	—/—	—	—	疎	—	△	礫サイズ大(40cm台) + 小礫。掘込(土壙)認めず。礫分布は面的。被熱礫、煤あり。
14	〃	第1号集石炉	縄文後期中葉 (伊波式土器)	0.7×0.6m/略円形土壙は径0.55m/略円形	—/—	浅めの 鍋底状	0.35m	密	△	○	構成礫はやや大型(20~30cm台)の円礫主体。土壙基底部に礫敷き、炭化木材3点検出。
15	〃	第2号集石炉	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.4×1.3m/略円形土壙は1.0×0.7m/楕円形状	—/—	鍋底状	0.24m	密	△	○	1号集石炉に隣接。遺構上面は面的。構成礫は黒色片岩、サンゴ角礫主体。礫サイズも小礫(10cm未満)~大形礫(50cm台)と多様。
16	〃	第3号集石炉	縄文後期中葉 (伊波式土器)	径1.2mの不整形な略円形土壙は1.0×0.8mの略楕円形	—/—	浅めの 鍋底状	0.30m	密	△	○	構成礫は殆ど黒色片岩、扁平大型礫(20~30cm台)主体。サンゴ礫・小礫も若干量あり。土壙下部に固く灰層。土壙基底に炭化木2点。
17	〃	第4号集石炉	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.1×0.9mの楕円形状	—/—	浅鍋底状	0.15m	密	—	○	
18	〃	石敷集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器主体)	(上部遺構)1.6×1.4m/略方形形状か (下部遺構)2.5×2.5m/略方形形状	—/—	—	0.2m前後	密	△	○	立石石列(石列A)検出。構成礫は黒色片岩主体。
19	〃	その他の集石①	縄文後期中葉 (伊波式土器)	石敷遺構検出レベルで伊波式土器、嘉徳Ⅱ式土器のほか礫石(角閃瑤瑤製)1、ヤコウガイ貝殻1、ベッコウカサガイ製貝輪1。貝類は、陸産マイマイなど陸産3種230g、淡水産3種60g、海産53種16760g以上。一イソハマグリ66・アマオブネ119など潮間帯15種350g、マガキガイ73・アンボンクロザメ7・シラナミ14など潮間帯下26種8520g、ゴホウラ1・サラサバタイ33・チョウセンサザエ15など潮間帯下(リーフ外)12種7890g一多量に検出。なお、石敷遺構下(土壙内)からは嘉徳Ⅰ式土器が検出されたほか小形貝を多量検出(マイマイ、アマオブネなど)。	—/—	—	—	疎	—	—	Ⅲ層中で検出。集石遺構遺棄後に崩れたものか。

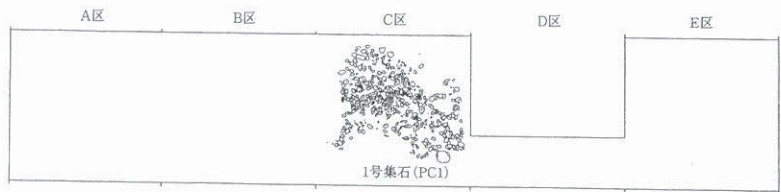
〃	〃	その他の集石②	縄文後期中葉 (伊波式土器)	径約2.1m/平面観不詳(円形か)	—/—	—	—	疎	—	—	Ⅲ層中で検出。集石遺構 遺棄後に崩れたものか。
〃	〃	その他の集石③	縄文後期中葉 (伊波式土器)	径約2.2m/平面観不詳(円形か)	—/—	—	—	疎	△	—	Ⅱ層で検出。集石遺棄後 に崩れたものか。一部に 立石(?)。
8	吹出原遺跡	第2号集石 遺構	縄文後期後葉 (室川式主体)	3.5×2.6m/略方形(楕円形状)	—/—	—	—	密(?)	—	—	上面検出で埋戻し。平面 観察では堅穴状の掘込 に密な礫集合。構成礫は 石灰岩礫主体。
〃	〃	第7号A集石 遺構	縄文後期後葉 (室川式主体)	2.2×1.3m/不整形な楕円形	—/—	略台形状	0.45m	密	—	△(微量)	炭微量検出あるが跡跡 と確定に至らず。構成礫 は石灰岩礫(拳大サイズ) 主体。
〃	〃	第13号B集石 遺構	縄文後期後葉 (室川式主体)	2.0×1.4m/略(長)方形	—/—	—	—	密(?)	—	—	13号A堅穴住居に切ら れる。上面検出で埋戻し し、調査者は堅穴住居址 と想定。
9	古我地原貝塚	第1号遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器 主体)	1.8×1.7m/楕円形状	—/—	浅い歪な鍋底状/0.3m	やや密	—	—	○	石灰岩礫主体で千枚岩 も若干量あり。周縁部に 大型礫、内側に中・小型 礫が多い傾向。礫下部に 焼土面。
10	苦増原遺跡	焼石集石遺構	縄文晩期前葉 (カヤウチ パンタ式主体)	1.5×0.8m範囲に散在	—/—	—	—	—	—	—	二次的に散乱したもの と推量。南側約1mに隣 接する落ち込みと関係(?) 。
11	砂辺サーク原 遺跡	—	時期不詳	0.9×0.8m/略円形	—/—	逆台形状	0.26m	密	×	×	大形(20~30cm台)の石 灰岩礫を積み込んだ状 態。
12	喜友名貝塚 I地区	集石遺構 [F9;12]	縄文後期中葉 ~晩期	2.4×0.3m/不整形な略長方形 土器	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [F11;8]	縄文後期中葉 ~晩期	2.4×0.5m/不整形な略長方形 土器(宇佐浜式に近似した胴部1ほか)。獣魚骨はイノシシ距骨1、リクガメ背甲板破片1、フダイ 科1	—/—	—	0.20m	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [G11;1]	縄文後期中葉 ~晩期	3.1×2.3m/不整形な略長方形 土器片、骨製品(イノシシ尺骨錐状製品)1。獣魚骨はイノシシ(椎体2・上腕骨1・尺骨1)、リク ガメ背甲板破片1、フエフキダイ科2、	—/—	—	0.10m	密	×	×	殆どが拳大程度の石灰 岩角礫。他より比較的 密で内容的に[F12;4] に近い。
〃	〃	集石遺構 [F12;1]	縄文後期中葉 ~晩期	1.15×0.3m/不整形な長方形 土器	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [F12;4]	縄文後期中葉 ~晩期	3.45×1.0m/不整形な長方形 土器(伊波・荻堂とみられる平底1ほか)、石斧転用品(砂岩)1、石皿(凝灰質砂岩)1、骨製品(イ ノシシ下顎大歯加工品)1。獣魚骨類はイノシシ(肋骨2・肩甲骨1・尺骨2・脛骨1・踵骨2・足根 骨2・下顎右歯1)、ジュゴン肋骨1のほかリクガメ背甲板破片2、サメ脊椎骨1、フエフキダイ 科1(体長復元28.0±cm)、ペラ科1、ハリセンボン科1、種不明計5、	—/—	—	0.1m未満	密	×	×	構成礫は大型礫若干あ るが殆ど拳大程度の石 灰岩角礫。落ち込みに 礫が集中した状況で 焼土・被熱破砕礫。
〃	〃	集石遺構 [G12;5]	縄文後期中葉 ~晩期	1.25×0.4m/不整形な長方形 土器	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [G12;6]	縄文後期中葉 ~晩期	0.8×0.3m/不整形な略長方形 遺構内から人工遺物検出されず。	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [G12;7]	縄文後期中葉 ~晩期	0.75×0.4m/不整形な長方形 遺構内から人工遺物検出されず。	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [H12;3]	縄文後期中葉 ~晩期	1.2×0.3m/不整形な長方形 遺構内から人工遺物検出されず。	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [H12;4]	縄文後期中葉 ~晩期	0.6×0.35m/不整形な長方形 土器	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
13	ヌバタキ遺跡	401号堅穴 内検出集石	縄文晩期後 相当	1.35×1.95m/略楕円形か	—/—	—	—	密	×	×	401号堅穴住居跡の中央 付近で検出。構成礫は石 灰岩角礫。
14	宇地泊兼久原 第一遺跡	集石土坑A	縄文後期相当 ~弥生併行期	長軸4.0m前後/略円形	—/—	逆台形状	0.8~0.6	密	○	○	基底(床)、壁部にビー チロック、石灰岩大型 礫(30~50cm大)を配置。 炭層・固着した灰層あり。 祭祀的性格の可能性も。
〃	〃	集石土坑B	縄文後期相当 ~弥生併行期	長軸4.0m前後/略円形	—/—	鍋底状	0.3m	密	△	○	遺構構造・内容は集石土 坑Aと同様だが掘込や や浅め。検出時状況で埋 め戻し。
〃	〃	集石土坑C	縄文後期相当 ~弥生併行期	長軸4.0m前後/略円形	—/—	鍋底状	0.3m	密	△	○	検出時状況で埋め戻し。
15	城間遺跡	貝塚後期後半 (くびれ平底)	貝塚後期後半 (くびれ平底)	1.1×1.0m/略方形	—/—	—	—	やや密	×	×	構成礫は石灰岩礫で、 サイズも殆どが拳大程 度。
16	阿波連浦貝塚	焼石遺構	弥生時代併行 浜屋原式主体	径約1.0m範囲に散在した状態	—/—	レンズ状	×	疎	×	△	硬質砂岩角礫。被熱礫も 複数確認。焼土面検出 等から調査者は地炉が 廃棄された痕跡と推量。
17	大原貝塚 (B地点)	SH01	縄文後期後葉 ~晩期前葉(?) 室川式 ~宇佐浜式	7~8.0×3~4.0m/略楕円形	—/—	レンズ状	0.2m未満	密	—	×	構成礫は拳~人頭大で、 サンゴ円礫も含む。周辺 で人骨検出されており、 調査者は埋葬関係遺構 と推量。
18	北原貝塚	1号集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式主体)	1.45×1.3m/円形~略方形	—/—	逆台形状	0.30m	密	×	×	構成礫は20~30cm大の サンゴ角礫・円礫で、礫 分布は平面的。調査者は 坩堝機能も推量。
〃	〃	2号集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式主体)	1.5×1.2m/略楕円形状	—/—	逆台形状	0.70m	密	×	×	構成礫はサンゴ角礫・円 礫。被熱破砕礫も確認。 礫分布は密だが断面図で は1号同様平面的な観。



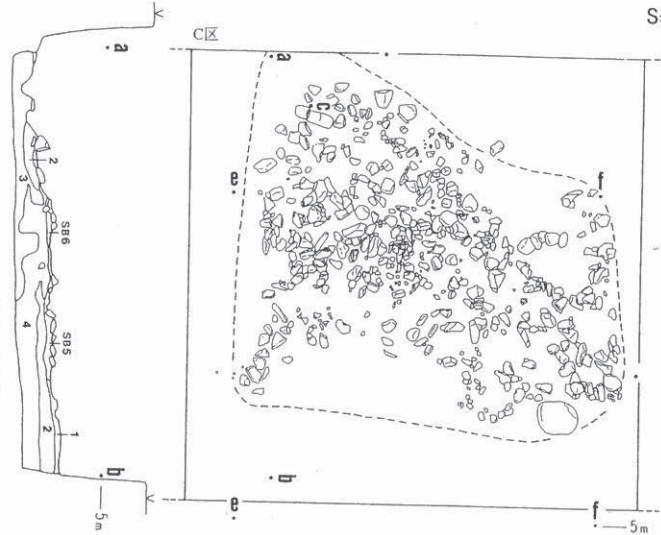
(写真) 2. 具志川島遺跡群南地点の集石遺構
(伊是名村教委1993)



(写真) 伊是名貝塚1号集石検出状況
(伊是名貝塚学術調査団2001)

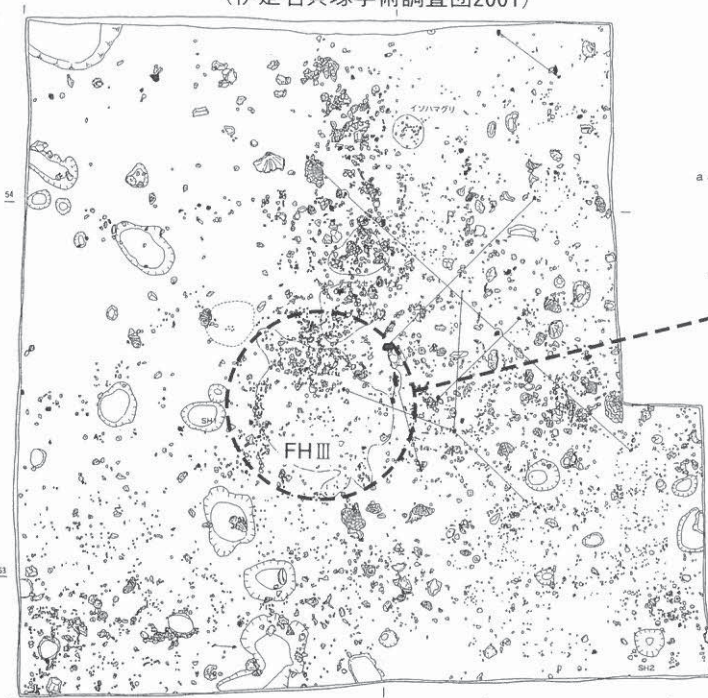


S=1/150



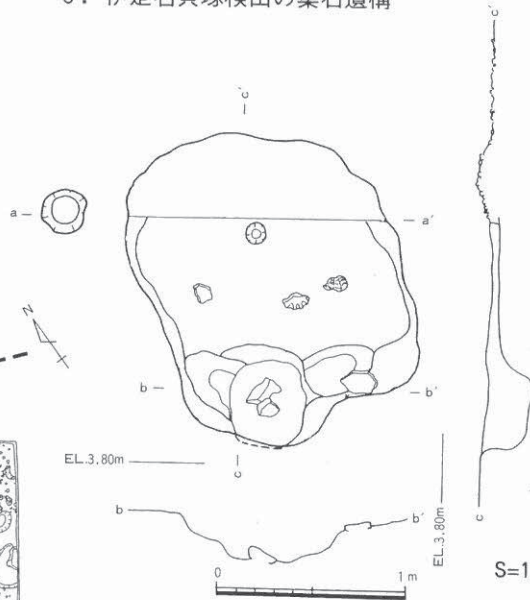
S=1/50

3. 伊是名貝塚検出の集石遺構



S=1/80

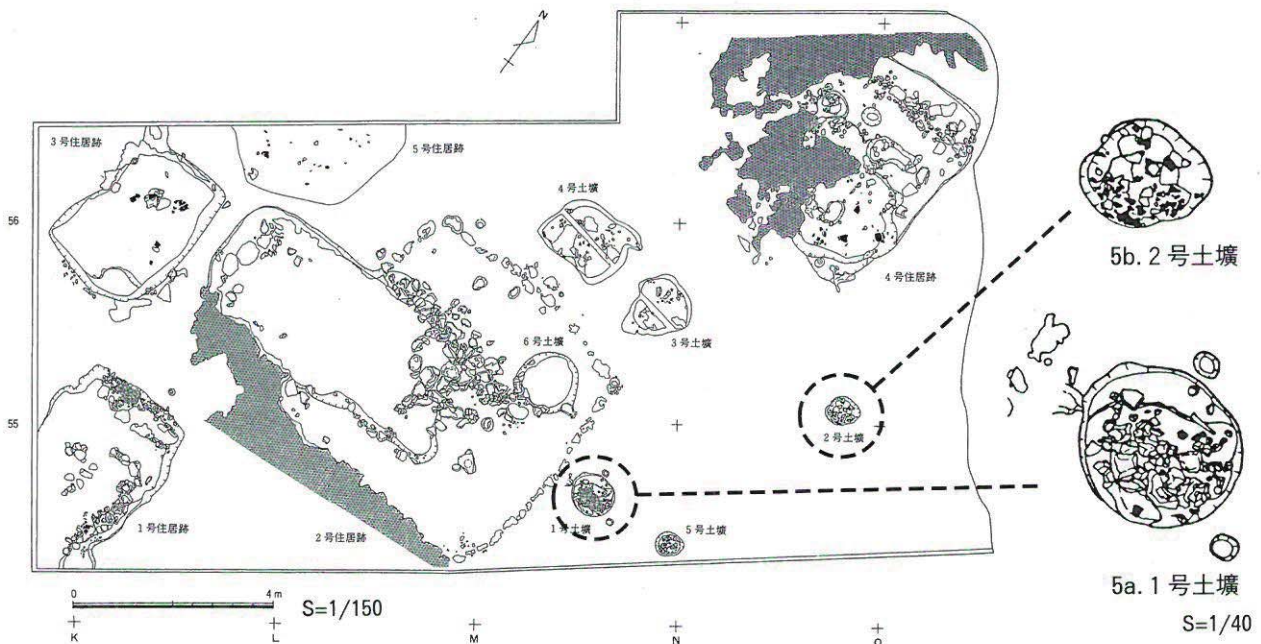
4. 具志堅貝塚検出の集石遺構



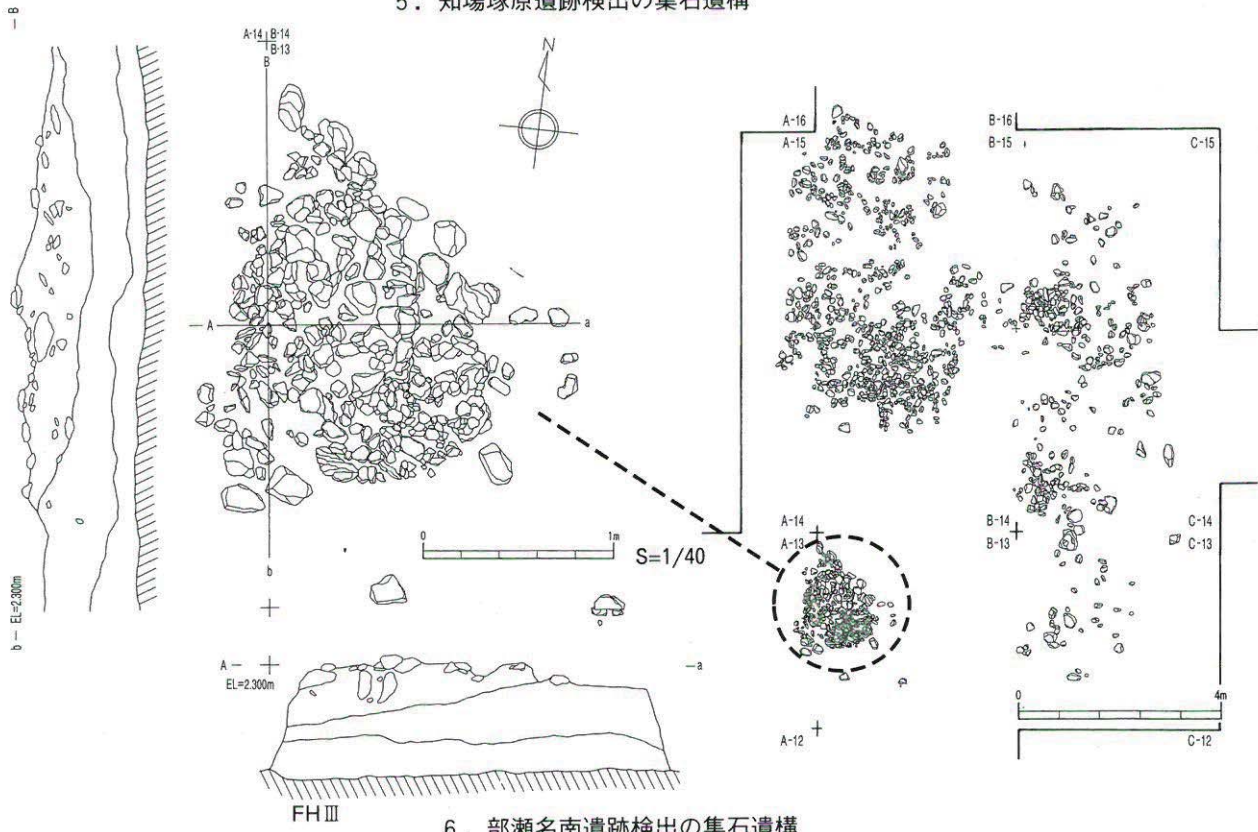
S=1/40

各図番号は表2 遺跡番号・文末記載リスト番号と同じ

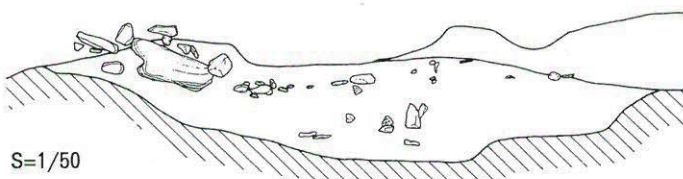
図1. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(1)



5. 知場塚原遺跡検出の集石遺構



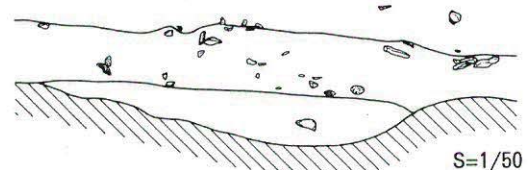
6. 部瀬名南遺跡検出の集石遺構



7a. 第1号土壌集石遺構

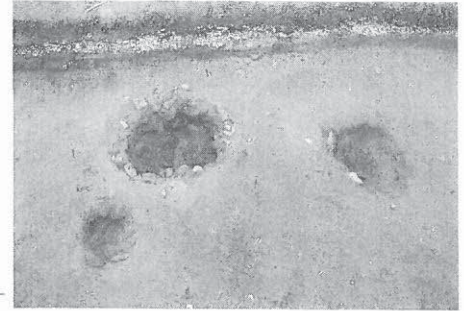
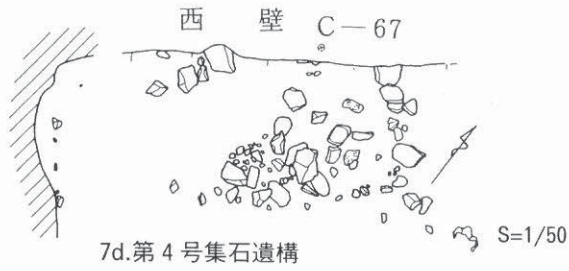
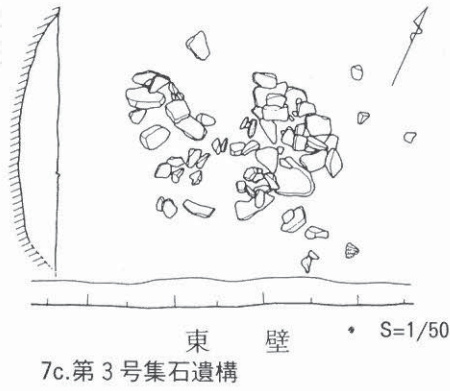
7-1. 伊武部貝塚検出の集石遺構

各図番号は表2遺跡番号・文末記載リスト番号と同じ

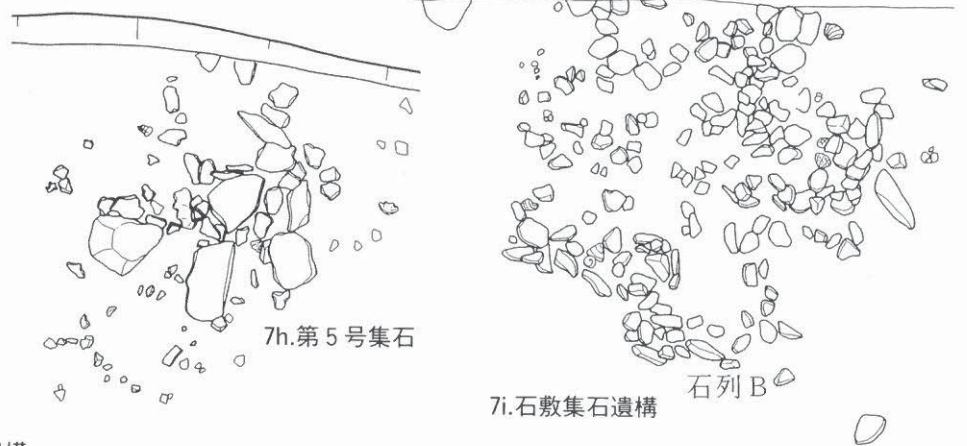
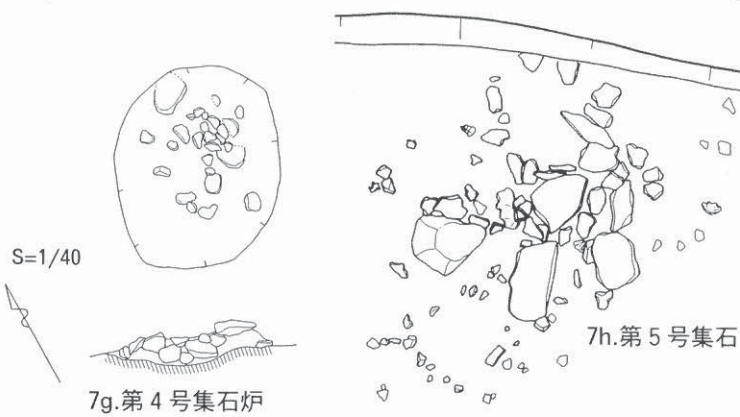
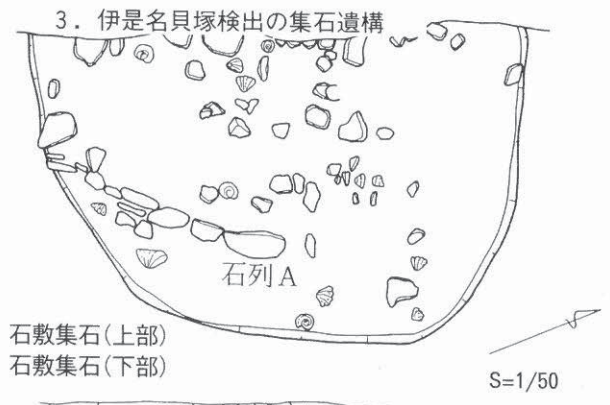
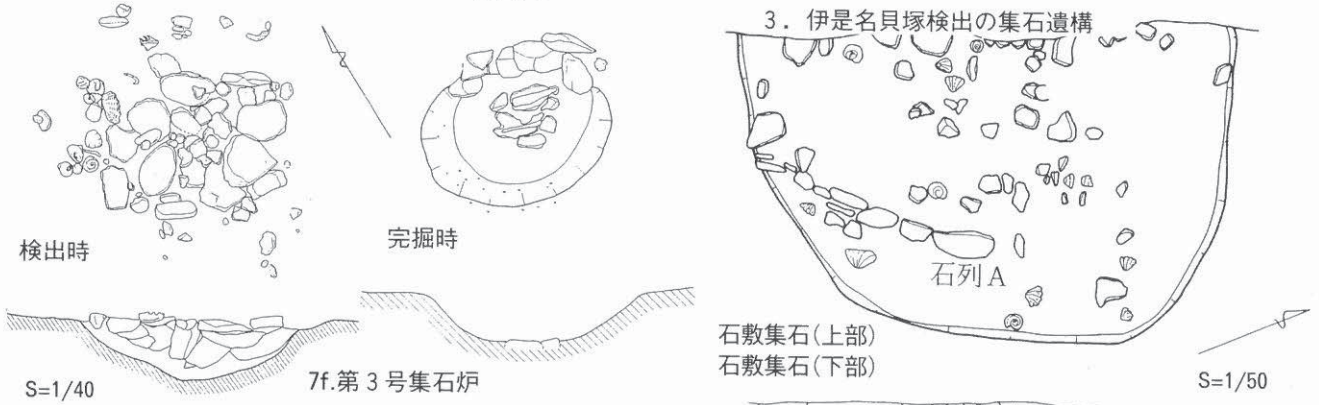
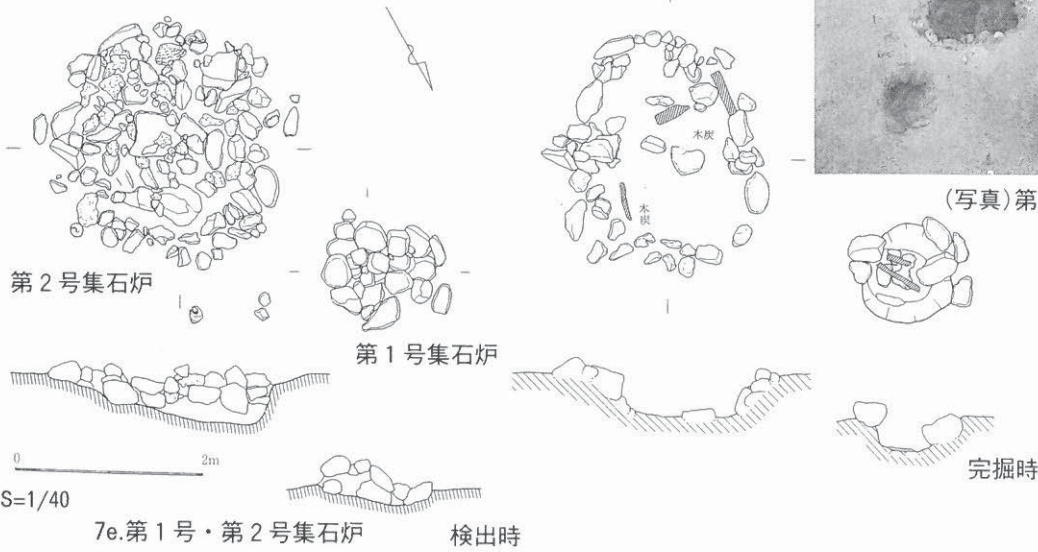


7b. 第2号土壌集石遺構

図2. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(2)



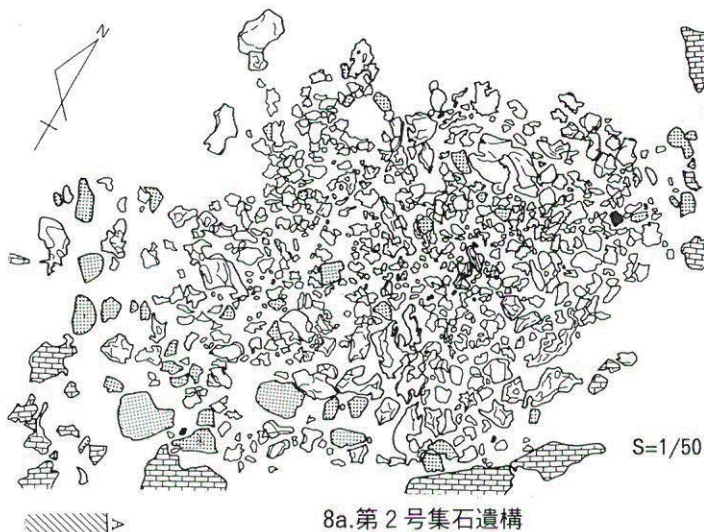
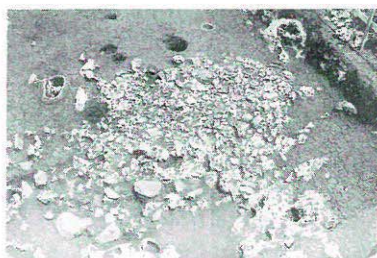
(写真)第1・2号集石炉(完掘後)
(沖縄県教委1983)



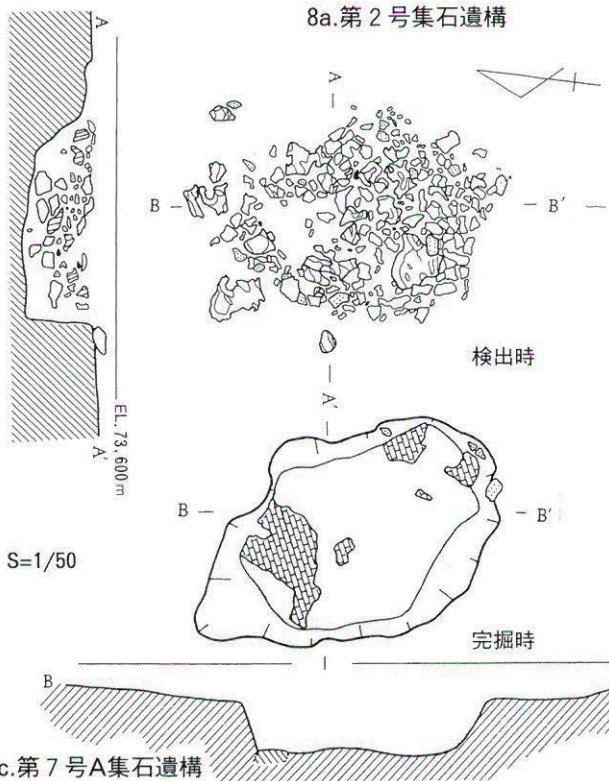
7・2. 伊武部貝塚検出の集石遺構

図3. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(3)

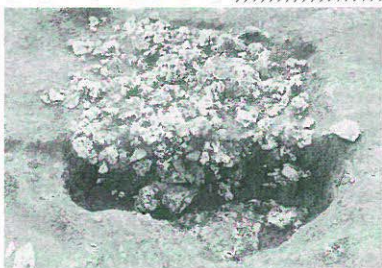
(写真a) 第2号集石遺構
検出状況
(読谷村教委1990)



8a. 第2号集石遺構

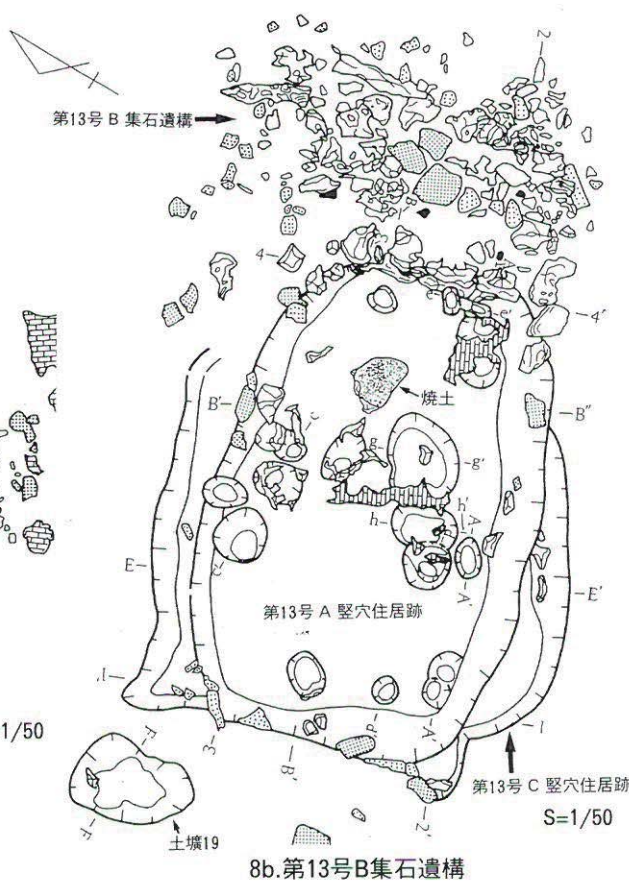


8c. 第7号A集石遺構

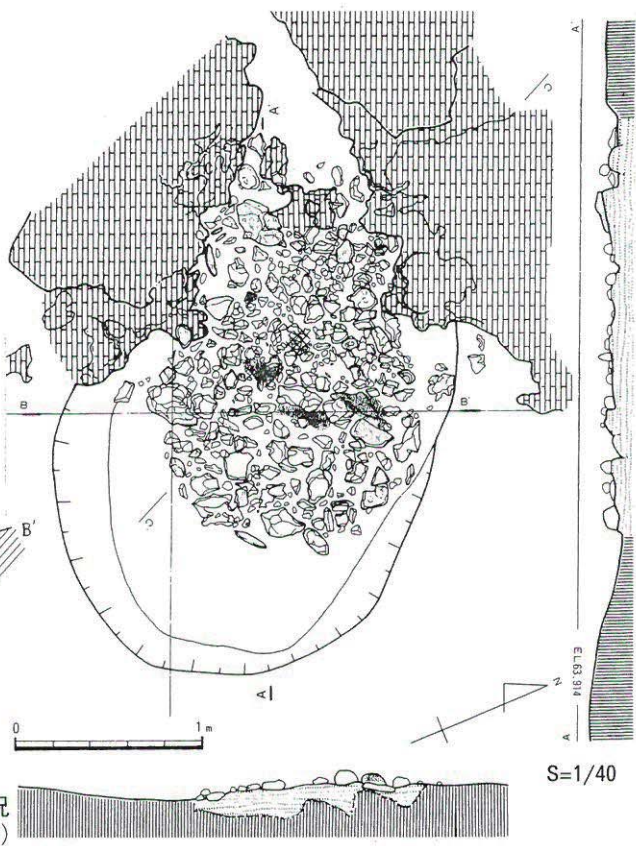


(写真b)
第7号集石遺構半截状況
(ibid)

8. 吹出原遺跡検出の集石遺構



8b. 第13号B集石遺構



9. 古我地原貝塚検出の集石遺構

各図番号は表2 遺跡番号・文末記載リスト番号と同じ

図4. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(4)



12. 喜友名貝塚検出の集石遺構

12a. [G11:1号遺構]

12b. [F12:4号遺構]

(写真)
13. ヌバタキ遺跡401号竪穴内検出の集石遺構
(宜野湾市教委1994)

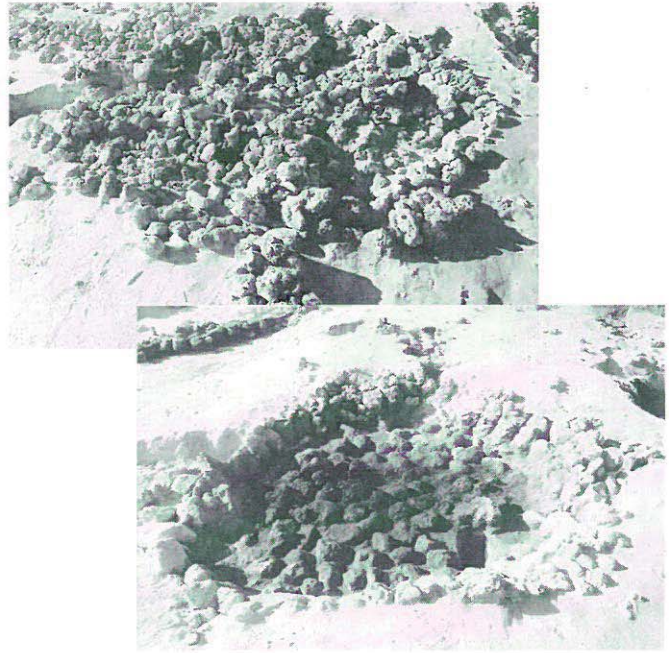


各図番号は表2遺跡番号・
文末記載リスト番号と同じ

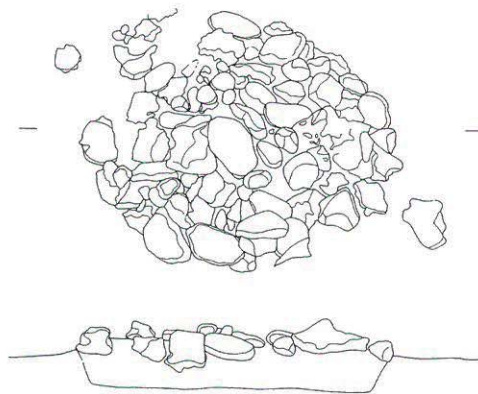
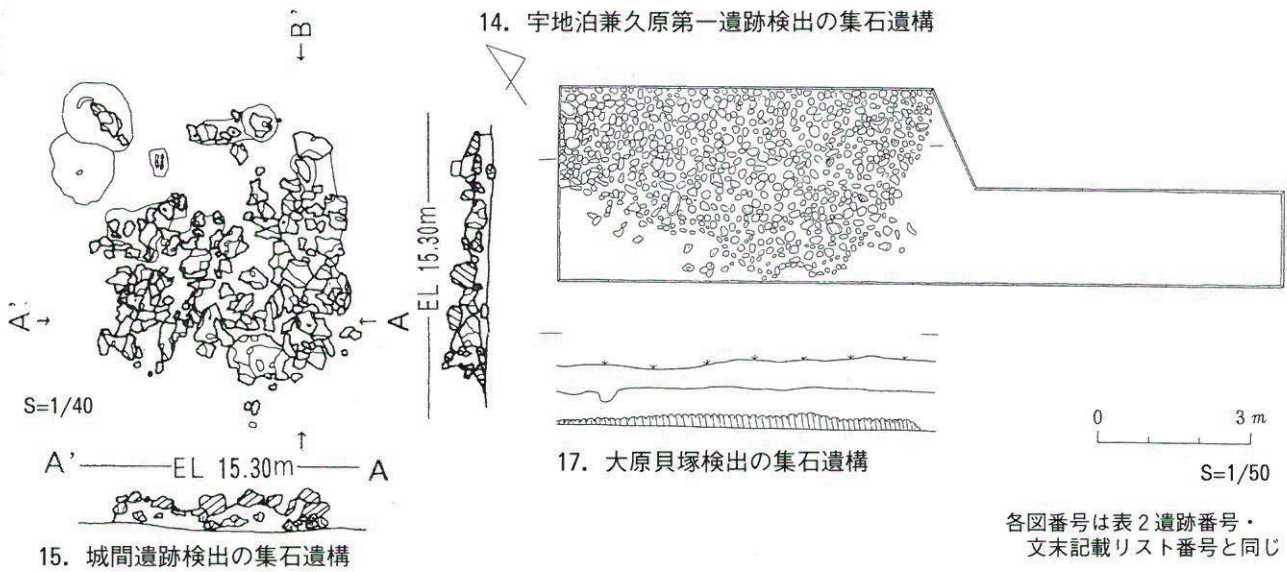
図5. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(5)



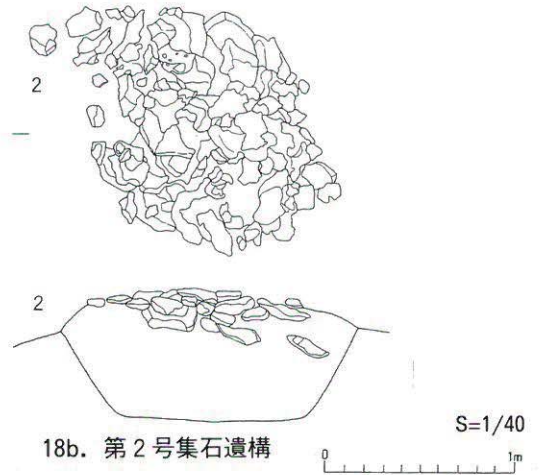
(写真)集石遺構検出状況(宜野湾市教委2002)



(写真a)集石土坑A検出状況(Ibid)
(写真b) 同 完掘状況(Ibid)



18a. 第1号集石遺構
18. 北原貝塚検出の集石遺構



18b. 第2号集石遺構

図6. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(6)

宮古・八重山諸島のグスク時代出土の骨鏃様製品考

Bone Arrowhead-like Objects of the Gusuku Period in Miyako and Yaeyama Archipelagoes

盛本 勲

MORIMOTO Isao

ABSTRACT: This paper aims to compile the excavated bone arrowhead-like artifacts found in Gusuku period sites in Miyako and Yaeyama Archipelagoes. The artifacts are also morphologically classified, located in time scale, and discussed in regard to function.

As a result, over 119 specimens were found in 19 sites within the area. They are classified in three types and seven sub-types, and are assigned to a period between early 14th century and 16th century. As to their function, considering the form and other features, they should be regarded as missile implements like arrowhead rather than the jabbing tools like harpoon.

1. はじめに

グスク時代¹⁾に比定されている宮古・八重山諸島の八重山編年第三期（滝口(編)1960），中森期(金武1994・2004)を特徴づける出土品の一つに、「尖頭器」，「有柄の尖頭器」，「有茎の尖頭器」，「骨製尖頭器」，「骨製矢じり?」，「ヤス状骨製品」，「ヤス状骨器」，「鏃」，「骨鏃」などと呼称されている骨製品がある。

例示のように，当該製品の名称はさまざまであり，これについては後節にて改めて検討するとして，小稿では当該製品の用途・機能を検討するうえで基礎資料となる集成と形態分類，帰属時期などを明らかにし，用途・機能に関しての筆者の考えを提示したい。

なお，後述するように，筆者は当該製品の用途・機能について，形態や個々の製品の有する属性などの検討から，ヤスなどのような突き道具的なものではなく，鏃などのような飛び道具的なものであろう，と考えることから，標題の名称を使用する。

2. 名称および用途・機能に関する研究略史

はじめに，当該製品の名称および用途・機能について，簡単に学史的整理をしておきたい。

宮古・八重山諸島地域において，当該製品が最初に報告されたのは高宮廣衛・C, W, ミーヤンによる竹富町鳩間島の鳩間中森貝塚の発掘調査報告である（高宮廣衛・C, W, ミーヤン1959）。この報告において，1点のみ出土している当該製品に，高宮らは「ポーン，ポイント Bone point」と，英名の名称を与えた。

そして，翌1960年に発刊された早稲田大学調査団による八重山調査の報告においては（滝口(編)1960），石垣市山原貝塚より出土した11点について，「尖頭器」の名称のもとに，その形状などからA・B形の二種に形態分類を行い，A形の製作技法は，それまで報告されていた「鳩間中森貝塚例に類似するものの，年代の異なる沖縄本島の大山貝塚や徳之島の面縄第二貝塚とは異なる」と指摘するとともに，A形は「八重山地方における一つの地方的・年代的-外耳系-特徴を示すものと思われる」と，形態や地域的，時期的比較を行っているものの，肝要な用途・機能についてはふれていない。

この早稲田報告において，与えられた名称の「尖頭器」は，高宮らが与えた英名の「ポーン，ポイ

ント Bone point] の「ポイント point」を邦訳して称されたものと思われる。

その後の報告は、この早稲田大学報告を踏襲したものと思われる「尖頭器」（三上(編)1980・"82, 関口他1981), あるいはそのほとんどが茎(柄)を有することから「有柄の尖頭器」(下地1993・下地(他)1993)「有茎の尖頭器」(阿利・黒島(編)1982), さらには骨製であることから「骨製尖頭器」(金武(他)1983)などと若干の相違は見られるものの、概して「尖頭器」という名称と、漁具のヤスを想定したと思われる名称の「ヤス状骨製品, ヤス状骨器」(阿利・岸本1984), 「ヤス状骨製品」(大濱編2004)の二者に大別されるが、その用途・機能に関して、具体的に論じた報告は多くない。

当該製品の用途・機能に関して、比較的具体的に論じているのは、国分直一と牛沢百合子である。

国分は、自らも参画して1954年に実施された波照間島下田原貝塚の発掘調査成果などをベースに、八重山先史文化の系譜を台湾に求めるという研究の作業仮説のなかで、高宮廣衛らが報告した鳩間島中森貝塚出土のボーンポイントの用途・機能を「細小の器形からみてヤスよりは鏃と見るべきであろう」(国分1972)と推察し、鏃を用いた弓射の技術が南方より入ってきたものであろうとして、台湾との関連性を指摘している。

この国分の鏃としての用途・機能推定に対し、牛沢百合子は石垣市仲筋貝塚の報告において「尖頭器(茎をもつ鏃の形をした尖頭器)」の名称を与え、当該製品の説明のなかで「全体に細長くきゃしゃなつくりである。これらは狩猟に使用したとするより、やはりヤスとして漁具などに利用されていたと考える方がよいと思われる。」と、突き道具であるヤス、すなわち漁具としての用途・機能を推定している(関口他1981)。

以上が、当該製品の用途・機能推定に関する八重山諸島地域の研究状況である。一方、報告例が若干後出するうへ、八重山諸島地域に比して極端に事例数が少ない宮古諸島地域では「骨製矢じり?」(砂辺(編)1999), 「骨鏃」(砂辺(編)1999), 「鏃」(羽方2003), 「骨鏃と思われる」(砂辺・宮城2003)と、八重山諸島地域とは異なり、鏃すなわち「矢じり」としての名称が定着しつつある。

しかし、その名称を定着せしめた具体的な根拠などが確にされておらず、判然としない。

3. 形態分類

管見の限り、これまでに宮古・八重山諸島のグスク時代遺跡より出土している当該製品は、19遺跡119点以上におよぶ(図1, 表1)。その内訳は、宮古諸島で6遺跡13点, 八重山諸島で13遺跡106点(うち未製品16点, 粗加工品7点)と、遺跡数, 点数とも八重山諸島が凌駕している。

両地域の遺跡数, 点数をさらに比較してみると、遺跡数においては、八重山諸島地域が宮古諸島地域に比して約2.7倍であるのに対し、点数では約8.2倍と圧倒的優位を占めている。

このことは、調査件数の多寡や各々の遺跡の調査規模の差異に起因しているということだけでは片づけられない他の要因が考えられるが、このことについては後節において検討するとして、以下において製品の形態などの具備する属性について検討する。

はじめに、形態分類について検討を行う。既報告において当該製品の形態分類について述べられた報文は、次に紹介する2遺跡例である。

その一つが、石垣市山原貝塚出土資料に関して示された分類である(滝口(編)1960)。当該報告においては、茎(柄)の有無により、A形=茎を有するもの, B形=茎を有しないものに二大別され、さらにA形は軸(身部)の仕上げ法により、多面形と丸形があるとしている。

他の一つが、石垣市仲筋貝塚出土資料に関して示された分類である(関口(他)1981)。当該報告においては、以下の5タイプに細分されている。

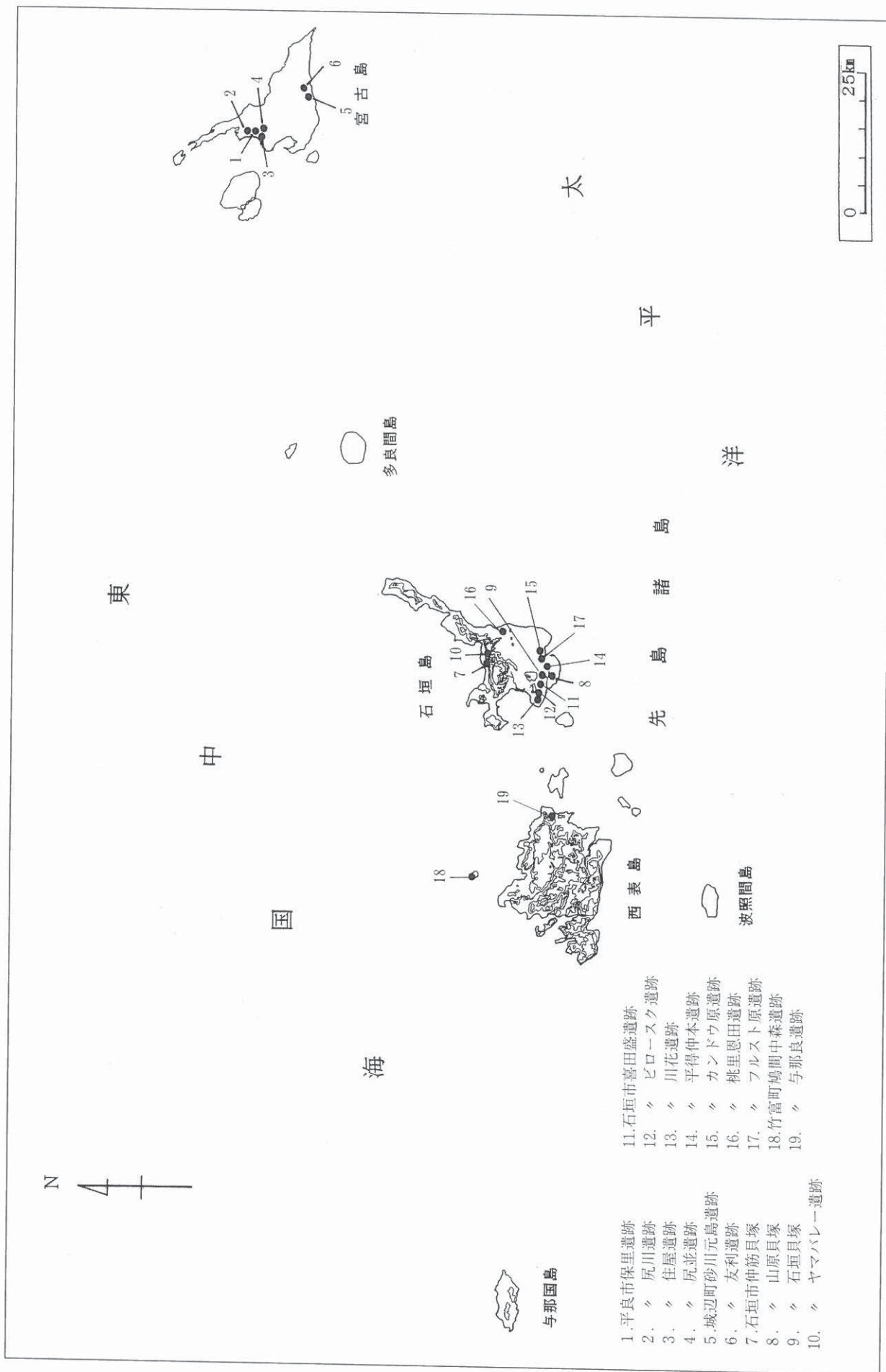


図1 宮古・八重山諸島の骨鍬様製品出土遺跡分布図

表1 宮古・八重山諸島のグスク時代出土の骨鏃様製品一覧

()は欠損値の残存値

No.	遺跡名	素材種・部位	図NO	身 部			茎部	重量	分類	備考	報告書図	文献		
				長さ	幅	厚さ	長さ							
1	平良市保里遺跡	種・部位不明	—	(4.77)	1.00	0.70	2.00	(3.20)		尖端・茎部部欠	(PL16)	砂辺(編)1999		
2		〃	—	(4.63)	0.70	0.70	1.51	(2.00)		尖端欠	(PL17)			
3		〃	—	—	5.40	0.70	0.40	—	1.60		完存	第41図2		
4	平良市尻川遺跡	ジュゴン：肢骨	図3-16	(4.60)	0.84	0.63	—	(2.70)	II b	尖端・茎部欠	〃3	砂辺・宮城(編)2003		
5		ジュゴン：部位不明	—	(3.25)	1.00	0.90	—	(2.40)		〃〃	〃4			
6	平良市住屋遺跡	ウシ：中足骨	—	3.50	0.83	0.75	—	(1.70)		茎部欠	p222写真図版4	砂辺(編)1999		
7		〃	—	(4.20)	0.75	0.75	(0.90)	(1.90)		尖端・茎部部欠	〃5			
8		〃	—	(4.10)	0.90	0.70	(1.50)	(1.90)		〃〃	〃6			
9		〃	—	2.60	0.90	—	—	(1.70)		茎部欠	〃7			
11	平良市尻並遺跡	ジュゴン：肋骨	図2-3	4.30	0.94	—	—	(2.20)	II a	茎部部欠	第51図3	羽方(編)2003		
12	城辺町砂川元島遺跡	ウシ：中足骨	図2-27	6.60	1.00	0.60	1.90	3.65	〃	完存	未報告	2001年2月発掘		
13	城辺町友利遺跡		—									下地和宏教示		
14	石垣市仲筋貝塚	ウシ：四肢骨	図2-22	(6.10)	0.90	0.80	2.00		II a	尖端欠	f i g. 17- 1	関口(他)1981		
15		〃	図2-23	(4.10)	0.90	0.60	(1.00)		〃	尖端・茎部部欠	〃2			
16		〃	図3-20	(6.90)	0.90	0.50	(1.10)		II c	尖端・茎部部欠	〃3			
17		〃	図3-21	(5.80)	0.80	0.50	(1.20)		〃	尖端欠	〃4			
18		〃	図2-24	(5.20)	0.70	0.50	(1.80)		II a	尖端欠	〃5			
19	石垣市山原貝塚		—	(2.50)	4.50	0.50	—			身部のみ	第44図4	滝口(編)1960		
20			—	(2.10)	0.50	0.40	(0.15)			尖端・茎部欠	〃5			
21			—	(1.35)	0.60	0.30	—			身部のみ	〃6			
22			—	(1.65)	0.40	0.20	—			〃	〃7			
23			図2-25	(5.60)	0.60	0.30	(1.20)		II a	尖端・茎部部欠	〃8			
24			図3-18	(5.70)	0.70	0.50	1.30		II b	尖端欠	〃9			
25			図2-26	(4.80)	0.80	0.50	(0.30)		II a	尖端・茎部欠	〃10			
26			—	(3.30)	0.70	0.50	(0.55)			〃	〃11			
27			—	(4.85)	0.35	0.25	—			茎部欠	〃12			
28			—	(4.00)	0.50	0.30	—			〃	〃13			
29			—	(3.30)	0.40	0.25	—			〃	〃14			
30			—	(3.10)	0.45	0.35	—			〃	〃15			
31			—	(2.80)	0.40	0.30	—			〃	〃16			
32			—	(3.60)	0.40	0.35	(0.40)			〃	〃17			
33			図2-1							I	完存		図版13-1	阿利・岸本1984
34			—								茎部部欠		〃2	
36			—								尖端部欠		〃3	
37		—								尖端・茎部欠	〃4			
38	石垣市石垣貝塚	ウシ：脛骨?	図3-31	(4.20)	0.80	0.69	2.00	(1.97)	II c	身部のほぼ中央部より先を欠		下地(他)1993		
39		〃	図2-29	(6.01)	0.70	0.60	1.40	(2.36)	II a	尖端部欠				
40		ウシ：脛骨?	—	5.92	0.70	0.45	—	2.94		未製品	図版75			
41		〃	図2-30	(5.60)	2.10	0.50	(2.10)	(1.51)	II a	尖端・茎部欠				
42		ジュゴン：肋骨	—	(6.80)	0.60	0.40	(0.10)	(1.40)		茎部欠				
43		〃	図2-31	(5.35)	0.60	0.50	1.40	(1.19)	II a	尖端部欠				
44		ウシ：脛骨?	図3-26	(6.60)	0.65	0.40	(1.20)	(2.06)	II b	尖端・茎部欠				
45		〃	図2-6	(5.45)	0.75	0.45	2.20	(2.62)	II a	尖端部欠				
46		〃	—	(9.50)	0.70	0.45	—	(4.59)		未製品				
47		〃	—	8.45	1.10	0.70	—	6.26		〃。茎様を成形。				
49		〃	—	(12.90)	1.10	0.85	—	(8.99)		〃。茎様を成形。	図版76			
50		〃	—	13.15	1.10	0.80	—	10.48		〃	〃			
51		〃	—	13.60	0.90	0.70	—	10.48		〃	〃			
52		〃	—	11.20	1.00	0.80	—	10.77		〃	〃			
52		〃	図3-29	(4.10)	0.69	0.58	1.50	(1.17)	II c	身部のほぼ中央部より先を欠				
53		〃	図3-1	(6.65)	0.70	0.60	1.70	(1.53)	II a	尖端部欠				
54		〃	図3-27	(4.90)	0.65	0.70	(1.20)	(1.73)	II c	尖端・茎部欠				
55		〃	図3-28	(4.10)	0.60	0.40	(0.40)	(0.94)	〃	尖端・茎部欠				
56	〃	図2-9	(5.80)	0.70	0.60	(0.80)	(1.73)	II a	茎部部欠					

59	石垣市石垣貝塚	〃	図2-28	(5.20)	0.60	0.50	1.45	(1.58)	〃	〃		下地(他)1993	
60		〃	図3-19	(5.90)	0.60	0.45	(0.30)	(1.14)	II b	尖端・茎部欠			
61		〃	図3-2	(3.90)	0.50	0.30	(0.70)	(0.54)	II a	茎部部欠			
62			—	(7.70)	0.59		1.50			尖端部欠	PL15-4	下地1993(宅地建設に伴う調査)	
63		—	5.00	0.78	0.53	1.60			完存	〃5			
64	石垣市ヤマバレー遺跡		図3-24	(2.60)	0.50	0.50	(0.35)		II c	尖端・茎部欠	Fig.10-10	三上(編)1980	
65			図3-23	(5.10)	0.70	0.70	(1.80)		〃	尖端・茎部欠	〃11		
66			図3-22	(8.60)	0.80	0.70	2.20		〃	尖端部欠	〃12		
67	石垣市喜田盛遺跡	ウシ：大腿骨	図3-12	5.70	0.70	0.60	1.00	2.00	II b	〃	第55図1	大濱(編)2004	
68		〃	図3-20	(5.40)	0.50	0.50	(0.90)	(1.70)	II a	茎部部欠	〃2		
69		〃	図3-9	4.10	0.60	0.60	—	1.30	II b	尖端・茎部欠	〃3		
70		〃	図2-21	(3.10)	0.70	0.70	—	(1.50)	II a	〃	〃4		
71		〃	—	(5.40)	0.70	0.50	—	(2.50)		未製品	〃5		
72		〃	—	(5.70)	1.00	1.00	—	(3.20)		〃	〃6		
73		〃	—	(11.30)	1.00	1.00	—	(9.50)		〃	〃7		
74		〃	—	10.10	1.00	1.00	—	5.60		〃	〃8		
75	石垣市ピロースク遺跡		—	(5.50)	1.00	1.20	—			〃	第31図49	金武(他)1983	
76			—	(5.70)	—	—	—	(5.00)		未製品。茎様を成形。	〃51		
77			—	(3.90)	—	—	—	(5.00)		尖端部のみ。幅が大きく他の製品の可能性あり。	〃52		
78			—	5.50	1.00	0.80	2.05			完存。粗加工品。	〃53		
79			図3-17	(4.20)	—	—	(1.20)		II b	尖端・茎部欠	〃54		
80			—	(4.10)	—	—	(0.10)			尖端・茎部欠	〃55		
81	石垣市川花遺跡	ジュゴン：肋骨	図2-7	(4.10)	0.90	0.80	(0.10)	(2.20)	II a	茎部欠		未報告	
82	石垣市平得仲本御嶽遺跡	ウシ：脛骨？	—	(2.61)	0.30	0.30	—	(0.32)		尖端・茎部欠	第15図6(図版23-4)	当真(編)1976	
83		〃	図2-18	(3.20)	0.26	0.50	(0.30)	(1.15)	II a	尖端・茎部欠	第15図5(図版23-5)		
84		〃	図2-8	(3.20)	0.60	0.50	—	(0.93)	〃	尖端・茎部欠	第15図7(図版23-6)		
85	石垣市カンドウ原遺跡		図3-3	(3.20)	0.75	0.80	—		〃	尖端・茎部欠	第30図	大城(他)1984	
86			図3-8	(3.80)	0.80	(0.50)	(0.40)		II b	〃	〃		
87			図3-4	(3.70)	0.65	0.65	(0.10)		II a	〃	〃		
88			図2-4	5.90	0.60	0.50	1.50		II a	完存	第6図15		知念(他)1977
89			骨製	図2-13	(6.45)	0.70	0.70	(0.10)		〃	尖端・茎部欠		表紙図1
90		〃	図2-14	(4.00)	0.80	0.60	(1.70)	(1.90)	〃	尖端・茎部部欠	表紙図2(第14図9)	名嘉(他)1978：(表紙図)；当真(編)1983：(第14図)	
91		〃	—	(4.40)	0.80	0.50	—			未製品？	表紙図3(第14図15)		
92		〃	図2-15	(3.90)	0.80	0.70	(0.30)		II a	尖端・茎部部欠	表紙図4(第14図7)		
93		種不明：牙(犬歯)	図2-10	(4.20)	0.60	0.50	1.60		〃	尖端部欠	表紙図5		
94		〃	—	(6.90)	0.80	0.60	—			未製品？	表紙図6(第14図3)		
95		〃	図2-11	(7.50)	0.80	0.60	(0.30)	(3.80)	II a	尖端・茎部欠	表紙図7(第14図2)		
96		骨製	図2-12	(5.50)	0.50	0.50	—		〃	〃	表紙図8		
97		〃	図3-5	(3.20)	0.60	0.40	—		II b	〃	表紙図9(第14図6)		
98		〃	図3-6	3.40	0.70	0.40	(0.80)		〃	完存	表紙図10		
99		〃	—	(2.70)	0.50	0.40	—			茎部欠	〃11		
100		種不明：牙(犬歯)	図2-17	(4.60)	0.60	0.50	—		II a	尖端・茎部欠	表紙図12(第14図10)		
101		骨製	図2-16	(4.40)	0.60	0.60	(0.60)		〃	〃	表紙図13		
102		〃	図3-7	(3.30)	0.70	0.30	(0.30)		II b	〃：身部に火を受けた跡が認められる	表紙図14(第14図16)		
103		〃	—				—			未製品	表紙図15(第14図14)		
104	石垣市桃里恩田遺跡	イシ：四肢骨？	—	(5.70)	1.20	1.10	—	(2.00)		尖端欠	第10図3		阿利・黒島(編)1982

105	石垣市フルスト原遺跡	ウシ：脛骨？	図2-5	(4.86)	0.50	0.50	1.1 (報告書より)		II a	先端・茎部欠 (茎部は新しい折損)	第13図6	阿利・岸本1984
106		—	(4.20)	0.85	0.70	(0.40)				先端・茎部欠。粗加工。	＊7	
107			図3-13	(2.30)	0.85	0.50	1.10	(1.43)	II b	身上上半欠・茎部端欠。粗加工。	＊8	
108		ウシ：脛骨？	図2-2	4.50	0.70	0.60	1.60	2.00	II a	完存。趾の有る黒褐色を呈す。	第14図4	
109		—	(6.60)	0.80	0.80	(1.70)				先端・茎部欠。粗加工。	＊5	
110		ウシ：脛骨？	図3-31	(4.80)	0.70	0.70	2.10	(1.87)	II c	身上上半欠	＊6	
111		—	(5.40)	0.90	0.85	(0.40)				茎部欠。粗加工。	＊7	
112		ウシ：脛骨？	—	(3.60)	0.85	0.80	—			身部のみ。粗加工。	＊8	
113		—	(4.86)	0.73	0.73	—	1.92			茎部欠。粗加工。	＊9	
114	竹富町鳩間中森貝塚	長肢骨	—	7.20						完存	図版VIg	高宮・C、W、ミーヤン1959
115	竹富町与那良遺跡	ウシ：脛骨？	図3-11	(6.12)	0.70	0.50	1.30	(1.81)	II b	先端部欠	fig.11-6	三上(編)1982
116		＊	図2-19	(5.20)	0.60	0.50	(0.01)	(1.45)	II a	茎部欠	＊7	
117		＊	図3-14	(1.40)	0.60	0.50	1.36	(0.61)	II b	身上上半欠	＊8	
118		＊	図3-32	(3.45)	0.60	0.50	1.29	(1.22)	II c	先端部欠	＊9	
119		＊	図3-10	(3.75)	0.60	0.50	1.40	(1.22)	II b	先端部欠	＊10	

①断面が円形に近くふくらむもの。当初は多角形をなしていたのであろう。②断面が、やや扁平な楕円形となるもの。③細長いタイプで、鎌身の両側が少し反り返るようになるもの。断面は扁平な四角形に近い。表面には刃器で削った面がそのまま残っている。④細長いタイプ。⑤細長く、断面が円形に近いもの、としている。

これらの分類をもとに、筆者の分類試案を提示する。なお、分類基準の対象としたのは、総出土数119点のうち、未製品および粗加工品の23点を除いた96点である。

はじめに、これらの形態的特徴として、1点の：かえし逆刺を有した形状のもの(図2-1)(阿利・岸本1984)を除けば、他はその名称にも表出されているように、有茎(柄)で先端を尖らせてポイント状に仕上げるといふ必要条件を具備している。したがって、石垣市山原貝塚で示されたB形(滝口(編)1960)は、茎(柄)部が欠失した無茎(柄)のものは基本的には存在しないものとする。なお、報文によっては無茎としたものもあるが(当真(編)1983など)、筆者はこれらは製作途上の未製品とみなしている。また、仲筋貝塚で示された細長いとか、鎌身が少し反り返るなどの細分は全体のヴァリエーションの範囲内として捉えて良いものと考えられ、分類上における基本的な差異ではないであろう。

このことから、筆者は以下に示すように、分類にあたっての形態を二大別し、その圧倒的多数を占めるII群を「身部の断面形状」によって、a. 円形若しくは楕円形状、b. 扁平若しくは四角形状、c. 多面形状のII群3種に分類、細分した。これらの組み合わせによってI群、II群a、II群b、II群cの4種が存在するが、II群aとcは必ずしも明確な判別が容易でないものもある。また、cはa



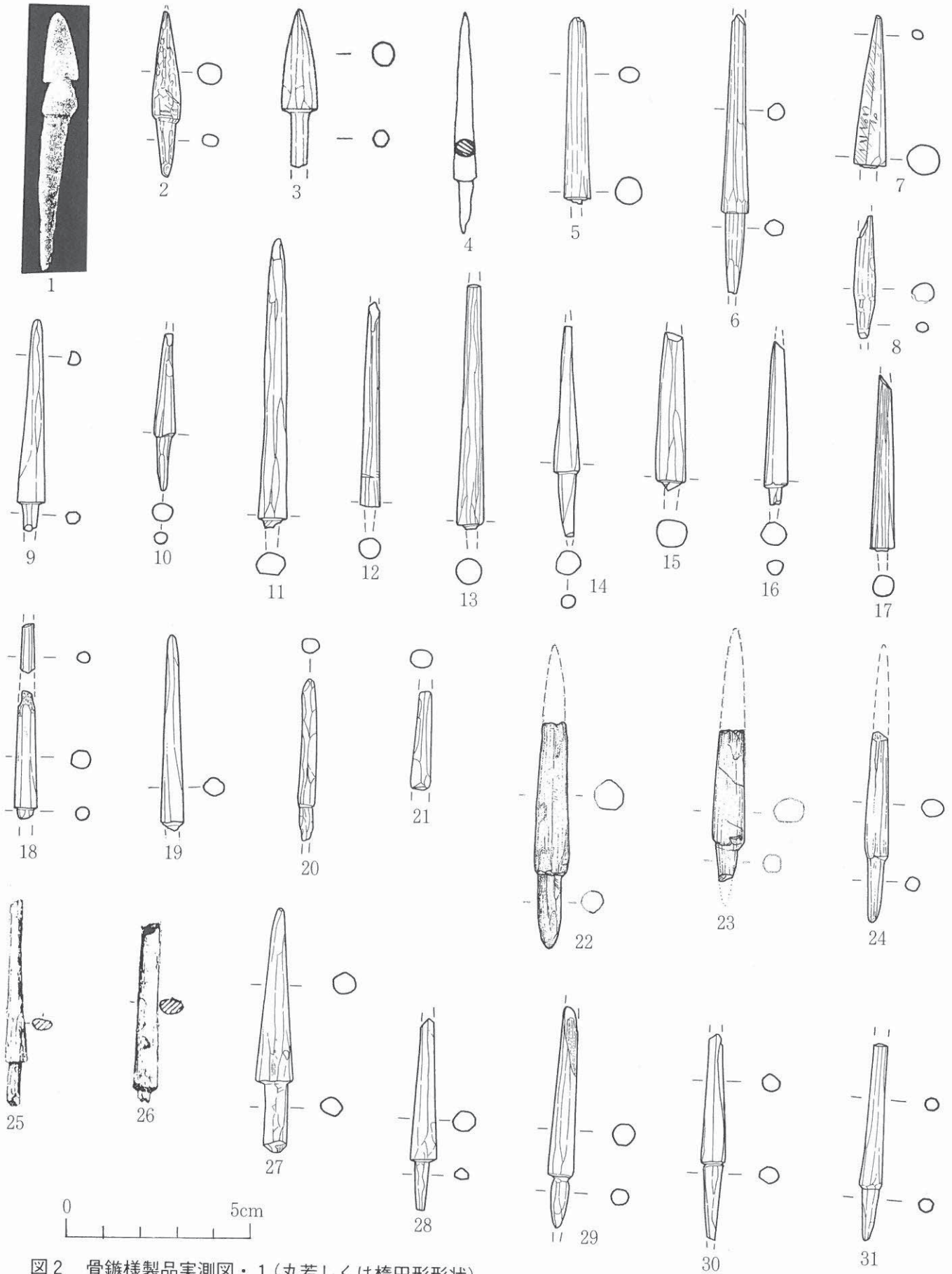


図2 骨鏃様製品実測図・1(丸若しくは楕円形形状)

1・25～26(山原貝塚), 2・5(ルスト原遺跡), 3(尻並遺跡), 4・5, 10～17(カドウ原遺跡), 6・9・28～31(石垣貝塚), 7(川花遺跡), 8・18(平得仲本御嶽遺跡), 19(与那良遺跡), 20～21(喜田盛遺跡), 22～24(仲筋貝塚), 27(砂川元島遺跡)

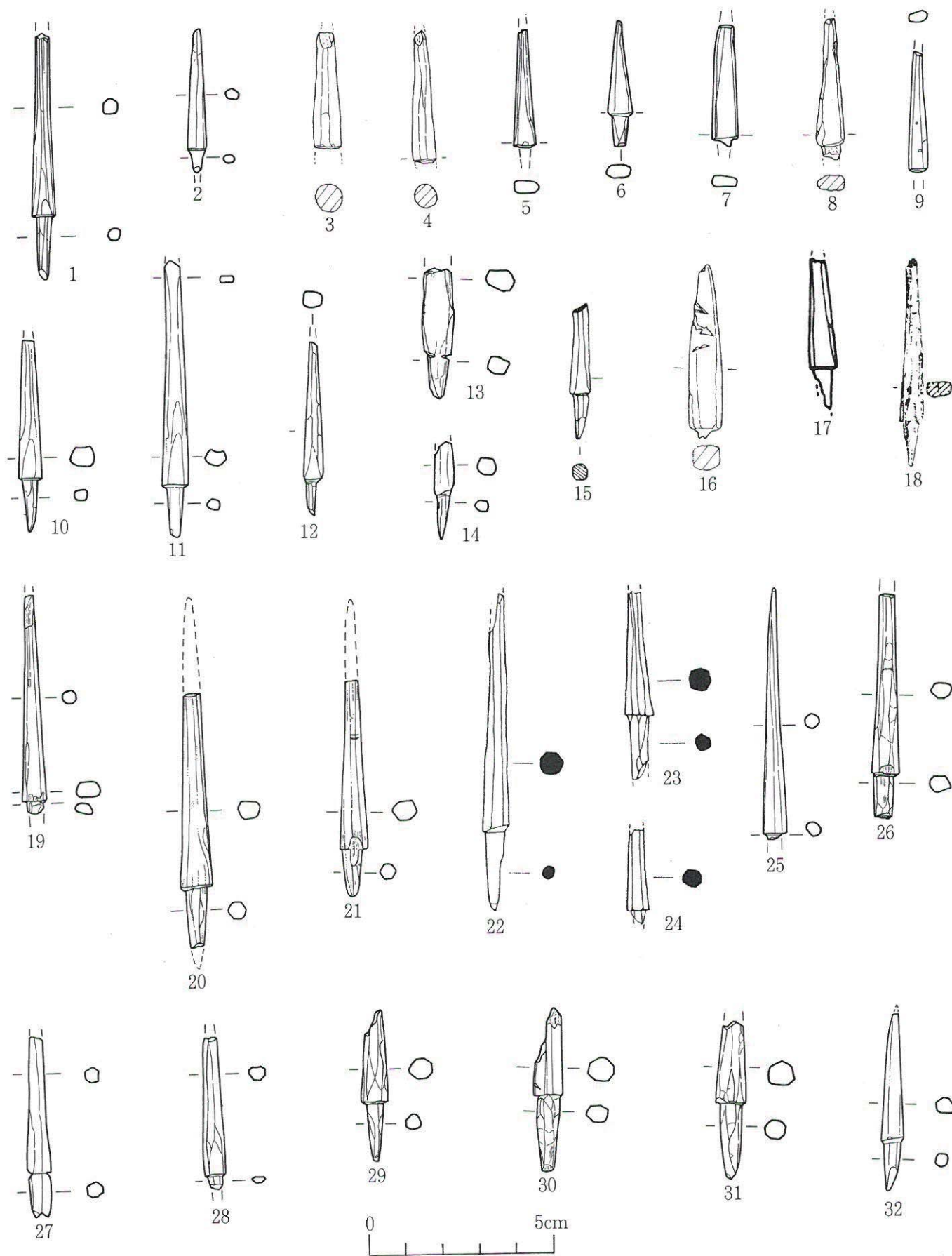


図3 骨鏃様製品実測図・1～4(丸若しくは楕円形形状), 5～19(扁平若しくは長方形状), 20～31(多面形状)

1～2・19・26～31(石垣貝塚), 3～8(カトウ原遺跡), 9・12(喜田盛遺跡), 10・11・14・32(与那良遺跡), 13・15・30(フルト原遺跡), 16(尻川遺跡), 17(ヒロスケ遺跡), 18(山原貝塚), 20～21(仲筋貝塚), 22～24(ヤマバレ遺跡)

の製作上におけるプロセス的なものの可能性を含んでいるものもあるかも知れないということも指摘しておきたい。さらには、身部の基端部と先端部が異なった形状をなすものもあり、当該分類がはたして如何ほどの意味を有するものかは今後の検討課題としておきたい。

このように、多少の課題も内包しているが、総体的にみた場合、Ⅱ群 a が最も多く、Ⅱ群 b がこれに次いでいる。そして、Ⅱ b は極少である。

4. 法量の比較

茎(柄)や身部の先端などを欠失する資料が少なくなく、身部の長さ、幅、厚さ、茎(枝)部の長さ、重量などが知り得る資料は多くなく、総数119点のうち、完存品は8点のわずかに6.7%に過ぎない。

このように、完存品が極少の状況にあるが、計測し得た資料の身部および茎(枝)部の長さ比較を見てみよう。

身部資料は、総数107点のうち、14.9%にあたる16点が完存している。これらは石垣市石垣貝塚出土の13.6cm例を最長、平良市住屋遺跡出土の2.6cm例を最短とし、平均長は7.37cmである。また、茎(枝)部資料は総数66点のうち、40.9%にあたる27点が完存している。これらは、石垣市石垣貝塚およびヤマバレー遺跡出土の2.2cm例を最長、喜田盛遺跡の1.0cm例を最短とし、平均長は1.58cmである。

このことから、身部長は8～12cmの圏をピークとする一群と、量的には少ないが1～3cmの範囲に集中部が見られる小型の一群に大別されよう、茎(枝)部長は2cmを超える資料も4点あるが、概ね1～2cm長の範囲に集約されていたことが判る。

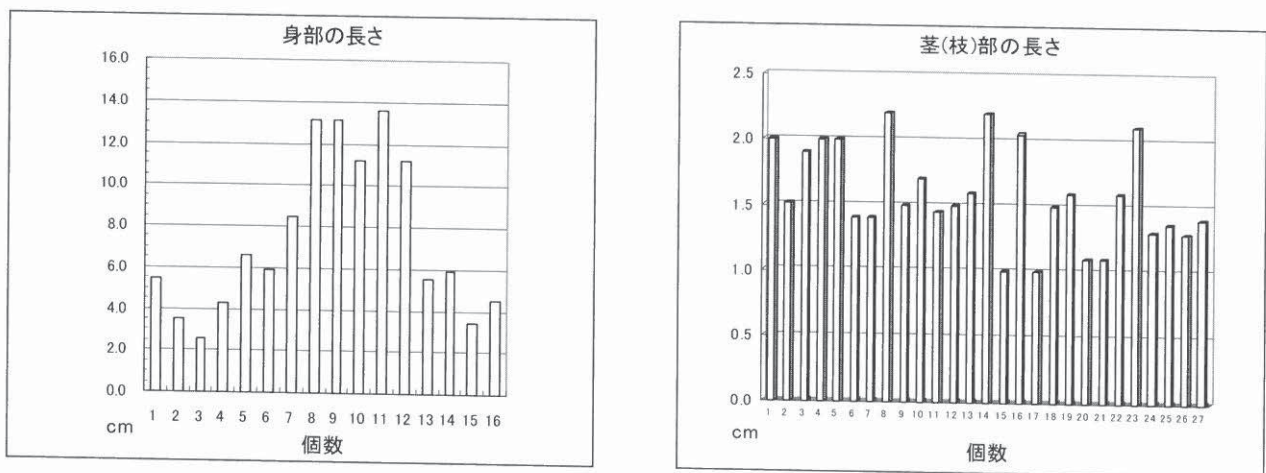


図4 身部長および茎(枝)部長の比較

5. 製品の素材と部位

全資料中のうち、使用素材の種などが明らかとなっているものは56点である。これらの種類としては、イノシシの四肢骨(石垣市桃里恩田遺跡)、イノシシの犬歯(石垣市カンドウ原遺跡)、ウシの四肢骨?(石垣市仲筋貝塚)、ウシの脛骨(石垣市石垣貝塚、竹富町与那良遺跡)、ウシの大腿骨(石垣市喜田盛遺跡)、ジュゴンの肋骨(平良市尻並遺跡、同市尻川遺跡)と、動物種としてはイノシシ、ウシ、ジュゴンの4種があり、その部位としては四肢骨、犬歯、脛骨、肋骨の4部位が知られる。

なお、石垣市石垣貝塚(下地(他)1993)やピロースク遺跡(金武(他)1983)においては、エイの尾棘製品もこれらと同様に扱っているが、当該製品については、沖縄諸島域の先史時代にも出土例が

あることや（盛本2004），検討の対象としている他の資料群とは形態上の差異などにおいて，同一のものではないと考えることから，ここでは割愛した。

この中で，最も多いのはウシの脛骨や大腿骨などの四肢骨の比較的厚みのある部分を縦位に裂いて，整形・加工したものが多く。このことは，伴出する少なくない未製品（製作途上品）などから明らかである。

なお，ウシの四肢骨は遺存骨においては部位の判別が可能であるが，製品として加工，仕上げられたものになると，部位レベルまでの特定は容易でない。ただ，言えることは未製品（製作途上品）などからして，素材段階で長さ15cm前後の真っ直ぐで，かつ2cm前後の厚みが必要条件とされていたことが判る。この条件を満たせるものは自ずと脛骨や大腿骨などに限定されよう。

6. 資料の時期と形態の変遷

まず，時期的な出土状況であるが，将来的に伴出する土器や陶磁器などの細分研究の進展によって，さらに詳細な変遷が把握可能になるかと思うが，現段階では大きくみて下記の二段階に大別されよう。

その一つは，当該製品の出現期である14C初頭段階で，他の一つがこれに後続する14C中葉～16Cである（図5）。

そして，17C段階になると当該製品は完全に消滅してしまう。

〔第一期：14C初頭頃〕

当該期の資料は，次段階に比して多くなく，宮古諸島に3点，八重山諸島に9点が知られるのみである。宮古諸島では，野城式土器(下地1978・'98)に後続し，元島系土器に先行するとされる土器群（住屋式土器と仮称：住屋遺跡の第3層に併行）（砂辺(編)1999）に伴出し，14C初頭頃に位置づけられている平良市保里遺跡出土の2点と同市住屋遺跡第3層出土の1点がある。そして，八重山諸島では14～16Cに位置づけられている中森期(金武1994・2004)の初期段階？に属すると思われる石垣市ピロースク遺跡出土の7点，同市川花遺跡出土の1点，同市桃里恩田遺跡出土の1点があるのみである。

〔第二期：14C中葉～16C代〕

14C中葉頃～15Cまでと，16C代を細分する必要があるものと考えますが，上記した理由で現段階では一括で扱う。当該期になると，前段階に比して飛躍的な資料の増加傾向が見られる。とりわけ，八重山諸島に顕著で，1遺跡における出土量も増えてくる。

宮古諸島では平良市尻川遺跡，同市尻並遺跡，城辺町友利遺跡，同町砂川元島遺跡などからの出土があるが，尻川遺跡出土の4点が最多で，他遺跡は1～2点と出土数は貧弱である。しかし，八重山諸島では報告例の古い石垣市山原貝塚の21点，同市カンドウバル遺跡の19点（未製品：3），同市石

地域	世紀	12	13	14	15	16	17～	備考
宮古諸島		野城式土器		住屋式土器（仮称）				
八重山諸島		新里村期		中森期			パナリ期	金武編年 (金武1994・2004)
		第三期					第四期	早稲田編年 (澁口(編)1960)

図5 出土時期と変遷

垣貝塚の25点（未製品：7）、同市フルスト原遺跡の9点（粗加工：6）、同市喜田盛遺跡の8点（内未製品4点）、竹富町与那良遺跡の5点と、5点以上の出土遺跡が3遺跡、15点以上の出土遺跡が3遺跡もある。とりわけ、カンドウバル跡遺跡や山原貝塚、石垣貝塚などは15点以上と傑出して多い。むろん、遺跡の調査規模等も考慮にいれなければならないが、このあり方は、何かを示唆しているものと思われる。石垣市八重山博物館前から天川御嶽前に至る県道：真栄里新川線（通称2号線）改良工事に伴う調査（仮称：登野城貝塚）でも25点以上が出土している³⁾。なお、当該貝塚は中森式土器を主体とした、早稲田編年の第三期（滝口（編）1960）に属する15C～16C頃の集落跡とみられる遺跡である。

このように、現段階においては、宮古・八重山諸島の両地域とも14Cの初頭段階に出現し、以後16C代まで形態上においては大きな変化も遂げずに継続していくが、17C以降の第四期（滝口（編）1960）、バナリ期（金武1994・2004）段階になると両地域とも一斉に消滅する。

7. 用途・機能および系譜など

用途・機能および系譜などを検討するにあたって、当該製品の具備する属性や出土遺跡の性格などをみてみよう。まず、形態の基本的な特徴であるが、3.でも記したように、1点のI群（図2-1）を除けば、他はすべてII群としたものである。これらのすべてが有茎（柄）である点に関しては、小林行雄が指摘する「骨角牙鏃は各時代に用いられているが、材料の関係や加工の容易のためか、有茎の形が多く、無茎がすくない」（小林1959）ということからも首肯できよう。そして、形態的特徴からして、II群は沖縄諸島の勝連町勝連城跡出土の骨鏃のII類（上原（編）1990）に対比できよう。上原静は、このII類の出自は共伴する鉄鏃のIII類（丸きり頭式）の模倣であろうとするとともに、「骨鏃は金属器の代用品ではあるが、革製の鎧（どうまる：胴丸）に対して十分な貫通力があり、当時の武器との関連で考案された合理的な武器であった」とする（上原2003）。

では、これらの出土遺跡の性格という点、第一期に属する八重山諸島の石垣市ビロースク遺跡、同市川花遺跡、同市桃里恩田遺跡などは、標高18～40mの独立丘陵若しくは丘陵台地上などに立地することなどから、防御的な性格を有している遺跡と見られる。宮古諸島の同段階に属する平良市保里遺跡や住屋遺跡もこれまでの調査地点は、標高11～18mの低平な琉球石灰岩台地上に立地しているグスク時代初頭の集落跡的な様相を呈した遺跡であるが、近隣にグスクの首長である按司の居住伝承などが伝えられている場所を控えており、防御的性格の可能性が高い遺跡である⁴⁾。

しかし、第二期の遺跡はその多くが低平な台地や砂丘上に立地し、建物に関するピット群や墓などが検出されていることから、より集落的な性格が強い。とりわけ、石垣市カンドウ原遺跡や石垣貝塚、喜田盛遺跡などは砂丘上に営まれた15C～16C代の集落跡である。また、当該期の出土遺跡には貝塚も含まれており、石垣市の仲筋貝塚は15C中葉～同後半代の比較的短期間に形成された貝塚である。

そして、個々の遺物でさほど多くはないが、石垣市フルスト原遺跡（図2-2）やカンドウ原遺跡（図3-7）や竹富町与那良遺跡（図3-11）例においては、身部などが黒褐色を呈するとともに、光沢を帯びた艶のある部分が観察された。ちなみに、フルスト原遺跡例は部分的ではなく全面におよんでいる。このことは、当該製品の強靱さを増幅させる目的から火にかけて焙っているのである。したがって、当該製品はより強靱でなければいけなかったのである。このようなことから、石垣市仲筋貝塚で指摘されているように、「きゃしゃ」ということはあてはまらないであろう。

このような諸点をふまえて、総合的に考慮した場合、当該製品は突き道具としてのヤス⁵⁾とみるよ

りも、飛び道具としての鏃として捉えた方が理解し易いのであろうと考える。このことは、サンゴ礁に圍繞された奄美諸島以南の地域においては、網魚などに比して突き魚はさほど発達をみなかった、ということもヤスとしての立場には立てない理由の一つである。

そして、第一期の段階において防衛的な性格を有した遺跡、すなわちグスクの発生とともに武器として出現したであろう。このことは、本来ならば鉄製族でなければならなかったモノが、鉄素材の貧弱さから当該製品に材質置換して現れた結果である。しかし、第二期の段階になると、出土遺跡の性格が集落や貝塚などに変わっていくことから、現段階では武器以外の例えば、国分直一の推定した狩猟具などに用途・機能も変化して行ったのであろうと考えておきたい。

本稿をまとめるにあたって、下記の機関、個人にお世話にあった。銘記して謝意を申し上げる所である。大濱憲二、大濱永寛、大竹憲治、下地和宏、下地 傑、砂辺和正、手塚直樹・永瀬史人、石垣市教育委員会、城辺町教育委員会、平良市教育委員会。また、図の浄書にあたっては、上原園子、喜屋武朋子、野村知子、譜久里昌代、外間瞳さんの手を煩わせた。同様に銘記して感謝申し上げます。

(もりもといさお：調査課課長)

【註】

- 1) 大濱永寛は、八重山地域の当該時代を地域的呼称を重視して「スク時代」と称している(大濱1985)。グスク時代の遺跡の性格等を考慮すれば、地域的特色を表徴する呼称として、弁別する見解には賛同でき、新里貴之も一定の評価を行っているが(新里2004)、琉球列島全域の時代呼称として学史的にも「グスク時代」が定着していることから、あえて地域的呼称を時代名称として使用すると、いたずらに混乱を招く恐れがある。そのため、筆者はあえて「グスク時代」を使用する。
- 2) 金武正紀は早稲田編年(滝口宏(編)1960)の第三期を、自ら中心となって実施した石垣島ビロースク遺跡や竹富島新里村東および西遺跡などの調査成果を踏まえて、共同調査者の阿利直治・金城亀信との連名で、在地土器の特徴や(新里2004)や舶載陶磁器のあり方などから、前・後半に細分し、前半期を新里村期(12~13C)、後半期を中森期(13末~16C)とする編年案を提示している(金武1994)。その後の論考で、新里村期を12後半~13C、中森期を14~16Cと、若干修正を行っているものの(金武2004)、概ね上記の年代観で把握してよいであろう。
- 3) なお、当該調査は現在継続中であることから、一覧表にも加えていない。調査担当者の大濱永寛のご厚意で実見させてもらった。
- 4) なお、当該遺跡の西へ約100m程離れた標高約20mの石灰岩台地上に保里(フサテイ)御嶽があるが、『平良市史・第9巻(資料編7・御嶽編)』によると、当該御嶽は「14世紀頃の人で西仲宗根の首長保里天太の居城跡と伝えられている」と記載されている。
- 5) 1910(明治43)年に農商務省から発行された『日本水産捕誌』では「尖頭鋭利なる鉄鏃に木製若しくは竹製の柄を付け其柄を把持して水中の魚貝類を突るの具」と定義されているという(直良1973)。

【参考文献】

- 笹間良彦、1997：弓矢・鏃・胡?。『図録 日本の甲冑武具事典』。pp389~399。柏書房。東京。
- 上原静・編、1990：勝連城跡-北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査-(1)。勝連町の文化財第11集。勝連町教育委員会。沖縄県勝連町。
- 上原 静、2003：第1部 沖縄諸島の先史・原始時代 第4章 グスク時代 第5節 一 主な武器と武具 1 鏃。『沖縄県史 各論編 第2巻 考古』。pp316~317。沖縄県教育委員会。那覇。
- 大濱永寛、1985：八重山の先史時代を考える。石垣市史のひろば。第8号。pp6~13。石垣市役所市史編集室。石垣。
- 金武正紀、1994：土器→無土器→土器-八重山考古学の編年試案-。南島考古。第14号 学会創立25周年記念特集号。

p83～91。沖縄考古学会。那覇。

金武正紀，2004：〈寄稿〉考古学からみた八重山の歴史。石垣市史のひろば。第27号。pp26～37。石垣市役所市史編集室。石垣。

国分直一，1972：七 原始経済技術 3 弓射の技術。『南島先史時代の研究』。pp323～328。慶友社。東京。

小林行雄，1959：こっかくがーぞく 骨角牙鏃。『図解 考古学辞典』。pp349。東京創元社。東京。

下地和宏，1978：野城（ぬぐすく）式土器について。琉大史学。第10号。pp34～49。琉球大学史学会。那覇。

下地和宏，1998：「グスク時代初期の宮古」。考古学ジャーナル。NO.437。pp19～24。ニューサイエンス社。東京。

新里貴之，2004：第IV章 先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景。今帰仁村教育委員会（編）『グスク文化を考える 世界遺産シンポジウム 〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録』。pp307～324。新人物往来社。東京。

直良信夫，1973：縄文人の漁撈生活。季刊 どんめん。創刊号 特集：縄文列島。JIIC（ジック）出版局。東京。

盛本 勲，2004：奄美・沖縄諸島の骨角牙製品。高宮廣衛・知念勇編『考古資料大観 第12巻 貝塚後期文化』。pp255～259。小学館。東京。

【出土遺跡報告書】

阿利直治・黒島玲子（編），1982：桃里恩田遺跡－沖縄県石垣市桃里恩田遺跡試掘調査報告書－。石垣市文化財調査報告書第5号。石垣市教育委員会。石垣。

阿利直治・岸本義彦，1984：フルスト原遺跡発掘調査報告書。石垣市文化財調査報告書第7号。石垣市教育委員会。石垣。

大城 慧（他），1984：カンドウ原遺跡－灌・排水工事に係る緊急発掘調査－。沖縄県文化財調査報告書第58集。沖縄県教育委員会。那覇。

大濱憲二（編），2004：喜田盛遺跡－真栄里新川線街路改良工事に伴う緊急発掘調査－。石垣市文化財調査報告書第28集。石垣市教育委員会。石垣市。

岸本義彦（編），1984：山原貝塚発掘調査報告書。石垣市文化財調査報告書第8号。石垣市教育委員会。石垣市。

金武正紀（他），1983：ピロースク遺跡－沖縄県石垣市新川・ピロースク遺跡発掘調査報告書－。石垣市文化財調査報告書第六集。石垣市教育委員会。石垣。

下地 傑，1993：石垣貝塚発掘調査報告書－宅地建設に係る記録保存調査－（ケータ-17～23区）。阿利直治・（編），黒石川窯址－沖縄県石垣市黒石川（フーシナー）窯址発掘調査報告書－所収。pp263～323。石垣市文化財調査報告書第15号。石垣市教育委員会。石垣市。

下地 傑・他，1993：石垣貝塚－県道真栄里新川線街路改修工事に伴う緊急発掘調査報告書－。石垣市文化財調査報告書第17号。石垣市教育委員会。石垣市。

砂辺和正・（編），1999：保里遺跡（旧県立厚生園跡地）-県営団地建設に伴う緊急発掘調査概報-。平良市文化財調査報告書第3集。平良市教育委員会。平良。

砂辺和正・（編），1999：住屋遺跡（I）-庁舎建設に伴う緊急発掘調査報告書-。平良市文化財調査報告書第4集。平良市教育委員会。平良。

砂辺和正・宮城ゆりか，2003：尻川遺跡－個人住宅建設予定に伴う緊急発掘調査報告書－。平良市文化財調査報告書第5集。平良市教育委員会。平良。

関口広次（他），1981：沖縄・石垣島 仲筋貝塚発掘調査報告 THE EXCAVATION OF NAKASUJI SHELL-MOUND。仲筋貝塚発掘調査団。石垣。

高宮廣衛・C, W, ミーヤン，1959：八重山鳩間島中森貝塚発掘概報。沖縄県教育委員会監修，1978『沖縄文化財調

- 査報告1956～1962』。pp136～150。那覇出版社。那覇。
- 滝口 宏(編)，1960：八重山の考古学 石垣島<山原貝塚>。『沖縄八重山』。pp129～151。早稲田大学考古学研究室報告第7冊。早稲田大学考古学研究室。東京。
- 知念 勇(他)，1977：八重山石垣島カンドウ原遺跡発掘調査報告。石垣市文化財調査報告書第2集。石垣市教育委員会。石垣市。
- 当真嗣一(編)，1976：八重山石垣島平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告。沖縄県文化財調査報告書第3集。沖縄県教育委員会。那覇。
- 当真嗣一(編)，1983：カンドウ原遺跡発掘調査報告(Ⅰ)-排水溝に伴う緊急調査-。沖縄県文化財調査報告書第49集。沖縄県教育委員会。那覇。
- 名嘉正八郎・他，1978：カンドウ原遺跡緊急発掘調査ニュース 1977年度。沖縄県教育委員会文化課。那覇。
- 羽方 誠(編)，2003：尻並遺跡－那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査－。沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第15集。沖縄県立埋蔵文化財センター。沖縄県西原町。
- 三上次男(編)，1980：沖縄・石垣島 ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報。青山史学。第6号。pp1～23。青山学院大学。東京。
- 三上次男(編)，1982：沖縄・西表島 与那良遺跡発掘調査概報。与那良遺跡調査団。東京。

先島諸島出土の骨製品について

Bone Artifacts from Sakishima District

久貝 弥嗣

KUGAI Mitsugu

ABSTRACT: It has been known that the Sakishima (Miyako and Yaeyama Archipelagos) district had shown a strong influence from southern culture since its early stage. The present discussion on Sakishima culture is focused upon its chronology and genealogy. The major study material has been either pottery or stone implements; however, little research has been conducted on bone artifacts. This paper attempts to compile and classify bone artifacts in order to add a data base for a new perspective. Then, the relations between Sakishima and Okinawa Island, or between 'Waseda Chronology' Period 1 and 2 are discussed based on the shark-tooth artifacts that have been relatively well studied. The characteristics and problems of Sakishima bone artifacts are also discussed.

1. はじめに

先島諸島は、琉球列島の最南端に位置しており、宮古諸島と八重山諸島によって形成されている。国分直一は、本地域について「全く縄文・弥生式土器文化の波及を受けず、むしろ台湾・フィリピンなどの南方文化との関連がある」として「南部文化圏」と位置付けている(国分1972)。先島諸島の考古学的な調査は、1904年の鳥居龍蔵による川平貝塚の発掘を始まりとし、早稲田大学八重山学術調査団による早稲田編年の確立や、金関丈夫・国分直一らによる文化系譜に関する研究が活発に行われてきた。しかし、1978年の神田貝塚・大田原遺跡の発掘調査によって早稲田編年の第Ⅰ期と第Ⅱ期の逆転が層序によって確認され、早稲田編年の修正が迫られた。以後、各研究者によって編年研究が行われている。

これまで、このような編年研究や文化系譜に関する問題の中心は、土器や石器、シャコガイ製貝斧などにあり、骨製品からのアプローチは一部の製品を除いて皆無である。本論では、これらの問題に対して骨製品からのアプローチを試みるため、研究の基礎段階として、骨製品の集成と分類を行い、先島諸島の各時期における骨製品の特徴などについてのべていきたい。

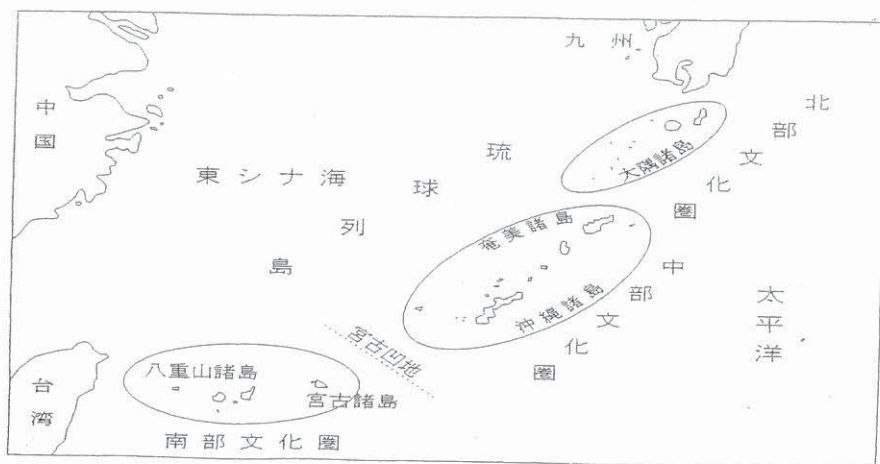


図1 南島の先史時代の文化圏(大濱1999 p 1より)

2. 研究史

先島諸島における骨製品の研究は、文化系譜や編年研究に付随して行われてきた。そこで本研究史においては、先島諸島の考古学の研究の流れの中で、骨製品がどのように位置付けられてきたのかをみていきたい。尚、先島諸島の考古学における研究史は高宮廣衛によってまとめられており(高宮1992)、これにならって調査研究の希薄であった戦前と漸増する戦後の2期に大きく分け、戦後は復帰を境にして行政発掘が急増する復帰後とそれ以前に分けてみていく。

(1) 戦前の研究

戦前における研究は1904年の鳥居龍蔵による川平貝塚の1件のみで、本調査における骨製品の出土は認められない。

(2) 戦後の研究・第Ⅰ期(終戦直後の1945年から1972年の本土復帰まで)

1959年に高宮廣衛、C・W・ミーヤンの両氏によって鳩間島中森貝塚の発掘調査が行われ、尖頭器状の骨製品をボーン・ポイントとして報告している。同年に滝口宏を団長とする早稲田大学八重山学術調査団は、編年の確立とそれに基づいた各期の文化相の分析的研究、また沖縄県史における八重山文化の意義の把握を目的とし、下田原貝塚、仲間第一・第二貝塚などの発掘調査を行っており、その調査成果をもとに早稲田編年を提唱し、長く先島諸島の考古学の基盤とされる。その調査の1つである山原貝塚からは、尖頭器や骨針、骨ヘラなどの多くの骨製品が出土しており、その中で尖頭器に関しては、これらと類似した製品が宜野湾市大山貝塚や徳之島面縄第2貝塚から出土しているとしながらも、本製品とは形態的に異なっているとして、本製品が八重山地方における1つの地方的・年代的・外耳系・特徴を示すものとして報告している。また、骨製品の製作過程において、鉄器の使用が指摘されている。国分直一は1954年に行った下田原貝塚の発掘調査をもとに、「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」(国分1964)の中で八重山の先史文化の系譜を台湾南部圏に求めており、1972年の『南島先史時代の研究』の中で鳩間島中森貝塚出土のボーン・ポイントの用途を鏃と推察し、この鏃を用いた弓射の技術が南方より入ってきたものであるとして台湾との関係性に結び付けている。

以上のように、戦後の第Ⅰ期の研究の中心は、八重山諸島の文化様相およびその文化系譜の把握に努められている。その中で、骨製尖頭器が八重山の第Ⅲ期の特徴的な製品として位置付けられ、また、国分は八重山諸島の文化系譜に関する研究の流れのなかで、鏃の使用方法を通して台湾との関係性についてふれている。

(3) 戦後の研究・第Ⅱ期(1972年の本土復帰以降)

1972年の本土復帰以降は、種々の開発行為に伴う、行政発掘の急増により骨製品の資料も増加する。新田重清は、「八重山諸島の考古学界に関する最近の動向」(新田1980)の中で、骨ヘラと骨製尖頭器を取り上げて南方との比較考察を試みている。新田は、第Ⅲ期の宮良第Ⅲ遺跡や山原貝塚出土の骨ヘラについて形態的に類似するものが東ジャワのラワ洞穴遺跡や南セレベスのトアレ洞穴から出土しているとし、骨製尖頭器に関しても類似品が台湾の鳳鼻頭遺跡や南中国から出土しているとしながらも、時期的な差やアッセンブリッジの点から対応しないとしている。金武正紀は、『沖縄歴史地図 考古』(金武1982)の中で、第Ⅲ期の尖頭器、骨ヘラ、骨斧に限りながらも出土遺跡の集成を行っており、骨斧については、沖縄本島及び周辺離島では検出されていないとしている。金子浩昌・忍沢成規の両氏は、『骨角器の研究 縄文編Ⅰ・Ⅱ』(金子・忍沢1986)の中で全国的な骨製品の集成と分類を行い、

先島諸島においても下田原貝塚が取り上げている。この中で南島地域においても沖縄・先島両諸島の間で骨角器文化のかなり異なることが明らかにされている、とし下田原貝塚出土のサメ歯製の鎌は特徴的であるとしている。岸本義彦は、「南琉球新石器時代の諸問題」の中で安里嗣淳の編年案をもとにして、前期の遺跡間の中での時期差について、骨製品の出土状況の点から考察を行っている。岸本は前期の遺跡の中でも有文土器が出土する遺跡においては、骨・貝製品はほとんど出土しないのに対し、無文土器を主体とする遺跡からは、骨錐やサメ歯製品の出土がみられるとし、ピュウツタ遺跡で把握された層序関係から前者が古くなるとしている。

以上、戦後第Ⅱ期の研究の焦点は、早稲田編年の修正とそれに伴った第Ⅰ期と第Ⅱ期の文化の連続性の有無にあったが、これらの問題に対しての骨製品からのアプローチはほとんどなされておらず、一部の骨製品の集成にとどまっている。また、これに加えて各報告書内に問題があると考えられる。発掘の増加に伴って骨製品の資料が増加したのに対し、各報告書では機能的名称と形態的名称が混在して用いられており、統一性が認められない。また、各骨製品に関する考察も単発的なものである。

これらの問題解決のために、まず、先島諸島の遺跡から出土する骨製品の集成を行った後に、一定の分類概念にもとづいて分類を行う必要があると考える。そこで今回私は、金子・忍沢両氏による『骨角器の研究 縄文篇Ⅰ・Ⅱ』を参考として、先島諸島出土の骨製品の分類を行っていきたい。

3. 骨製品出土遺跡の概要

先島諸島より骨製品の出土する遺跡を図2、表2に示した。先島諸島の遺跡を概要していく上で、これらの遺跡を早稲田編年にもとづいて第Ⅰ期から第Ⅳ期に分けた。早稲田編年の第Ⅰ期と第Ⅱ期の逆転が明確にされている現在に、早稲田編年を使用する点は問題があると思われる。しかし、各研究者によって提示されている編年案については、岸本義彦によっていくつかの問題点が指摘されており、その中で最も重要とされるのが、各編年案に含まれる文化の連続性に関する問題である。高宮氏が指摘されたように、各編年案は文化一元論、文化二元論、大浜永亘が提唱する文化多元論(大浜1999)に分けられ、各研究者の主張が組み込まれており、第Ⅰ期と第Ⅱ期の関係が不明確な現在の段階で、これらの編年案のいずれかをを用いることは避けたいと考える。そのため、本論においては、基本的に早稲田編年にもとづいて各遺跡の時期を捉え、第Ⅰ期と第Ⅱ期を逆転させて用いたい。尚、本論で早稲田編年第Ⅰ期と第Ⅱ期を逆転させて用いるが、これが文化の連続性の関係を示唆するものではないことを断っておく。

表1 早稲田編年(滝口編1960 p168より)

編年	遺跡名	遺物
第一期	仲間第一(西表)	石器(磨製・半磨製)
第二期	下田原川付近小貝塚 (波照間)(西表)(西表)	土器(少量)・石器 貝器・骨角器
第三期	山平フルロスウト フ波照間 原西山原貝塚群 (石垣)(西表)(小浜)(石垣)	土器(外耳多量・磁器・その他) 鉄製品・石器・貝器・骨角器
第四期?	大野川川名黒 川平平蔵 第第第 原底一二三川島 (西表)(ク)(石垣)(ク)(ク)(ク)	土器(ハナレ系?・磁器・その他) 鉄製品

線は各遺跡に共通するもの

4. 分類概念・分類案

(1) 分類概念

骨製品の分類方法は、金子・忍沢両氏による『骨角器の研究 縄文編 I・II』による所が多い。まず、骨製品の分類は、その第1義的な機能、つまり生産性によって2大別される。一つは、生産・生活用具としての生産用具、もう一つは装飾・呪術具といった精神的な活動に深く関わってくる非生産用具である。

生産用具としての骨製品は、その加工方法によってその機能を推察することができる。そこでまず、骨製品の加工によって示される機能によって分類を行う<1. 2. 3. …で示す>。次に機能を効果的に果たす技法としてこれらの製品を使用する際の方法、具体的には着柄のための加工の方法によって分類を行う<A. B. C. …で示す>。そして最後に骨製品の形態的な特徴、つまり素材となる動物種や部位によって分類を行う<i. ii. iii. …で示す>。

非生産用具としての呪術的な骨製品は、現在のところ確認できなかったため、装飾品としての骨製品の分類に限られる。装飾品としての骨製品は、その装着の方法によって分類される<1. 2. 3. …で示す>。この装着方法は、その出土状況によって明確にされるが、先島諸島において、人骨に伴った出土した例がないため推察の域をでない。次にこれらの装着するための加工、具体的には穿孔と挟りなどの加工の方法によって分類を行う<A. B. C. …で示す>。そして最後に生産用具と同様に形態的な特徴によって分類を行う<i. ii. iii. …で示す>。しかし、生産用具とは異なり、非生産用具に関しては、素材となる動物種や部位が、当時の人々の精神面と大きく関わってくる点は留意するべきである。

尚、サメ歯製品に関しては、新里貴之・上村俊雄の両氏によって詳細な分類がなされており、本製品に関してはこの分類に従う。

(2) 生産用具(図3)

1. 骨針：針の基本形態としては、先端部を尖らせ、頂部に穿孔をもつもので、針としての機能を有すると推定されるものを針とした(1・2)。
2. 骨錐(刺突具)：骨錐の基本形態は、一端を尖らせており、他端は自然面をよく残すものである。他端近くから斜位に打ち欠き、先端部に研磨を施して整形する。打割面には、整形痕か使用痕かは不明であるが、斜位の傷痕が多数認められる。使用される素材として、イノシシ脛骨、イノシシ大腿骨があるが、形態的に類するため一括して扱った。
3. ヤス：ヤスの基本形態としては、先端部を尖らせ、他端に着柄のための加工を有する製品である。使用のための製作技法によって大きく6つに分かれる。
 - A. 骨を縦に半裁し、一端を割ってソケット状を呈する。他端は、先端部を尖らせる。また、挟りが認められる製品もあり、着柄のための加工も推察される。使用される素材によって、イノシシの脛骨、尺骨、腓骨、橈骨に細分されるが今回は一括して扱った。
 - B. 茎部と基部とを作り出す製品で、逆刺などの加工を施さない。従来尖頭器と呼ばれている製品である。その大きさによって細分可能であるが今回は一括して扱った(12・13)。
 - C. 基部の先端部両側に逆刺加工を施すもので、山原貝塚から1点のみ出土している(14)。
 - D. 基部の先端部の片側に逆刺加工を施すもので、慶来慶田城遺跡から1点のみ出土している(15)。形態的に類似する鉄製の製品が与那良遺跡から出土している。
- E. 鏃としての用途も推察される製品である。新里・上村分類のA - 2に相当する(7)。

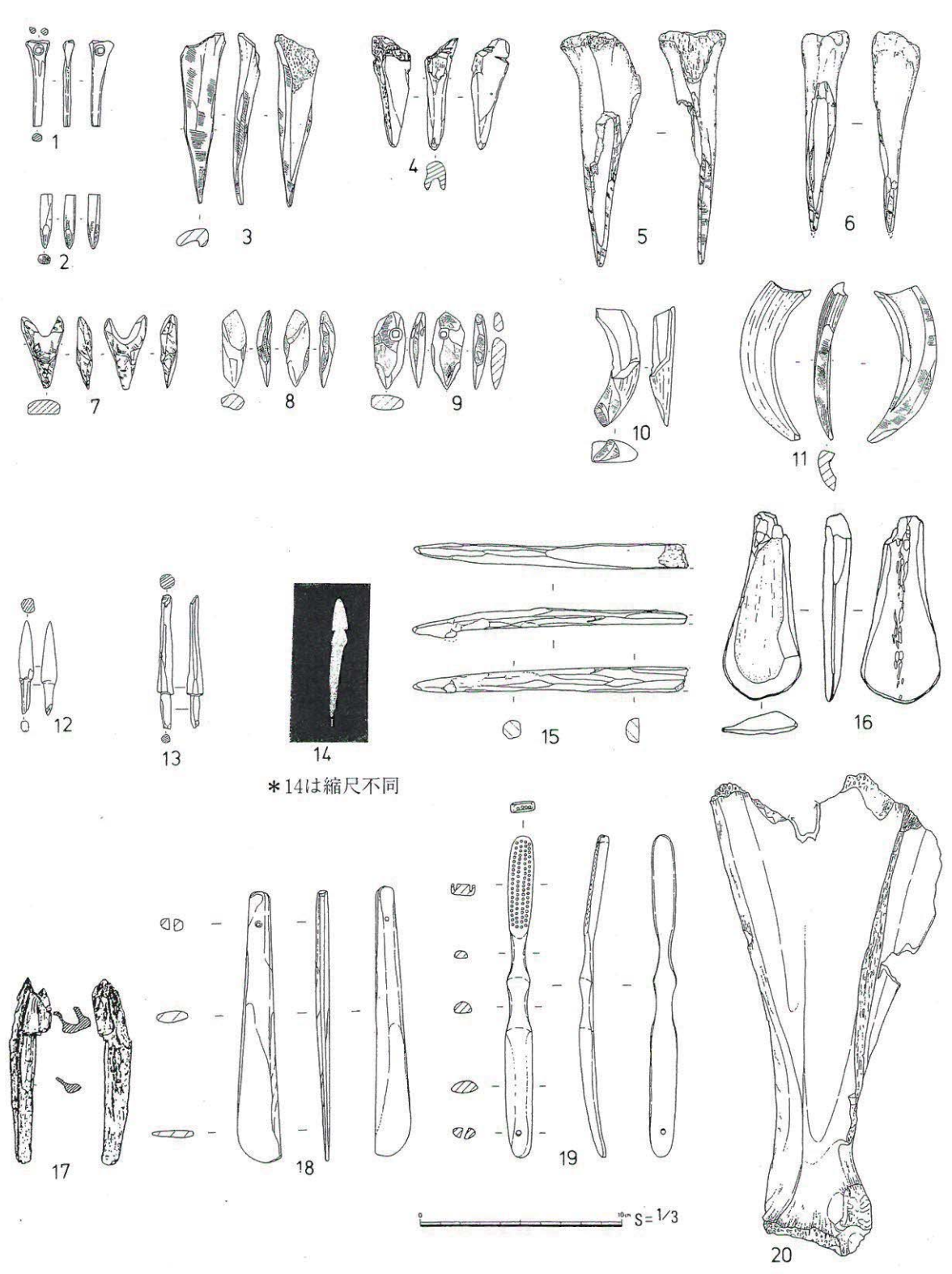


図3 生産用具

- 1・2：骨針(下田原貝塚) 3・4：ヤスA(下田原貝塚) 5・6：刺突具(錐)(長間底遺跡) 7：ヤスE下田原貝塚
 8・9：ヤスF(下田原貝塚) 10：磨製刃器B(下田原貝塚) 11：磨製刃器A(下田原貝塚) 12・13：ヤスB(フルスト原遺跡)
 14：ヤスC(山原貝塚) 15：ヤスD(慶来慶田城遺跡) 16：磨製刃器C(ピロースク遺跡) 17：骨錠(山原貝塚)
 18：裁縫用ヘラ(慶来慶田城遺跡) 19：歯ブラシ(慶来慶田城遺跡) 20：脱穀具(尻並遺跡)

F.Eと同様に鏃としての用途も推察される製品である。新里・上村分類のB-7に相当する(8・9)。

本製品は、下田原貝塚の報告書内で金城亀信氏によって詳細な2次加工の過程が示されている。

4. 磨製刃器：磨製刃器の基本形態としては、刃器としての面を有する製品である。刃部の形成方法によって3種認められる。A・Bは下田原貝塚からのみ出土する製品であり、Cは第Ⅲ期の特徴的な製品として早くから指摘されている(新田1980)。

A.犬歯を縦に半裁し、外側または内側に刃面を形成する(11)。イノシシの犬歯を素材とする。

B.犬歯の先端部に刃面を有するものである(10)。イノシシの犬歯を素材とする。

C.骨の一端に両面もしくは片面から研磨を施して刃面を形成する製品である。従来骨斧として報告されている製品である(16)。使用される素材などは不明確である。

5. 骨篋：本製品は金武正紀氏によって「イノシシの掌足骨や肋骨などを縦に裂き、一端を削って扁平にし、研磨を施したもので先端部は方形、円形などがある。」とされた製品である。(17)。

6. 裁縫用ヘラ：骨製の裁縫用ヘラである(18)。

7. 歯ブラシ：骨製の歯ブラシである(19)。

8. 脱穀具：尻並遺跡から1点のみ出土している。ウスビラと称される脱穀具である(20)。

(3)非生産用具(図4)

1. 垂飾品：垂飾品の基本形態としては、装着のための穿孔もしくは抉りなどの加工を施して垂れ飾りとしての機能を有する製品である。

A.穿孔を施す製品(1~8、10)。

i：サメ歯製。サメ歯製垂飾品は新里・上村分類によるA-1と、B-1-II(1・3)とB-2-II(2)の3つがある。

ii：イヌ犬歯製。下田原貝塚から1点出土するのみである(4)。

iii：イノシシ犬歯製。穿孔を施す製品は浦底貝塚からのみ8点出土する(10)。

iv：イノシシ切歯製。イノシシの切歯に1孔を穿つ。アラフ遺跡からのみ1点出土する(5)。

v：その他：ウツボ下顎骨を素材とする製品(6)やモンカラカワハギ製などが出土する。

vi：各種の椎骨の中央部に穿孔する製品である(7・8)。

B.抉りを施す製品(9)。

i：イノシシの犬歯に抉りを施す製品が長間底遺跡より1点のみ出土している(9)。

2. 簪：簪状の製品が宮国元島より1点出土する(11)。

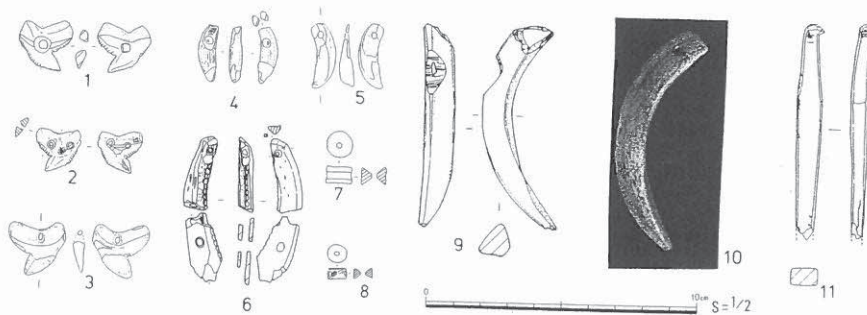


図4 非生産用具

1：垂飾品A-i(下田原貝塚) 2：垂飾品A-i(トゥグル浜遺跡) 3：垂飾品A-i(アラフ遺跡) 4：垂飾品A-ii(下田原貝塚)
5：垂飾品A-iv(アラフ遺跡) 6：垂飾品A-v(下田原貝塚) 7・8：垂飾品A-vi(トゥグル浜遺跡) 9：垂飾品B-i(長間底遺跡)
10：垂飾品A-iii(浦底遺跡) 11：簪(宮国元島)

5. 考察

先島諸島の骨製品の集成と分類を概観してきた。考察においては、実見することのできた第Ⅰ期と第Ⅱ期の製品を中心に、分類案と表2をもとに各時期における骨製品の整理を行い、骨製品からみた各時期の特徴と関係性について若干の考察を行っていきたい。まず、第Ⅰ期の遺跡については、トゥグル浜遺跡に着目したい。トゥグル浜遺跡に関しては、安里嗣淳によって再検討がなされているが、骨製品の出土状況からも下田原貝塚と同様のヤスFが出土する点や、骨錐として報告されている製品についても、長間底遺跡とは異なる様相を示している点などが示される。その他の遺跡として、長間底遺跡、浦底遺跡、アラフ遺跡に関しては、共通する製品が少ない状況にある。しかしながら、イノシシの犬歯の使用方法に関しては、明らかな第Ⅱ期との異なる様相が見て取れる。また、沖縄本島との関係性についてみると、浦底遺跡から出土する犬歯に1孔を穿つ製品が沖縄本島では少なく、両地域の比較を行う際にも重要な製品になると思われる。

第Ⅱ期の遺跡に関しては、下田原貝塚のみであるが、その種類と出土量は多い。サメ歯製品に関しては新里・上村両氏や金城亀信氏によって考察がなされているが、新里・上村分類のB-VIIは、先島諸島第Ⅱ期の特徴的な製品として認識される。また、従来骨錐とされていた製品に関しては、その形態と加工方法からヤスとして扱ったが今後検討を必要とされる。磨製刃器に関しても、本時期の特徴的な製品である。本製品に関しても、金城によって詳細な製作過程が述べられている。イノシシの犬歯のこのような加工方法が沖縄本島に認められないことから、第Ⅱ期の文化系譜を考える上でも注意される製品である。

第Ⅲ期の遺跡に関しては、早くから先島諸島における地域性が指摘されており、ヤスB(従来の骨製尖頭器)骨篋、磨製刃器C(従来の骨斧)があげられている。今回は、実見した資料が少なかったため、具体的には考察を行うことができないが、今後の方向性として、ヤスBの製作技法の復元を行う必要があると考える。ヤスBは第Ⅲ期のほとんどの遺跡から出土しており、石垣貝塚においては未製品も含めてまとまって出土している。また、その用途に関しても使用痕や動物遺存体などとの関係性も考えていきたい。

第Ⅳ期に関しては、明確な本時期の骨製品を確認できなかった。

6. まとめ - 今後の課題 -

本論では、骨製品に焦点をあてて、各時期の製品の特徴や各時期での比較検討を行った。その結果、考察で述べたような一定の特徴をおさえることができた。しかしながら、これまでに指摘されているような文化系譜の問題点や、各時期の関係性に関しては明確な答えを出すにはいたらなかった。今後、これらの問題点を考えていく上で、下記の点の考察を深めていきたい。

- ・ 周辺地域(沖縄本島・台湾・中国など)との関係性。同様の骨製品を用いる文化の有無。
- ・ 当時の生業活動の復元。各種の骨製品の用途を考えていく上で、狩猟・漁労などとの関係性に着目し、各遺跡から出土する動物遺存体の種構成比、また骨に残された傷(解体痕や貫通痕など)の分析を行う。
- ・ 製作技術の復元。製作技法の違いによって地域差・時間差などを考える。

今回は、骨製品に着目して、先島諸島の考古学の問題点にアプローチを行った。しかしながら、骨製品のみで考えていくには限界があり、土器、石器、貝器などの各遺物から考えていくことは、当然のことであり、筆者の今後の大きな課題としたい。

(くがい みつぐ：調査課 臨時任用職員)

引用・参考文献

1. 青山学院大学ヤマバレー遺跡調査団 1977年 『沖縄・石垣島 ヤマバレー遺跡発掘調査概報』
2. 青山学院大学ヤマバレー遺跡調査団 1980年 『沖縄・石垣島 ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報』
3. アラフ遺跡発掘調査団 2003年 『アラフ遺跡調査研究Ⅰ - 沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告』
4. 石垣市教育委員会 1977a年 『フルスト原遺跡』 石垣市文化財調査報告書第1集
5. 石垣市教育委員会 1977b年 『八重山石垣島カンドウ原遺跡発掘調査報告書』
石垣市文化財調査報告書第2集
6. 石垣市教育委員会 1981年 『沖縄石垣市桃里恩田遺跡発掘調査ニュース』
7. 石垣市教育委員会 1982年 『桃里恩田遺跡 - 沖縄県石垣市桃里恩田遺跡試掘調査報告書』
石垣市文化財調査報告書第5集
8. 石垣市教育委員会 1983a年 『沖縄県石垣市ピロースク遺跡発掘調査報告書』
石垣市文化財調査報告書第13号
9. 石垣市教育委員会 1983b年 『山原貝塚発掘調査概報』
10. 石垣市教育委員会 1984a年 『フルスト原遺跡発掘調査報告書』 石垣市文化財調査報告書第7号
11. 石垣市教育委員会 1984b年 『山原貝塚発掘調査報告書』 石垣市文化財調査報告書第8号
12. 石垣市教育委員会 1989年 『保存管理計画策定報告書 史跡フルスト原遺跡』
13. 石垣市教育委員会 1993年 『石垣貝塚 - 県道真栄里新川線街路改修工事に伴う発掘調査報告書』
石垣市文化財調査報告書第17号
14. 石垣市教育委員会 2004年 『喜田盛遺跡 - 真栄里新川線街路工事に伴う緊急発掘調査』
石垣市文化財調査報告書第28集
15. 上野村教育委員会 1980年 『宮国元島』 上野村文化財調査報告書第1集
16. 江上幹幸・松葉崇 2003年 『アラフ遺跡』 『考古学ジャーナル』497号 ニューサイエンス社
17. 大濱永亘 1999年 『八重山の考古学』 先島文化研究所
18. 沖縄県教育委員会 1976年 『八重山石垣市 - 平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告書』
沖縄県文化財調査報告書第3集
19. 沖縄県教育委員会 1978年 『石城山遺跡 - 緊急発掘調査概報』 沖縄県文化財調査報告書第15集
20. 沖縄県教育委員会 1981年 『住屋遺跡緊急発掘調査報告』
21. 沖縄県教育委員会 1983年 『カンドウ原遺跡発掘調査報告(1)排水溝に伴う緊急調査』
沖縄県文化財調査報告書第49集
22. 沖縄県教育委員会 1984a年 『宮古城辺町 - 長間底遺跡 - 発掘調査報告』
沖縄県文化財調査報告書第56集
23. 沖縄県教育委員会 1984b年 『カンドウ原遺跡 - 癌・排水工事に係わる緊急発掘調査』
沖縄県文化財調査報告書第58集
24. 沖縄県教育委員会 1985年 『与那国島トゥグル浜遺跡 - 与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査』
沖縄県文化財調査報告書第74集
25. 沖縄県教育委員会 1986年 『下田原貝塚・大泊浜貝塚 第1・2・3次発掘調査』
沖縄県文化財調査報告書第74集
26. 沖縄県教育委員会 1997年 『西表島慶来慶田城遺跡 重要遺跡確認調査』
沖縄県文化財調査報告書第131集
27. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002年 『新里東元島遺跡上方台地遺跡 新里元島』

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第7集

28. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003年 『尻並遺跡 - 那覇地方裁判所平良支部立て替えに伴う発掘調査』

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第15集

29. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004年 『嘉田地区古墓群 - 嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第21集

30. 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文 1960年 「波照間島下田原貝塚の発掘調査」

『水産大学校研究報告』人文科学篇9号

31. 国分直一 1972年 『南島先史の研究』 慶友社

32. 金子浩昌・忍沢成規 1986年 『骨角器の研究 縄文篇Ⅰ』 慶友社

33. 金子浩昌・忍沢成規 1986年 『骨角器の研究 縄文篇Ⅱ』 慶友社

34. 金武正紀 1982年 「Ⅲ-4 骨製の道具と装身具」 『沖縄歴史地図』考古編 柏書房

35. 島袋春美 2000年 「沖縄・奄美諸島における「骨製品」と「模造品」について」『琉球・東アジアの人と文化』

36. 新里貴之・上村俊雄 1998年 「南西諸島に分布するサメ歯製品およびその模造品」

『南島考古』No17 沖縄考古学会

37. 高宮廣衛、C・W・ミーヤン 1959年 「鳩間島中森貝塚発掘調査報告」 『文化財要覧』

38. 高宮廣衛 1992年 「八重山考古学研究略史」 『陳奇禄院 慶論文集』

39. 滝口宏 1960年 『沖縄・八重山』 校倉書房

40. 玉津博克 1986年 「五. 考古学上の宮良」 『宮良村誌』 宮良公民館

41. 友寄英一郎・髙元政秀 1976年 「上ノ頂(ウイヌツズ)遺跡調査概報」 『琉大史学』第4号

42. 仲筋貝塚発掘調査団 1981年 『沖縄・石垣島仲筋貝塚発掘調査報告』

43. 新田重清 1980年 「八重山諸島の考古学界に関する最近の動向」 『第四紀研究』第18巻第4号

44. 平良市教育委員会 1983年 『住屋遺跡(俗称：尻間)発掘調査報告』

45. 平良市教育委員会 1992年 『住屋遺跡』

46. 平良市教育委員会 1999年 『住屋遺跡(1)庁舎建設に伴う緊急発掘調査報告書』

平良市埋蔵文化財調査報告書第4集

47. 平良市教育委員会 2003年 『尻川遺跡 - 個人住宅建設予定に伴う緊急発掘調査報告書』

平良市埋蔵文化財調査報告書第5集

48. 三島格 1989年 『南島考古学 - 南島・大和および華南・台湾』 第一書房

49. 与那良遺跡調査団 1982年 『沖縄・西表島 与那良遺跡発掘調査概報』

50. The Gusukube Town Board of Education 『THE URASOKO SITE A Sketch of the Excavation in Photographs』

ジュンゴン骨に関する出土資料の集成 (補遺・1)

Compilation of Excavated Dugong Bones (Supplement 1)

盛本 勲

MORIMOTO Isao

ABSTRACT: This paper aims to add more data to the compilation of excavated dugong bones issued in the last volume of this bulletin. The last paper presented the dugong bone specimens from 103 sites in total. This time, ten more sites are introduced from the Satsunan Archipelago (1), Okinawa Archipelago (6) and Yaeyama archipelago (3), and the total number of the sites becomes 113. Although the major concentration of the sites exists in Okinawa district, two specimens belong to Honshu and Kyushu. Based on the folk records and oral traditions, these exceptions were supposed to have occurred due to stray dugong along the Black Current. An additional example from Satsunan Archipelago, adjacent to southern Kyushu, should support this assumption.

筆者は、縄文時代併行期以降の琉球列島における骨製品の素材や形状の特徴などから、薩南諸島以北の日本列島における鹿角などに対応する骨製品素材として、海棲哺乳類のジュゴン (Dugong dugon) の肋骨などが相当するものと考え(盛本2004b)、研究の端緒として、動物考古学研究の基礎となる遺存骨と製品の出土時期および空間的分布状態の把握を第一の目的として、これらの集成を行った(盛本2004a)。その結果、本州島1、九州島1、奄美諸島5、沖縄諸島79、宮古諸島8、八重山諸島9の計103遺跡よりの出土が確認され、部位ごとの出土量、さらには利用製品の具体的内容が判明し、その多様性と出現頻度の高さが明らかとなった。この内容は、今後の調査の進展に伴って、さらに増えるであろうであろうことは容易に推測できた。

本稿は、旧稿において遺漏があったものや、旧稿作成以後に刊行された発掘調査報告書などからの集成の補遺である。

旧稿において、これらの分布状況からして、棲息域から大きくかけ離れている本州島の愛知県渥美町保美貝塚や九州島の佐賀県唐津市菜畑遺跡例などは、民俗事例や伝承などを(江崎1935)¹⁾等も考慮した結果、フィリッピン沖に源流をもつ黒潮にのって迷遊したものであろう、と考えた。今回の補遺では、このことを補強する報告が鹿児島県南種子町一陣長崎鼻貝塚(縄文晩期)(鹿児島県教委1977, 西中川・久林2004)にあることが判った。

このようなことから、分布の中心は奄美諸島以南の沖縄諸島にあることが判る。そして、琉球列島では、縄文時代前期併行期の野国貝塚群B地点出土の爪形文件出例を最古とし、以後、近世までの各時代の遺跡よりの出土がある。分布状態をさらに詳細に見ていくと、琉球列島の中でもより棲息域に近い沖縄諸島に分布の中心があり、北限に近い奄美諸島では少ないということが明らかである。この観点に立脚するならば、沖縄諸島に比べてより多いはずの宮古・八重山諸島は、発掘調査事例の少なさということもあり、現段階での出土遺跡数は必ずしも多くない。また、出土量の多い沖縄本島をみた場合(旧稿:図4)、出土遺跡の立地は沿岸部、内陸部を問わず出土していることが判る。

今回、上記一陣長崎鼻貝塚以外に、沖縄諸島において7遺跡、八重山諸島において3遺跡の11遺跡を追加することができた。これらのうち、勝連町津堅貝塚が沖縄後期、竹富町仲間第一貝塚が南琉球新石器時代後期に属するほかは、グスク時代に属する遺跡である。

(もりもといさお:調査課課長)

表1 ジュゴン骨および骨利用製品集成一覧(補遺・1)

()内の数字は点数

番号	遺跡名	時期	出土骨(点数等)	製品(利用部位等)	文献
1	鹿児島県南種子町 一俣長崎鼻貝塚	縄文晩期	人魚骨	—	鹿児島県教委1977, 西中川・久林2004
2	今帰仁村今帰仁城跡 (主郭地区)	グスク	歯(1), 上腕骨(3), 肋骨片	骨鏃(3), 器種不明製品(1), 賽子 未製品(2), 未製品(4), 模造品(1)	金武・松田・宮里 編1991
3	石川市伊波城跡	グスク	肋骨(10), 歯(1), 焼骨(5)	—	上原編2003
4	勝連町津堅貝塚	沖縄後期	部位名の記載なし(1:EグリッドII層)	—	池田・後藤2001
5	勝連町平敷屋トウ バル遺跡	沖縄後期	肋骨(18), 左環椎(1), 右環椎(1), 橈骨(1)	—	宮城・東富編2004
6	那覇市首里城跡 (城郭南側地区)	グスク	椎体(2), 棘突起(4), 肋骨片(2)	肋骨利用製品(1), 犬歯利用製品(1)	知念・新垣編2004
7	那覇市首里城跡 (城の下地区)	グスク	後頭骨(1)	不明(第39図6は, 肋骨利用製品の 可能性あり)	羽方編2004
8	那覇市銘苅直禄原 遺跡	グスク(13~15C の低湿地遺跡)	肋骨?片(1), 不明(1)	骨錐状製品(肋骨利用)(1)	樋口他2003
9	佐敷町佐敷グスク	グスク	部位及び数量不明(僅少)	—	当真編1980
10	竹富町仲間第一貝 塚		肋骨片(少数), 嵩個体分の頭蓋, 歯, 四肢 骨	—	滝口編1960, 金子 1983
11	竹富町慶来慶田城 遺跡	グスク~近世	鍛冶屋跡:後頭顆L(1), 椎体・脊弓片(1), 肋骨(L:1, 不明(1)), 翁屋敷跡:椎体:椎体 棘突起(1), 肋骨片(4), 破片(1), 仮薩摩 在番跡:肋骨片L(1)	—	金城他1997
12	竹富町上村遺跡	グスク	肋骨片(1)	—	大城他1991

註

1)江崎によれば, 日本列島内での例外的な迷遊例の記録として, 宮城県油津付近でも漁れたことがあるという。

<参考文献>

江崎悌三, 1935: 八重山遊記-4-(ザンの魚), ドルメン, 第4巻第4号, pp305~311, 岡書店, 東京。

盛本 勲, 2004a: ジュゴン骨に関する出土資料の集成(暫定), 沖縄埋文研究 2, pp23~42, 沖縄県立埋蔵文化財センター, 沖縄県西原町。

盛本 勲, 2004b: 奄美・沖縄諸島の骨角牙製品, 沖縄考古学会2004年度研究会発表要旨「後期文化の様相」, pp17~21, 沖縄考古学会, 宜野湾。

【集成(暫定)(補遺・1)に関する発掘調査報告書等一覧】

池田榮史・後藤雅彦, 2001: 第1節 津堅貝塚, 宮城伸一編: 町内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 平成11・12年度 津堅貝塚 平敷屋古島遺跡 浜貝塚, pp5~18, 勝連町の文化財第21集, 勝連町教育委員会, 沖縄県勝連町。

上原 静・編, 2003: 伊波城跡 史跡整備事業計画策定に伴う遺構調査概要, 石川市文化財調査報告書第5集, 石川市教育委員会, 石川。

大城 慧・他, 1991: 上村遺跡-重要遺跡確認調査報告書-, 沖縄県文化財調査報告書第98集, 沖縄県教育委員会, 那覇。

鹿児島県教育委員会, 1977: 鹿児島県市町村別遺跡地名表, 鹿児島。

金子浩昌, 1983: 狩猟対象と技術, 加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究』, 2, pp96, 雄山閣, 東京。

金武正紀・松田朝雄・宮里末廣・編, 1991: 今帰仁城跡発掘調査報告II, 今帰仁村文化財調査報告書第14集, 今帰仁村教育委員会, 沖縄県今帰仁村。

金城 透・他, 1997: 西表島 慶来慶田城遺跡 -重要遺跡確認調査-, 沖縄県文化財調査報告書第131集, 沖縄県教育委員会, 那覇。

滝口 宏・編，八重山の考古学．『沖縄八重山』．早稲田大学考古学研究室報告第7冊．pp100～173．早稲田大学考古学研究室．東京．

当真嗣一・他，1980：佐敷グスク-佐敷グスク発掘調査報告-．佐敷町教育委員会．沖縄県佐敷町．

西中川駿・久林朋憲，2004：九州の縄文遺跡出土の哺乳類遺体．鹿児島考古，第38号．pp53～64．鹿児島県考古学会．鹿児島．

樋口麻子・他，2003：銘苅直祿原遺跡-天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 Ⅲ．那覇市文化財調査報告書第57集．那覇市教育委員会．那覇．

宮城伸一・東當美和編，2004：第2章 調査の記録 第1節 平敷屋トウバル遺跡．町内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 平成13・14年度 平敷屋トウバル遺跡 津堅島キガ浜貝塚 津堅貝塚南風原古島遺跡．pp5～86．勝連町の文化財第22集．勝連町教育委員会．沖縄県勝連町．

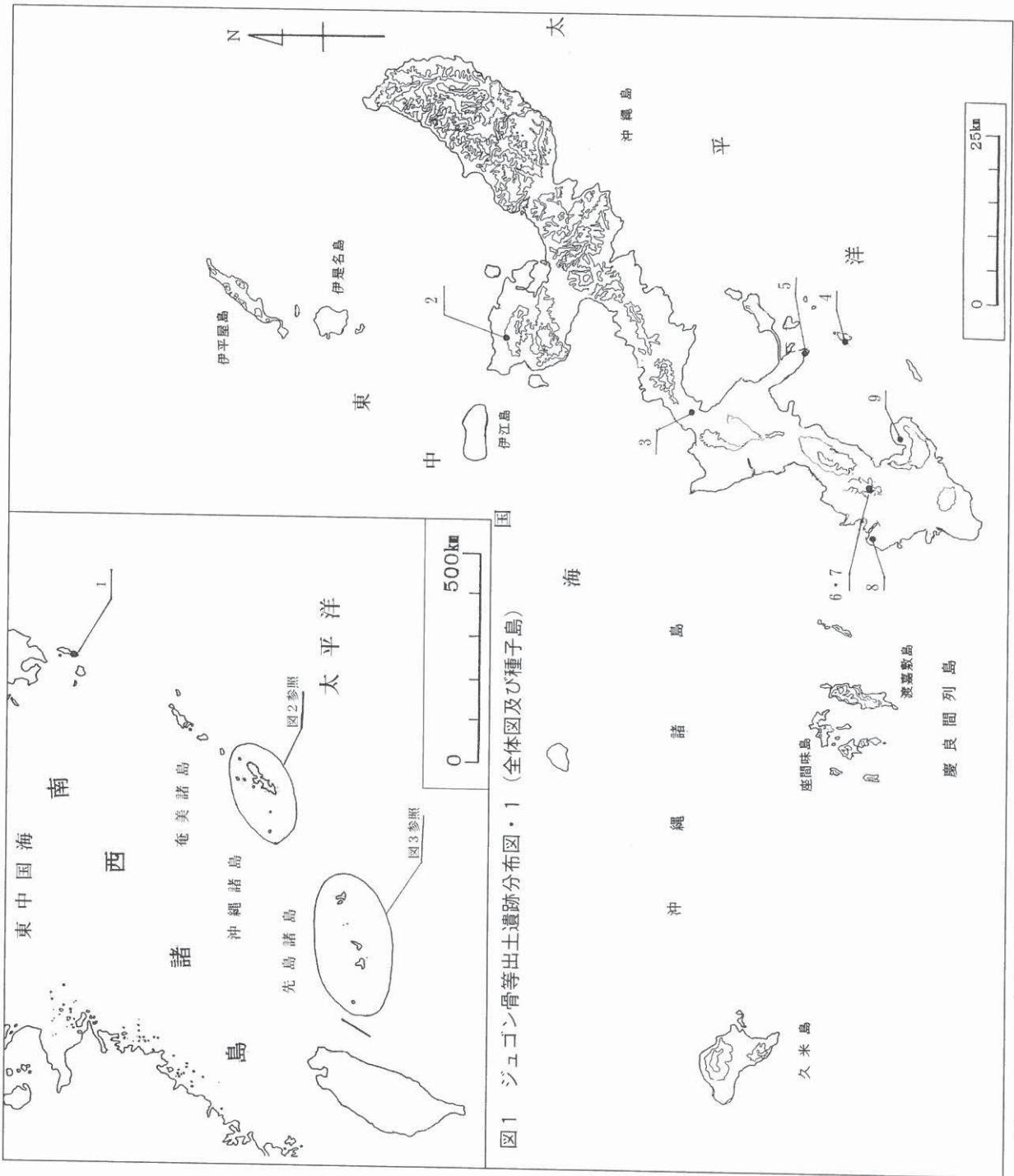


図1 ジュゴン骨等出土遺跡分布図・1 (全体図及び種子島)

図2 ジュゴン骨等出土遺跡分布図・2 (沖縄諸島)

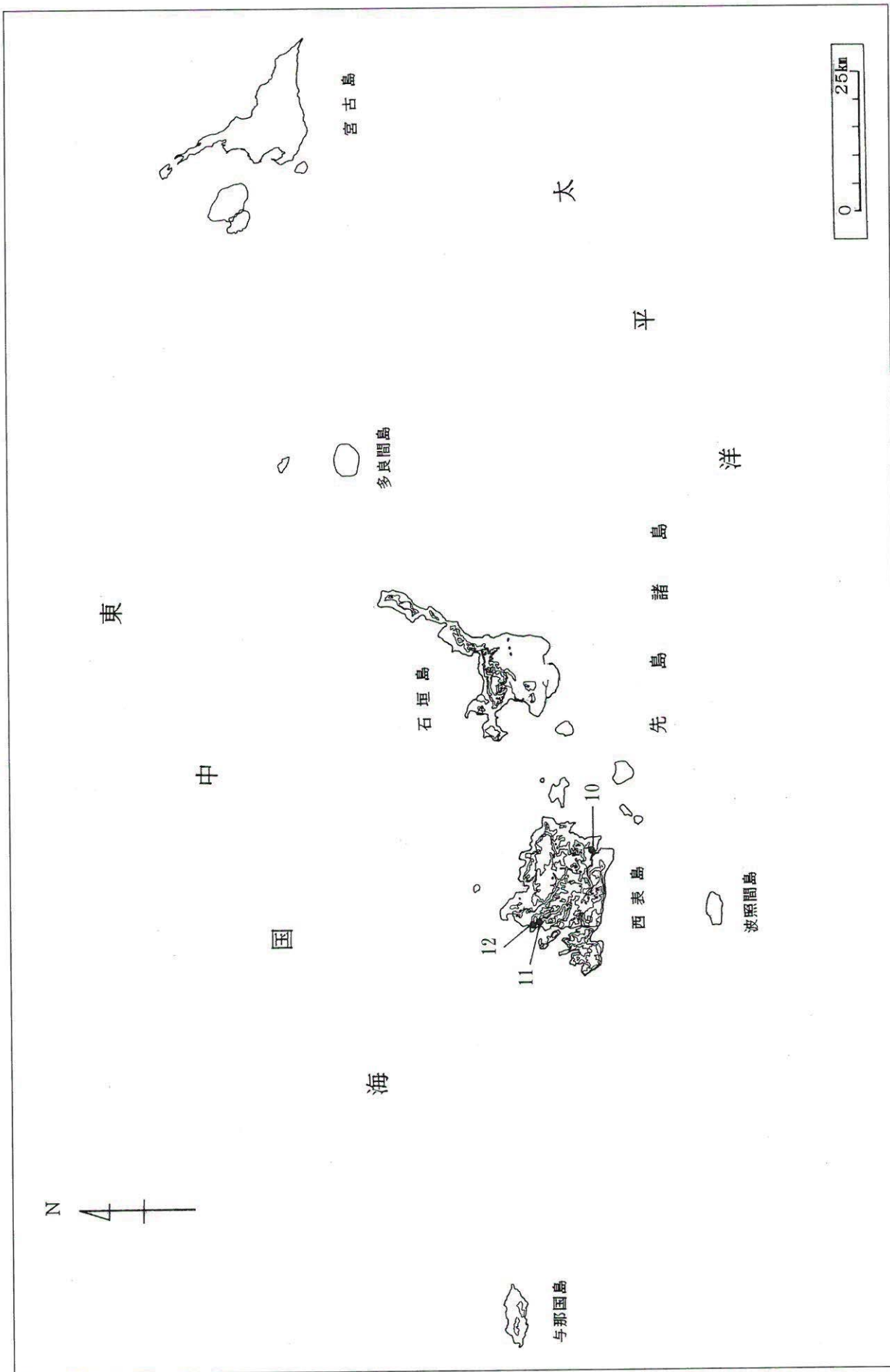


図3 ジュゴン骨等出土遺跡分布図・3 (宮古・八重山諸島)

南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査(Ⅱ)

—海洋採集遺物からみた海上交通—

Primary Investigation into discovering Sunken Ships in the Southwest Island (Ⅱ)

-Underwater artifacts and marine transportation-

宮城弘樹・片桐千重紀・比嘉尚輝・崎原恒寿

MIYAGI Hiroki KATAGIRI Chiaki・HIGA Naoki・SAKIHARA Tsunehisa

ABSTRACT: This paper tries to organize the basic information regarding the possible discovery of sunken ships in the Southwest Archipelago. A paper of the same title was already issued last year, introducing the related artifact collections in Okinawa Archipelago. This time, the focus is upon the Amami Archipelago in order to complete the primary investigation on the possibilities of discovering sunken ships in the entire Southwest Archipelago.

The paper includes reports on various artifact collections found in underwater and coastal areas, underwater and land discovery of vessel furnishings such as anchor and ballast, and artifact collections from specific locations where the shipwrecks were recorded in archives.

As a result, seven sites with maritime artifact distributions were recognized in Kagoshima and Amami Archipelago, and six locations of stone anchor discovery were registered. One archival record about a shipwreck event was also found. Analyzing the entire information, a total of twenty five possible locations for sunken ship discovery are compiled in the Southwest Island and Kagoshima.

1. はじめに

沖縄埋文研究2(宮城他2004)において、沖縄諸島における沈没船発見の可能性のある事例について紹介した。具体的には、12世紀から17世紀までは遺物の採集事例を中心に、18世紀以降については記録から沈没船と関わりのある事例について17地点の事例報告を行った。2004年には奄美諸島を中心として、沖縄諸島の追加調査を含め同様の手法によって調査を継続した。以下、事例を紹介する。

調査の目的や意義、調査方法については前回の報告を参照されたい。

2. 調査概要

今回は調査前に得られた情報から下記の日程で調査を行った。

第1次調査(2004年5月)

宮古島八重干瀬・多良間島調査。昨年度は潜水調査を実施したが、今回は干潮時に最も八重干瀬があらわれるとされる浜下りの時期に合わせ、池間島沖の八重干瀬に座礁したとされるプロビデンス号の座礁ポイントを調査した。多良間島ではさらに沖に向かって遺物散布状況の踏査を実施した。また、前回できなかった鉄錨の実測も行った。

第2次調査(2004年7月)

今帰仁村沖潜水調査。今帰仁村運天港沖では年代不明の木造船が確認され、古宇利島沖では戦時中の軍船「エモンズ」の沈没が知られている。今回は潜水調査を行い、位置座標と記録写真を撮った。

第3次調査（2004年9月）

奄美大島調査。奄美大島で確認されている周知の遺跡である「倉木崎海底遺跡」を調査し、すでに陸上に引き揚げられている碇石や場所がほぼ特定されている碇石採集ポイント（イカリ浜）において海底の調査を行った。既報告資料（當眞1996）もあるが実測図等未報告の碇石があるため、実測図を作成した。

第4次調査（2004年10月）

鹿児島坊津町・金峰町調査。鹿児島県坊津町坊津・泊・秋目、知覧町知覧、金峰町吹上浜の5つの海岸において海浜の踏査を行った。坊津と泊では現場で陶磁器を採集、坊津歴史資料センター輝津館と金峰町教育委員会ではこれまでに採集された陶磁器を確認した。

第5次調査（2004年11月）

沖永良部島調査。沖永良部島和泊町のウジジ浜では英国カナダ籍船トループ号の座礁ポイントにおいて潜水調査を行った。海底では遺物の散布を認めることはできなかったが、採集遺物が地元で保管されておりこれを確認することができた。

第6次調査（2005年1月）

徳之島調査。徳之島の幾つかの海岸で調査を実施したが、伝承で伝わるオランダ船座礁地点では陶磁器等の散布は認められなかった。

3. 遺跡（確認地点）の紹介

本章では、既に周知の遺跡として、また今回調査によって確認された遺跡や遺物散布地、沈没船関連事例としての碇石などについて紹介していきたい。紹介にあたっては、前回の調査（宮城他2004）にアルファベット記号を追加する形でおこなっている。このため、先の報告の補記を行うものについても掲載した。前回は記述したがアルファベット記号で地点名を示すのは、今後これらの遺跡や遺物採集地点は、直接保存管理する市町村教育委員会によって名称が決められる方がよいと判断したためである。また当該地点はあくまでも遺物採集地点や文献により場所がほぼ特定できる地点であり、追調査によって厳格に検討されるべき場所と考える。

r 地点（鹿児島県大島郡龍郷町イカリ浜） 中世

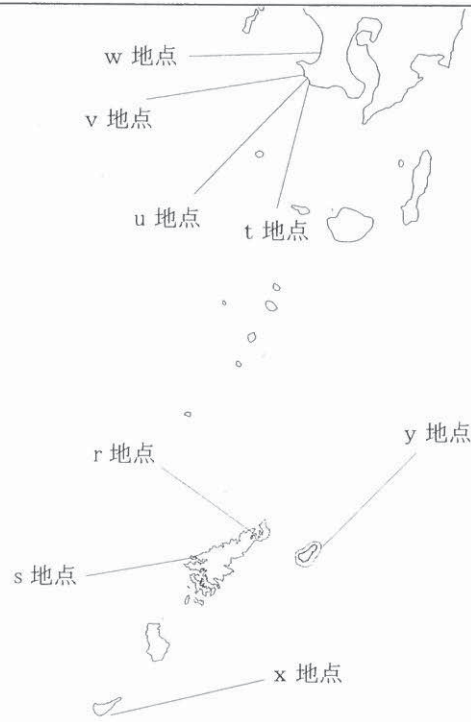
奄美大島で7本の碇石を確認することができた。但し、出土地点が確認できたのは龍郷町イカリ浜（r 地点）で確認された2本の碇石1件だけである。あわせて、イカリ浜の潜水調査を実施したが遺物の散布などは認められなかった。ここでは、奄美大島において確認されている未報告の碇石について報告する。奄美大島の碇石については當眞氏が詳細な報告（當眞1996）を行っているが、その当時から場所が移動しているものもあるため、現在の所在地一覧表を作成した。



写真1 龍郷町イカリ浜

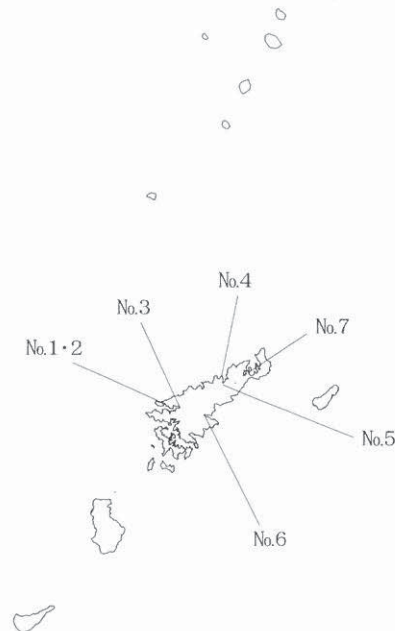
宇検村 宇検村では3本の碇石を調査した。2本は宇検公民館の庭に、1本は田検小学校裏の井戸の橋桁として転用されていた。宇検公民館所在の碇石は便宜的に大きい方をA、小さい方をBとした。

地点名	場所	採集資料	保管場所
r地点	鹿児島県奄美大島龍郷町イカリ浜	礎石	住用村奄美アイランド・龍郷町中央公民館
s地点	鹿児島県奄美大島宇検村倉木崎	12～13世紀中国陶磁器	宇検村教育委員会
t地点	鹿児島県坊津町泊浜	青磁等	歴史資料センター輝津館
u地点	鹿児島県坊津町久志浦・博多浜	陶磁器	歴史資料センター輝津館
v地点	鹿児島県坊津町秋目浦	船体の一部	歴史資料センター輝津館
w地点	鹿児島金峰町吹上浜	肥前磁器	金峰町教育委員会
x地点	鹿児島県沖永良部島知名町ウジジ浜沖	金属製品	ダイビングショップ「アミーゴ」山本先友氏
y地点	鹿児島県喜界島沖	-	-



遺跡・遺物散布地

地点名	場所	採集資料	保管場所
No.1	宇検村宇検集落 礎家	礎石	宇検村宇検公民館庭
No.2	宇検村宇検集落 礎家	礎石	宇検村宇検公民館庭
No.3	宇検村田検小学校裏の井戸	礎石	宇検村田検小学校裏の井戸
No.4		礎石	名瀬市奄美博物館
No.5	龍郷町秋名集落 肥後家	礎石	名瀬市市役所裏 肥後家
No.6	龍郷町イカリ浜沖	礎石	住用村奄美アイランド
No.7	龍郷町イカリ浜沖	礎石	龍郷町中央公民館



礎石

第1図 遺跡・遺物散布地確認地点

第1表 奄美大島所在碇石一覧

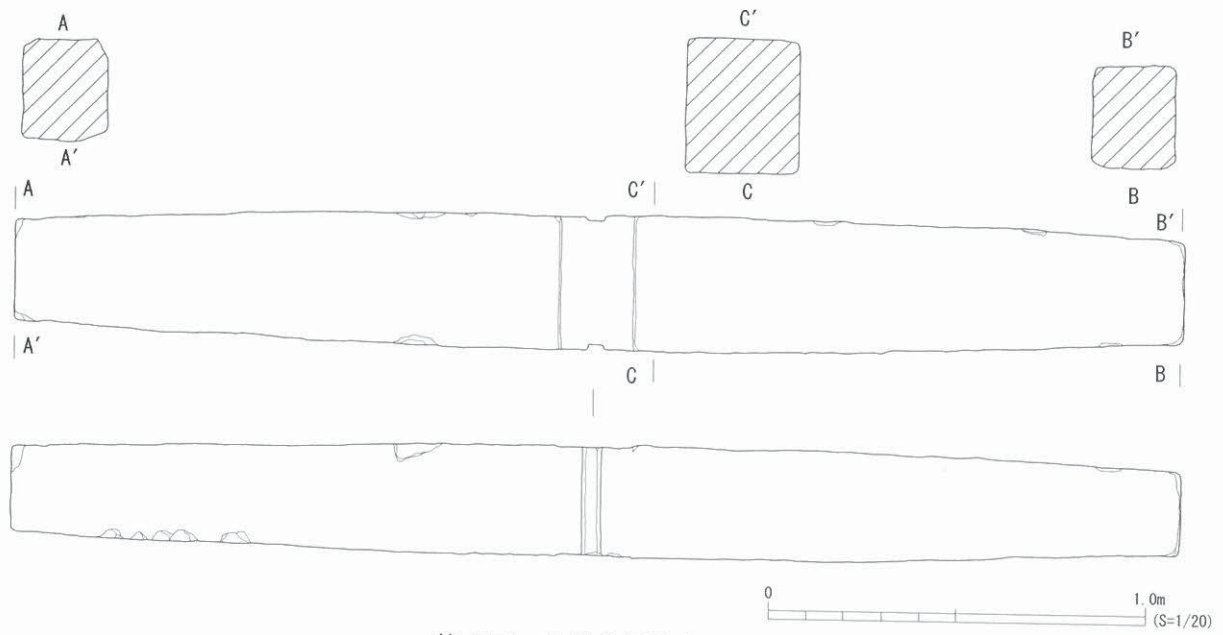
No.	発見場所	現所在地	当真1996	長軸	分類
1	宇検村宇検集落 碇家	宇検村宇検公民館庭	未報告	309 cm	1 A類
2	宇検村宇検集落 碇家	宇検村宇検公民館庭	未報告	282 cm	1 A類
3	宇検村田検小学校裏の井戸	宇検村田検小学校裏の井戸	未報告	112 cm (復元)	2類
4	?	名瀬市奄美博物館	未報告	225 cm	1 A類
5	龍郷町秋名集落 肥後家	名瀬市市役所裏 肥後家	龍郷町秋名集落 肥後家	326 cm	1 A類
6	龍郷町イカリ浜付近の海底	住用村奄美アイランド	住用村奄美アイランド	300 cm	1 C類
7	龍郷町イカリ浜付近の海底	龍郷町中央公民館	龍郷町中央公民館	200 cm	1 C類

2本とも以前は宇検集落の碇家に置かれていたものだが、現在は宇検公民館に移転されている。松岡氏の1 A類に該当するものである(松岡1981)。石材・加工方法ともによく似ており、1船の船舶に使用されていた可能性が高いと思われる。田検小学校裏の井戸に転用されているものは小型で、2類に該当すると思われる。いずれも出土地点等については不明である。宇検村といえば、近隣には後述する倉木崎海底遺跡が所在する。碇石が陸上にあつて、その行政区内に遺物散布がある事例といえば、沖縄でも久米島の宇江城の碇石とa地点(ナカノ浜)の事例が知られる。時代、碇石の形状からも近い事例として興味深い。以下、今回調査した碇石について紹介する。

No. 1 宇検公民館碇石A (第2図, 写真2~4) 大島郡宇検村宇検公民館に所在する。宇検集落の碇家にあつたものだが、現在は公民館庭のため池の橋に利用されている。全長309 cm, 掟身着装部幅20 cm×深さ0.5~1 cm, 固定溝幅5 cm×深さ1.5 cm, 中央部幅35.5 cm×厚30 cm, 先端部幅27 cm×厚22 cmを図る。石材は凝灰質砂岩と考えられる。幅・厚みともに中央部が最も大きく、先端部に向かうにつれて先細りする。腕部の稜には、僅かだが垂直方向の剥離痕が明瞭に残る。制作時に残つたものか使用中に残つたものかは判断できない。上下左右対称構造を志向することから、松岡氏の分類による1 Aに該当する。

No. 2 宇検公民館碇石B (第3図, 写真5~8) 大島郡宇検村宇検公民館に所在する。以前はAと同様に宇検集落の碇家にあつたものだが、現在は公民館の脇に置かれている。全長282 cm, 掟身着装部幅25 cm×深さ1 cm, 固定溝幅6 cm×深さ1 cm, 中央部幅33 cm×厚29 cm, 先端部幅29.5 cm×厚21 cmを図る。石材はAと同じく凝灰質砂岩と考えられる。幅・厚みともに中央部が最も大きく、先端部に向かうにつれて先細りする。腕部の稜には僅かだが、垂直方向の剥離痕が明瞭に残る。制作時に残つたものか使用中に残つたものかは判断できない。上下左右対称構造を志向することから、松岡氏の分類による1 Aに該当する。

No. 3 田検小学校裏碇石 (第4図, 写真9~11) 大島郡宇検村田検小学校裏の井戸の橋桁に転用されている。平面は細長い長方形で、断面がほぼ正方形の棒状を呈する。一部破損しており、半分はコンクリートで固められているため、全体を伺うことはできないが、破損している方は一部だけ露胎しているため、厚みを計上することが可能であった。中央に掟身着装部と考えられる幅広の溝を有することから碇石と判断した。反対側の面にも設けられているかは不明である。掟身着装部を中心に左右対称と考えて復元すると全長111 cm, 幅10 cm×厚10 cmを図る。石材は判断できないが、石色は黄色を呈し砂質である。



第2図 宇検公民館碇石A

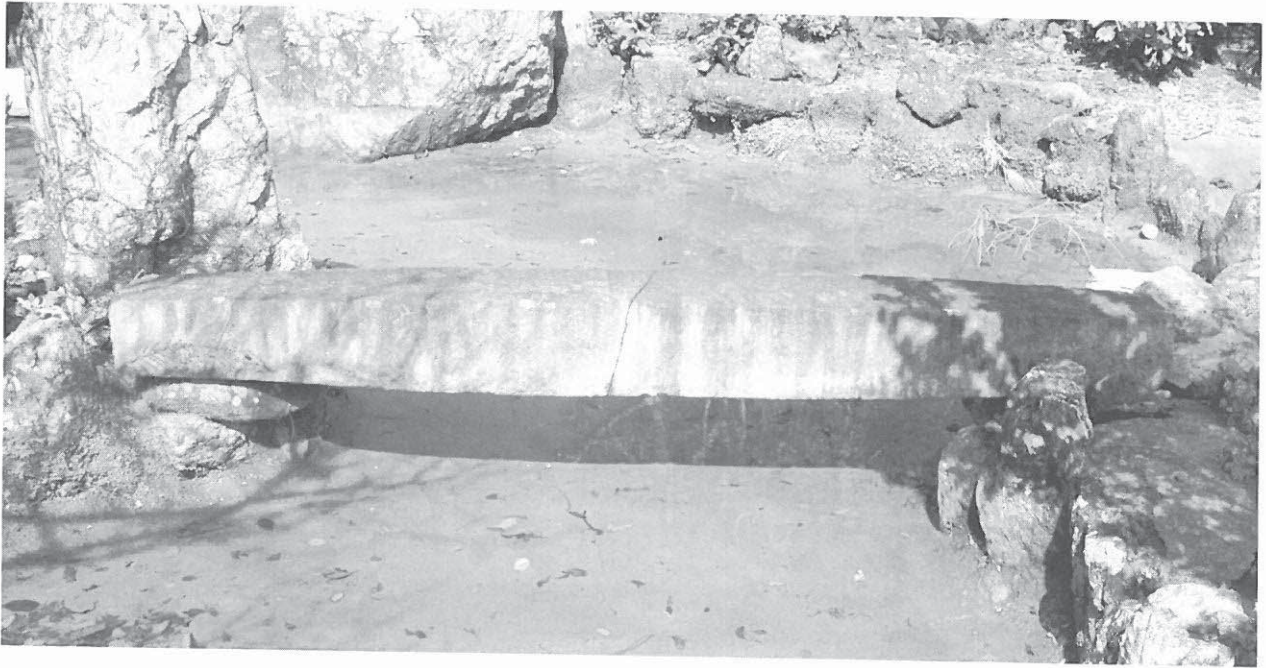


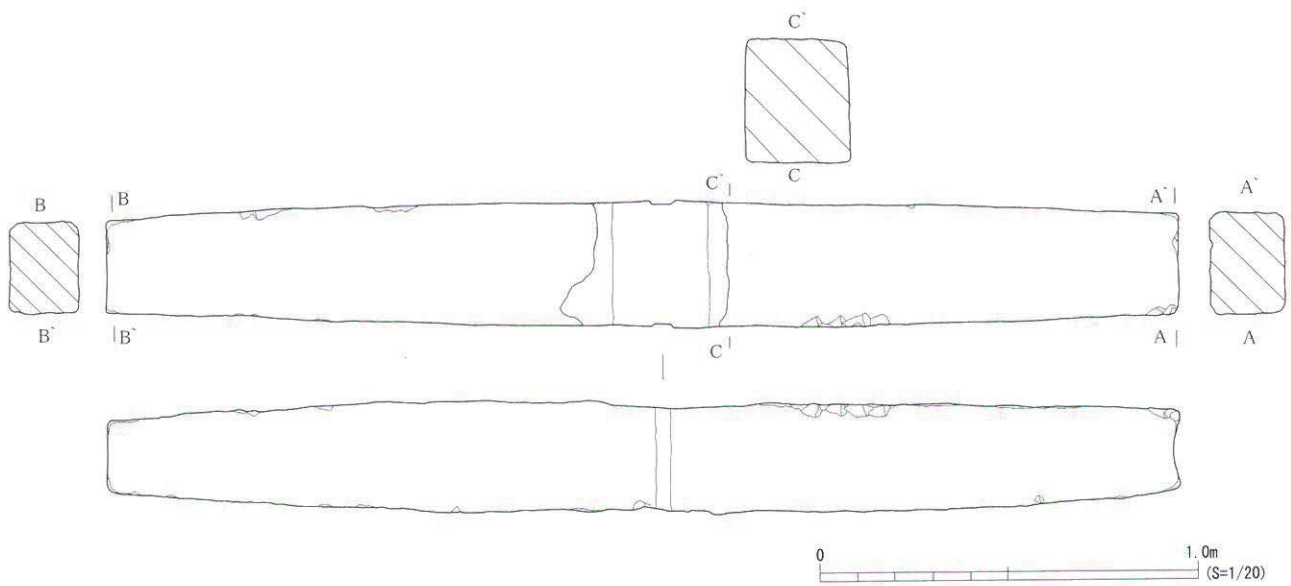
写真2 宇検公民館碇石A



写真3 碇石観察光景



写真4 碇石実測光景



第3図 宇検公民館礎石B

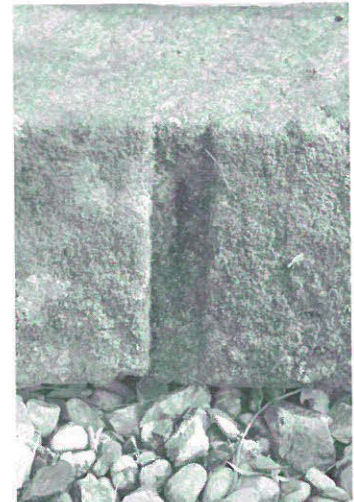
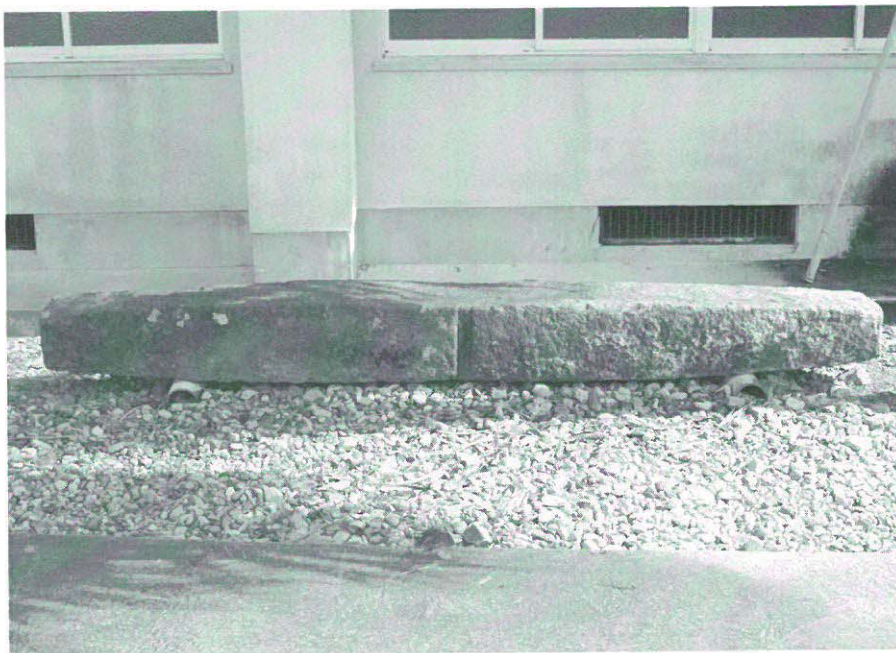


写真5(上) 固定溝

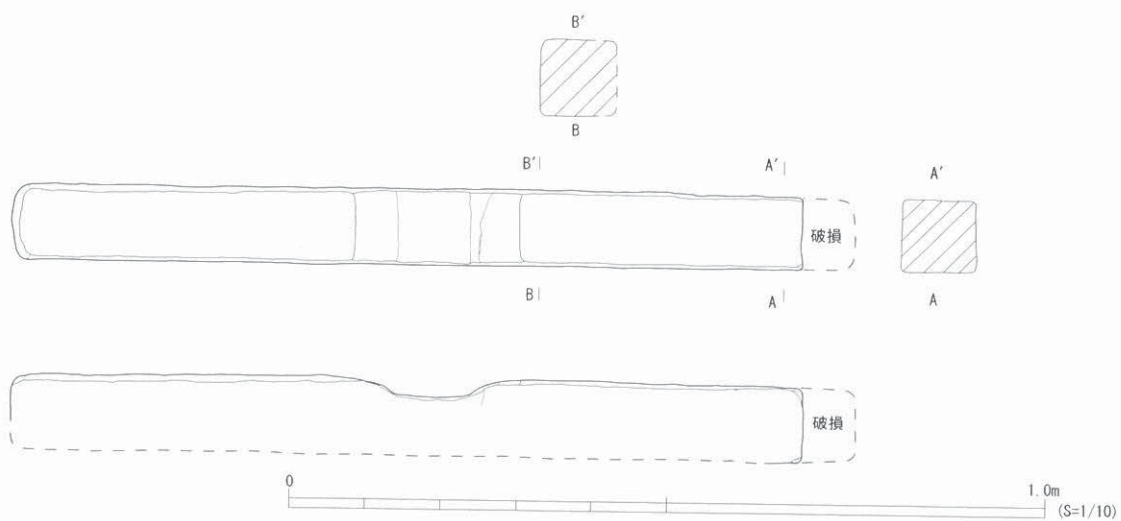
写真6(左)
宇検公民館礎石B



写真7 礎石の観察



写真8 礎石実測光景



第4図 宇検村田検小学校裏碇石



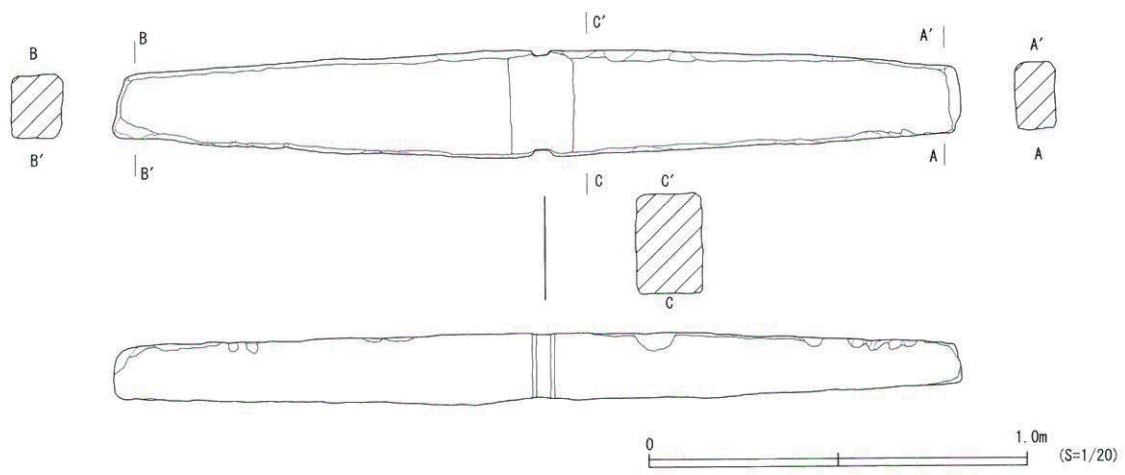
写真9 田検小学校裏碇石



写真10 田検小学校裏碇石(井戸に転用)



写真11 碇石側面



第5図 名瀬市奄美博物館碇石



写真12 名瀬市奄美博物館碇石

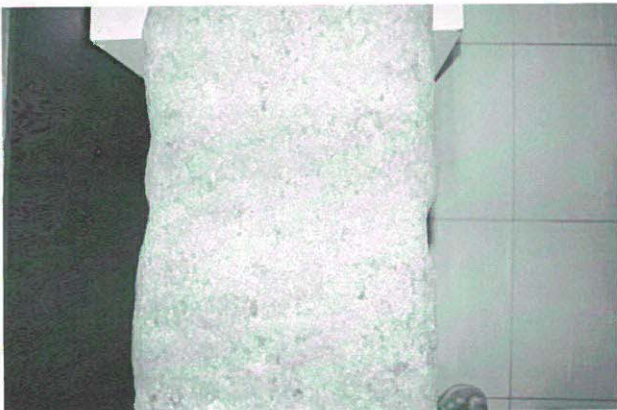


写真13 軸着装部



写真14 固定溝

名瀬市 名瀬市では2本の碇石を確認した。その内1本(No.5)は以前は龍郷町秋名の肥後家に所在していたもので、當眞氏によって報告されているものである。現在は移転し、名瀬市役所裏の肥後家の庭に保管されている。もう1本(No.4)は奄美博物館に保管されているものであり、今回、学芸員の高梨修氏に便宜を図っていただき実測等の調査をすることができた。

No.4 名瀬市奄美博物館碇石 (第5図, 写真12~14) 大島郡名瀬市奄美博物館に所在し、常設展示として展示されている。全長225cm, 掬身着装部幅12cm×深さ0.5cm, 固定溝幅5cm×深さ1.5cm, 右側の中央部幅28cm×厚17.5cm, 先端部幅18cm×厚11cm, 左側の中央部幅28.5cm×厚18cm, 先端部幅16.5cm×厚13.5cmを図る。石材は判断できないが、比較的柔らかい石材なのか磨耗が著しい。松岡氏の分類による1A類に該当するが、先端部における左右の幅や厚さに違いが見られる。この違いが製作時からの違いなのか、使用等による磨耗によるものなのか判断ができなかった。

s 地点 (鹿児島県大島郡宇検村) 12世紀後半~13世紀前半

この場所は「倉木崎海底遺跡」として周知されており、焼内湾入口の枝手久島北側海峡の比較的浅い海底に所在する。平成8年~10年に海底調査が実施され、龍泉窯系の青磁・同安窯系青磁等を中心とした多量の陶磁器群が回収されている(宇検村教育委員会1999)。今回、宇検村教育委員会の元田氏に便宜を図っていただき船にて現場まで移動し、シュノーケルによる潜水調査を実施した。その結果、現在も遺物が多量に散布しており、その集中する地点は報告書に記載されているとおりの範囲であった。



写真15 遺物散布状況① (S地点)

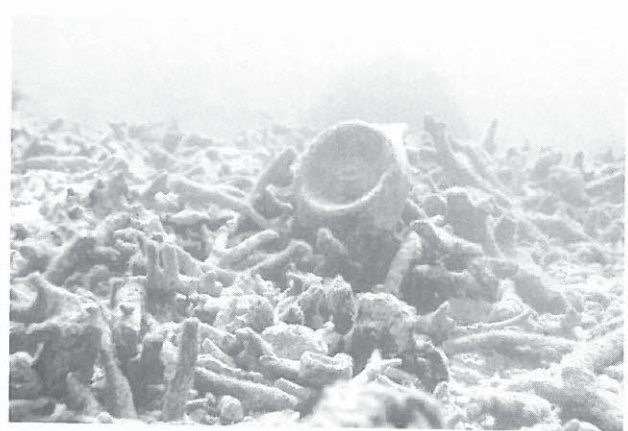


写真16 遺物散布状況② (S地点)



写真17 調査風景 (S地点)

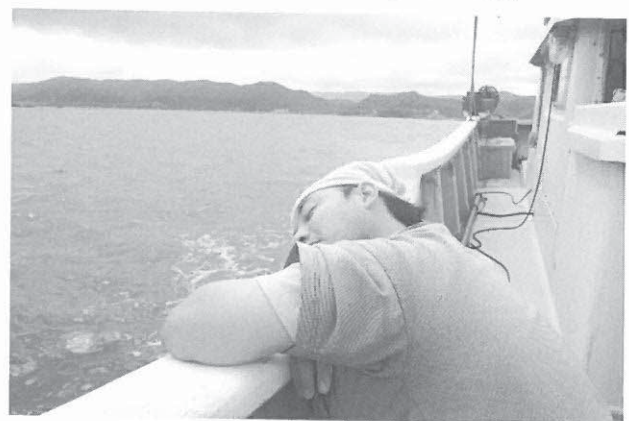


写真18 船酔いするM

t 地点（鹿児島県坊津町泊浜）中世～近世

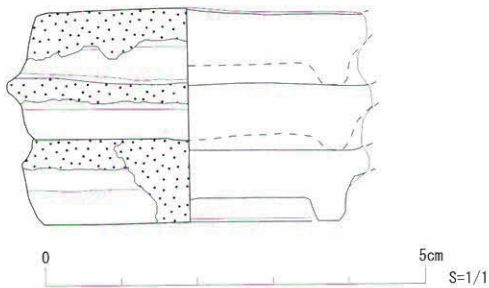
鹿児島県坊津町では海岸で多くの陶磁器が採集されている（橋口1998）。採集された陶磁器を現場及び資料館で確認することができた。坊津泊浜採集の遺物に陶磁器が癒着した状態の資料があった（第6図，写真19）。このような不良品の陶磁器が採集されていることは，この場所が荷揚げ場として利用されていたことを物語るものと考ええる。

u地点（鹿児島県坊津町久志浦・博多浜）中世～近世

鹿児島県坊津町の久志浦・博多浜では海岸でも陶磁器が採集されている。博多浜では港の地名や屋号を多く残している。博多もそのひとつであるが，唐人町や交易場といった屋号はこれをよく表している。かつて隣接するエゴンタンでは日本水中考古学会によって調査が行われている（南日本新聞1986他）。

v 地点（鹿児島県坊津町秋目浦）中世～近世

鹿児島県坊津町の秋目浦でも採集されているようであるが，調査時には散布を確認するには至らなかった。いずれにせよ坊津町の t・u・v 地点は港として有名である。今後の詳細調査によっては海域において沈没船が発見される可能性があるものと考ええる。実際に工事中に船体の一部が発見されており，その資料が展示されている。



第6図 溶着した陶磁器（t地点採集遺物）



写真19 溶着した陶磁器（t地点採集遺物）

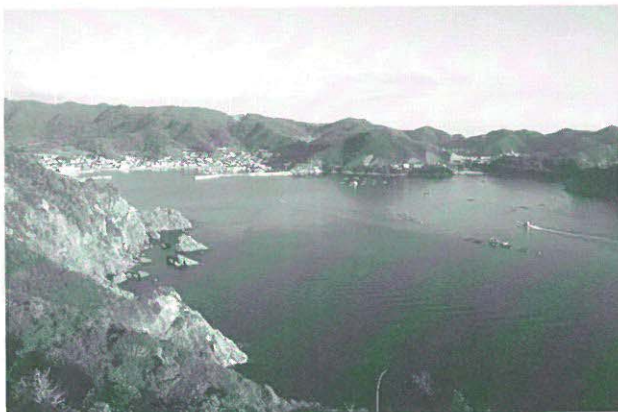


写真20 坊津泊浜遠景（t地点）



写真21 吹上浜調査風景（w地点）

w地点（鹿児島県金峰町吹上浜）近世

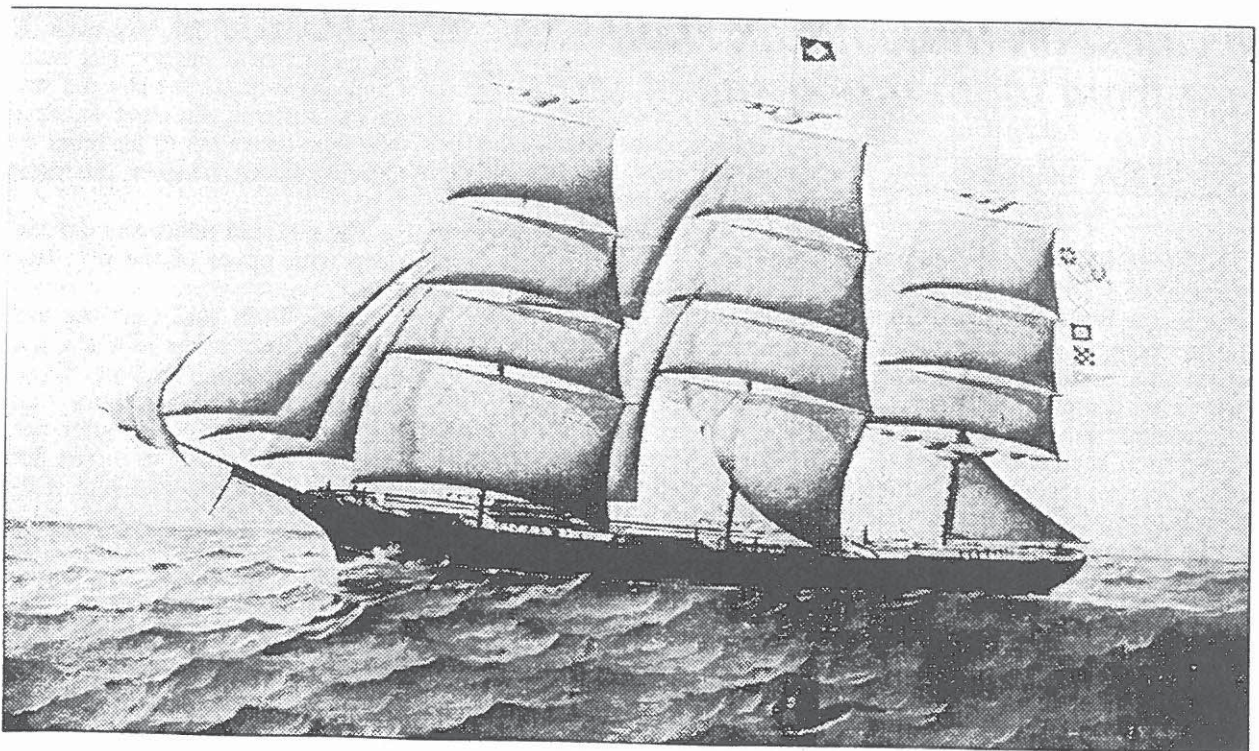
金峰町教育委員会では、吹上浜で採集された肥前磁器を確認することができた。採集された陶磁器は有田・伊万里で東南アジア向けに生産されたものを含むことから、東南アジア向けの船舶からの捨荷等によって散布したものと推測されている（大橋1985）。今回、表面踏査を実施し少量の陶磁器散布が確認できたが、その量は一時期より格段に少なくなってしまったという。

x地点（鹿児島県沖永良部島知名町ウジジ浜，シートループ号）1890年座礁

1890年（明治23年），鹿児島県沖永良部島知名町ウジジ浜沖でイギリス籍カナダの帆船リジー・シートループ号が座礁・沈没した。長崎港を出港し帰路に至る途中であった。乗組員22名の内，12名が死亡し，生存者は名瀬経由で鹿児島へ護送され神戸県庁に引き渡されたという。2年後の1892年，カナダ政府から謝礼金と感謝の銘が刻まれた望遠鏡が届けられた。その後，巨大な鉄錨2本が海底から引き揚げられたが，大阪の商人がどこかに運び出したという。さらに，トループ号に関係すると思われる鉄製品が何本か引き揚げられている。当時の沖永良部島鋼鉄では金具を作る鍛冶職人がいなかったため，道路工事等で重宝された。知名町で漁師をしていた古老からの聞取調査によれば，昭和初期の頃シートループ号と思われる船体の一部が海底で露胎しており，周辺には船窓が散乱していたため，引き揚げて地金屋に売った。現在，船体は砂に埋まって見えなくなってしまったという。

現在，地元のダイビングショップ「アミーゴ」の山本先友氏が熱心に調査をしており，関係文献の収集や海底調査を行っている。その結果，1本の長大な鉄製品が海底で発見され，同氏が保管している（第8図，写真24～25）。

今回，山本先友氏の案内で座礁地点の潜水調査を実施した。海岸は潮流の厳しいところで危険な思いもした。しかし，遺物の散布等を確認することはできなかった。



The Saint John-built Lizzie C. Troop in a painting dated 1885.

第7図 トループ号画（註1）



写真22 ウジジ浜近景 (x 地点)

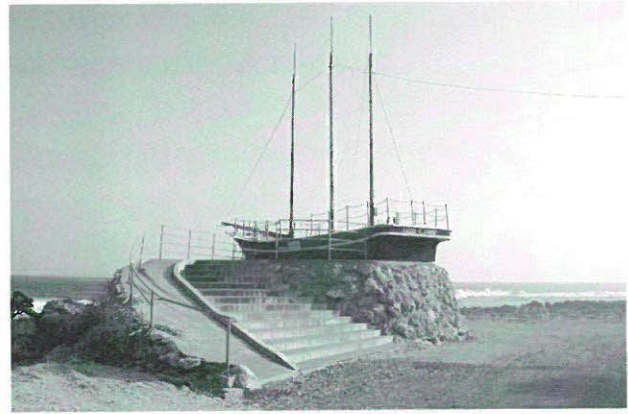


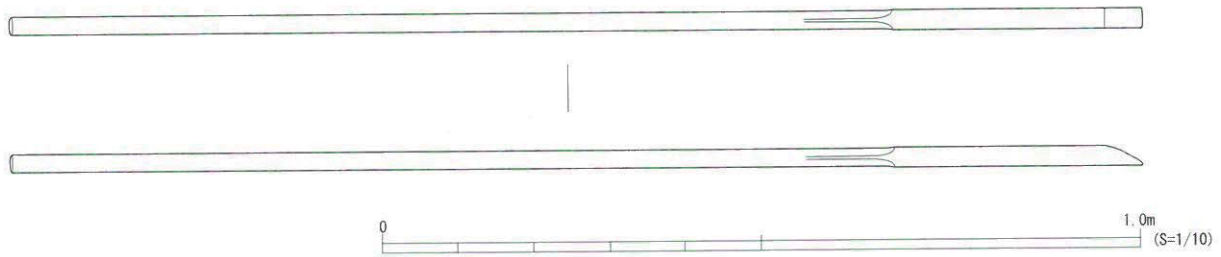
写真23 復元したトループ号 (x 地点)



写真24 ウジジ浜沖引き揚げ鉄製品 (x 地点)



写真25 同先端部 (x 地点)



第8図 ウジジ浜沖引き揚げ鉄製品実測図 (x 地点)

y 地点 (鹿児島県喜界島) 1877年座礁

文献のみの資料であるがシートループ号に先行する1877年(明治10年), 喜界島の沖合でイギリス船が座礁・沈没した。乗組員の大半が死亡したが13人が生存し, 長崎へ護送された。まもなくイギリス政府から謝礼の品々が届いたという(註1)。

沖縄県においても当該期(幕末~明治)には多くの船舶が南西諸島沿岸海域で座礁・沈没している

ことが確認されている。このような座礁沈没事例は沖縄だけの特徴でなく、奄美諸島を含み広範囲に及ぶことが想定されるが、これを示す好例としてあげることができる。

q地点（沖縄県宮古郡城辺町吉野） 1853年座礁

宮古島で昨年調査した吉野のバラスト資料について、沈没船との関わりが不明であったが、追跡調査によって1853年に新城村後之浦より約500mの沖合で座礁沈没した英国籍の船（平2001）のものである可能性が高いことがわかった。

4. 沈没船事例の紹介

平成15～16年度に2年間にわたってこのような調査を実施してきた。調査では、多くの方のご協力を得て実施し情報の提供をいただいた。前回調査とあわせて集成した沈没船発見の可能性のある地点はあくまでも沈没記録やその発見の可能性を類推することのできる遺物の発見事例を通して沈没船を発見しようと試みるものである。しかし、実際には海岸近くの多くの散布地では残念ながら船体そのものの発見には至っていない。他方、目的とする中世もしくは近世に往来した船とは無関係であることは否めないものの、木造船もしくは戦時中の沈没船については幾つかの事例を確認することができた。

い地点（運天漁港沖）木造船

ろ地点（古宇利沖）アメリカ軍船



写真26 古宇利島沖アメリカ軍船①（ろ地点）

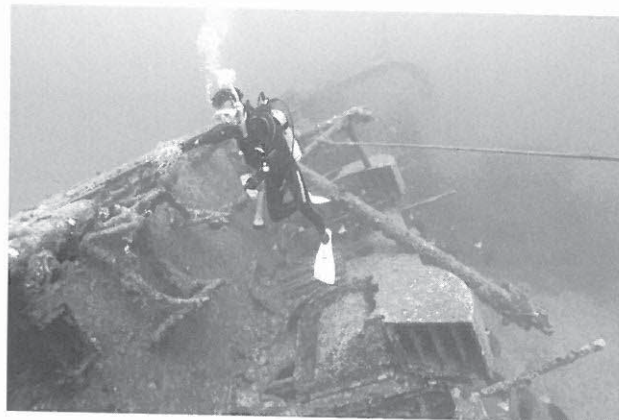


写真27 古宇利島沖アメリカ軍船②（ろ地点）



写真28 運天港沖木造船①（い地点）



写真29 運天港沖木造船②（い地点）

5. まとめ

以上、昨年度に続き今回は奄美諸島を中心に鹿児島県域における近世以前の沈没船・海難事故等関係の調査成果をまとめた。今回の調査によって南西諸島の沈没船座礁地点や海岸で陶磁器が採集される地点を集成することができた。これによって基礎的な情報の整理が行えたことと考える。その数は総計で25地点（a～y地点）に上る。また、未報告の礎石を含め、現在南西諸島で確認することができる礎石は沖縄諸島で4例、奄美諸島で7例である。北部九州を除けば日本列島の中で最も多く確認されていることになる。

この2カ年間の成果を地図に示す（第9図、第10図、第2表）。

今回の重要な成果の一つとして近代から戦争時の事例ではあるが、具体的な沈没船体を確認することができたことがあげられる。一連の調査によって沈没の文献記載や伝承が伝える事例を現場で確認し、陶磁器採集という事実から、沈没船が発見できる可能性を示唆しており、今後も海浜や海底での探査を続けることが重要であることを実証できたものとする。

今後の課題として、研究の深化とともに、やはり遺跡の周知化につけると考える。これについては、陸上の遺跡（埋蔵文化財）についても言えることで、水中遺跡との差は無い。以下に文化庁が発行した『遺跡保存方法の検討－水中遺跡－』引用する（荒木2001）。

『「文化財保護法」にいう埋蔵文化財とは、「土地」に埋蔵された文化財のことをいい（法第57条第1項）、文化財の種類ではなく、文化財の存在する状態を意味する。「土地に埋蔵されている」という状態には、土に埋まっているもののみならず、水中に没しているものも含まれる。一般に埋蔵文化財というと、陸上において埋蔵された遺跡や遺物を想起しがちであるが、水中にある遺跡にも文化財保護法が適用されるのである。

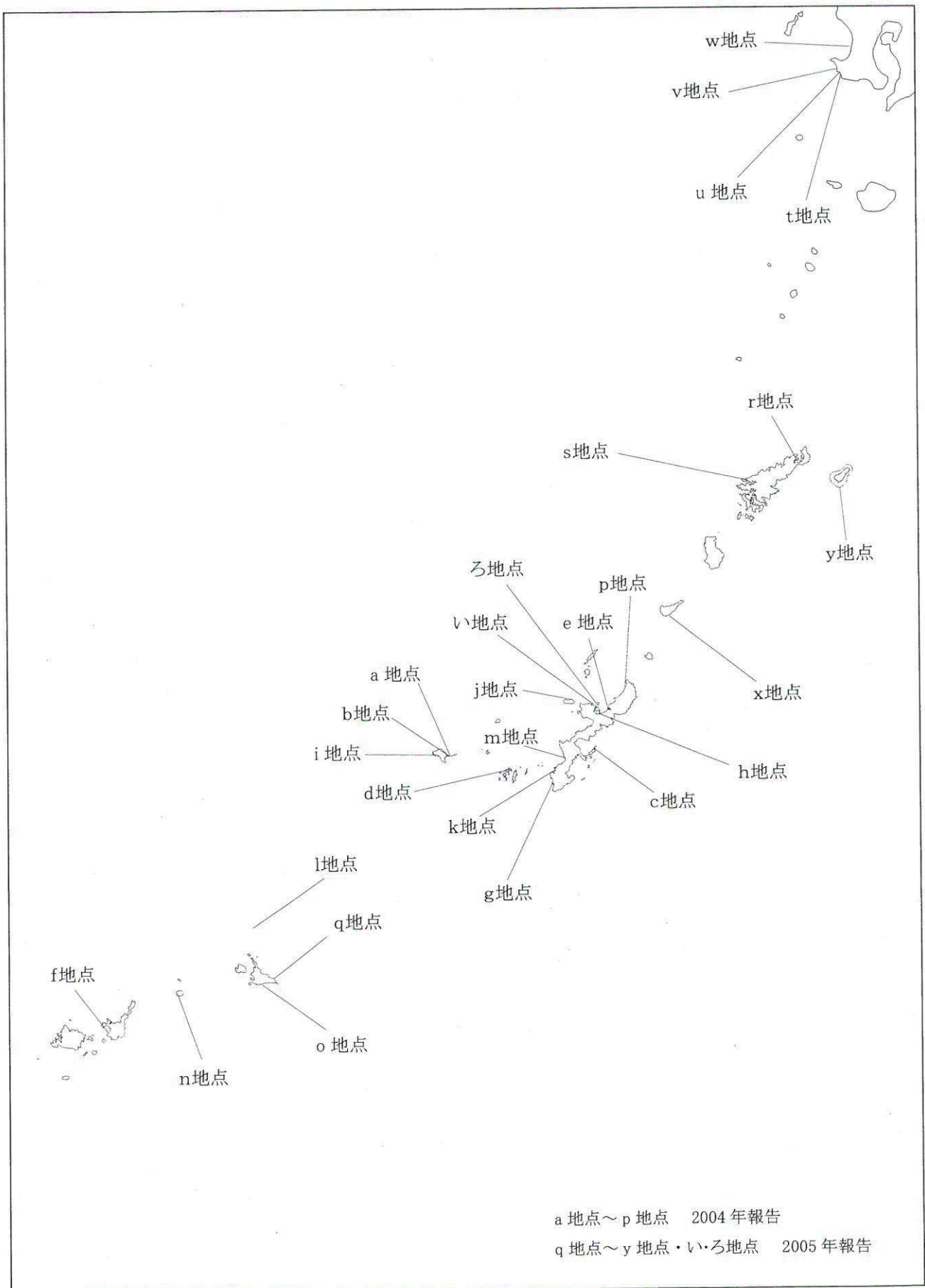
文化財保護法では、文化財が埋蔵されている土地を発掘調査しようとする場合、事前に文化庁長官に届け出ることが義務づけられている（法第57条第1項）。これは濫掘などによる遺跡の破壊を防止するための制度であり、水中の遺跡についても、ダイバーなどが勝手に遺物を引き揚げたり、遺跡の現状を改変することができないことになっている。また、埋蔵文化財を包蔵する土地として周知されている土地において土木工事などを実施する場合にも、事前の届出や通知が必要とされており（法第57条の2、第57条の3）、遺跡の新発見にともなう規則（法第57条の5、第57条の6）もある。これらは、当然のことながら水中の遺跡にも適用される。』

上述するとおり、地下も海底も同じ埋蔵文化財であり法の保護下にあることをより認識すべきである。テレビや新聞報道でしばしば沖縄の近海でも宝探しのような記事が踊るが、これは水中遺跡が危機的状況にあることを示している。今後は遺跡の周知化とともに、文化財保護法を遵守しこれらの水中遺跡の保存問題に取り組むべきと考える。

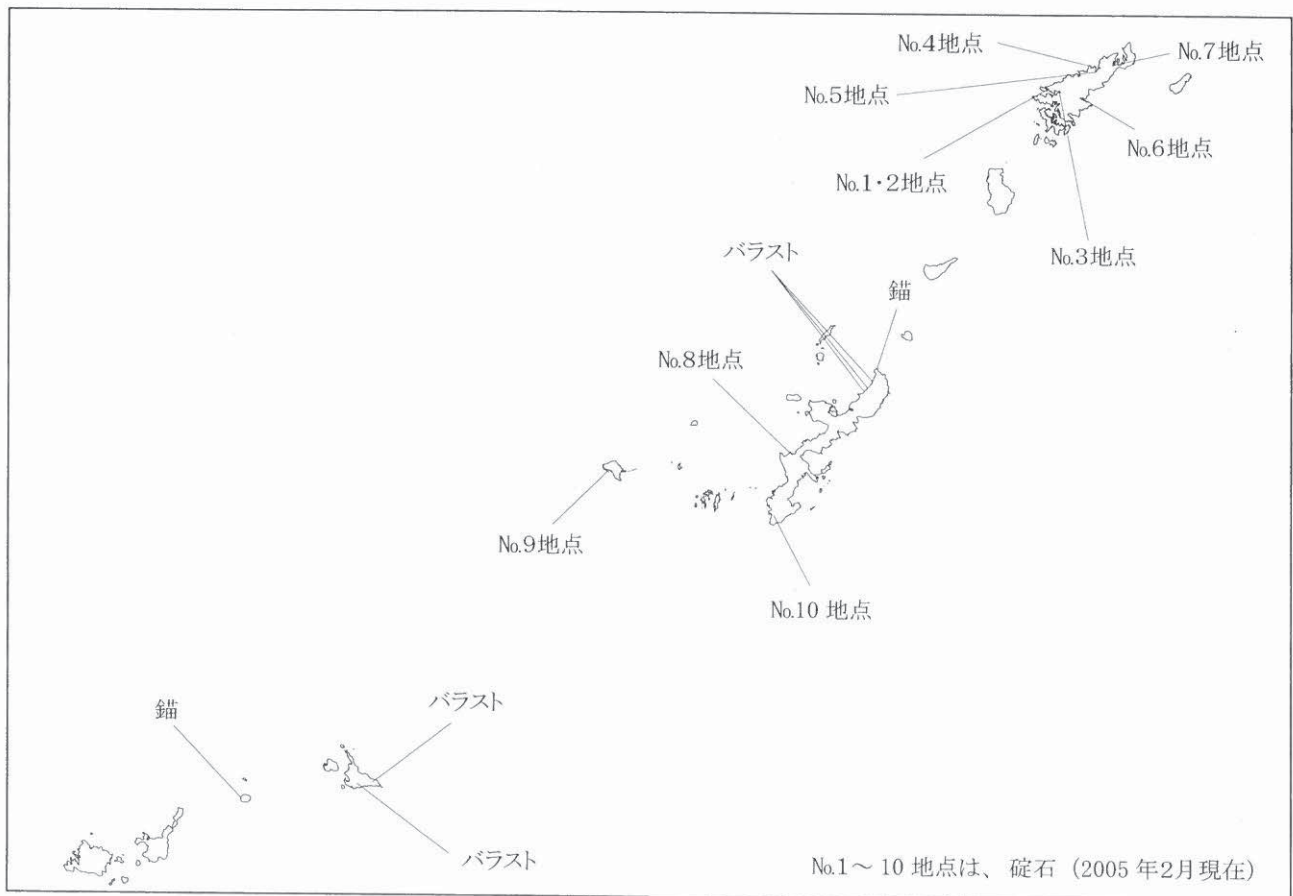
今回の調査を通して、海底で作業を行う場合において専門的知識が必要であることを改めて痛感することとなった。これについては陸上の遺跡での調査手法を簡単に持ち込むことができず、水中では諸種の特殊な技能を有していなければ調査が行えないということに起因する。このため、水中考古学を専門とするスタッフの育成こそ緊急的な課題として考えなければならない。

第2表 遺跡・遺物散布地一覧（2004・2005報告）

地点名	発見場所	確認資料	年代	遺跡名・船名等	保管場所
a地点	はての浜(ナカノ浜)	舶載陶磁器	12後半～13前半、16世紀後半～17世紀前半		久米島自然文化センター、久手賢稔、沖縄県立埋蔵文化財センター
b地点	オーハ島沖	舶載陶磁器	14世紀後半～15世紀前半		久米島自然文化センター、久手賢稔、沖縄県立埋蔵文化財センター
c地点	伊計島沖	舶載陶磁器	14世紀後半～15世紀前半		与那城町海の文化資料館
d地点	座間味村阿護の浦	沖縄産陶器、舶載陶磁器	15世紀頃、19世紀?		座間味村教育委員会
e地点	塩屋湾	舶載陶磁器	15世紀代		未確認
f地点	名蔵湾	舶載陶磁器	15世紀中頃		先島文化研究所、石垣市教育委員会、沖縄県立博物館 等々
g地点	瀬長島地先	舶載陶磁器	15世紀中～16世紀前半		沖縄県立埋蔵文化財センター
h地点	今帰仁村今泊沖	舶載陶磁器、沖縄産陶器	15世紀中～16世紀前半、19世紀?		今帰仁村教育委員会
i地点	久米島白瀬川河口	舶載陶磁器	14世紀～15世紀		未確認
j地点	伊江島北海岸	舶載陶磁器	15世紀後半～16世紀前半		今帰仁村教育委員会
k地点	那覇港	舶載陶磁器			東京大学総合研究博物館?
l地点	八重干瀬	バラスト等	1797年座礁	プロビデンス号(英)	平良市池間公民館(未確認)
m地点	北谷町沖	舶載陶磁器、バラスト	1849年座礁	インディアン・オーク号(英)	北谷町教育委員会
n地点	高田海岸	舶載陶磁器、鉄錨	1857年座礁	ファン・ボッセ号(蘭)	多良間村立ふるさと民俗学習館
o地点	上野村宮国沖	バラスト	1873年座礁	ロベルトソン号(独)	上野村野原公民館
p地点	国頭村宜名真沖	舶載陶磁器、バラスト、鉄錨	1874年座礁	(英)	国頭村奥交流間、宜名間集落等
q地点	城辺町吉野海岸沖	バラスト	1853年座礁	(英)	城辺町吉野集落
r地点	龍郷町イカリ浜沖	碇石	中世		住用村奄美アイランド、龍郷町中央公民館
s地点	宇検村倉木崎	舶載陶磁器	12後半～13前半		宇検村教育委員会
t地点	坊津町泊浜	舶載陶磁器	中世～近世		坊津町歴史資料センター輝津館
u地点	坊津町久志浦・博多浜	舶載陶磁器	中世～近世		坊津町歴史資料センター輝津館
v地点	坊津町秋目浦	舶載陶磁器	中世～近世		坊津町歴史資料センター輝津館
w地点	金峰町吹上浜	肥前磁器	近世		金峰町教育委員会
x地点	知名町ウジジ浜	鉄製品	1890年座礁	シー・トループ号(英)	「アミーゴ」山本先友
y地点	喜界島沖		1877年座礁	(英)	未確認
い地点	今帰仁村運天港沖	船体			海底
ろ地点	今帰仁村古宇利島沖	船体	1945年沈没	(米)	海底
No1	宇検村宇検集落 碇家	碇石(1A)	中世		宇検村宇検公民館庭
No2	宇検村宇検集落 碇家	碇石(1A)	中世		宇検村宇検公民館庭
No3	宇検村田検小学校裏の井戸	碇石(2類)	中世～近世		宇検村田検小学校裏の井戸
No4	?	碇石(1A)	中世		名瀬市奄美博物館
No5	龍郷町秋名集落 肥後家	碇石(1A)	中世		名瀬市市役所裏 肥後家
No6	龍郷町イカリ浜沖	碇石(1C)	中世		住用村奄美アイランド
No7	龍郷町イカリ浜沖	碇石(1C)	中世		龍郷町中央公民館
No8	恩納村山田グスク	碇石(1A)	中世		恩納村山田グスクメーガー
No9	久米島宇江グスク	碇石(1A)	中世		久米島自然文化センター
No10	糸満市内道路脇	碇石(2類)	中世～近世		糸満市教育委員会



第9図 遺跡・散布地確認地点 (2004～2005)



第10図 碇・バラスト

謝辞

昨年度より実施してきた基礎的調査によって遺物等が海岸に散布する事例をある程度集成できたと考える。今後は遺跡の周知化と遺跡保存への対応に関する問題について、南西諸島の海域に遺跡があるという情報を共有し、考古学の対象として遺跡や遺物をきちんと分析することが重要であると考え

る。以上、このような作業をする中で知ることのできた知見の多くは、これまで市町村で遺跡の保存にあたってこられた担当者の方から多くの情報をいただくことで整理できたことである。末文ながら記して謝意を表す。

調査に関しては以下の方よりご指導いただいた。

安里嗣淳・盛本勲（沖縄県立埋蔵文化財センター）、池田榮史（琉球大学）、江上幹幸（沖縄国際大学）、新里亮人（伊仙町教育委員会）、新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）、高梨修（名瀬市教育委員会）、中山清美（笠利町教育委員会）、西銘章（嘉手納高校）、早水廣雄・橋口亘（坊津町教育委員会）、宮下貴浩（金峰町教育委員会）、元田信有（宇検村教育委員会）、森田太樹（知名町教育委員会）、山本先友（ダイビングショップ「アミーゴ」）

（みやぎ ひろき：今帰仁村教育委員会）

（かたぎり ちあき：調査課 専門員）

（ひが なおき：臨時任用職員）

（さきはら つねひさ：嘱託員）

註

註1 山本先友氏より資料をいただいた。

引用・参考文献

- 荒木伸介 2001年 「第5章 日本の水中遺跡4」『遺跡保存方法の検討－水中遺跡－』 文化庁
- 宇検村教育委員会 1999年 『倉木崎海底遺跡』
- 大橋康二 1985年 「鹿児島県吹上浜採集の陶磁器片」『三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁器編』
- 平 和彦 2001年 「中国苦力貿易船と琉球諸島」『奄美郷土研究会報』第37号
- 當眞嗣一 1996年 「南西諸島発見の碇石の考察」『沖縄県立博物館紀要』第22号 沖縄県立博物館
- 松岡 史 1981年 「碇石の研究」『松浦党研究』No.2 松浦党研究連合会
- 橋口 亘 1998年 「鹿児島県坊津町泊海岸採集の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- 南日本新聞 1986年4月9日 「坊津の海底文化財探査へ」『南日本新聞』（新聞記事）
- 南日本新聞 1986年6月24日 「来月25日から海底探査」『南日本新聞』（新聞記事）
- 宮城弘樹他 2004年 「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査－海洋採集遺物からみた海上交通－」
『沖縄埋文研究』第2号 沖縄県立埋蔵文化財センター

本部町瀬底島アンチ浜海底発見の碇石

A Stone Anchor Found Underwater Near the Anchi Beach in Sesoko Island, Motobu-cho

片桐千亜紀・比嘉尚輝・崎原恒寿

KATAGIRI Chiaki・HIGA Naoki・SAKIHARA Tsunehisa

ABSTRACT: The Center for Buried Cultural Property in Okinawa has been carrying out a survey of coastal site distribution from 2004 to 2009, supported by a financial aid from the Ministry of Culture.

In the course of the survey in 2004, a stone anchor was found in the ocean near the Anchi beach in Sesoko Island, Motobu-cho. The anchor was half-buried in the sand floor of 3m underwater, about 20m south of the Anchi beach wharf where the coral reef forms an inlet. An underwater survey was carried out from August 31 to September 2 in order to take measurements before retrieving the anchor. The anchor is a rather small type, 76.5cm long and weighing 29kg. The joint part is 11.5cm wide and 1.5cm thick, and the center part is 17.5cm wide and 14cm thick. Though the surface is finished roughly, the anchor as a whole is carefully and thoroughly made. The stone material seems to be andesite. A similar type of stone anchor has been found over a wide area, from Vladivostok of Russia to Palawan Archipelago of the Philippines, as well as northern Kyushu. The Anchi beach specimen also belongs to the same type, and is probably a local copy. Two other similar anchors of the same type have been found in the Okinawa main island.

1. 調査の経緯

四方を大海に囲まれ多くの離島を持つ沖縄県は先史時代から沿岸海域を中心とした生業を行っており、海と深い関係をもってきた。特に海岸からリーフにかけては、先史時代においては砂丘遺跡の存在が示すように、前方のリーフによって守られた穏やかな礁湖（ラグーン）に生息する魚貝類を重要な食料の糧としたり、装飾品の材料とし貝交易を行ってきた。中世においては、海を架橋として中国や東南アジアといった様々な国と交易を行い、富を得てきた。さらに、海岸に露胎する石灰岩は切り出されて、コンクリートが普及する以前は家の柱などに利用されるなど、多様な活動の場となっている。近年ではスキューバダイビングが普及し、沖縄の美しい海を求めて年間何千人ものダイバーが沖縄を訪れている。

このような状況から、海岸からリーフを中心とした沿岸地域では多様な埋蔵文化財が存在する。そこで、沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成16年度～平成21年度の6ヶ年計画で国庫補助を受けて「沿岸地域遺跡分布調査」事業を実施している。分布状況を把握することで、年々増加しつつある海岸の埋め立て工事や護岸工事といった多種多様な公共事業から、適切な保護をする目的である。

調査対象としているものは、①沈没船やそれに関係した遺物の散布地、②唐船^{トウジン}グムイなど呼ばれる津の確認、③ラグーンやリーフに生息する魚貝類の採取に関係すると思われる石器等の遺物散布状況、④塩田跡や石切場といった生産遺構、等々である。

平成16年度の調査中、本部町の瀬底島アンチ浜沖の海底において碇石を発見した。本来は現状のまま保存することが望ましいが、発見された場所はシュノーケル等のマリンスポーツが盛んであり、水深も浅いことから、簡単に荒らされることが想定された。そのため、記録保存調査を実施して遺物回

収を行った。今回、その調査概要を紀要の機会を借りて報告する。

2. 位置と環境

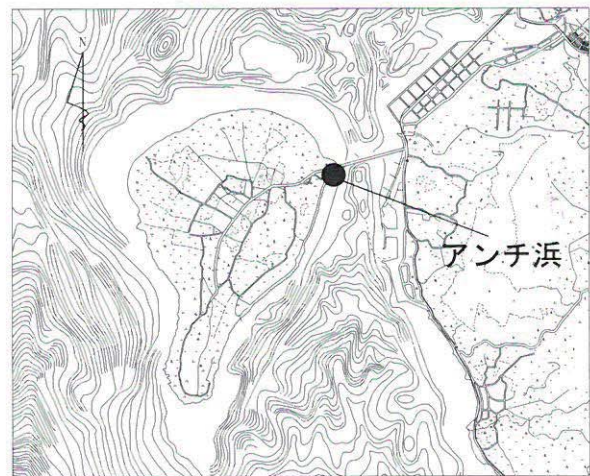
瀬底島は、沖縄本島北部本部半島の東岸からわずか450m沖にある周囲8km、総面積2.99km²、人口1000人余りの小島である（第1図）。地質的には琉球石灰岩で沖縄特有の石材、トラバーチン（国会議事堂もこの石材）の産地としても知られるほか、ムンジユル笠や琉球舞踊である花笠等の手造り民具の産地としても有名である。西海岸の瀬底ビーチは、1Kmにもわたる白い海岸線が続く美しい海水浴場となっている。

瀬底島と本部半島間の海域は「唐船グムイ」^{トウシン}と呼ばれ、古くから船舶の良い停泊所として利用されてきたようである。その反面、海難事故を誘発する要因ともなったと思われる。瀬底島琉球大学実験場前方の海域では、壺や大量の古銭が引き揚げられ（沖縄タイムス1986/7/12）、瀬底大橋付近の海底では多量の壺が散乱しているという（註1）。このようなことから、本部半島・瀬底島間周辺の海域は船舶の沈没や海難事故に関する遺跡が発見される可能性が高い。

碇石は瀬底島アンチ浜にある栈橋から南に約20m、水深約3mの砂地上で発見された。周囲はリーフが大きく湾曲し小規模な入り江状を呈しており、海底は沖に向かってなだらかに傾斜する砂地となっている。入り江状を呈する入り口付近には直径1.2mほどの岩があり、この岩の沖側岩陰に幅広面を上下として露胎していた。（写真1）

3. 調査概要

聞き取り調査によって、瀬底島周辺海域から古銭や壺などが引き揚げられていることを知った。このため瀬底島周辺の海岸踏査を実施した。その際、アンチ浜海岸に褐釉陶器等の遺物が散布していることを発見した。このような遺物が陸上からの流入であるのか、海底から打ちあげられたものなのかを確認するため、シュノーケルによって海底の調査を実施した。その結果、アンチ浜沖の海底で碇石を発見した。（第2図・写真2）



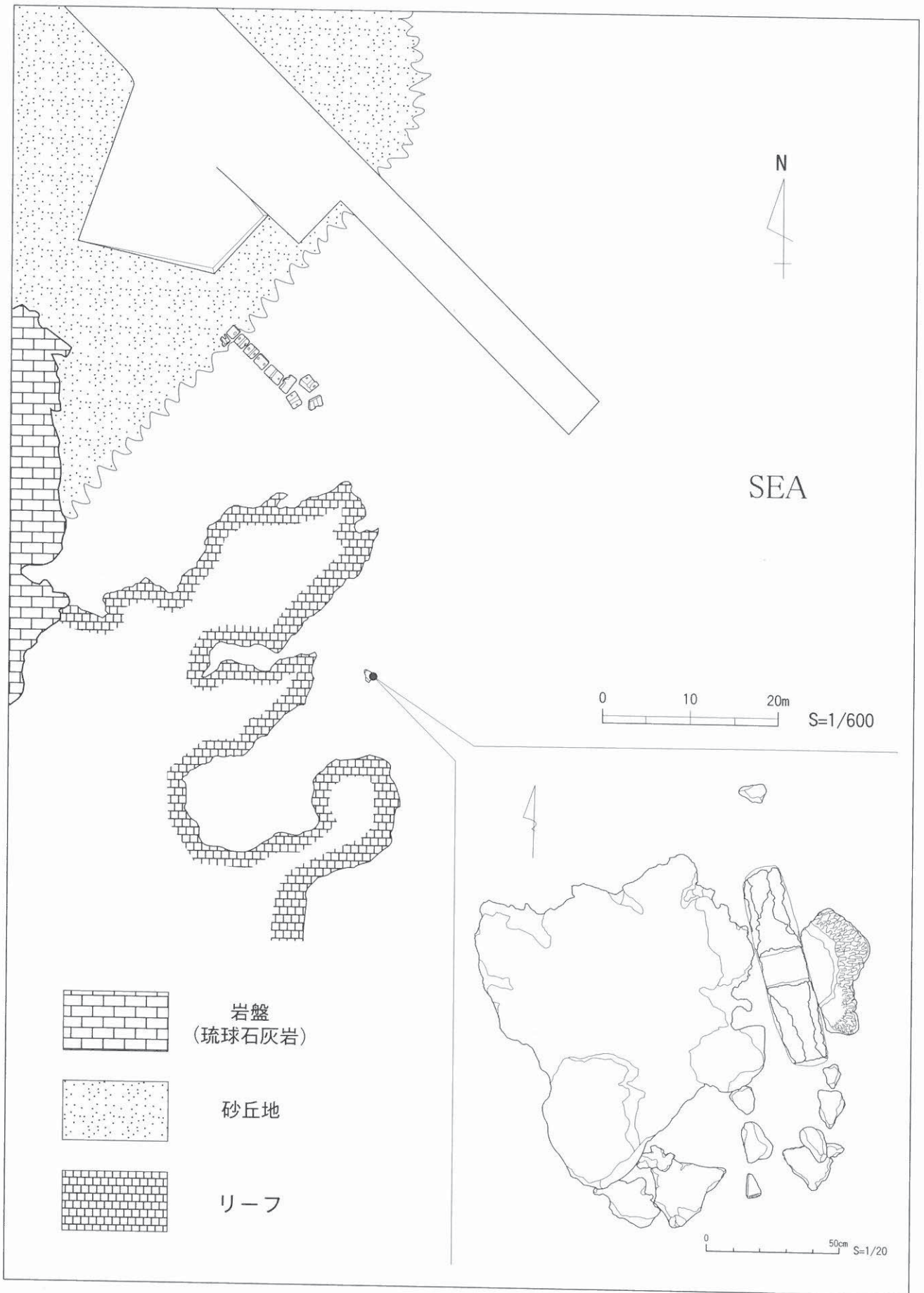
第1図 瀬底島周辺地形図



写真1 アンチ浜近景



写真2 碇石発見状況



第2図 アンチ浜碇石発見状況図

発見当日は簡易GPSによって場所を記録し現状の写真撮影をした後、碇石をその場所に残したまま調査を終えた。その後、埋蔵文化財センターにて検討を行い、引き揚げるための調査を実施することとした。基本的に遺物の発見から保管までのプロセスは陸上でのそれと何ら変わりがないが、前半の水中での作業に関しては、苦労の連続であった。調査は平成16年8月31日（火）～9月2日（木）までの3日間実施した。以下、調査手順を概要する。

8月31日（火） 水深約3mといえどもシュノーケルで作業をするのは困難なので、潜水タンクを用いた調査となった。安全確保のため、1名を陸上班として待機させ2名で調査を行った。

まず、碇石及び周辺の清掃から開始した（写真3）。大きなテーブルサンゴや石などはどかさないうように、砂やバラスなどを取り除き、碇石に付着している海草や藻などを手で落とした。その後、写真撮影を行った。カメラは一般的な一眼レフを防水用のハウジングに入れたものを用いた。水中では光が足りないため、水中専用のストロボも使用した。フィルムは露出の不足を考え、なるべく感度のよいフィルム（ISO400）を使用した。フィルムはポジフィルムのみで、デジタルカメラは陸上用のものに防水用のハウジングに入れたものを用いた。

次は基準点の設置である。ピンホール・水糸・5mスタッフ・光波測距儀の三脚等を海底に持ち込んだ。碇石長軸の北側延長線上に任意でピンポールを打ち込み基準点（A）とした。始めは木杭を打ち込もうと試みたが、砂地の下にすぐ岩盤か珊瑚など固いものがあるようで、うまく打ち込むことができなかつたためピンポールとした。さらに、基準点から碇石の長軸にそって反対側に任意でピンポールを打ち込み（B）直線を確認した。

続いて、予め栈橋に設置した陸上の基準点から光波測距儀を利用して海底に設置した2点の座標を取得した。5mスタッフの頂部に光波測距儀のプリズムを固定し、海底での揺れを防ぐために三脚を使用して、その中にスタッフをセットした。ブレを最小限に納めるためスタッフには水平器を取り付け、常に垂直となるようにした。1名が海底にてスタッフを支え、1名が水面にて陸上の調査員に合図を送り、光波測距儀にて座標を取得した。同様の方法で、付近の岩にコンクリート釘を打ち込み水準点を確認した。（写真4）

実測ではコンベックス・巻尺・水糸・マイラー・



写真3 碇石の清掃風景



写真4 水中レベリング作業



写真5 水中にて碇石実測作業

シャーペン等を海底に持ち込んだ。A・B基準点間を水糸で結び水平器を使って水平を確保した。基準点からの距離及び水糸からの距離を測りつつ、碇石や周辺の状態を実測した。（写真5）

9月1日（水）引き続き実測を行った。レベリングは岩に設定した水準点に水糸を取り付け、水平器を利用して行った。午前中に実測がすべて終了した。午後からは碇石の引き揚げ及び周辺の地形測量を実施した。碇石は小型のため、人力での引き揚げが可能であった。

地形測量は、碇石の位置を明確にするため、周辺のリーフの状態を表現することを目的とした。

9月2日（木）引き続き周辺の地形測量を実施し、午前中で終了した。以上をもって現場調査は終了した。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、まず、現状の写真撮影を行った。その後、碇石に付着する貝や汚れを取り除く清掃を行い、実測図を作成した。碇石の清掃にあたって、貝などはドライバーや千枚通しなどを使って根気よく取り除いた。小さな貝が石と密着しているものについては、石を傷つけてしまう恐れがあるため、サンボールを利用して溶かした。（写真6・7）

最後に再び写真撮影を行い、収蔵庫にて保管している。



写真6 アンチ浜碇石清掃前

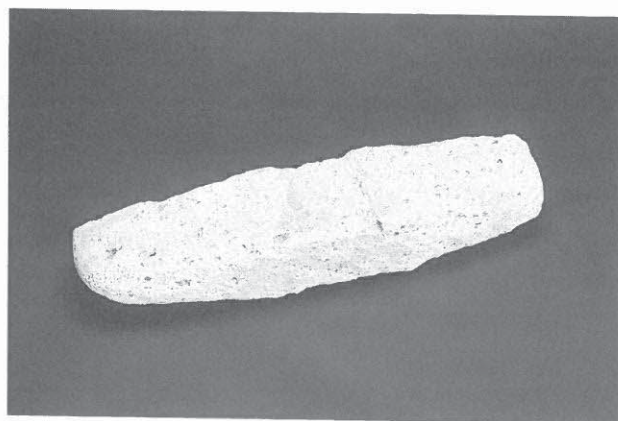


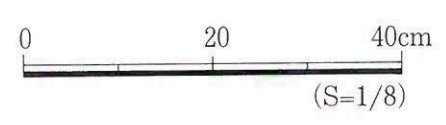
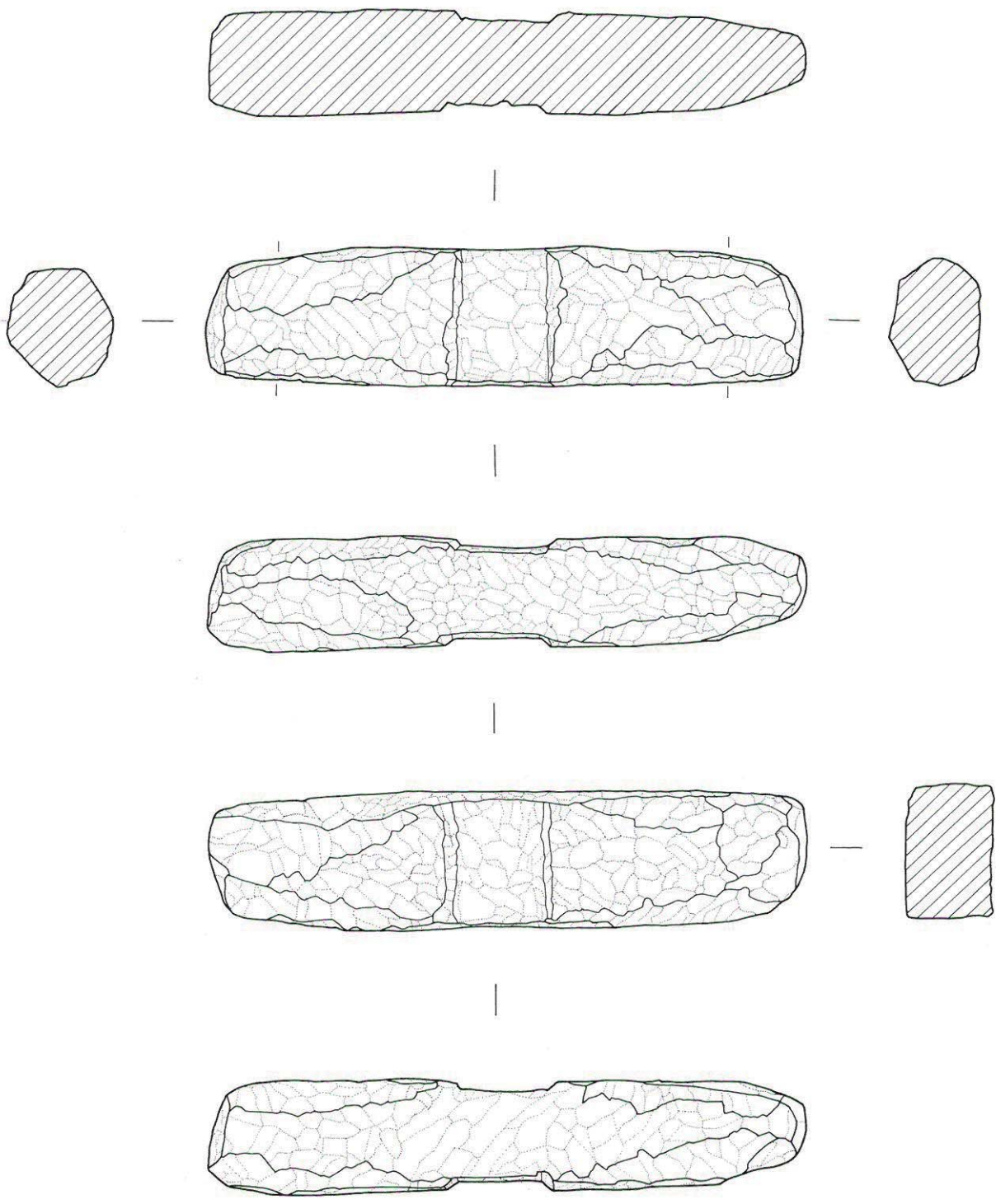
写真7 アンチ浜碇石清掃後

4. 碇石の特徴

瀬底島アンチ浜海底の碇石（第3図）は完形で残存しており、全長76.5cm、重量29kg、軸装着部（幅×深）11.5×1.2cm、中央部（巾×厚）17.5×14.0cm、右側先端部（巾×厚）16.4×12.5cm、左側先端部（巾×厚）15.3×14.4cmである。材質は安山岩と推定される（註2）。

細部における形態上の特徴は、正面観が中央部に最大幅を持ち左右の先端部に向かうにつれて次第に細くなり、側面観が左側先端部から中央部にかけてほぼ同じ幅を持ち右側先端部が若干細くなっている。この正面・側面観の形態より、全面加工によって平坦面を意識して柱状に成形後、陵を面取りして仕上げているため、断面形が八角形状を呈している。軸装着部が両面あり、丁寧に整形されている。固定溝はない。形態上の特徴から角柱定形型の碇石を模倣しようと試みた可能性がある。

以上のことから、木碇としての形態の全体像を伺うことはできなかった。しかし、この碇石に軸装着部が両面にあることから掬身で挟み込むタイプの装着方法をとっていたことがわかる。



第3図 本部町瀬底島アンチ浜の碇石

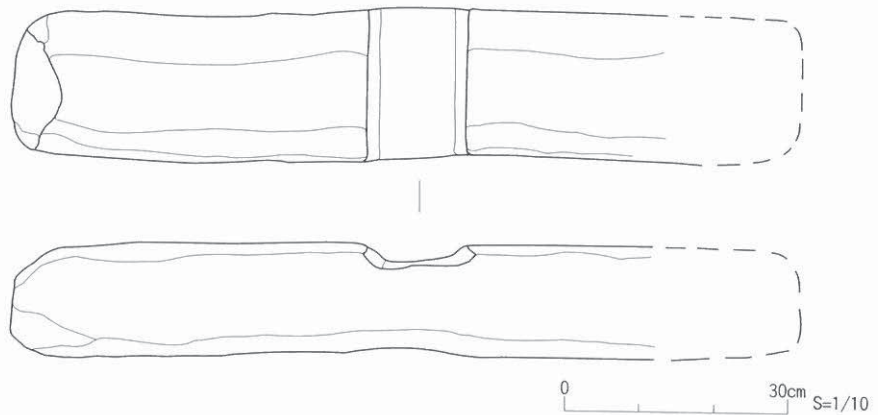
5. 沖縄県内の類例資料

・糸満市の碇石（第4図・写真8～10）

沖縄県糸満市字糸満で「石敢當」に転用されて糸満市内の道路脇に立っていたものである。採集地は不明である。現在、糸満市教育委員会が保管している。

この碇石は、沖縄産砂岩製で推定全長108cm（地表部の長さ86cm）、軸着装部（幅×深）13×2cm、中央部（巾×厚）20×15cm、先端部（巾×厚）18×10cmと當眞氏によって報告されている。

碇石全体の形状は、長方形の棒状に加工し、稜が面取りされている。断面形が八角形状を呈している。軸着装部が表裏にあるが成形のみにとどめられている。固定溝はない。重量不明。



第4図 糸満市の碇石（當眞1996より転写）



写真8 糸満市碇石正面

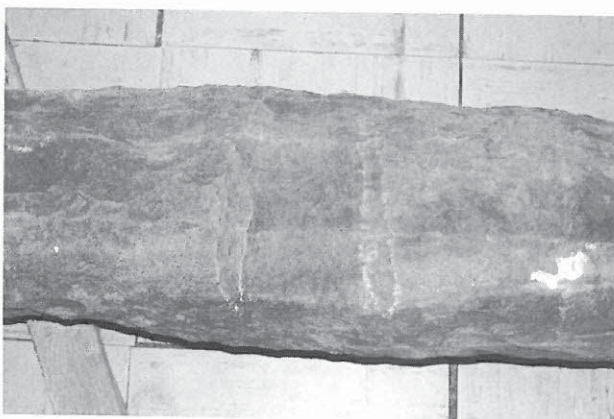


写真9 軸着装部



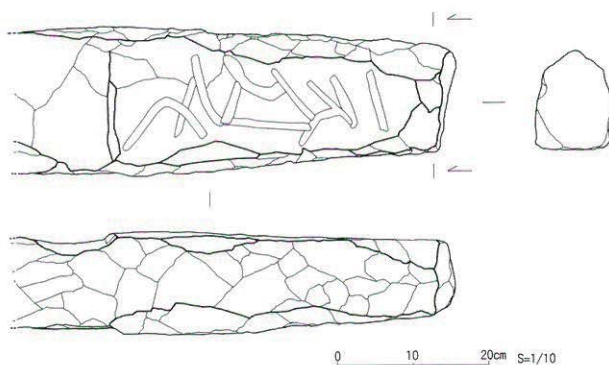
写真10 左側先端部

・勝連町浜比嘉島の碇石（第5図・写真11～14）

沖縄県勝連町字浜の集落内に「線刻石柱」として立っている。採集地は不明である。勝連町の文化財として報告されている（上原静1993）。

民家の入口突当たりの石垣前に石敢當のように立てられている。一部、地中に埋っている（平成17年3月現在）。砂岩製の碇石で、推定全長113.2cm（地表部の長さ57.9cm）、軸装着部（幅×深）10.0cm以上×0.8cm、中央部（巾×厚）19.6×13.4cm、先端部（巾×厚）14.4×10.0cmである。

碇石全体の形状は、中心から先端部にむかって窄まり、稜が面取りされている。断面形が八角形状を呈している。軸装着溝が表裏にあるが成形のみにとどめられている。固定溝はない。重量不明。



第5図 勝連浜比嘉島の碇石

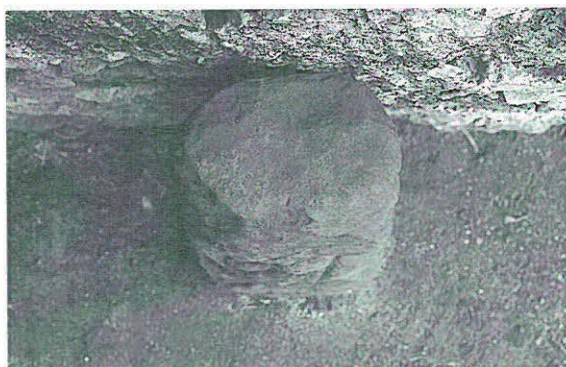


写真13 碇石先端部



写真11 勝連浜比嘉島の碇石近景



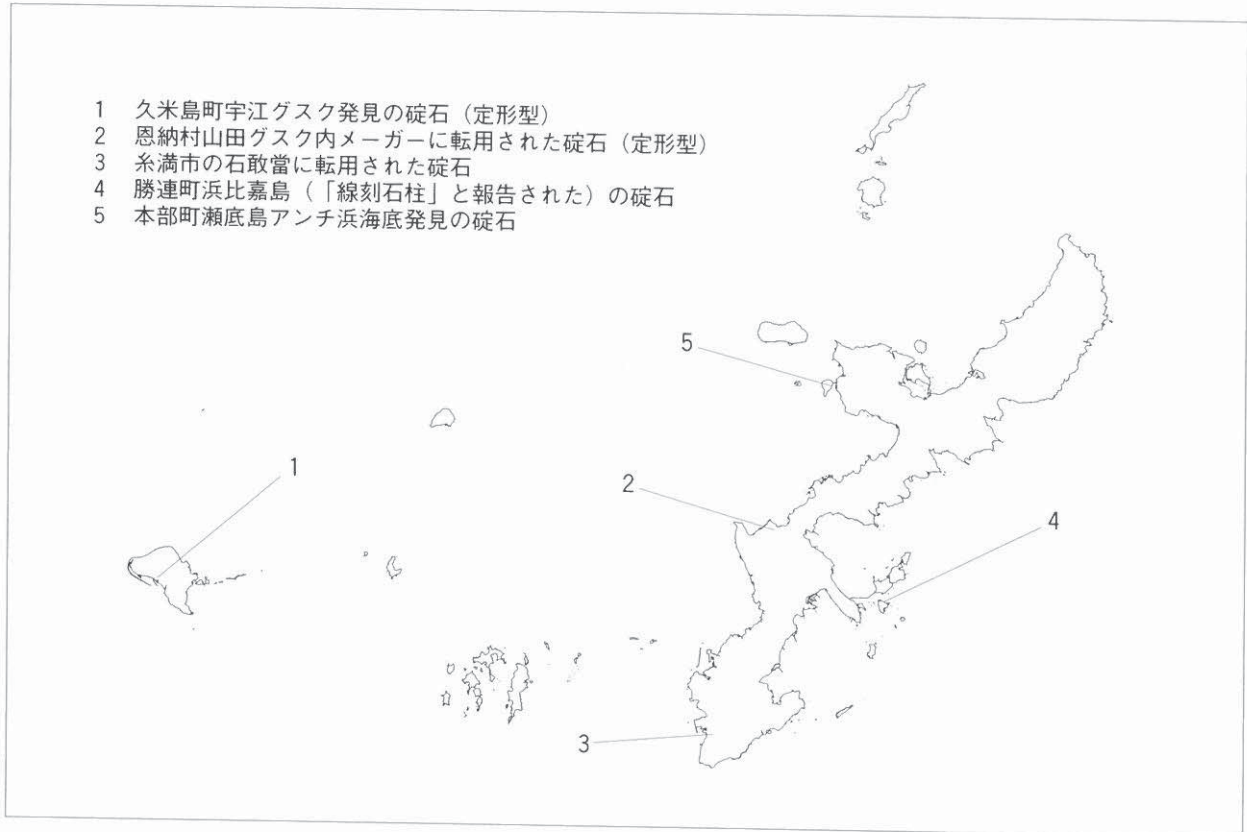
写真12 碇石正面



写真14 側面

6. まとめ

これまで沖縄県で確認された碇石は恩納村，久米島町，糸満市，勝連町（註3），国頭村（註4）においてそれぞれ1例ずつの5本である（第6図）。恩納村，久米島町，糸満市の3本については當眞嗣一氏の論考（當眞1996）に詳しく掲載されているため参照されたい。すべて陸上で発見されたもので，どこの海底から引き揚げられたものかわからない。今回の調査によって沖縄県では初めて海底において発見された。このことは，本部町の瀬底島周辺海域に碇石を装備した船舶が往来していたことを裏付けるものである。



第6図 沖縄県の碇石発見状況図

碇石の形態的特徴については松岡氏（松岡1981），當眞氏（當眞1996），小川氏（小川1998）によって分類が進められており，恩納村，久米島町の例は角柱定形型碇石（1類）に該当し，中国船舶のものと考えられている。糸満市，勝連町，国頭村，本部町アンチ浜海底の例は小型で石質も沖縄で産出されるものであることから，琉球国内を流通した船舶のものと考えられる。その中でも今回アンチ浜海底で発見された碇石は，最も丁寧な仕上げである。形体も中央部が断面方形で幅広面に明確な掬身着装部を有し，石材を徹底的に加工していることから，中国船舶が装備していた碇石を模倣して製作された可能性が高い。だとすれば，木碇自体の構造についても，1類のそれに近いものであったのではなかろうか。

残念ながら角柱定形型碇石（1類）を装備する木碇は発見されていないため，その構造については想像の域をでないが，推定図は松岡氏や小川氏が作成している（第7図）。

石材は安山岩を使用している。本部町周辺で安山岩が産出される場所は本部町の山中や渡名喜島の海岸などある（註5）。糸満市，勝連町，国頭村の碇石は砂岩を使用していることから，安山岩を使用する例は初めてである。

角柱定形型碇石は、北部九州の博多湾を中心に多量に発見されている。その分布域は、北はロシアのウラジボストックから南はフィリピンのパラワン諸島まで及ぶ。福岡市では文化財指定を受けているものもある（柳田1987）。碇石の存在は東アジアを舞台に活躍した交易船の航路を示すものと考えられており、流通・交易史を考える上で重要な遺物とされている。

今回発見された碇石は定形化された碇石とは異なるものの形態的特徴が似ており、模倣の意識があったものと考えられる。時代や産地を示すような遺物が共伴して発見されていないため使用された年代や船舶の性格について言及することはできなが、その規模から考えると中世から近世にかけて琉球国内で使用された船舶に装備されていた可能性が高い。

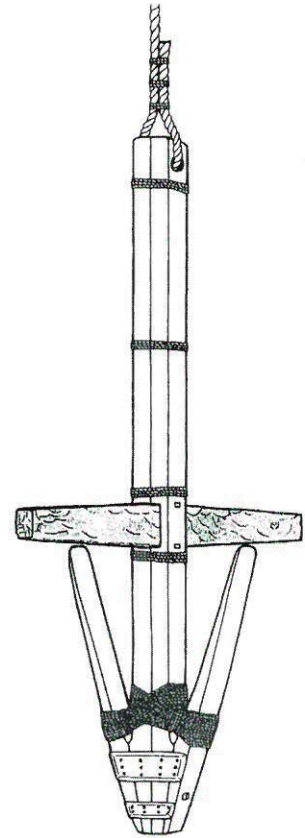
（かたぎり ちあき：調査課 専門員）
 （ひが なおき：調査課 臨時任用職員）
 （さきはら つねひさ：調査課 嘱託員）

註

- 註1. 本部町在住の中村英雄氏からの聞き取り情報。
 註2. 神谷厚昭氏に同定を依頼した。
 註3・4. 當眞嗣一氏のご教授による。
 註5. 神谷厚昭のご教授による。

引用・参考文献

- 松岡 史 1981年 「碇石の研究」『松浦党研究』No.2 松浦党研究連合会
 當眞嗣一 1996年 「南西諸島発見の碇石の考察」『沖縄県立博物館紀要』第22号 沖縄県立博物館
 小川光彦 1998年 「太宰府天満宮所蔵の所謂「蒙古碇石」について（上）（下）」
 『飛梅』第107～108号 太宰府天満宮社報
 柳田純孝 1987年 『福岡市の文化財-考古資料-』福岡市教育委員会
 上原 静 1993年 『勝連町の遺跡-遺跡詳細分布調査報告-』勝連町教育委員会
 沖縄タイムス 1986年7月12日「海洋考古学に情熱」『沖縄タイムス』（新聞記事）



第7図 木製推定復元図
 (小川1998より転写)

首里城跡木曳門地区出土の土師器と思われる土器皿

Possible 'Haji Ware' Found in Kobiki-mon Sector in Shuri Castle Site

瀬戸 哲也

SETO tesuya

ABSTRACT: This paper reports and analyzes an earthenware dish excavated in Kobiki-mon sector in the Shuri Castle Site. The dish resembles to the Early-Modern pottery of Okinawa; however, its form, retouching technique and temper indicate different features. The pottery of the closest kind seems to be the Haji ware of southern Kyushu, produced in 16th and 17th centuries. Although they look alike, the observed temper still shows a different quality. At any rate, the specimen may represent a relationship between Okinawa and southern Kyushu in the period.

1. はじめに

筆者は、沖縄で出土している本土産と思われる瓦質土器の集成・検討以来、日本本土からもたらされた土器・陶磁器類でも特に僅少なものに興味がある（瀬戸2004 a・b）。この瓦質土器は、主に北部九州産の15～16世紀と考えられる浅鉢・風炉で、首里城跡・勝連城跡・今帰仁城跡・天界寺跡などの主にダスクや寺院跡で出土している。

今回は、1989～1990年度にわたって沖縄県教育委員会が行った首里城跡木曳門地区において出土している特殊な土器皿について検討したい。この土器皿は、近世以降に壺屋窯で焼かれた素焼きの器である陶質土器に一見似ているが、その器面の滑らかさ、強い回転調整、糸切底などから、異質な感じを受けるものである。既に、この資料については、以前報告書掲載資料（沖縄埋文2001）を用いて若干の検討を行ったことがある（新垣・瀬戸2004）。この前稿では、この土器皿を16～17世紀代の鹿児島を中心とする南九州産の土師皿ではないかと推察した。

しかしながら、この検討に用いた報告書資料では、特徴の一つである糸切底の拓本が掲載されていないこと、さらに未掲載の資料によりその特徴が窺えるものがあることが確認できた。そのため、報告書掲載以外の未掲載資料の内12点を実測・観察することで、前回検討したことについて再度確認することを本稿の目的とする。さらに、鹿児島地域の資料を実見することで比較検討も行った。

2. 首里城跡木曳門地区の概要

今回、対象とする土器皿が出土した首里城跡木曳門地区について、調査報告書によりその概要を略述する（沖縄埋文2001）。

木曳門は城内へ導く西方に位置する門の一つであるが、城内工事等の資材搬入口とされており、普段は石で封じられていた。この地区の調査は、儀礼の場所である御庭の前面広場の下之御庭、ここに位置する用物座、木曳門と同様に城外から至るこの広場へ瑞泉門・漏刻門・廣福門と一連で行っている。

この調査では、木曳門の基礎である石積遺構を一部確認することができている。今回の土器皿も含め全ての遺物はこの遺構を覆う近世～現代の遺物が混在する攪乱層から出土している。そのため、層位等から時期的なまとまりを絞ることは困難である。出土陶磁器の内容であるが、周辺の地区と変わ

らないもので、青磁・白磁・褐釉を中心とした中国産を中心とした陶磁器および、近世以降の沖縄産各種陶器、本土産陶磁器で構成される。つまり、今回検討する土器皿はこういった状況から出土しているため、他の遺物との共伴関係により、時期を限定するのは難しいと言える。

後述するが、報告書においても認識されているように、本土産と考えられている焙烙も、木曳門地区及び隣接する下之御庭地区で出土している。このことは、この土器皿が首里城跡の他地区でも出土していないことも合わせ、やや特殊な状況での出土と言えよう。

3. 土器皿の観察 (図1・写真1・表1)

今回取り上げる土器皿であるが、木曳門地区で、接合後の破片数で111点出土している。既に報告書では13点が掲載されているが、この時には出土点数は記されていなかった。また、先述したようにこの土器皿について、口縁部が多く実測されているが、特徴的な糸切痕等の調整が見られる底部についてはあまり掲載されていない。そこで、今回は未掲載分の中でも特徴的な12点を実測・写真撮影を行なうことにした。

以下、主に今回掲載分の12点についての観察をまとめていくが、基本的に既報告のものも同様の特徴である。

全体的な特徴を述べていく。底部は、全体的に平底で、わずかに上げ底となるものが多い。体部は

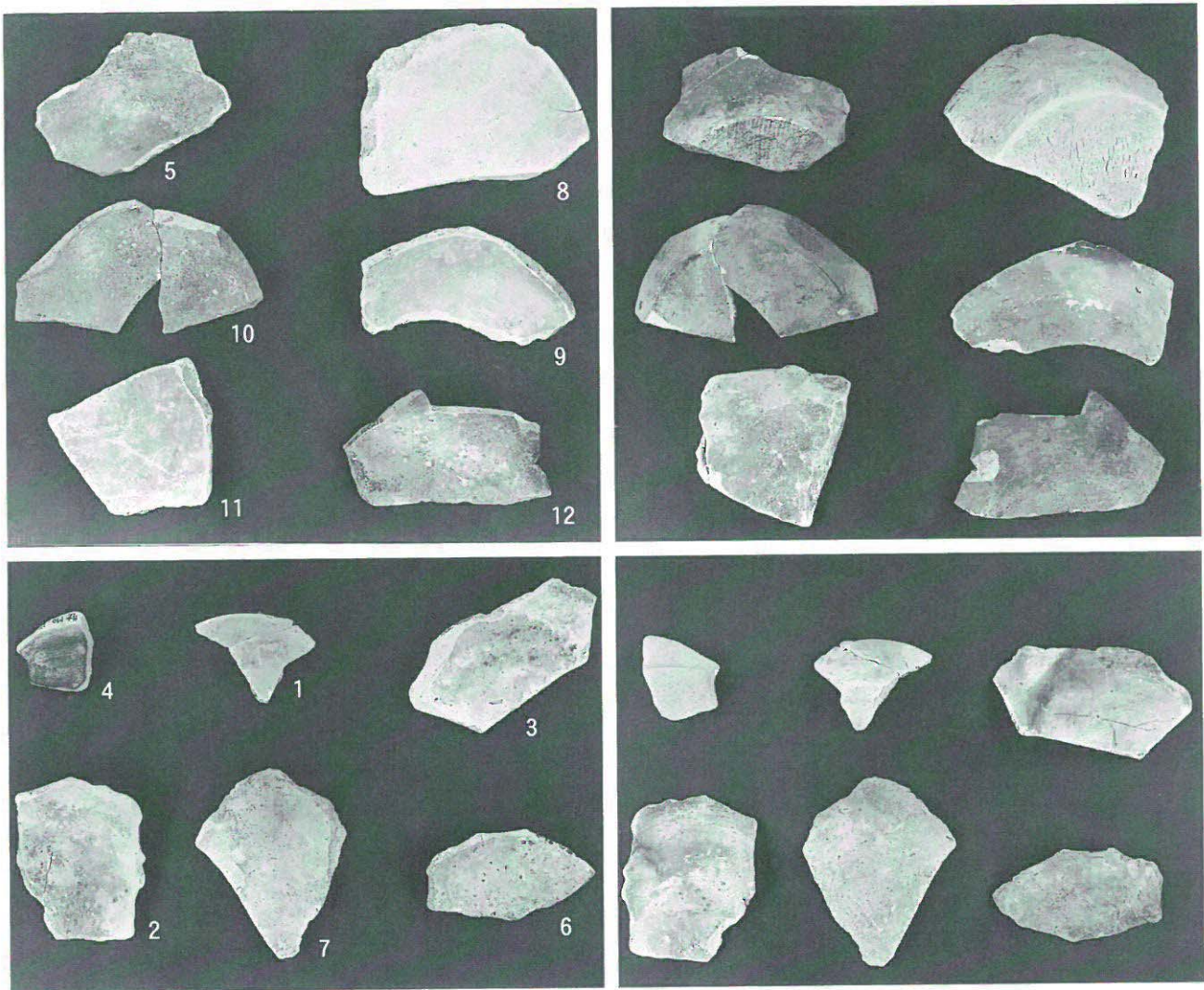
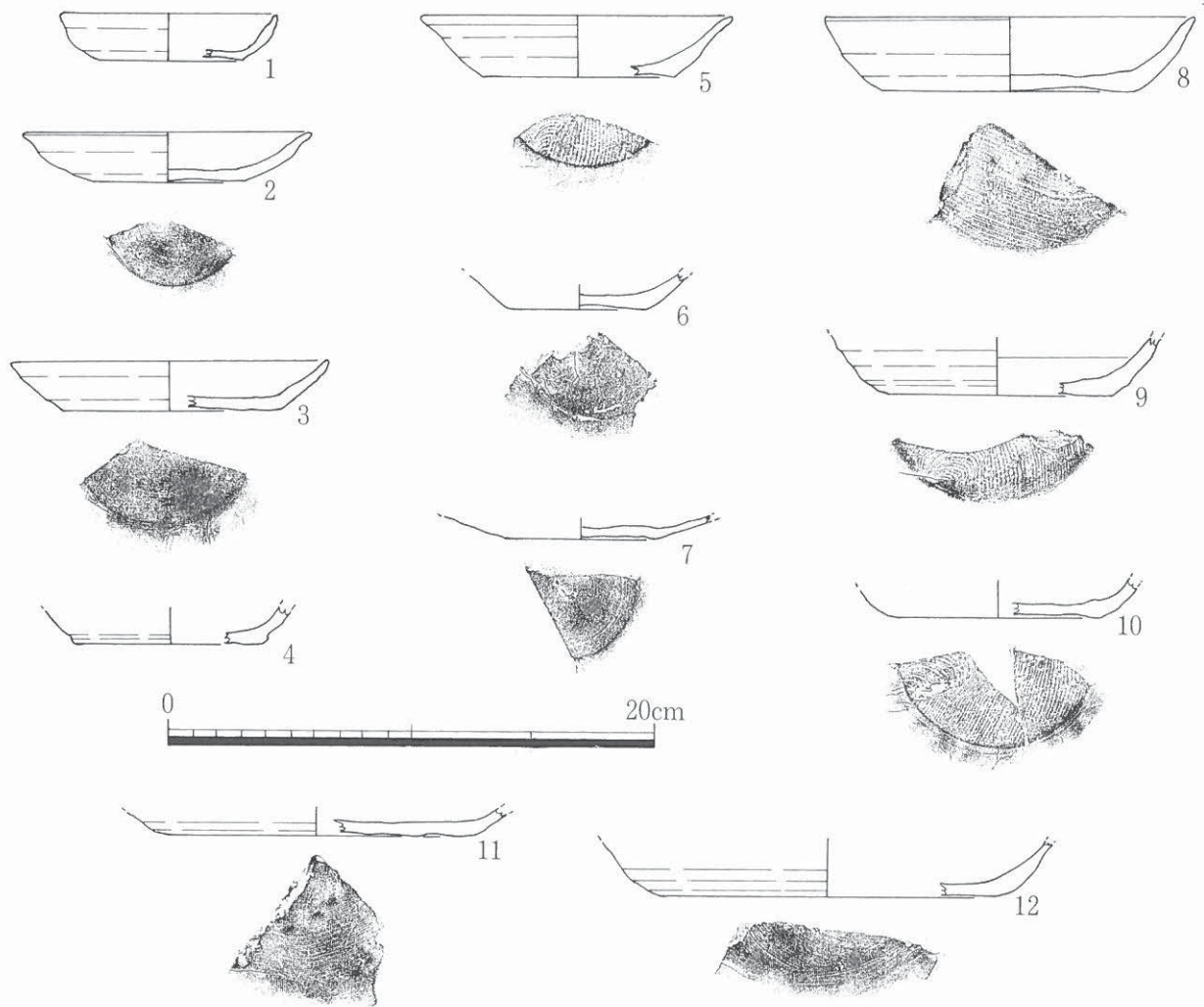


写真1 首里城跡木曳門地区出土土器皿 (左：内面 右：外面)



第1図 首里城跡木曳門地区出土土器皿

第1表 首里城跡木曳門地区出土土器皿観察表

番号	口径	器高	底径	色調	特徴
1	8.8	1.9	6.0	内外5YR7/8橙	底部不定方向のナデか。体部内外面ヨコナデ、内面に線状痕見られる。
2	11.8	2.0	6.2	内10YR8/3浅黄橙、外10YR6/2灰黄褐	底部回転ナデ。体部内外面ヨコナデ、共に線状痕顕著。口縁外面やや黒変。外面底部との境は不明瞭。
3	13.0	2.0	8.0	内外10YR8/3浅黄橙	底部回転ナデ消しか。体部内外面ヨコナデ。外底、内面線状痕顕著。体部縁外面やや黒変。
4	-	-	7.6	内10YR3/2黒褐、外7.5YR8/4浅黄橙	底部不定方向のナデ?。体部外面下半に強い段がある、回転ケズリか? 体部内面ヨコナデ、線状痕顕著、焼成不良のためか黒変。他に比べるとわずかであるが砂礫混、やや軟質。
5	12.8	2.5	8.0	内5YR8/4浅橙、外10YR8/4浅黄橙	底部目が粗い糸切痕。体部外面下半はケズリもしくはヘラナデ、上半・内面強いヨコナデ、線状痕顕著。ヨコナデのため、体部わずか外反。外面上半一部黒変。
6	-	-	5.6	内外7.5YR8/4浅黄橙	底部回転ナデ消し、やや上げ底。体部内外面ヨコナデ、線状痕目立たない。全体的に灰がかっており、被熱か?
7	-	-	6.0	内外2.5Y7/1灰白	底部回転ナデ消し、線状痕顕著、やや上げ底。体部内外面ヨコナデ、線状痕あり。
8	15.0	3.0	10.4	内10YR8/3浅黄橙、外7.5YR8/8黄橙	底部目が粗い糸切痕。体部外面ヘラナデ?、内面ヨコナデ、共に線状痕顕著。
9	-	-	9.4	内7.5YR8/3浅黄橙、外5YR8/4淡橙	底部目が粗い糸切痕。体部外面ヘラナデ?、内面ヨコナデ、共に線状痕顕著。
10	-	-	8.4	内10YR8/4浅黄橙、外2.5Y6/2灰黄	底部目が粗い糸切痕。体部外面ヘラナデ?、内面ヨコナデ、共に線状痕顕著。内面ざらつき、被熱のためか?
11	-	-	12.4	内2.5Y7/1灰白、外2.5Y8/2灰白	底部目が細かい糸切痕。体部内外面ヨコナデ、線状痕顕著。
12	-	-	13.4	内10YR8/4浅黄橙、外10YR5/2灰黄褐	底部目が細かい糸切痕。体部外面は滑らかでヘラナデもしくはミガキか。内面ヨコナデ、線状痕顕著。内面ややざらつく。

底部との境が比較的明瞭なものが多いが、2・12などはやや不明瞭である。口縁部が残存しているもので見ると、体部は底部から直線的に伸びるものである。口径は8～15cmの間のものである。既報告分もあわせると、13～15cmのものが多いと思われる。一方、底部で見ると、6cm、8cm、10cm、12cm台といったサイズに分けることが出来ようか。口縁まで窺えるものがそれほど多くないため、サイズごとの器形の違いは明確にすることは難しい。いずれにせよ、サイズの作り分けがなされているのだろう。

調整であるが、基本的には回転を利用したもので、手づくねではない。内面は滑らかで、同心円状の線状痕が明瞭に残るものも多く、ヨコナデと思われる。外面であるが、特に胴部下半に緩やかな稜が残り、さらに細い沈線状になった痕（以下、線状痕と呼称）が途切れ途切れではあるが見られる。この痕跡はいわゆる回転ケズリとも言えるが、通常のケズリのようにその部分が明確な凹面となっていない。そこで、この痕跡はヘラ状の工具で回転を利用したナデではないかと考えた。底部も回転を利用した調整であり、糸切痕を残すもの、同心円状の線状痕が見られるものの二者がある。糸切痕を残すものには、目が粗いものと細かいものがある。線状痕を残すものについてはヘラで削り取ったものか、切り離した後にヨコナデ調整を行ったのかは判断が付け難い。いずれにせよ、回転を利用した調整だと考える。

色調は、浅黄橙色のものが多いが、焼成が悪いのかもしくは二次的に火を受けたのか灰白色もしくは一部が明るく橙色になっている部分のものもある。一部、黒変しているように見えるものもあるが、例えば灯明皿として利用したかどうか断定できるほどではない。

胎土は精良で、砂礫はほとんど混じらないで、非常に緻密である。また土器にしては非常に硬くしまっている。

報告書ではこの土器皿を壺屋で焼かれた陶質土器（アカムヌー）の項で掲載されていたが、通常の陶質土器ではないという認識もなされていた。しかしながら、具体的な産地については触れられていなかった。

4. 鹿児島地域の土師器皿との比較（図2）

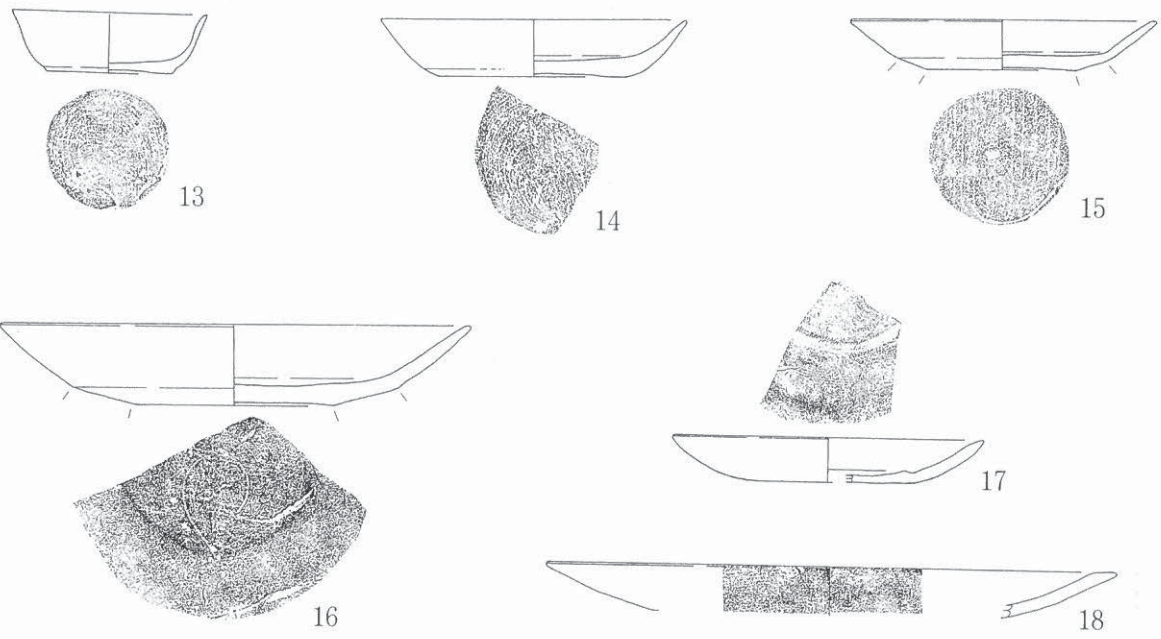
さて、このような特徴をもつ土器を九州地域に求めると、鹿児島県を中心とした南九州の16～17世紀の土師器皿に類似するようである。筆者が実見した富隈城跡、鹿児島（鶴丸）城跡、浜町遺跡のものを中心に比較していきたい。また、宮崎県都ノ城跡（都城市教委1991）でも同様の資料が出土しており、重要だが今回は実見していないため検討の対象とはしていない。

隼人町富隈城跡の土師器皿は、中国産青花などの陶磁器や文献資料により16世紀末～17世紀初頭と限定されている資料である（隼人町教委1999）。この土師器皿には、幾つかの種類がある。

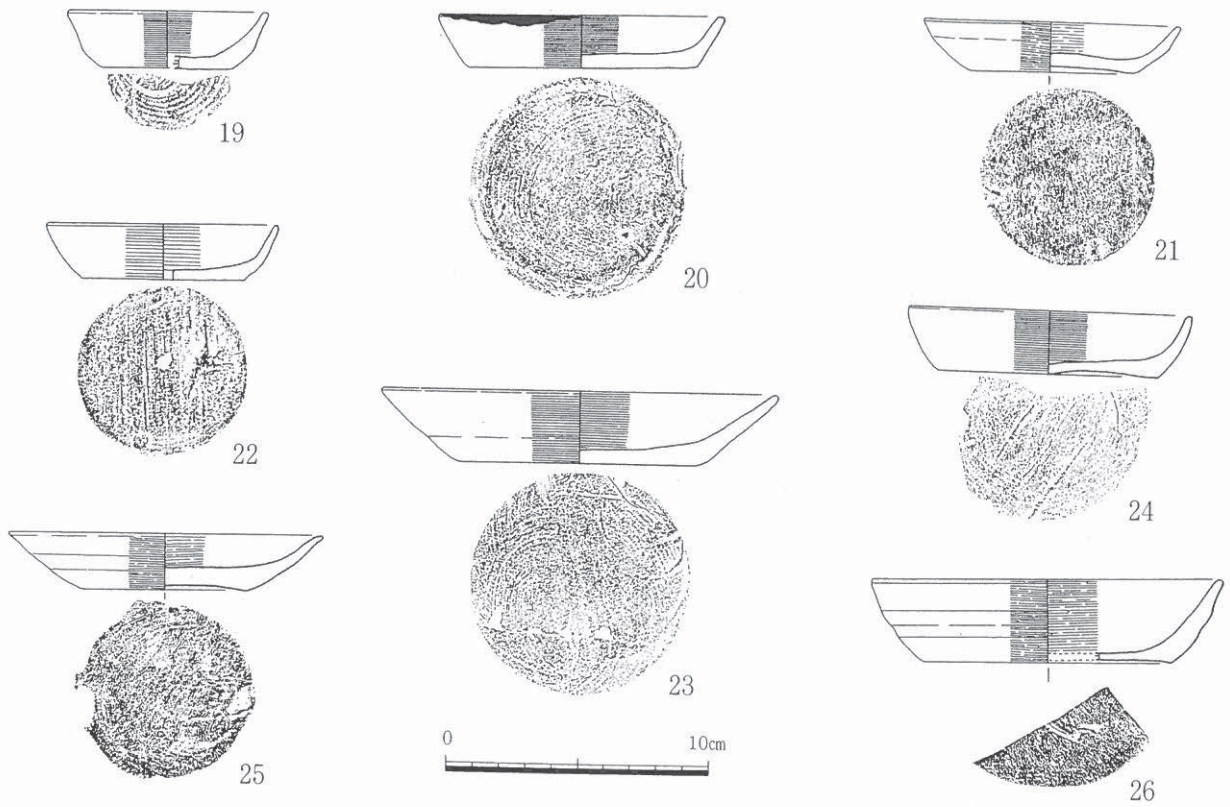
最も特徴的なものは、15・16のように、胴部下半に幅1～2cmがケズリのままで残された部分がある、いわゆる面取りされているものである。胴部が大きく外に開くのも特徴である。底部は様々で、糸切痕を残すもの、線状痕が目立つ回転ナデもしくはヘラナデ調整である。木曳門地区のものにはこの明瞭な面取りはないことと、胴部の外反度が弱いことから、やや異なるものであろう。ただ、底部に回転ナデ調整されるものがあることは共通している。

13・14はこの面取りがないものであるが、やはり胴部下半に緩やかな稜は見られる。底部は糸切底が多いようである。14については、木曳門地区の8などにやや似るようである。

また、17・18はいわゆる京都系とされるロクロを使用しない手づくね土師器皿である。これらも時期的には、伊野の編年（伊野1987）によると16世紀後半～17世紀前半代であるので、より土師器皿全



富隈城跡 (13~18)



鹿児島城二の丸跡 (19~26)



浜町遺跡 (27~29)

第2図 鹿児島地域の土師器皿

体の年代を限定できるものと言えよう。

鹿児島（鶴丸）城跡の土師器皿は、近世・近代の遺物と共に出土しているようであるので、明確な年代は与えにくい資料であるが、16～17世紀が主体の富隈城跡よりは新しいものであろう（鹿児島県教委1983・1991・1992）。

特徴としては、19・21のように胴部下半に面取りが見られるものとなないものがある。面取りが見られるものは、富隈城跡に比べると、胴部の外反度は弱い。法量は8～20cmの間で、10～14cmが多い。底部は、糸切底、ヘラナデ調整が多い。回転ナデ調整のものも見られるが、木曳門地区や富隈城跡のものに比べると、線状痕が目立たない。木曳門地区のものとは24や25が器形的には近い。

浜町遺跡の土師器皿は、主に18～19世紀代の中国産・肥前系陶磁器と共に出土しているようである。

特徴としては、やはり面取りがあるものとなないものがある。ただ、両者とも先の3遺跡の資料と比べると、器壁が全体的に厚い点でまず異なる。また、面取りを有する28は口縁が直立する点でこれまでのものとは異なる。さらに、口径12cm以上のものは見られない。実見すると、この資料は木曳門地区のものとは全く別のものと思われる。

このような中で、木曳門地区資料はどのように位置付けられるであろうか。まず、富隈城跡の面取りを持つタイプ（15・16）のものではないと言える。器形的には、先述したが富隈城跡の14、鹿児島城跡の24・25が近い。ただ、底部がヘラ調整のものではない点異なる。富隈城跡では16のように底部に線状痕が目立つ回転ナデ調整のものがあり、この点は木曳門地区資料と類似する点である。浜町遺跡のものは、全体的に厚ぼったいことから、やや異なる。

そのように考えると、富隈城跡よりも新しい傾向で、鹿児島城跡のものとはほぼ同時期のものと言えようか。ただ、鹿児島城跡のものが時期的に限定できないが、浜町遺跡のものとは異なるので、おおよそ17世紀代と考えられようか。先述したように、底部の回転ナデ調整が富隈城跡のものに近いものがあるので、鹿児島城跡のものよりやや先行する可能性もあろう。

ただ、これら鹿児島県内の資料と全く同じと言えるかどうかであるが、木曳門地区のものは硬質で砂礫が全く混じらないのが特徴であるが、これと同一とまでは断定できなかった。

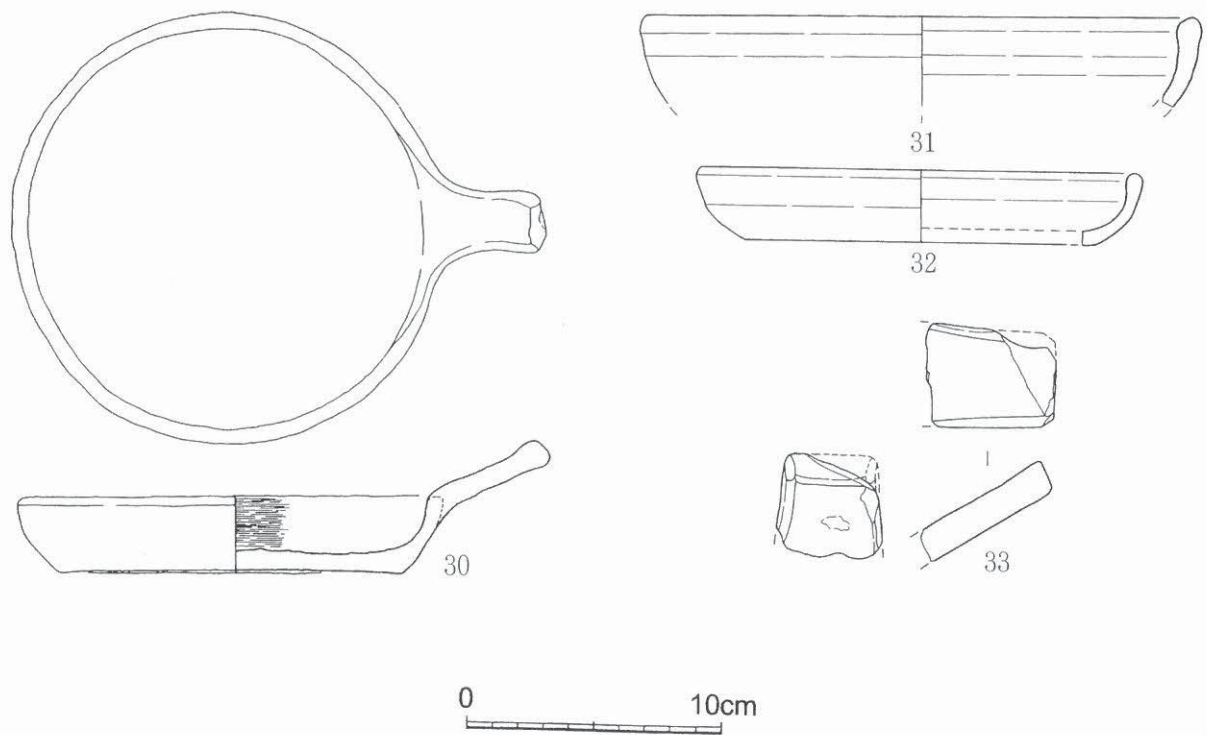
5. 焙烙について（図3）

ここで土器皿から離れて、冒頭で触れた焙烙について見てみたい。この焙烙は、土器皿と同じ首里城跡木曳門地区首里城跡木曳門地区及び隣接する下之御庭地区で出土しているものである。量的には、下之御庭地区の方がより大きな破片で多く出土している。今回掲載した図面も下之御庭地区で出土したものである。

さて、この焙烙は、身（31・32）と把手（33）が別個体で出土している。これも結論を先に述べてしまうが、鹿児島地域のものに類似するのである。例としては、報告書でも取上げているように、鹿児島県浜町遺跡（30）のものを挙げる。この焙烙も先の土師器皿と同様に18～19世紀代の陶磁器と出土している。

個々の特徴だが、土師器皿ほどは強くないヨコナデ調整によるもので、底部は平底である。口縁部が丸く肥厚するものが多い。焼成は良いが軟質で、色調は黄灰～黄橙色である。把手は3～5cm前後である。実際に浜町遺跡のものと比較したが、全く胎土まで同一化断定できないものの、器形・色調・焼成は類似していた。印象的には土師器皿よりも似ている雰囲気であった。

このように考えると、土器皿が浜町遺跡のものよりもやや古手と思われるものに似ていることから、焙烙とは直接関係しないと考えざるを得ない。新垣が指摘するように、18～19世紀の薩摩陶器は首里



第3図 鹿児島産炮烙

城でも比較的多く出土する（新垣2004）。この焙烙については、この他の薩摩陶器と同じような意味で考えたほうが良いかもしれない。

6. おわりに

以上の検討から、首里城跡木曳門地区出土の土器皿は、鹿児島県内の土師器皿に類似するものがあることは確実と言えよう。時期的にも、富隈城跡・鹿児島城跡の資料の比較から、おおよそ17世紀代ではないかと推察した。

しかしながら、この資料が鹿児島で作られたのかどうかは、明確に同一だという胎土などの特徴については抑えられなかった。この点では、筆者が別稿で行った瓦質土器の検討でも同様であった（瀬戸2004 a・b）。それは、現状では沖縄産瓦質土器にはない菊花文の連続スタンプが施されているものでも、微妙な文様の特徴が異なっていることや、胎土が沖縄産のものに類似するように見えるものがあつたことである。

この土器皿についても、前稿では鹿児島産ではないかという結論を導き出し、今回もその可能性を主張はしている。しかしながら、やはり、本土の方でも明らかに確認できない場合は、沖縄での模倣についても考える必要もあるのであろう。今回の土器皿については、首里城跡のみの出土しか認められていないこともある。いずれにせよ、やはり胎土の特定もこれからこのような製品に関しては必要であらう。

最後にこの土器皿の意義について若干考えてみたい。これまで検討してきたように、若干の疑問点はあるが、鹿児島を中心とする南九州の土師器皿に類似するものである。そこで、この土器皿は鹿児島地域的年代で考えられる17世紀だとすると、この時期に当該地域との何らかの交流が想定できるのである。前稿では、沖縄の陶器生産開始期と関連した考えを述べた（新垣・瀬戸2004）。

また、一般に土師器は灯明皿や何らかの儀礼に使用するものと考えられている。木曳門地区の土器は、全体的に変色しており被熱をした可能性があるが、明らかに灯明皿として使用されたと言えるものは見られない。ただ、この土器は今のところ、首里城跡でも当地区だけでの出土であるので、何らかの非日常的な儀礼等に用いられたものであろう。

いつもながら不十分ではあるが、首里城跡木曳門地区出土土器が、鹿児島地域のものと同様の器形・調整の特徴が類似するものがあることを指摘した。繰り返すが、こういった他地域のものに類似する資料については、器形・調整だけでなく、何らかの形で胎土についても検討することがまさに必要であらう。

首里城跡木曳門地区の調査報告に携わった西銘 章氏には様々ご教示を戴いた。また、未報告資料の掲載にあたっては、当埋蔵文化財センターの皆様にお世話になった。

今回、報告した資料12点は、既に報告された13点（沖縄埋文2001）と共に閲覧できるように整理している。所定の手続きをとられると、閲覧が可能であるので、今後広く利用されたい。

渡辺芳郎、中村和美、重久淳一の三氏には、鹿児島県の土師器について多くの御教示を戴いた。新垣 力・佐藤亜聖の両氏には、この土器がもたらす諸問題様々な御教示・御助言を戴いた。写真現像・焼付については、光嶋香・田村浩子両氏にやっていただいた。記して感謝申し上げたい。

（せと てつや：調査課 専門員）

参考・引用文献

- 新垣 力 2004 「沖縄・首里城出土の九州陶磁」『受容層の違いによる九州陶磁の様相』九州近世陶磁学会
- 新垣 力・瀬戸哲也 2004 「近世初頭における沖縄への窯業技術の伝播—16世紀～17世紀頃の考古資料から—」『第5回 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会 研究発表資料集 20年の成果と今後の課題』沖縄考古学会・鹿児島県考古学会
- 伊野近富 1987 「からわけ考」『京都埋蔵文化財論集』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡—下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡 発掘調査報告書—』
- 鹿児島県教育委員会 1983 『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』
- 鹿児島県教育委員会 1991 『鹿児島城二之丸跡（遺構編）』
- 鹿児島県教育委員会 1992 『鹿児島城二之丸跡（遺物編9）』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000 『浜町遺跡』
- 瀬戸哲也 2004 a 「沖縄出土の本土系瓦質土器」『グスク文化を考える』新人物往来社
- 2004 b 「本土系瓦質土器の産地についての補論—北部九州のものと比較して—」『紀要沖縄埋文研究2』
沖縄県立埋蔵文化財センター
- 都城市教育委員会 1991 「都之城跡（主郭部）」『平成2年度遺跡発掘調査概報』
- 隼人町教育委員会 1999 『富隈城跡Ⅱ』

沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理

付. 14～16世紀の青磁の様相整理メモ

New Perspective on Chinese Ceramics Unearthed in Okinawa of the 14-16c

新垣 力・瀬戸哲也

ARAKAKI Tsutomu・SETO Tetsuya

ABSTRACT: A large quantity of East Asian ceramics was introduced to Okinawa in the Gusuku Period. The major component, Chinese ceramics of the Late Medieval period (14c-16c) has been studied in terms of the classification and chronology; however, they need to be reconsidered in light of new information and recent excavations. This paper attempts to re-organize and analyze Chinese celadon and white porcelain, referring to the latest studies. As a result, celadon could not be classified exhaustively, but white porcelains are divided into two major production groups, Fujian (福建) kilns and Jingdezhen (景德鎮) kilns. It is also noted that the quantity of excavated white porcelains of the former kiln group surpasses the latter throughout the Gusuku period.

1. はじめに

グスク時代の沖縄には、東アジア各地から大量の舶載陶磁器がもたらされている。中でも大多数を占める14世紀～16世紀の中国産陶磁器は早くから研究の対象となり、多くの分類・編年が作成された。しかし、近年の研究成果により新たな知見や考古資料の蓄積が進んでおり、現状を見直す必要があると思われる。今回は、沖縄出土の中国産白磁について碗・皿を中心に、最近の研究成果等を用いて今一度の整理・検討を試みたい。

白磁の分類・編年は、横田賢次郎・森田勉が大宰府出土資料を用いて作成した分類及び編年案（横田・森田1978、以下大宰府旧分類とする）を嚆矢として、14～16世紀の白磁を対象とした森田勉の分類・編年案（森田1982、以下森田分類とする）、博多遺跡群出土の陶磁器分類案（福岡市教育委員会1984、以下博多分類とする）、山本信夫によって追加・修正が施された大宰府編年案（太宰府市教育委員会2000、以下大宰府新分類とする）が主なものである。沖縄では、これらを基礎に金武正紀が提示した分類・編年案（金武1988・1989・1990、以下金武分類とする）が一般に用いられている。

こういった中で、福建省の生産地資料からのアプローチを行った田中克子の分類案（田中2003、以下田中分類とする）が近年、クローズアップされている。沖縄では、従来指摘されているように、福建地方の白磁が多く出土しており、田中の研究は非常に重要である。また、近年の首里城跡の調査では、いわゆる「枢府磁」の系統を引く白磁もまとまって出土しており、景德鎮窯系の様相もより具体的にになってきつつある。

そこで、本稿では、沖縄出土の白磁を①福建・広東系白磁、②景德鎮窯系白磁、の2種に大別し、それぞれを上記の先行研究と対比させる形で分類を行う（第1表）。

また、今回、「14～16世紀の青磁の様相整理メモ」を付章とした。本来ならば、青磁についても白磁同様の視点で体系的な分類までに踏み入れるつもりであったが、力及ばずまとまったものとはならなかった。しかしながら、この作業過程についてはある程度の参考になるのではないかと考えたので、赤恥を覚悟の上で掲載することにした。

2. 福建・広東系白磁（第1図、第2図）

沖縄から出土する白磁の大半を占め、当該期全体を通じて出土している。以下に分類案を記す。

A類（1～9）

口縁部周辺の釉薬を施釉後に掻き取る口禿のもので、金武分類の口禿碗・皿に対応する。器種は碗と皿があり、それぞれ器形と施釉方法から2種類に大別される。

碗Ⅰ：胴部が球形に張り、高台の断面形態が方形を呈する。釉薬は内底から高台際または高台まで施釉され、内底に陰圏線を1条廻らせる（1）。

Ⅱ：Ⅰに比して胴部の張りが弱く、畳付外縁に面取りが施される。釉薬は内底から外面腰部まで施釉され、高台は露胎。内底に陰圏線を1条廻らせる（3）。

皿Ⅰ：高台を持たない小形の浅皿。施釉方法及び器形の差異から3種類に細分される。

I-a：碗Ⅰに対応するもの。胴部中位で内側に湾曲し、外底面がわずかに上げ底状を呈する。釉薬は内底から外面腰部まで施釉され、口禿にはならない。無文（2）。

I-b：碗Ⅱに対応する。腰部にやや丸みを持ちながら直線的に開く端反口縁のもので、外底面がわずかに上げ底状を呈する。釉薬は内底から外面腰部までの施釉だが、外底にも雑に塗布する。器高の低いもの（4）と高いもの（5）の2種がある。いずれも無文。

I-c：bと同様に碗Ⅱに対応する。基本的な器形はbに似るが、口縁部が直口し、底部が上げ底にならない。施釉方法はbと類似するが、外底には釉薬を塗布せず露胎のままとしている。bと同様に、器高の低いもの（6）と高いものがある（7）。いずれも無文。

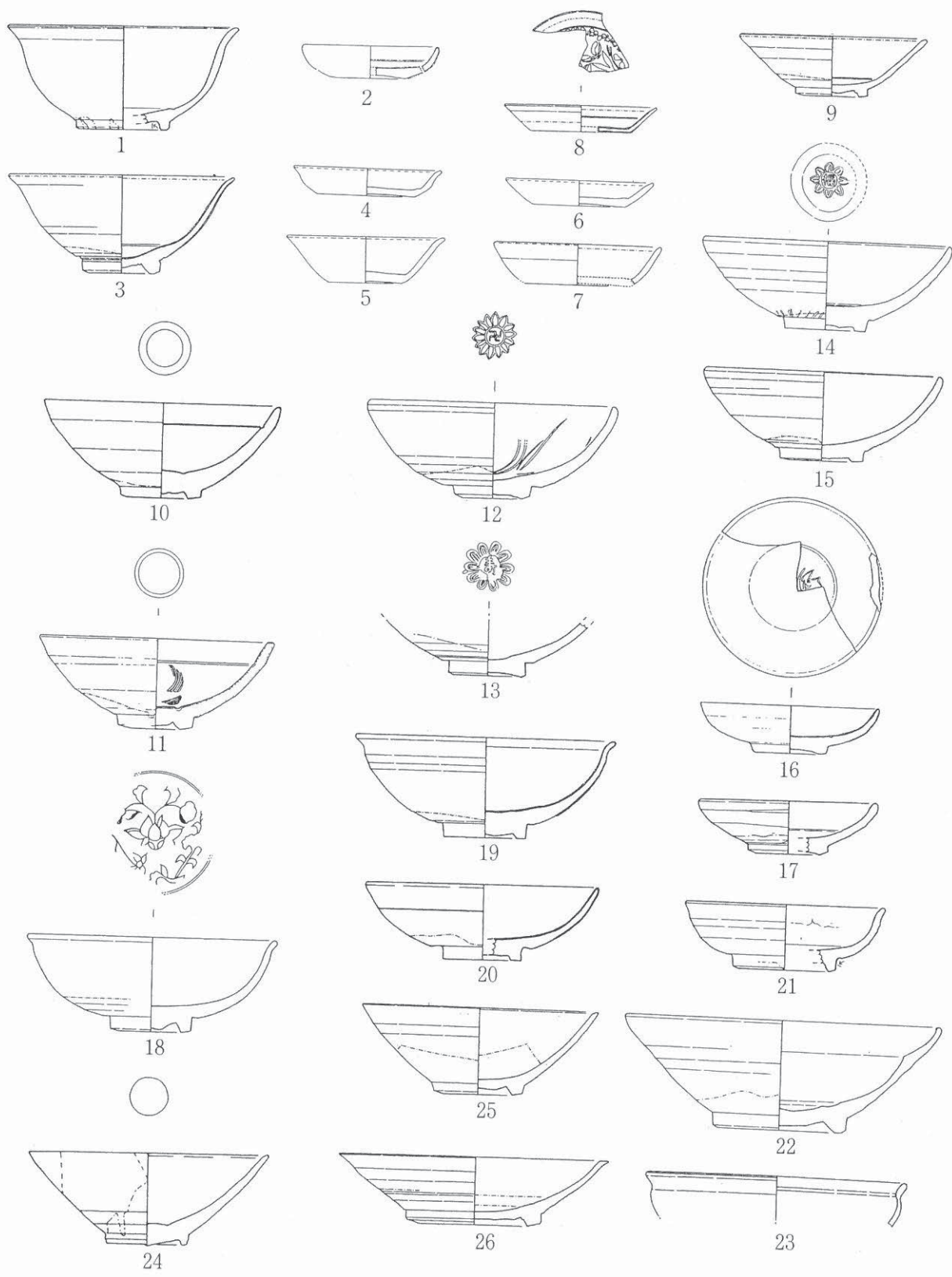
I-d：b、cと同器形だが薄手で底部が上げ底にならないもの。釉薬は内底から外面腰部まで施釉する。内底に陰圏線を廻らせ、印花文を施す（8）。

Ⅱ：体部が斜上方に直線的に開き高台を持つもの。成形が雑で器面全体に調整痕が残る。高台の断面形態は方形で全体が「ハ」の字状を呈し、接地面は畳付内端のみとなる。釉薬は内底から外面腰部まで施釉。内底に陰圏線を1条廻らせる（9）。

A類碗は大宰府旧・新分類の碗Ⅸ類、博多分類の口ハゲの白磁碗、森田分類のA群碗、田中分類のH類にそれぞれ比定される。細分類では碗Ⅰが大宰府旧・新のⅨ類-1、博多分類の口ハゲの白磁碗1、Ⅱ類は大宰府旧・新分類のⅨ類-2、博多分類の口ハゲの白磁碗2に相当する。森田分類は両者を一括しており、田中分類には碗Ⅱのみが含まれる。

生産地は碗Ⅱに限定されるが、田中によって閩江以北沿海部寧徳地区の窯と同定されている。年代は今帰仁城跡主郭9、7層（今帰仁村教育委員会1991）の出土例から13世紀末が初現と考えられるが、拝山遺跡（沖縄県教育委員会1987）や広島県尾道市街地遺跡（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1978）ではいわゆる龍泉窯系青磁の劃花文碗と共伴しているため、13世紀後半まで遡る可能性もある。終末は沖縄の例では確認できないが、韓国・新安沖海底遺跡（国立中央博物館1977）の出土状況から14世紀前半と考えられる。大宰府新分類では13世紀中頃から14世紀初頭前後の標識資料で、13世紀後半～14世紀前半に増加するとしており、田中分類では13世紀前半に出現し、やはり13世紀後半から14世紀前半に多くみられるとしている。

皿Ⅰは細かい分類が実施されている。I-aは大宰府新分類のⅧ類-1'、博多分類の口ハゲの白磁平底皿1、田中分類のK類-5に相当し、特に博多分類と田中分類では後述する皿Ⅱの口縁部総釉資料と捉えられている。生産地は素地や釉薬の特徴から福建省内と思われるが、現時点では情報が少なく判然としない。年代は今帰仁城跡主郭7層（今帰仁村教育委員会1991）の出土状況から13世紀末～14世紀初頭に位置付けられ、大宰府新分類では13世紀に到って出土する傾向があるとしている。



A類 (1~9)、B類 (10~23)、C類 (24~26)

1・13・17・21 (銘苜原遺跡)、3・8・9・11・12・15・19・23・25・26 (今帰仁城跡主郭)、
 2・4~7・18・22 (今帰仁城跡志慶真郭)、10 (ピロースク遺跡)、14 (屋良グスケ)、
 16 (稲福遺跡)、20 (首里城跡御庭地区)、24 (住屋遺跡)

第1図 沖縄出土の白磁1 (福建・広東系1) 縮尺1:4

I-bとcは広く知られているもので、それぞれ大宰府旧・新分類の皿Ⅸ類、博多分類の口ハゲの白磁平皿2と3、森田分類のA群皿、田中分類のK類-5に比定されている。細分類ではI-bが大宰府旧・新分類のⅨ類-1、博多分類の口ハゲの白磁平皿2、I-cが大宰府旧・新分類のⅨ類-2、博多分類の口ハゲの白磁平皿3に相当するが、森田分類と田中分類では両者を一括している。I-dは大宰府新分類のⅩ類-bに相当し、Ⅱは器形に若干の差異があるが、大宰府新分類のⅨ類-3、博多分類の口ハゲの白磁高台付皿、田中分類のH類に類似の資料がみられる。

このI-b・cは碗Ⅱとセット関係にある製品と考えられるため、生産地も同じく閩江以北沿海部の寧徳地区の窯と推定されるが、I-dとⅡに関しては生産地が異なる可能性もある。I-b・cの年代は今帰仁城跡主郭7層（今帰仁村教育委員会1991）の出土例から13世紀末～14世紀初頭と考えられるが、広島県尾道市街地遺跡（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1978）や長崎県鷹島海底遺跡（森本1993）の出土状況をみると、初現は13世紀後半まで遡る可能性も高い。終末は拝山遺跡（沖縄県教育委員会1987）やピロースク遺跡（石垣市教育委員会1983）、福岡県大宰府史跡第45次SX1200（九州歴史資料館1978）の出土例から14世紀前半と想定される。しかし、石川県普正寺遺跡地山面からも少量ながら出土しているため（石川県立埋蔵文化財センター1984）、14世紀後半との位置付けも一概に否定し難い。皿I-d及びⅡは今帰仁城跡主郭7層（今帰仁村教育委員会1991）から確認されているが、当該資料は出土例が少なく不明な点が多いため、今回はⅡと近い年代であろうとの指摘にとどめる。大宰府新分類では13世紀後半～14世紀前半、森田分類では13世紀中頃～14世紀前半、田中分類では13世紀前半から出現し、13世紀後半～14世紀前半に多くみられるとしている。

B類（10～23）

高台内削りの浅い厚手の製品。器種は碗・皿・鉢があり、器形や文様から碗は3種、皿と鉢は2種に大別される。

碗Ⅰ：体部は直線的に開くが、口縁部直下でやや内側に屈曲する。口唇部は外側が尖り、内面口縁部には陰圏線を1条廻らせる。高台の断面形態は方形で、接地面は畳付内端のみである。釉薬は内底から外面腰部まで施釉する。文様は内底に幅広の陰圏線を廻らせるもの（10）と、内面胴部に櫛描文を描き、内底に幅広の陰圏線を廻らせるもの（11）がある。金武分類のピロースクタイプ碗Ⅰに相当する。

Ⅱ：体部が内湾するもの。口縁部は丸みを持つが、口唇部内端に稜を持つものが多い。高台形態はⅠに似るが底径はⅠより広く、畳付全体を接地面とするものもある。施釉方法はⅠと同様。文様は内面胴部に櫛描きで花卉文を描き、内底に印花文を施すもの（12）、内底に印花文のみを施すもの（14）がある。無文のもの（15）がある。金武分類（金武1989）のピロースクタイプ碗Ⅱに相当する。

Ⅲ：器形はⅠに似るが、腰部が大きく張り口縁端部が外反するもの。高台の形態はⅡに類似し、施釉方法はⅠ・Ⅱの双方と共通する。内底に陰圏線を1条廻らせ、その中に印花文を施す（18）。端反口縁にならないもの（20）もあるが量的には少ない。金武分類（金武1990）の外反碗に相当する。

皿Ⅰ：体部が内湾するもので、口縁部は丸みを持ち口唇部内端に稜を持つ。高台内削りは浅く接地面は畳付内端のみである。釉薬は内底から外面腰部まで施釉する。内底に陰圏線を1条廻らせ、その中に印花を施す（16）。碗Ⅱに対応する。

Ⅱ：Ⅰに比して胴部が大きく張り端反口縁を呈するもの。高台形態は碗Ⅲに類似し、釉薬は内底

から高台際まで施釉する。内底に陰圏線を廻らせる(21)。碗Ⅲに対応する。

鉢Ⅰ：体部を斜上方に立ち上げるもので、内面胴部には蓋受部と考えられる突帯が廻る。暈付外縁に面取りが施され高台内側は斜めに削られる。釉薬は内底から外面腰部まで施釉。無文(22)。

Ⅱ：鼈甲口口縁のもの。口縁部資料のため胴部以下の器形及び文様の有無は不明(23)。

B類碗は大宰府新分類の碗C類、森田分類のC群碗、田中分類のJ類にそれぞれ比定され、細分類では碗Ⅰが大宰府新分類のC類-1、碗ⅡとⅢが田中分類のJ類-1と2に相当する。ちなみに、大宰府新分類では碗ⅡとⅢをまとめてC類-2としており、森田分類は3種類を一括している。

生産地は、以前曾凡が報告した南平葫芦山窯出土資料の中に碗Ⅱが確認されており(曾凡1988)、田中によれば閩江中流の南平から下流域と、河口から以北東沿海部一帯の窯群と推定される(田中2003)。碗Ⅰについては判然としないが、素地や高台造りからⅡと生産地を同じくする可能性が高い。また、碗Ⅰ類の器形及び文様がいわゆる同安窯系櫛描文青磁碗に類似していることから、当該グループの消長・展開を考える上で重要な資料と考えられる。

年代は、碗ⅠとⅡは今帰仁城跡主郭7層の出土例から13世紀末～14世紀初頭と想定されるが、Ⅰは出土例が少なく終末期など不明な点が多い。ただ碗Ⅰは前述したように同安窯系青磁の系統を色濃く残すと思われるので、Ⅱより若干古いとする金武の説(金武1989)には賛成したい。碗ⅠとⅡは韓国・新安沈船資料(国立中央博物館1977)から14世紀前半までの出土が認められるが、同遺跡からはⅢが出土せず今帰仁城跡主郭5層(今帰仁村教育委員会1991)では両者が共伴するため、下限は14世紀中頃と考えられる。碗Ⅲは韓国新安沈船資料にみられないこと(国立中央博物館1977)、今帰仁城跡で最も多く出土していること、首里城跡での出土量が極端に少ないことなどから、金武が述べるように1383年～1415年を中心に招来されたと考えられ(金武1988)、おおむね14世紀後半～15世紀初頭に位置付けられる。しかし、福岡県大宰府史跡第109・111次SD3200では嘉元2年(1304)銘の卒塔婆に共伴する出土例もあるため(九州歴史資料1989)、初現が14世紀前半、あるいは14世紀初頭まで遡る可能性も否定できない。森田分類(森田1982)では15世紀前後、田中分類では碗Ⅱは13世紀末～14世紀中、碗Ⅲは14世紀後半～15世紀初頭としている。

皿は器形の特徴から碗Ⅱとのセット関係が考えられるが、内底の印花文という碗Ⅲの要素も併せ持つ資料である。田中が最近提唱したビロースクⅣ類の皿形品に相当すると考えられるため、(森本・田中2004)生産地も必然的に閩江中流の南平から下流域と、河口から以北東沿海部一帯の窯群が想定される。本標品は稲福遺跡(沖縄県教育委員会1983)や銘苅原遺跡(那覇市教育委員会1998)で出土しているものの、双方とも包含層出土であり年代の特定までは至っていない。器形や文様の特徴から判断すると碗ⅡとⅢの重複する時期、すなわち14世紀全搬との位置付けが妥当であろうか。

鉢はいずれの分類にもみられない。鉢Ⅰは類例が青森県十三湊遺跡(国立歴史民俗博物館1998)とベトナム・ダイラン遺跡(森本1996)から出土している。これらは内底に蛇の目釉剥ぎと印花文を施す点が異なるが、器形の特徴は一致する資料である。年代は前述の2遺跡に加えて今帰仁城跡志慶真郭(今帰仁村教育委員会1983)の出土状況から14世紀～15世紀に収まると判断されるが、素地や釉調が碗Ⅲに類似するため同様の産地が指摘され、時期的にも14世紀の後半頃に盛期を持つと考えられる。鉢Ⅱは好資料に恵まれず、出土例も現在のところ今帰仁城跡主郭(今帰仁村教育委員会1991)に限られているが、素地及び釉調が鉢Ⅰに類似すること、共伴遺物が14世紀以降の製品で占められることなどから、産地・年代ともに鉢Ⅰに近いと思われる。今後類例の増加を待ちたい。

C類 (24~26)

幅広の高台から体部を斜上方に立ち上げる器形の低い碗。器形と施釉方法から2種に大別される。

碗Ⅰ：底部が肉厚のもので、口唇部内端に稜を持つ。内底、外底ともに中央部が突出し、内底面に陰圏線を廻らせる。釉薬は内底から外面胴部まで施釉。無文(24)。

Ⅱ：口唇部内端の稜がⅠに比して明瞭なもので、高台は「ハ」の字状に開き畳付内端を接地面とする。器形や施釉方法により2種類に細分される。金武分類の薄手直口碗に相当する。

Ⅱ-a：釉薬は内面胴部から外面胴部まで施釉し、内底と外面腰部以下は露胎となるもの。無文(25)。

Ⅱ-b：aに比して器形の低い浅碗。釉薬は内底から外面胴部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文(26)。

C類は田中分類のG群に確認されるが、当該分類は碗Ⅱのみを提示している。碗Ⅰの生産地は判然としないが、A類碗ⅡやB類碗Ⅰに共通する特徴的な内底形態を有しているため、これらとの関係で出自・系統を考えることが可能であろう。一方、碗Ⅱは田中によると閩江河口近くの連江一帯の窯群とされている。年代は今帰仁城跡主郭9、7層(今帰仁村教育委員会1991)の出土例から13世紀末~14世紀初頭に位置付けられるが、長崎県鷹島海底遺跡からも確認されているため(森本1993)、初現は13世紀後半まで遡ると考えられる。終末は今帰仁城跡主郭1~4層(今帰仁村教育委員会1991)で少量ながらB類碗Ⅲとの共伴関係がみられること、マレーシア・ジュアラ遺跡(森本1991)で類品が出土していることから、14世紀中頃~後半まで下る可能性もある。田中分類では13世紀後半~14世紀前半に多くみられるとしている。

D類 (27~46)

底部が肉厚で腰部の張りが強い小振りの製品。器種は碗・皿・杯があり、器形の特徴から碗と皿は4種類、杯は3種類に大別される。

碗Ⅰ：口縁部が大きく外反するもの。高台の断面形態は方形で畳付の外端に面取りが施され、高台内削りは浅い。釉薬は内底から高台外面まで施釉され、内底に目跡が確認される。無文(27)。

Ⅱ：Ⅰに比して腰部の張り、口縁部の外反が弱いもの。高台の形態はⅠに似る。釉薬は内底から外面腰部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文(39)。

Ⅲ：器形はⅡに似るが器面全体に調整痕が残る厚手のもので、内面口縁部に稜を持つ。高台の形態はⅠに類似する。釉薬は内面胴部から外面胴部まで施釉し、内底と外面腰部以下は露胎。内底に目跡が確認されるものもある。無文(41)。

Ⅳ：Ⅲの亜種と考えられる薄手の碗で、Ⅲに比して素地が硬質である。口縁部内端に稜を持ち、高台内削りはアーチ形を呈する。施釉方法はⅢに類似するが、施釉範囲はⅢより小さい。内底に陰圏線を廻らせる(44)。

皿Ⅰ：口縁端部が舌状で器肉が厚く、外面に調整痕が残るもので、碗Ⅰに対応する。器形の特徴から2種類に細分される。

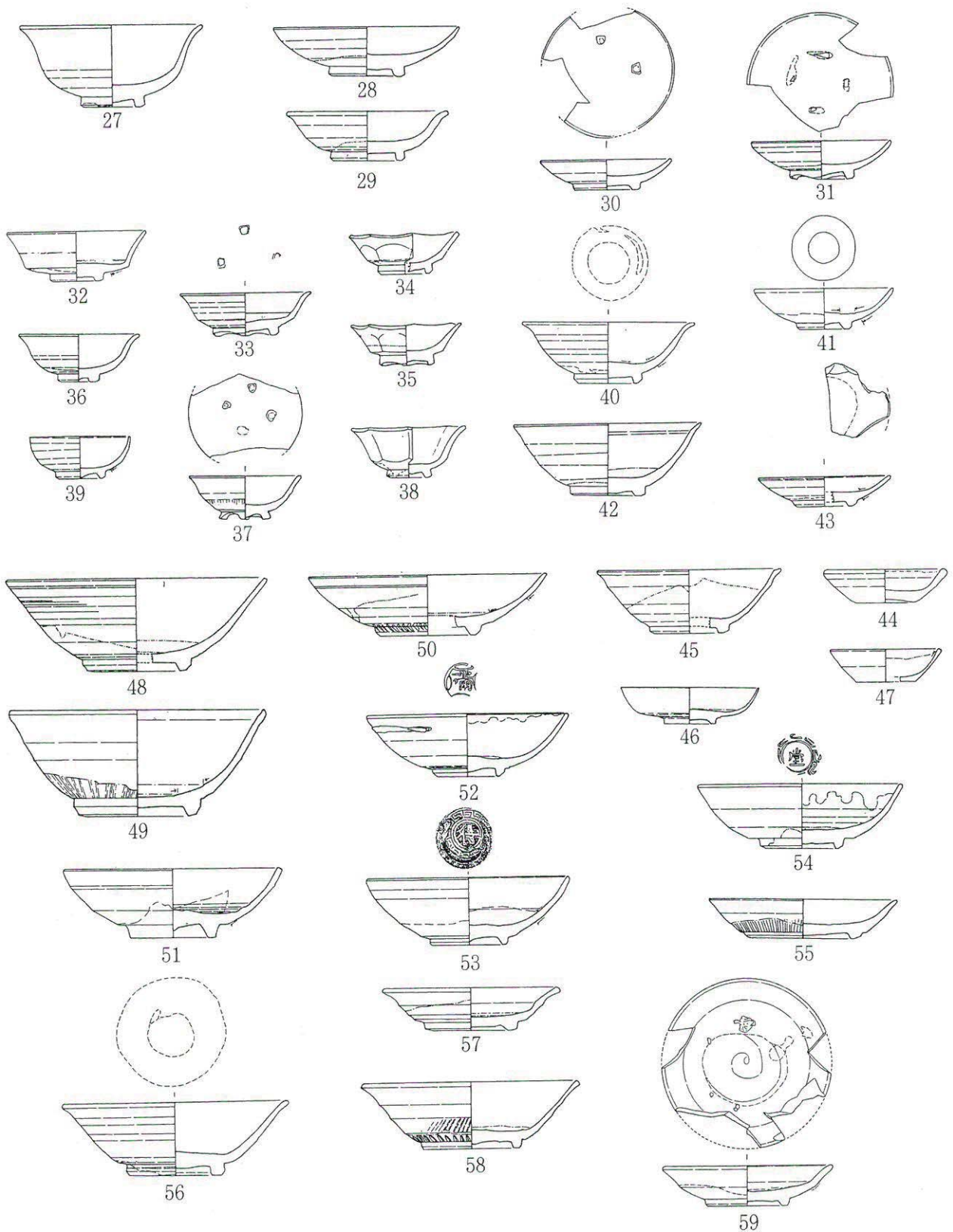
I-a：胴部にやや膨らみをもたせながら斜上方に開くもので、高台の断面形態は方形で畳付外縁または両端に面取りを施す。釉薬は内底から外面胴部まで施釉する。無文(28)。金武分類の内彎皿に相当する。

I-b：腰部が張り端反口縁を呈するもので、高台の断面形態は方形で畳付外端に面取りを施す。釉薬は内底から外面腰部まで施釉。無文(29)。

- I-c：直口口縁の小皿。平高台のもの（30）と4～5ヶ所抉りを入れるもの（31）があり、出土例は後者が多い。釉薬は内底から外面胴部まで施釉するが、器面全体に施釉するものもある。内底に目跡が確認される。無文。金武分類の挟入高台皿に相当する。
- II：器形はI-cに似るが高台造りが厚く、I-cに比して底径が小さい。内底から外面胴部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文（40）。碗IIに対応する。
- III：碗IIIに対応するもの。器形の特徴から2種類に細分される。
- III-a：器形はIIに似る薄手の皿で、器面全体に調整痕が残る。高台内削りは浅く畳付外端の面取りは雑である。釉薬は内面胴部から外面腰部まで施釉する。無文（42）。
- III-b：口縁端部がわずかに膨らみ外底が上げ底状を呈する平底皿。素地は軟質で器肉は厚い。釉薬は内面だけに施釉され、口縁部に煤が付着するものもある。無文（43）。金武分類の燈明皿に対応する。
- IV：碗IVに対応するもの。器形の特徴から2種類に細分される。
- IV-a：III-aの亜種と考えられるもので、腰部の張りが強い内湾器形の皿。高台内削りはアーチ状を呈し畳付を水平に切る。釉薬は内面胴部から外面腰部まで施釉する。無文（45）。
- IV-b：器形はIII-bに似るが、口縁端部が方形を呈し上げ底にならないもの。素地は硬質で器肉は薄い（46）。施釉方法及びその他の特徴はIII-bと同様。金武分類の燈明皿に対応する。
- 杯I：腰部で屈曲し明瞭な稜を持つもの。器形の特徴から通常の腰折杯（32、33）と、外面に面取りを施したいわゆる八角杯（34、35）に大きく分類され、それぞれ平高台のものと挟入高台のものがあり、後者は内底に目跡が確認される。釉薬は内底から外面胴部まで施釉。すべて無文。
- II：腰部が張り体部に丸みを帯びるもので、Iと同様に通常の外反杯（35、36）と八角杯（37）に分類される。高台形態及び施釉方法もIに類似する。無文。
- III：半球形の胴部を持つ直口口縁の杯。高台の断面形態は方形で畳付外端に面取りを施す。釉薬は内底から外面腰部まで施釉。無文（38）。

D類碗はいずれの分類にもみられないが、碗Iと同様の素地・高台形態を有する皿Iが森田分類のD群に含まれる。この種の皿は邵武四都窯が生産地の一つと指摘されているため（田中2002）、碗Iも生産地を同じくする可能性が高いと思われる。年代はIとIIIは今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）の出土例から14世紀後半以降、IIは首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998a）の出土例から15世紀中頃に位置付けられる。IVは今帰仁城跡志慶真郭（今帰仁村教育委員会1983）から出土しているが、年代の推定できる好資料に乏しい。しかし15世紀から遡らせることは難しいと思われる。

皿は森田分類のD群に相当するが、その他の分類にはみられない。田中により邵部四都窯が生産地の一つとして紹介されているが（田中2002）、沖縄及び日本での出土量を考えると閩江上流域一帯の窯群まで範囲が広がると想定される。皿Iの年代は今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）の出土例から14世紀後半以降、皿IIからIVは前述の今帰仁城跡に加えて首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998）、名蔵シタダル遺跡（沖縄県立博物館1982）、湧田古窯跡行政棟I区（沖縄県教育委員会1993）などの出土例から14世紀後半～16世紀に位置付けられるが、福岡県博多遺跡群第40次4号土壙（福岡市教育委員会1990）や島根県富田川河床遺跡第7次4、5遺構面（島根県教育委員会1983）からは出土しないため、16世紀前半が上限と推定される。しかしIII-bとIV-bは金武



D類 (27~47)、E類 (48~55)、F類 (56~59)

27~29・31・33・35・36・42・45・46・48・52・54(今帰仁城跡主郭)、30・37・55・57・58(湧田古窯跡行政棟地区)、
 32・41(越来グスク)、34(喜屋武グスク)、38・44(今帰仁城跡志慶真郭)、39・47・50(天界寺跡
 西区)、40・59(首里城跡京の内地区)、43(湧田古窯跡地下駐車場地区)、49(銘苧原遺跡)、51・
 53(天界寺跡東区)、56(慶来慶田城跡遺跡)

第2図 沖縄出土の白磁2 (福建・広東系2) 縮尺1:4

が15世紀～16世紀と設定しているもので（金武1990）、現時点の考古資料からも14世紀代まで遡らせることは難しい。また、I-a・bに関しては前述の湧田古窯跡から確認されていないことから、15世紀代で姿を消す可能性もある。

杯は森田分類（森田1982）のD群とE群の一部に相当する。前述の碗Iや皿と素地・高台形態・釉調に多くの類似点があることから、田中の紹介した邵武四都窯を生産地の候補の一つに挙げることができる（田中2002）。年代は越来グスク（沖縄市教育委員会1988）、首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998a）、今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）、湧田古窯跡行政棟I区（沖縄県教育委員会1993）などの出土例から14世紀後半～16世紀頃に位置付けられるが、福岡県博多遺跡群第40次4号土壙（福岡市教育委員会1990）や島根県富田川河床遺跡第7次4、5遺構面（島根県教育委員会1983）からは確認されていない。よって16世紀前半が上限と想定される。森田分類（森田1982）では15世紀後半～16世紀代の遺跡から出土するが、14世紀後半から使用されていたとしている。

E類（47～54）

逆台形の高台を持ち畳付の外縁を削るもの。成形は雑で器面全体に調整痕が残る。器種は碗と皿があり、器形と施釉方法から2種類に細分される。

碗I：体部は直線的に開くがやや丸みを持ち、口縁部は直口するもの（47）と若干外側に開くもの（48）がある。外面腰部に飛鉋が廻り、高台内削りは深い。釉薬は内底から外面胴部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文。

II：体部が内湾する器高の低い碗。口縁部は舌状を呈し、口唇部内端に明瞭な稜が残る。釉薬は内面胴部から外面胴部まで施釉し、内底と外面腰部以下は露胎。無文のもの（50）と内底に印花文を施すもの（51～53）がある。金武分類の厚手直口碗に相当する。

皿I：体部や直線的に開くがやや丸みを持ち、口縁部は舌状を呈する。外面腰部に飛鉋が廻り、高台内削りが深い。釉薬は内底から外面胴部まで施釉した後、内底を蛇の目状に釉剥ぎする。無文（49）。碗Iに対応する。

II：Iに比して小振りの皿。胴部から底部にかけて肉厚となり、高台内削りも浅い。外面腰部に飛鉋が廻る。釉薬は内面胴部から外面胴部まで施釉し、内底と外面腰部以下は露胎。無文（54）。碗IIに対応する。

E類碗は、田中が最近提唱した「内底輪状釉剥ぎ・露胎碗」にまとめられている（森本・田中2004）。また形態的な特徴では前述のD類碗IVにも近いので、これらを同一グループとして捉えることも可能かと思われる。生産地は現在のところ判然としないが、田中によれば邵武四都窯に本標品と同形態の高台を持つ白磁があるとされる（田中2002）。年代は今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）の出土状況から14世紀後半～16世紀頃と推定されるが、包含層出土資料のため詳細な設定は難しい。

皿も「内底輪状釉剥ぎ・露胎碗」（森本・田中2004）の皿形品と解することができる。皿Iは天界寺跡西区から出土しているが（沖縄県立埋蔵文化財センター2002）、包含層出土資料のため詳細な年代は不明である。よって今回は碗Iの年代観を援用して14世紀後半～16世紀頃としておきたい。皿IIは湧田古窯跡行政棟I区（沖縄県教育委員会1993）、島根県富田川河床遺跡第7次4、5遺構面（島根県教育委員会1983）、福岡県博多遺跡群第40次4号土壙（福岡市教育委員会1990）の出土例から16世紀頃と考えられる。

F類 (55～59)

体部が逆「ハ」の字状に大きく開き、外端が面取りされるもの。器種は碗と皿がある。

碗：体部が外側に大きく開き、外面口縁部は玉縁状を呈する。高台の断面形態は方形で外端が面取りされる。釉薬は内底から外面腰部または高台際まで施釉した後、内底を円形(57)または蛇の目状(55)に釉剥ぎする。無文。

皿：器形は碗に似るが胴部中位で屈曲し口縁部が端反を呈する厚手の皿で、口唇部に稜を持つものもある。高台は内側が斜めに削り出され、外端のみを接地面とする。釉薬は内底から外面胴部まで施釉した後、内底を円形(58)または蛇の目状(56)に釉剥ぎする。無文。

F類は、これまでの分類には見られない。しかしながら、57・59は水澤幸一が新潟県江上館跡等の日本海側の北陸・東北地方で、一定量出土することを指摘している。水澤は、このタイプを首里城跡京の内の資料を基準として「首里タイプ」と呼称している(水澤2004)。

碗は青磁にも同形態の製品があるが、両者は釉薬の色調や素地の焼成具合などのわずかな差異が認められるのみで、明確な分類は難しい。高台形態や施釉方法がD類碗Ⅳに類似するため、邵武四都窯を生産地とする可能性も考えられる。碗の年代は湧田古窯跡行政棟Ⅰ区(沖縄県教育委員会1993)や慶来慶田城遺跡(沖縄県教育委員会1997)の出土例から16世紀代に位置付けられるが、皿は今帰仁城跡主郭1～4層(今帰仁村教育委員会1991)、首里城跡京の内SK01(沖縄県教育委員会1998a)、湧田古窯跡行政棟Ⅰ区(沖縄県教育委員会1993)、新潟県馬場屋敷遺跡W区上層(川上1984)などの出土例から14世紀後半～16世紀頃と推定される。

3. 景德鎮窯系白磁 (第3図)

浙江省景德鎮窯及びその周辺諸窯を生産地とするもので、14世紀後半から登場するが出土量は福建・広東系に比して少ない。以下に分類案を記す。

A類 (60～62)

底部が肉厚で内側に斜行する幅広の高台を持つもの。器形の特徴から2種類に大別される。

碗Ⅰ：腰部が張り直口口縁を呈するもの。釉薬は内底から高台外面まで施釉する。無文(60)。

Ⅱ：Ⅰに比して底径が大きく、口縁部が外反すると想定されるもの。内底に陽圏線状の明瞭な稜が確認され、高台内側には少量だが砂が付着する。内面に型押し陽刻文が施されるもの(61)と、無文のもの(62)がある。

A類は森田分類のいわゆる「枢府磁」であるB群そのものとは言い切れないが、その退化したB'群に相当もしくは近似すると思われる。典型的な「枢府磁」とされる森田分類B類は少なく、今回図示していないが、首里城跡二階殿地区出土の精巧な鳳凰文の碗破片(沖縄県立埋蔵文化財センター2005、第30図2)があるのみである。しかしながら、金沢陽が検討したインドネシア・トゥバン海域引き揚げ資料(金沢2001)の「枢府」銘白磁碗を含む一群の高台づくりが非常に類似している。この資料は、景德鎮湖田窯産と推定されるもので、時期的には14世紀中頃～後半に位置付けられる。

B類 (63～69)

高台形態や施釉方法がA類に似る外反口縁の製品。器種は碗と皿があり、器形の特徴からそれぞれ2種類に大別される。

碗Ⅰ：口縁部が外反する薄手の碗。底部の形態は不明だが、おそらく皿Ⅰに類似すると考えられる。内面に陽刻の龍文を施す(63)。

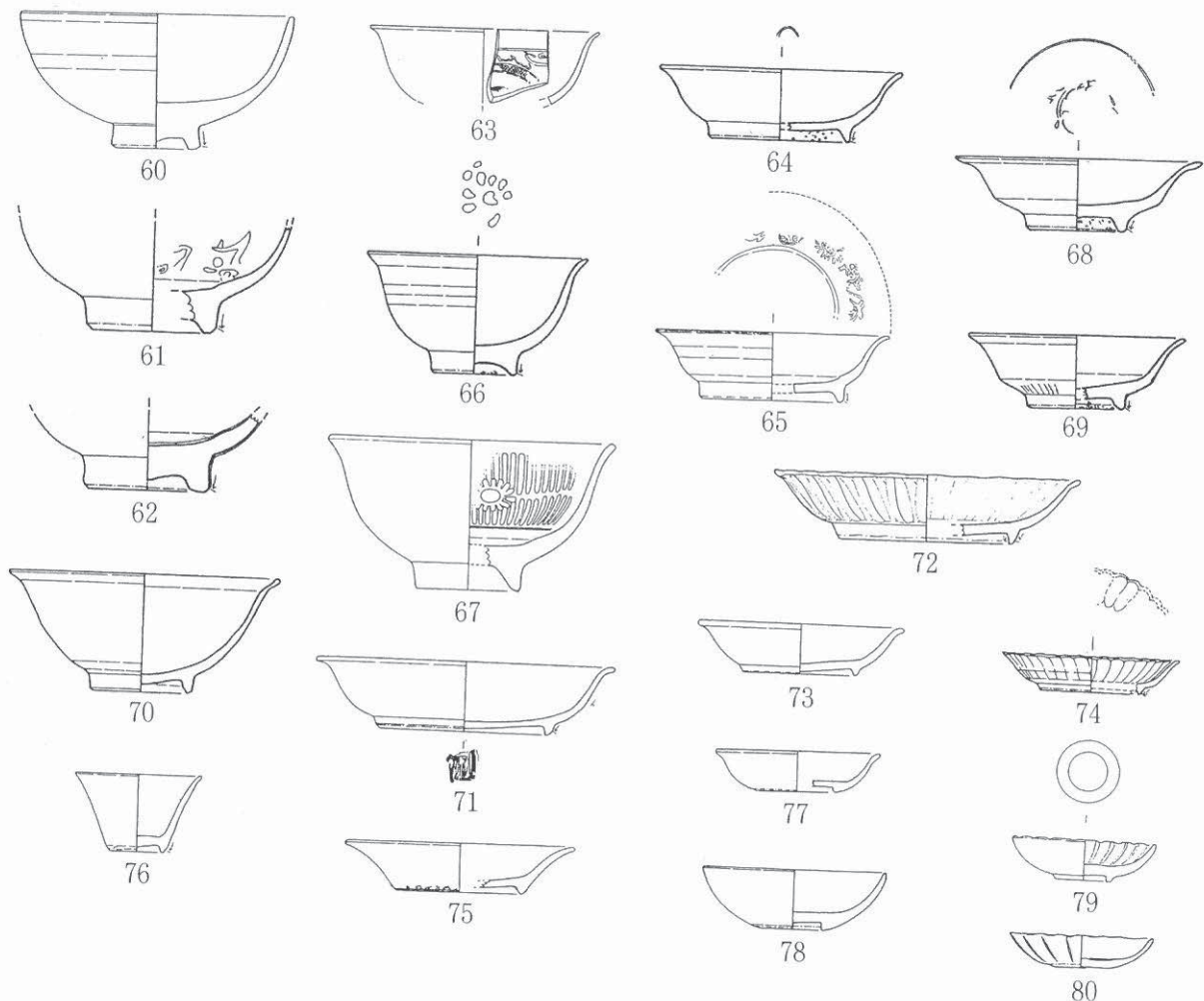
Ⅱ：器形はⅠに似るが器肉が厚く、高台内削りがアーチ形を呈するもの。釉薬は内底から高台外面まで施釉する。A類と同じく高台内側に砂が付着するものもある。文様は内底に印花文？を施すもの（66）や、内面胴部に陽刻の草花文を施すもの（67）がある。

ⅢⅠ：口径に比して底径が大きい外反口縁の皿で、碗Ⅰに対応するもの。高台内削りは若干アーチ形で畳付外端に面取りが施される。釉薬は内底から高台外面まで施釉し、高台内側に砂が少量付着する。文様は内面に陽刻の唐草文を施すもの（65）と、無文のもの（64）がある。

Ⅱ：碗Ⅱに対応すると考えられる。腰部で屈曲し口縁部が端反を呈するもので、口縁端部はわずかに玉縁状に膨らむ例も確認されている。施釉方法及び高台内側の状況はⅢⅠと類似する。

文様は内底に陰圏線を廻らせて中央に草花文を描くもの（68）と、無文のもの（69）がある。

B類はいずれの分類にもみられないが、器形・施釉方法・施文方法などA類碗Ⅱに近似する特徴を有しているため、枢府磁系統の製品群であることは間違いなからう。年代は今帰仁城跡志慶真郭（今帰仁村教育委員会1983）や首里城跡二階殿落ち込み（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）の出土状況や、同器形の色絵碗や染付碗が首里城跡京の内SK01（沖縄県教育委員会1998a）から出土しているこ



A類（60～62）、B類（63～69）、C類（70～80）

60（首里城跡京の内）、61・62・64・66・68・69（首里城跡二階殿地区）、63・71（天界寺西区）、65・76（首里城跡下之御庭跡地区ほか）、67・79（今帰仁城跡志慶真郭）、70（尻並遺跡）、72（天界寺跡中区）、73・77（今帰仁城跡主郭）、74（円覚寺跡）、75（安仁屋トゥンヤマ遺跡）、78・80（湧田窯跡行政棟地区）

第3図 沖縄出土の白磁3（景德鎮窯系） 縮尺1:4

とから、おそらく14世紀後半～15世紀中頃と思われる。ちなみに、皿Ⅱに器形の似た資料が景德鎮瑤里窯産として報告され、博多遺跡群の出土例から14世紀末～15世紀初頭に位置付けられている（高島・田中2004）。

C類（70～80）

失透性の釉薬を全体に施釉した後、暈付を釉剥ぎする薄手のもの。器種は碗・皿・杯があり、碗と杯は単体だが皿は3種類に大別される。

碗：胴部にやや丸みを持ちながら開き、口縁部を外側に折り曲げるもの。内底中央部は円錐状にくぼみ、いわゆる「蓮子碗」に近い形態となる。高台は方形だが暈付両端に面取りが施される。無文（70）。

皿Ⅰ：全体的な器形はB類皿Ⅰに似る外反口縁の浅皿。器形の差異から3種類に細分される。

I-a：器高さの低い外反口縁の皿で、薄造りのためか底面にへたりがみられるものもある。口径が15cmを超えるもの（71）と、10～12cmの範囲に収まるもの（73）があり、前者は外底に呉須で銘が施される。

I-b：器形はaに似るが器面及び口唇部に篋削りを加え、上面観が菊花形に仕上げるもの。aと同じく大形のもの（72）と小形のもの（74）がある。

I-c：底部から直接ラップ状に開く外反皿で、サイズとしてはaやbの小形のものに近い。暈付周辺に砂が付着するものもある。無文（75）。

Ⅱ：底部が基筒底を呈するもの。口縁端部をわずかに外反させるもの（77）と、直口口縁におさめるもの（78）がある。いずれも無文。

Ⅲ：直口口縁を呈する小形の菊花皿だが、I-bに比して成形は雑である。底部に高台を持つもの（79）と平底のもの（80）がある。基本的には総釉後に暈付または外底を釉剥ぎするが、79のように内底を蛇の目状に釉剥ぎする例もある。

杯：底部からラップ状に立ち上がる蕎麦猪口形の杯で、皿Ⅰ-cに対応するもの。釉薬は内底から高台外面まで施釉し、外底は露胎。無文（76）。

C類は森田分類のE群に相当するが、同時期の染付製品の素地とも考えられるため、小野正敏の染付編年（小野1982）を援用する手法も有効と思われる。年代は今帰仁城跡主郭1～4層（今帰仁村教育委員会1991）、尻並遺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター2003）、湧田古窯跡行政棟Ⅰ区（沖縄県教育委員会1993）などの出土状況から16世紀頃と推定される。森田分類（森田1982）及び小野分類（小野1982）でもほぼ同様の年代観が提示されている。

4. 結語

今回、沖縄で出土する14～16世紀の白磁について、まず福建・広東系と景德鎮窯系に分けて、分類を行ってきた。基本的には、従来の森田分類を大きく外れることはない。しかしながら、特に福建・広東系においては、生産地の動向を追求した田中の研究（田中2002・2003）を援用することによって、より詳細な生産地を意識した分類を提示することができたのではないかと考える。また、景德鎮窯系でも、沖縄ではそれ程多く出土していなかった、いわゆる枢府系の要素を持つ一群が、近年の資料の増加により、「枢府磁」により近いA類、その系譜を引くがやや後出するB類と、明確にできたのが成果と言えよう。

結論としては、従来指摘されたように、福建・広東系が終始主流を占め、景德鎮窯系が14世紀後半

から搬入され始めるということであろう。今後の発掘事例の増加、生産地での研究の深化により、修正点も生じると思うが、現状での分類案として提示したい。諸氏の検証・批判・教示を戴きたく思う。

本稿は、新垣が分類の素案を作成し、原稿を主に執筆した。瀬戸は、景德鎮窯系A・B類の整理を行うなどの補助的な役割を果たした。ただ、分類の大枠は相互が同意するまで議論を尽くした。

付. 14～16世紀の青磁の様相整理メモ（第4・5図）

本来ならば、本稿において、青磁の分類試案についても提示したいと考えていた。しかしながら、青磁に関しては白磁ほどの成果を挙げることが出来なかった。その原因は、当然、当方の力不足のためであるが、確かに沖縄では本土では見られないタイプの青磁が出土しているものの、年代・産地を考慮した結果、先行研究である大宰府分類（横田・森田1978）、新大宰府分類（大宰府市教育委員会2000）、上田分類（上田1982）、金武分類（金武1989・1990・1997）などに少しも新たな知見を加えることが出来なかったからである。ただ、沖縄における14～16世紀の青磁の様相について、近年の資料を用いて作業を進めたため、一つの整理メモの役割程度にはなると思い、本稿の付録として掲載することにした。

今回の14～16世紀の青磁を再整理・確認にあたっては、先述した既往の分類を参考にして各遺跡の出土状況を検討すると、おそらく次の大きく4つの画期に分けられると推測している。そこで、まず便宜的に4つの画期ごとの様相を見ていく中で検討することにした。

I期（13世紀末～14世紀前半）

II期（14世紀中葉～14世紀後半）

III期（14世紀末～15世紀中葉）

IV期（15世紀後半～16世紀）

I期（81～87）

大宰府Ⅲ類とされる、高台が小さく細いタイプで畳付のみ釉剥ぎするものを指標とする。碗は、全体的に内湾する器形で、文様はやや細めの鎬連弁文（81・82・84）が多く、無文、また口縁を輪花状にさせるもの（83）がある。皿（杯）は、口縁が外へ直角に折れ曲がる器形で、文様は外面が鎬連弁文か無文、内底には貼り付け双魚文のものもある（85～87）。釉調はいわゆる砧系とされる青緑色のものが典型的である。

今帰仁城跡主郭7層では、これらと共に新大宰府Ⅱ類や白磁福建・広東系A類、B-I・Ⅱ類が出土している。その他、首里城跡二階殿地区落ち込みでは15世紀中葉までの陶磁器と共に出土しているが、112点の大宰府Ⅲ類及びⅢ'類が出土している。現在のところ、沖縄では出土遺跡も首里城跡・今帰仁城跡に限られ、量的には多くないと思われる。

既往の分類から13世紀末～14世紀前半と考えたい。

II期（88～109）

既往の分類では、大宰府Ⅳ類や上田C-I・D-I類に相当もしくは近いものを指標とする。この時期のものは、大宰府分類でも説明されているように、完成された分類ではなく、量的に少ないこともあって、非常に捉えにくいものである。横田賢次郎・山本信夫・森本朝子が1323年銘を有する新安沈船資料との比較で、この14世紀中葉のものを抽出しようとした（横田・山本・森本1989）。本稿では、この横田・森本・山本の論考にならって、次の特徴でこの時期のものを抜き出した。

高台は前代に比べるとやや細い角形か（89・93・97・100・109）、畳付が広くなり内側のみが斜行する

表1 沖縄出土の白磁分類試案と既往の分類との対応一覧

産地	分類	器種	細分類		沖縄分類 (金武1989・90ほか)	大宰府分類		博多分類 (福岡市教委1984)	白磁分類		
			大	小		横田・森田1978	太宰府市教委2000		森田1982	田中2003	
福建・広東系	A類	碗	I	—		白磁碗Ⅸ-1	白磁碗Ⅸ-1	口ハゲの白磁碗1	A群碗		
			II	—	口禿碗	白磁碗Ⅸ-2	白磁碗Ⅸ-2 a	口ハゲの白磁碗2		H類	
		皿	I	a				白磁皿Ⅷ-1'	平皿1		K類?
				b	口禿皿	白磁皿Ⅸ-1	白磁皿Ⅸ-1	口ハゲの白磁平皿2	A群皿	K類-5	
				c		白磁皿Ⅸ-2	白磁皿Ⅸ-2?	口ハゲの白磁平皿3			
			d			白磁皿Ⅸ-3?		A群皿?			
		II	—	口禿碗		白磁皿Ⅹ-b				H類?	
	B類	碗	I	—	ビロースクタイプ碗Ⅰ				C群碗		
			II	—	ビロースクタイプ碗Ⅱ					J類-1	
			III	—	外反碗					J類-2	
		皿	I	—	ビロースクタイプ皿						
			II	—							
		鉢	I	—							
	II		—								
	C類	碗	I	—	薄手直口碗					G類かH類?	
			II	a						G類	
	D類	碗	I	—							
			II	—							
			III	—							
			IV	—							
		皿	I	a	内彎皿					D群坏	
				b							
				c	挟入高台皿					D群坏	
			II	—							
			III	a							
				b	燈明皿						
		IV	a								
			b	燈明皿							
		杯	I	—						C~E群坏	
			II	—							
	III		—								
	E類	碗	I	—	薄手直口碗					F類	
II			—	厚手直口碗							
皿		I	—								
		II	—								
F類	碗	—	幅広高台碗								
	皿	—									
景德鎮窯系	A類	碗	I	—	枢府系				B'群碗		
			II	—							
	B類	碗	I	—							
			II	—							
		皿	I	—							
			II	—							
	C類	碗	—						E群碗		
			I	a	薄手外反皿					E群皿	
		b									
		c									
		皿	II	—							
III			—								
杯	—						E群坏				

もの(94・98・105~108)、外底は無釉であることを第一の特徴とした。碗の器形では、総じて腰の張りが低い位置にあるものが多く、口縁が緩やかに外反するもの(88・89・97~100)があることなどが特徴であろう。皿は前代よりも口折がゆるく、浅めの器形が多いと思われる(102・103)。また、文様の特征として、沖縄で弦文帯と称される口縁外面に数条の圈線が巡るもの(88~91・98)や、蓮弁が複線で描かれるもの(95・102・103・107)などが特徴である。また、沖縄では束口碗(101)は、大宰府Ⅲ類よりも新しい傾向をもつもの、すなわちこの時期のものが少量見られる。他の特徴としては、釉調がⅠ期の青緑色というよりも水色に近いもの、Ⅲ期の深緑色よりも淡い透明質の黄緑色が多いということも参考にはなるだろう。

これらも前代と同様にやはり出土数が少ないが、今回改めて各遺跡を見ると、Ⅰ期の段階よりもやや多い印象を受けた。ただ、まとめて出土しているのはやはり少ない。今帰仁城跡主郭Ⅵ・Ⅴ層では、共に白磁福建・広東系A類・B-Ⅲ類・C類が出土している。他に、拝山遺跡でも大宰府Ⅱ類、白磁福建・広東系A類・B類と共に出土している。首里城跡二階殿地区落ち込みでは、やはり15世紀中葉までの遺物とともに、これらの特徴のものが、整理に携わった筆者の感覚では少なくとも全体の1割程度は出土しているのではないかと思っている。

時期的には、新安沈船資料以降の年代ということで、14世紀中葉~後半と考えたい。

Ⅲ期(110~142)

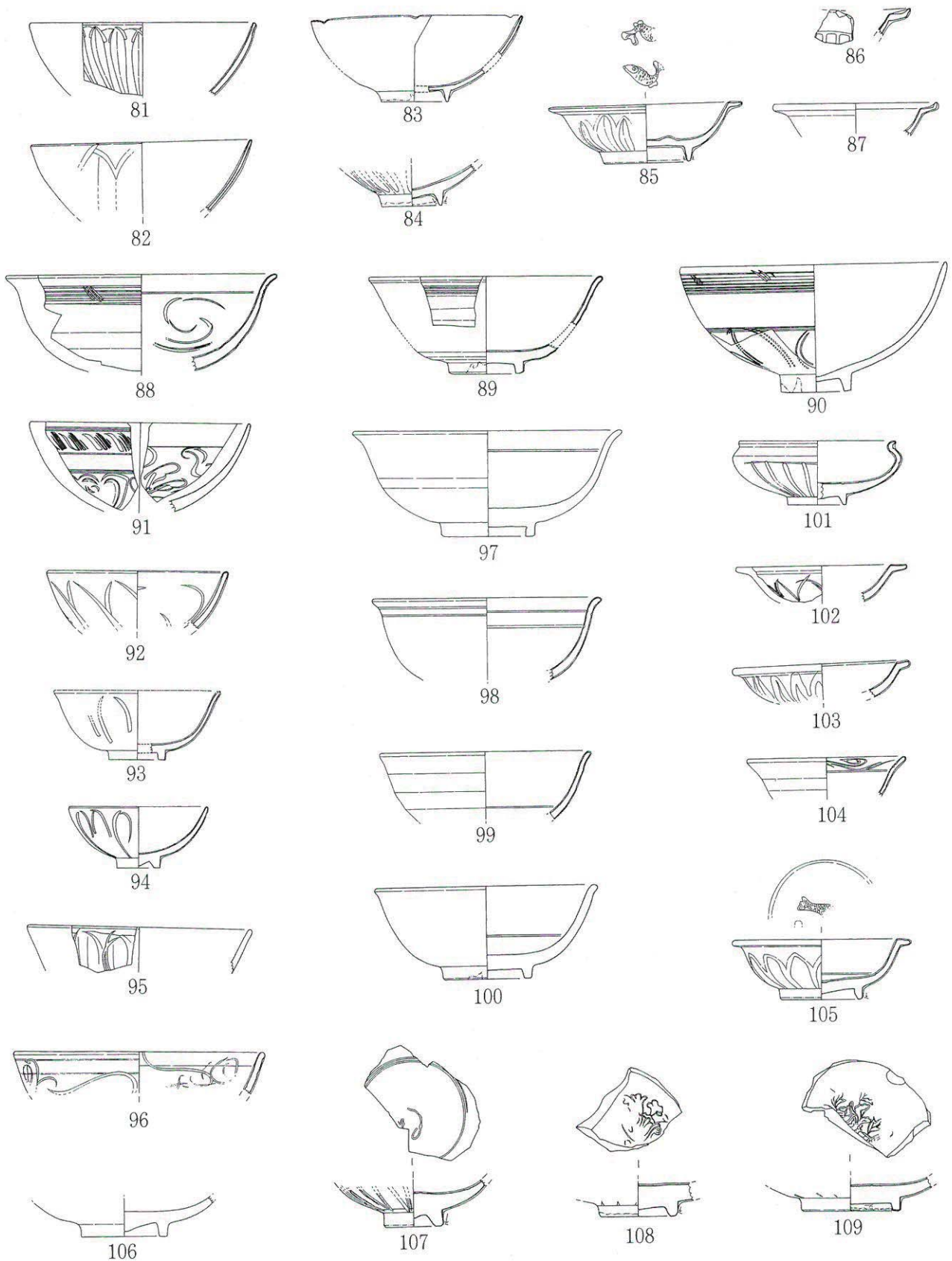
この時期が沖縄で最も陶磁器が多く出土する時期であり、年代観の確定が切に望まれている時期でもある。しかしながら、肝心のこの時期の細分を表すタイプ及び具体的な出土状況を決めかねているのが現状である。今回もそれを十分に整理することは力不足であった。ただ、近年の大きな成果である、文献から1454・1549年の火災による一括資料とされる首里城跡京の内SK01資料(沖縄県教育委員会1998a)には、金武が設定した佐敷タイプ碗(金武1990)が出土していないことを注目して、仮に2つの段階を設定した。

Ⅲ期-①段階(110~129)

佐敷タイプ碗とされる、外底無釉で底部が厚く、高台外側が竹節、内底釉剥ぎ、玉縁口縁となるものを指標とした(110・111)。これに対応する玉縁口縁皿(113・114)もあることは、金武が指摘している(金武1990)。このタイプと共伴するものとして、外反口縁碗(118・119)や金城亀信が指摘した(金城2000)ラマ式蓮弁文碗(123)、上田B-Ⅱ類つまり無鎬蓮弁文碗の中でも太い明瞭な輪郭の蓮弁を有するもの(115・120)や外面上半に圈線を有するもの(116・117・122)、口縁端部に刻みを有するもの(121)などが挙げられる。皿では、浅めの口折皿(124・125)、口縁が直線的な直口皿(126)、次段階よりも胴部の外反が弱い腰折皿(127~129)などが相当しようか。

このタイプが多く出土するのは、佐敷グスクや今帰仁城跡志慶真郭、越來グスク、首里城跡北殿トレンチ造成層などがある。白磁の共伴関係を見ると、福建・広東系B-Ⅲ類や、同皿D-Ia類でも口径10cm以上の大きいサイズのものが出土している。また、首里城跡二階殿地区SB4下層では、この玉縁口縁皿が多く出土しており、後述する雷文帯碗、上田C-Ⅱ類が出土していないのが特徴である。このことから、Ⅲ期のなかでも古相と考える。

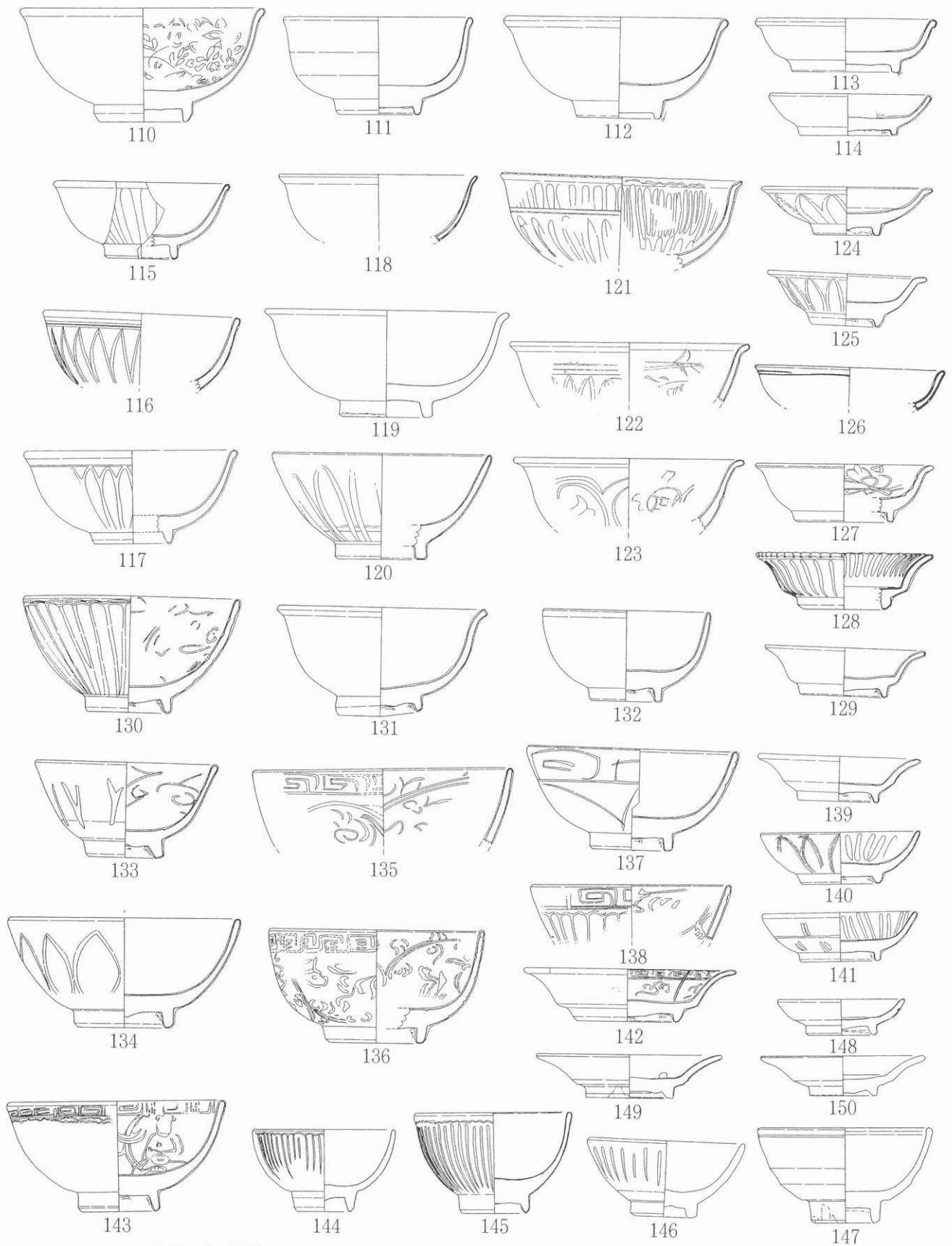
また、瀬戸が管見で検討した結果、佐敷タイプ碗が多く出土する遺跡では、雷文帯碗が多く出土するところはないと認識している。この認識は、水澤幸一が日本海側の北陸・東北地域の資料で検討したように、雷文帯碗は14世紀後半・末にはなく、15世紀でも中葉ではないかとするに近しい(水澤2004)。しかしながら、この点はさらに厳密な検討を行った結果で判断したい。この段階に雷文帯碗を図示していないが、全くなかったとは考えてはいない。雷文帯碗でも、135のようなやや深めの器



I期 (81~87)、II期 (88~109)

81・87・88~91・93~95・100~102・104 (今帰仁城跡主郭)、83・97 (今帰仁城跡志慶真郭)、82・84~86・92・96・103・105・107~109 (首里城跡二階殿地区)、98・106 (拝山遺跡)、99 (首里城跡北殿地区)

第4図 沖縄出土の青磁1 縮尺1:4



Ⅲ期一①段階 (110~129)、Ⅲ期一②段階 (130~143)、Ⅳ期 (144~150)

110 (今帰仁城跡志慶真郭)、111・119・144・145 (今帰仁城跡主郭)、112~114・120~124・127・129・135・143 (首里城跡二階殿地区)、115~118・126・128 (首里城跡北殿地区)、125・130~134・136~142 (首里城跡京の内)、146~150 (湧田古窯跡行政棟地区)

第5図 沖縄出土の青磁2 縮尺1:4

形で、丁寧な文様のものは古手ではないかと推測される。ただ、現状ではそれを裏付ける資料はないので、首里城跡京の内ではこのタイプのは少ないという指摘に留める。

Ⅲ期—②段階 (130~143)

首里城跡京の内SK01で多く出土する、上田C—Ⅱ類つまり線刻の雷文帯碗(135~138)、型押し
の雷文帯碗(143)、蓮弁が不明瞭な蓮弁文碗(133)、弁先を共有しない細蓮弁文碗(130)を指標
とする。皿では、前段階よりも外反が強い腰折れ皿(149)、八角皿(142)、稜花皿、胴部が内湾す
る直口皿(140・141)がある。この段階の外底は、碗・皿の多くが蛇の目釉剥ぎされられると思われ
る。

これらの資料自体は、多くの遺跡で通常出土しているが、量的には、京の内を含めた首里城跡各
地区の出土が最も多いと思われる。白磁の共伴関係は、福建・広東系D類が主体である。

このⅢ期の全体の時期幅は、既往の分類と首里城跡京の内から14世紀末~15世紀中葉と考えら
れる。ただ、仮に設定した2つの段階が、大きく新古の様相をもつのは確かと思うが、具体的
な年代に置き換えられるほどの検討は行えていない。

Ⅳ期 (144~150)

この時期の指標は、上田B—Ⅳ類、すなわち線刻細蓮弁文碗(144~146)と、それに共伴する直
線的に外反する腰折皿(149・150)となる。碗の高台が前代よりも、高くなっているのが特徴
であろうか。湧田古窯跡が良好な資料である。時期は、既往の分類から15世紀後半~16世紀
代と思われる。

今後に向けて

以上、既往の分類を適用して、沖縄での出土状況から、14~16世紀の青磁の様相を探って
みた。しかしながら、遺跡における出土状況などの客観的なデータ提示も非常に不十分な
もので、思いつきのメモにしか過ぎない。

ただ、Ⅱ期は新安沈船資料との比較による抽出、一方Ⅲ期は首里城跡京の内SK01資料
との比較によりさらに新旧に分けることは、一つの方法であると思われる。この方法は、
森本朝子がベトナム産陶磁器の沖縄への搬入時期を検討するために行ったものを参考
にしている(森本2002)。今後、底部の処理方法や釉調、文様の細部などを、厳密に
各資料について検討していかなければならない。そのため、本章はあくまでも当
方の整理メモ程度に受け止めていただきたい。

本付章は瀬戸が、首里城跡二階殿地区落ち込み資料を整理する中で、考えついたメモ
である。新垣もこの視点には賛同しているが、雷文帯碗の年代観などには若干の相違
点がある。本付章については、吉岡康暢、水澤幸一、片桐千亜紀、宮城弘樹、四
氏の御教示が基礎になっている。記して感謝したい。

(あらかき つとむ：沖縄県教育庁文化課専門員)

(せと てつや：調査課 専門員)

引用・参考文献

- 石垣市教育委員会 1983『ピロースク遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1984『普正寺遺跡』
上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
沖縄県教育委員会 1983『稲福遺跡発掘調査報告書(上御願地区)』
1987『拝山遺跡』
1992『安仁屋トゥンヤマ遺跡』
1993『湧田古窯跡(I)』

- 1995『首里城跡－南殿・北殿の遺構調査報告－』
- 1997『慶来慶田城遺跡』
- 1998a『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』
- 1998b『首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告－』
- 1999『湧田古窯跡（Ⅳ）』
- 沖縄市教育委員会 1988『越来城』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a『天界寺跡（Ⅰ）』
- 2001b『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』
- 2002a『天界寺跡（Ⅱ）』
- 2002b『円覚寺跡』
- 2003『尻並遺跡』
- 2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』
- 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 嘉手納町教育委員会 1994『屋良グスク』
- 金沢陽 2001「インドネシア・トゥバン海域引き揚げの元代“樞府手”白磁と青花片」『出光美術館研究紀要第7号』出光美術館
- 川上貞雄 1984「新潟県馬場屋敷遺跡出土の陶磁」『貿易陶磁研究No.4』日本貿易陶磁研究会
- 九州歴史資料館 1978『太宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』
- 1989『太宰府史跡 昭和63年度発掘調査概報』
- 金武正紀 1988「ビロースタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究No.8』日本貿易陶磁研究会
- 1989「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要第15号』沖縄県立博物館
- 1990「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナルNo.320』ニュー・サイエンス社
- 1997「第2節 11世紀末頃～16世紀の遺物」『銘苅原遺跡』那覇市教育委員会
- 金城亀信 2000「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究No.20』日本貿易陶磁研究会
- 具志川市教育委員会 1988『喜屋武グスク』
- 国立中央博物館 1977『新安海底文物』
- 国立歴史民俗博物館 1998『幻の中世都市十三湊－海から見た北の中世－』
- 島根県教育委員会 1983『富田川河床遺跡発掘調査報告書－Ⅲ－』
- 曾凡（訳・亀井明德） 1988「南平葫芦山窯（福建省）についての初歩的理解」『貿易陶磁研究No.8』日本貿易陶磁研究会
- 太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
- 高島裕之・田中克子 2004「景德鎮・明代瑤里窯跡出土の陶磁器」『亜州古陶瓷研究Ⅰ』亜州古陶瓷学会
- 田中克子 2002「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）－福建省閩江流域、及び以北における窯跡出土陶磁」『博多研究会誌第10号』博多研究会
- 2003「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）－宋・元代白磁をめぐる問題－」『博多研究会誌第11号』博多研究会
- 今帰仁村教育委員会 1983『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』
- 1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』
- 那覇市教育委員会 1998『銘苅原遺跡』

2000『天界寺跡』

平良市教育委員会 1999『住屋遺跡（Ⅰ）』

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1978『尾道－市街地発掘調査概要－』

福岡市教育委員会 1984「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』

1990『博多15』

森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会

水澤幸一 2004「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究No.24』日本貿易陶磁研究会

森本朝子 1991「マレーシア・ブルネイ・タイ出土の貿易陶磁器 11世紀末～14世紀末－日本出土の貿易陶磁との差異」『貿易陶磁研究No.11』日本貿易陶磁研究会

1993「長崎県鷹島海底出土の「元寇」関連の磁器についての一考察」『博多研究会誌第2号』博多研究会

1996「中部ベトナム・ラムドン省ダイラン遺跡の陶磁器」『貿易陶磁研究No.16』日本貿易陶磁研究会

2002「ベトナム陶磁－日本における研究の成果と課題」『東洋陶磁史－その研究の現在－』東洋陶磁学会

森本朝子・田中克子 2004「沖縄出土の貿易陶磁の問題点－中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁－」『グスク文化を考える』新人物往来社

横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

横田賢次郎・森本朝子・山本信夫 1989「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁－森田勉氏の研究成果に寄せて－」『貿易陶磁研究No.9』日本貿易陶磁研究会

多良間島の集落遺跡について

Settlement Sites in Tarama Island

山本 正昭

YAMAMOTO Masaaki

ABSTRACT: Several Medieval settlement sites exist in Tarama Island, located between Miyako and Ishigaki Islands. In spite of the archaeological investigations in the past, the entire contents of the sites have not been understood systematically. It is surprising that a considerable number of surface artifacts such as ceramics and pottery can be collected at the sites even today. Moreover, the structure of present villages still reflects the features of the Medieval age. This report attempts to reconstruct Medieval-era Tarama Island from the surface-collected artifacts and the survey results of the sites.

1. はじめに

多良間島は宮古島と石垣島のほぼ中間に位置する面積19.73平方キロメートルの石灰岩から成る島である(図1)。島の最高地点は34.4mと全体的に平坦であり、島の大半が畑あるいは放牧場となっている。現在、島の北側に仲筋と塩川の2つの字から成る多良間集落がある(註1)。島で唯一の集落であり、現在は1,331人が居住している。この集落はかつて四方が雑木と自然地形とに閉鎖された集落であった。このような閉鎖性を有する集落は多良間集落に限らず先島の各地域で確認されているものの、概ね石積み等の恒久的な構築物によって周囲を取り囲んでいる例が多くみられる(山本2004)。雑木と自然地形から成る閉鎖性を有する集落は現在、あまり残されていない。本稿では琉球列島の一地域で見られた集落の在り方を提示する目的のもとで多良間集落の検証を行っていきたい。

2. 集落の構造とその周辺

まずは閉鎖的空間を創り出す個々の要素を取り上げていきたい。

現在の多良間集落を訪れた際、集落外縁部に細長い帯状の緑地帯が走っているのに気が付く(図2 トーン部分)。18世紀中頃に植樹されたと云われている抱護林であり、幅約8m、南側は1km、東側は0.8km、西側は戦後の圃場整備によって失われて50mしか残存していないものの、集落の3方を囲むように配置されている(PL.1,2)。西は八重山遠見台から東は塩川井そして宮古遠見台までかつては総延長2.7kmにわたっては配置されていた。地元では「ポーク」と称して近世から現在までその保存に努めてきている。多良間集落を取り囲む抱護林を設置する以前、この抱護林区域には雑木が配置されていたと云われている(註2)。また、集落の北側には低丘陵が東西に広がる。この集落北西部の丘陵最頂部には石造りの烽火台、八重山遠見台が配置されている。この遠見台の築造年代は不明であるが1644年に初めて烽火を琉球王国の版図内に設置された際に築かれたものとされている。他方でこの周辺で土器、陶磁器が表採されていることから、中世相当期もこの場所は人が介入していたものと考えられる。この集落の北側に広がる低丘陵を越えて北側の前泊浜へ至る古道が現在も残る。「前泊道」と称されており、かつては浜へ至る唯一の道であった。この古道に沿って運城御嶽(註3)、宮古遠見台、泊御嶽が点在している(多良間村教育委員会1993)。この低丘陵を越える最も標高の高い場所は切り通しとなり、その東側の展望が利く場所に総石積み造りの宮古遠見台が設置されている。

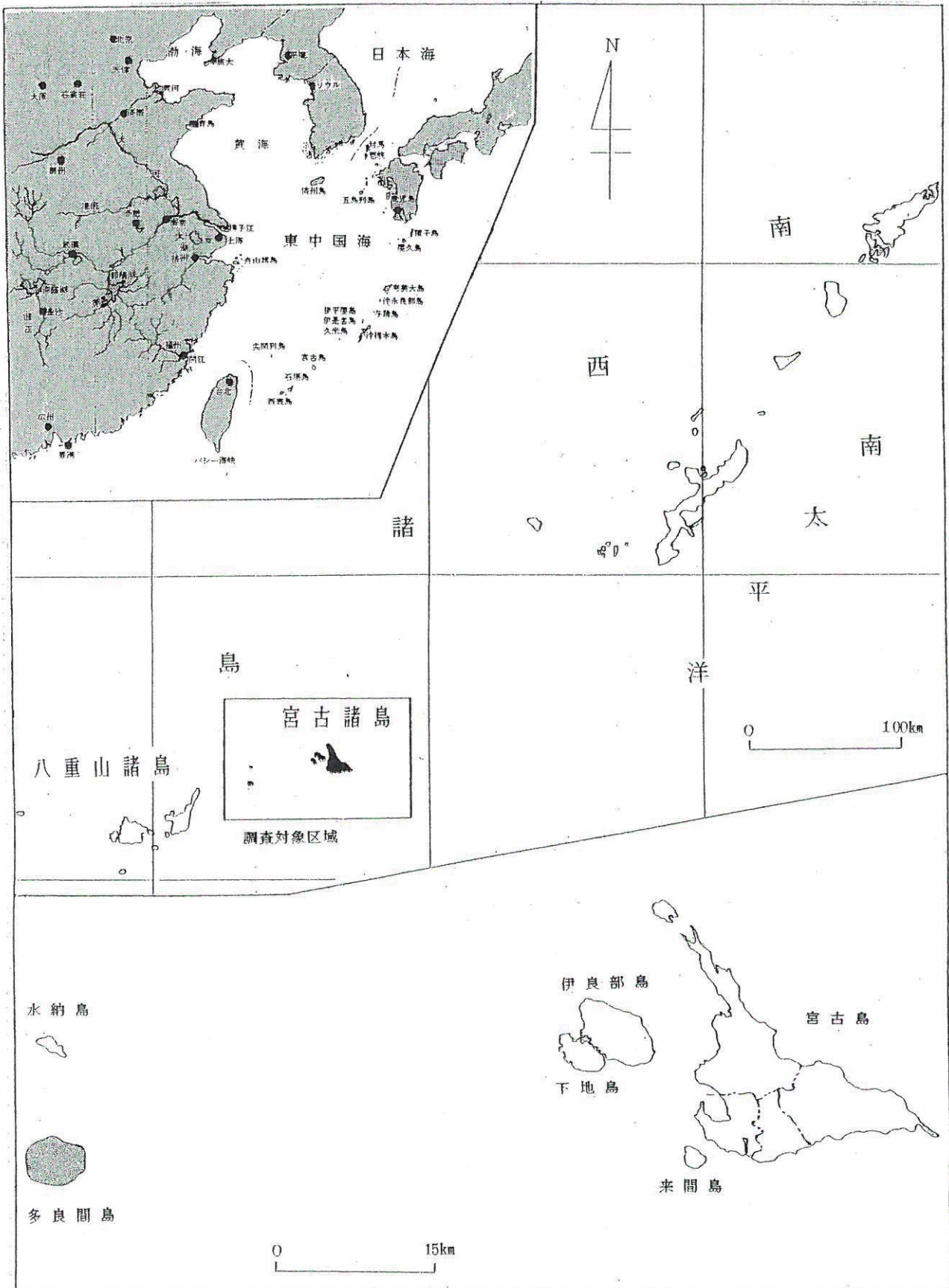


図1 沖縄本島及び多良間島位置図



図2 多良間集落および集落内の遺跡

- | | | | |
|----------|--------------|-----------|-------------|
| ① 運城御嶽遺跡 | ② 宮古遠見台 | ③ 塩川井遺跡 | ④ 嶺間遺跡 |
| ⑤ 天川遺跡 | ⑥ 土原御願遺跡 | ⑦ 多良間神社遺跡 | ⑧ フシャトウガー遺跡 |
| ⑨ 大道遺跡 | ⑩ びとうまたうがん遺跡 | ⑪ 長瀬原遺跡 | ⑫ 八重山遠見台 |



PL.1 多良間集落空撮



PL.2 ポーグ遠景



PL.3 八重山遠見台



PL.4 遺物採取地

近世には前泊へ停泊する船や島周辺を往来する船の監視を担っていた。このように北側には低丘陵、東、西、南側にはかつて雑木、現在は抱護林、海に出るには北側の1本道と閉鎖性を有した集落であることを現況から窺うことができる。更に民俗事例からでは近世段階には屋敷を抱護林の外側に構えることは許されず、集落所有の龕は抱護林より外へ持ち出すことができなかつたということもそのことを暗に示している。

集落内においては塩川井遺跡、嶺間遺跡、天川遺跡、土原御嶽遺跡、多良間神社遺跡、フィシャトゥガー遺跡、大道遺跡、びとうまたうがん遺跡、運城御嶽遺跡、長瀬原遺跡、八重山遠見台遺跡（PL.3）と11遺跡が確認されている（註4）。伝承では多良間神社遺跡付近は中世相当期における多良間集落の首長であった土原豊見親とその一族が居住していた場所とされており（多良間村教育委員会1993）、周辺から青磁、宮古式土器、褐釉陶器が表採されているので後章で報告する。現地踏査においては周辺の畑地からは染付の小片、多良間神社北側（PL.4）の切り通しからは青磁、宮古式土器、獣骨を表採することができた。また当該地点から東側約50mの場所に土原豊見親を葬ったとされる古墓が、西側50mにある土原御嶽には土原豊見親の父母が居住していたとの伝承があり、この周辺からも土器、青磁、褐釉陶器、銭貨が表採されている（多良間村教育委員会1993）。これらのことから現在の多良間集落東側一帯が多良間集落の首長とその一族に深く関わりがある場所であったものと想定される。

3. 表採遺物

前述したように多良間集落の北西部に鎮座する多良間神社裏手（西側）から多くの遺物を表採することができたため、とくに残りの良い資料のみを選別し、以下に報告する。

図3-1 青磁碗口縁部資料

外反を示す資料である。外面に4条の圈線が確認できることから、上田分類のC-Iに該当すると思われる。素地には白色鉍物が混入され、色調は灰白色となっており、また釉色は深緑色を呈している。

図3-2 青磁碗口縁部資料

直口口縁の青磁碗である。口縁直下に線描蓮弁文を施すが、剣頭が省略されており、上田分類B-IVに当てはまると考えられる。素地には白色や黒色の粒子が確認でき、また淡緑色の釉が施釉されている。外面には小孔が見られ、凹凸が著しい。

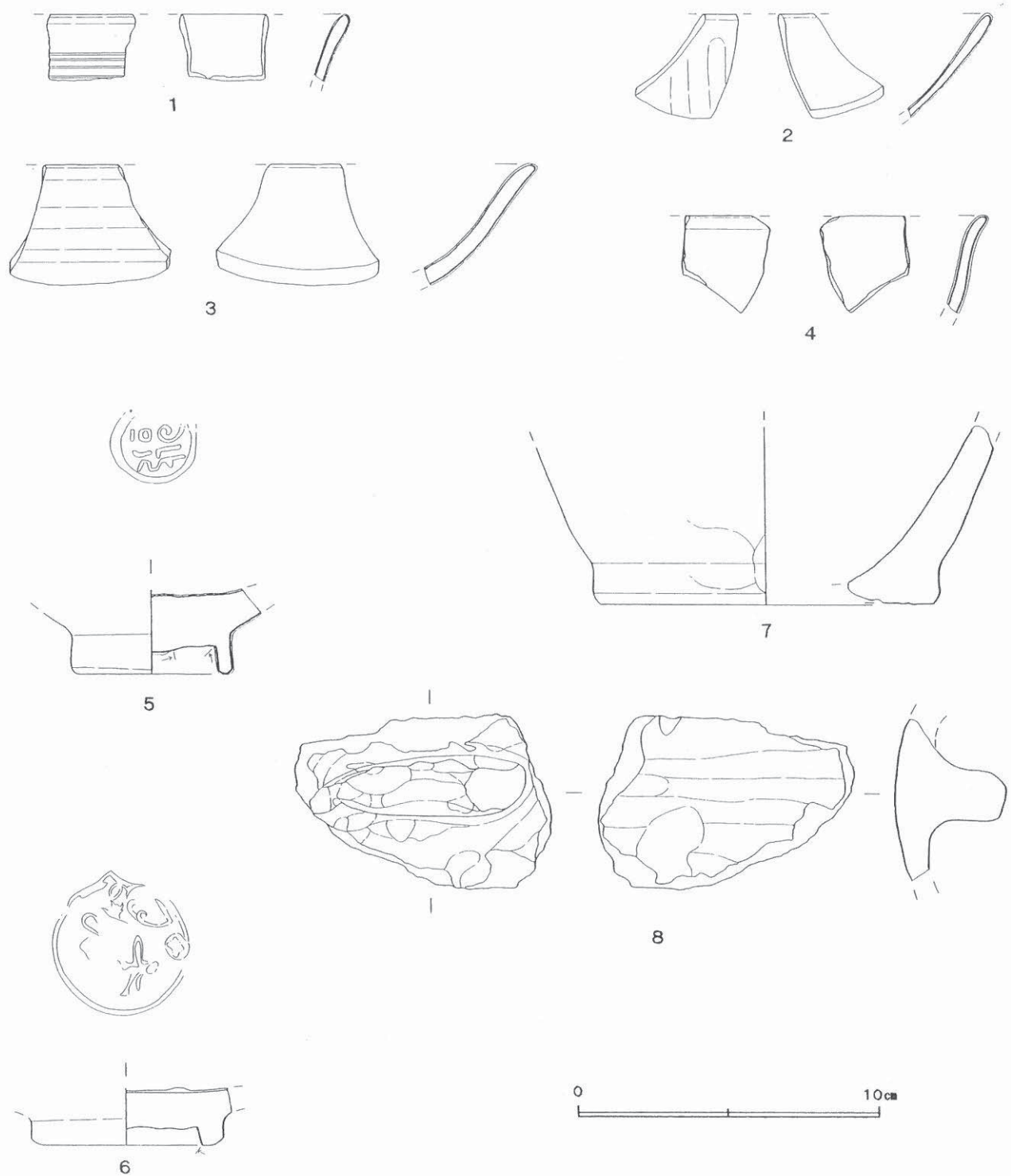


図3 多良間神社遺跡表採資料

図3-3 青磁碗口縁部資料

外反碗である。内面または外面ともに無文であるが、透明感のある釉が薄く施されているため、体部の回転ヘラ削りの痕が認められる。この資料は上田分類において、D - Iになると判断される。本

資料は、素地に灰白色の微粒子が見られ、施釉色は青緑色となっている。

図3-4 青磁碗口縁部資料

無文の青磁外反碗で、上田分類のD-IIに該当すると思われる。素地に黒色や黄白色の微粒子が混入されている。また、明緑色の釉が施されており、わずかに粗い貫入が確認される。

図3-5 青磁碗底部資料

高台脇から腰部へと開くように立ち上がる底部資料である。高台の外側は斜位に面取りがなされ、また見込み部には陽圏線と吉祥文による文字が配される。畳付の幅は一定ではなく、施釉も厚みに斑が見られる。明緑色の釉を全面的に施した後、外底面のみ蛇の目状に釉剥ぎをし、施釉部位には貫入が密に見られる。素地には黒色鉱物や気泡が認められる。推算底径は約5.4cmを測る。

図3-6 青磁碗底部資料

高台際で破損する底部資料である。高台の外側を面取りし、畳付けは平坦になっている。また、内底面には陽圏線と花文が施される。釉は深緑色を呈し、ほぼ畳付けまで施されているが、一部高台内側まで及んでおり、外底面は露胎するものの釉垂れの部分も見受けられる。素地は黒色粗粒子が目立つ。内底面には砂粒が溶着する。外底面には粘土塊が円形状に溶着している。推算底径は6.4cmを測る。

図3-7 土器底部資料

くびれ平底状の底部破片で、逆「ハ」字状に立ち上がる資料である。器面調整は内外面ともナデ調整がされている。胎土に白色粒を確かめることができ、明赤褐色を示している。推算底径は約11.6cmを測る。

図3-8 土器把手資料

把手を横位に貼付する資料である。内面はナデ調整がなされるが、把手を貼り付ける際の指頭押圧痕が残り、外面もナデによる器面調整が行われている。胎土は白色粗粒が目立ち、暗赤褐色を呈する。また、把手の一部にスラシキ付着物が認められる。

陶磁器は概ね14世紀後半から16世紀前半までと幅を有し、器種は碗と小形の製品に限られる。施釉や成形を見る限り明らかに粗製品であるものも見られる。これら以外にも中国産染付や褐釉陶器の小片を表採することができ、また多良間神社東側の黍畑一帯からも多くの染付小片を表採することができた。筆者が集落内を踏査した限りでは多良間神社周辺ほど、陶磁器が表採される場所を見つけることはできなかった。これらのことから多良間神社周辺、すなわち土原御願遺跡やウブメーカ、天川遺跡にかけては伝承に見られる有力首長およびその一族が関係していた場所であることを踏まえると、陶磁器と有力首長との関係が指摘される。

過去、村内遺跡詳細分布調査において採集、若しくは出土した陶磁器については碗、皿に器種はほぼ限定され、粗製品である資料も見ることができる。この調査成果を見れば、今回の報告において特筆すべき資料は無いと言える。しかし、多良間集落におけるこれらの陶磁器が表採される場所を面的に捉えていった場合、多良間神社一帯がとりわけ重要な地点であることが再確認することができる。それは土原御願や多良間神社といった拝所、八重山遠見台がある島内最高所、そして湧水地である天川といった集落内における主要地点が密集している場所と看取することができる。これらの場所を押さえることが有力首長にとって重要であったことを窺い知ることができ、陶磁器が密に散布している状況も決して偶然ではないことも推測される。

4. まとめ

今回の報告はあくまで表面踏査及び表採資料から見たものであるため、考察にはある程度限界がある。よって集落構造としては陶磁器と有力首長とが係わりを有し、かつ有力首長が集落内における主要地点を抑さえていたという指摘のみに止めておく。一方で宮古島と石垣島の間位置する多良間島が中世相当期において例外無く、海域アジアの陶磁器流通の中に組み込まれていたことは紛れも無い事実として捉えておく必要がある。それは15世紀から16世紀前半における朝貢貿易とは異なる民間交易に係るもので、換言すれば明国の海禁政策下で展開された商品流通に係わる物品である。前章で報告したように陶磁器が粗製品で碗といった小形の器種が多く見られることから、主に沖縄本島の首里グスクや今帰仁グスクから出土する陶磁器とは様相を全く異にしているのは言うまでも無い。このことから民間交易の実態を如実に示している資料と言え、今後において当該地域の更なる新たな報告が俟たれるところである。

最後に、多良間島の中世相当期における集落様相についてであるが、未だ集落全容を把握できる発掘調査事例が無いため、不鮮明な部分が多い。しかし、集落において閉鎖性を有するという点が指摘されることは八重山諸島、宮古諸島において少なからず見られ、当該地域も例外ではないということは指摘できる。現在、多良間集落を圍繞する抱護林をそのまま中世相当期まで遡るとするには無理があるが、圍繞する意識そのものは中世相当期に芽生え始めるとする考え方も多良間島の古層を考えていく上での一つの選択肢として掲げても無理がないように思える。更に多良間島の集落における閉鎖性は倭寇的性格を有する集団に備えるためであるというように考察を展開させていくと興味深いが確たる論拠に乏しいため、詳細については今後の課題としておく。近い将来には海域アジアの情勢を踏まえた中での中世相当期における多良間島の有り様を解明していく作業が粛々と進められていくと希望的観測を述べて本報告を締めたい。

謝辞

多良間村の歴史、民俗に関しては渡久山春好氏（多良間村立ふるさと学習館）からご教示を得、集落内については羽地直樹氏（多良間村教育委員会）に案内して頂いた。また長濱健起、伊藤圭、金城克子各氏には図版作成ならびに文章校正を手伝って頂いた。末文ながら記して謝意を表す。

註

- (註1) 近世期の多良間集落は遠隔地であるため特別行政区として扱われ、間切には属していなかった。塩川・仲筋両集落は近世の史料からすでに窺うことができるが、多良間首里大屋子、塩川与人、水納目差、多良間目差の4人の役人は塩川・仲筋何れの集落にも属していないことから一括して多良間島として扱われていた。村番所は塩川、仲筋に置かれていたが両村境界に並列して配置されていたとの指摘がなされている（平凡社2002）。
- (註2) 渡久山春好氏のご教示による。
- (註3) 沖縄県教育委員会によるグスク分布調査で運城御嶽遺跡からは白磁、カムイヤキ、土器が表採されている（沖縄県教育委員会1990）。
- (註4) このうち沖縄県教育委員会によるグスク分布調査で嶺間遺跡、天川遺跡から土器、土原御嶽遺跡からは褐釉陶器、塩原井遺跡からは白磁が表採されている（沖縄県教育委員会1990）。

引用・参考文献

- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 沖縄県教育委員会 1990「ぐすく グスク分布調査報告書（Ⅱ）－宮古諸島－」『沖縄県文化財調査報告書』第94集
- 多良間村教育委員会 1993「多良間村の遺跡」『多良間村文化財調査報告』第10集
- 平凡社 2002『日本歴史地名大系第48巻 沖縄県の地名』
- 山本正昭 2004「先島地域の防御性を有する遺跡について」『中世城郭研究』第18号 中世城郭研究会

日本復帰後33年間の県内埋蔵文化財発掘調査

1972（昭和47）～2005（平成16）年

The Archaeological Excavations on Okinawa islands During 1972~2005

安里 嗣淳

ASATO shijun

日本復帰の年である1972（昭和47）年度は、とくに発掘調査は実施されていない。その頃までは復帰前の雰囲気が残っていたのである。復帰前までは、大規模開発工事は盛んではなかったため、当時の行政当局である文化財保護委員会も、学術的動機で勝連城跡や宇佐浜遺跡の発掘調査を数年次も実施したりして、今思えばノンビリとした時代であった。とはいっても、本当はゆとりがあったのではなく、開発工事によって知花遺跡、仲宗根貝塚、沢岬グスクなどが、十分な記録保存措置をすることもなく破壊されたりしている。行政も、社会も文化財の保護については、その認識とシステムが熟していなかったといえる。しかし、一方では浦添バイパス工事で消えそうになった浦添貝塚を、文化財保護委員会が保存キャンペーンの資料まで作って保存を訴え、琉球政府を動かして保存させたという輝かしい実績もある。浦添バイパスの伊祖トンネルは、そのときに貝塚を保存するためにできたものである。

さて、ノンビリムードも長くは続かなかった。1973（昭和48）年度夏には久米島空港の拡張工事に伴って北原貝塚が、年度末の1974（昭和49）年3月には国道改修工事のために恩納村仲泊遺跡の発掘調査が実施されている。当時の県教育庁文化課埋蔵文化財担当職員は知念勇さんただ1人だったことから、北原貝塚の場合は、夏休みに大学や高校にいる考古学研究者の一時的応援を得てしのいだのだが、ついに仲泊遺跡の場合は3人が増員されて体制の強化が図られた。その3人とは当真嗣一さん（前原高校教諭）、金武正紀さん（沖縄高校教諭）と私（中部商業高校教諭）である。ところが、仲泊遺跡は大きな保存運動によって国指定史跡となったために記録保存目的の調査は1974（昭和49）年4月で一時打ち切られた。そこで、増員された埋蔵文化財担当職員は仲泊遺跡の報告書作成のかたわら、この年度に津堅第二貝塚の個人住宅建設に伴う発掘や、宮古の仲宗根豊見親墓の整備にともなう暮室調査などの対応も可能になった。また、青山学院大学の宮古砂川元島遺跡発掘に参加したり、文化財保護審議会の専門部会委員と一緒に、本部町具志堅で天水田遺構の探索調査を実施したりしていた。まだ、復帰前のノンビリした雰囲気もひきずっていたといえる。

1975（昭和50）年度までは開発をめぐる埋蔵文化財保存問題はまだ深刻な状態には至っていない。圃場整備にともなう石垣島平得仲本遺跡の緊急発掘が1件だけで、他は曾畑式土器が発見された読谷村の渡具知東原遺跡、中学生が発見した沖縄市の室川貝塚、無人島の伊是名村具志川島遺跡群などの発掘で、開発工事を原因としないものばかりであった。

ところが、1976（昭和51）年度から緊急発掘がしだいに増加してきた。採砂、道路工事などが原因である。また前年度から仲泊貝塚を最初の例に開始された史跡整備のための発掘調査事業も、この年に識名園整備事業にともなう遺構調査が加わった。さらに、首里城跡（歓会門遺構）の発掘も開始されたが、当時の文化課は埋蔵文化財担当職員を投入せず、工事請負業者に単なる土木工事的発掘をさせるという不幸な出発をしてしまった。その結果、後の首里城復元整備に重要な問題を残すこととなった。

1977（昭和52）年度からは緊急調査が急激に増加していく。そしてこのような行政発掘調査が、

沖縄の考古学的調査の主流を占める状況は現在もなお続いている。もちろん、それは日本全体の傾向でもある。その原因は農業基盤整備、空港、道路、公園、米軍施設、官庁建設、上下水道、区画整理・宅地造成などの工事、そして史跡整備事業などに伴う発掘で、ほとんどが公共事業に関連している。これは復帰後の沖縄経済が公共事業依存体質を深めていったと分析されていることを、埋蔵文化財緊急調査の原因別でも裏付けているといえる。

行政調査を主体とする発掘はほとんどが記録保存措置であり、現地から消えてしまうという否定的な面もあったが、大規模発掘によって集落遺構などが確認できたり、さまざまな新発見があったりして、沖縄考古学を大きく発展させてきたことも事実である。それは記録保存発掘だけでなく、重要遺跡範囲確認調査、遺跡分布調査やグスクなどの史跡整備のための発掘でも同じようなことがいえる。

編年研究の進展に関連した発掘では、次のような成果があげられる。

- ① 読谷村渡具知東原遺跡における曾畑式土器の発見は沖縄の歴史を従来の最古約3,500年前から約5,000年前へと遡らせ、その後の下層からの爪形文土器はさらに今から約6,500年前と古くなった。嘉手納町の野国貝塚B地点では、爪形文土器が大量に出土するとともに、最下層から無文土器の層を確認している。
- ② 沖縄市室川貝塚ではいくつかの土器文化の層位的な発掘に成功し、土器の型式についても新たに3つのタイプが把握された。また、従来の伊波・萩堂式土器のなかで伊波式が先行タイプであることも層位的に証明された。
- ③ 八重山石垣島の大田原遺跡・神田貝塚、波照間島の下田原遺跡・大泊浜貝塚では、それぞれ無土器の層が上位に、下田原式土器文化が下位にあることが判明し、従来の八重山の先史時代の時期区分（編年）の順序が逆転した。これにより、これまで南琉球先史時代の種々のデータの矛盾点がかかり整理された。
- ④ 八重山竹富島の新里村跡遺跡から八重山式土器の外耳にタテ形があり、形態も滑石製石鍋に近似する土器が発見された。これによって、八重山式土器のひとつのタイプの出自が滑石製石鍋と関係すること、同じく影響関係にある北琉球のグスク土器とも関連することが明らかになった。
- ⑤ 沖縄後期に尖底土器とくびれ平底の形態があることは知られているが、前者が時期的に先行することが把握された。
- ⑥ 伊是名島の具志川島岩立遺跡では面縄前庭式土器（の祖型を含む）を中心とする層が確認され、既知の浦添貝塚やその後発掘された石川市古我地原貝塚とともに、この時期の文化期の存在が明らかとなった。
- ⑦ 宮古島長間底遺跡では、宮古地域で初めてシャコガイ製貝斧文化をもった先史遺跡が発見され、宮古の歴史の開始の時期が従来の最古14世紀から先史時代の約2千数百年前まで一気に古くなった。さらに浦底遺跡でも大量のシャコガイ製貝斧が出土し、宮古・八重山諸島の貝斧文化の展開は、その起源・系譜をめぐる論議を活発化させた。
- ⑧ 名護市屋我地島の大堂原遺跡では、いくつかの時期の異なる文化層が確認され、従来の編年をさらに詳細に検討するとともに、豊富な土器、貝器、石器はその文化内容の理解や比較研究に役立っている。
- ⑨ 首里城跡正殿の発掘では5～7期に時期区分ができることが把握され、しかも文献記録上のできごととある程度照合できることが判明した。

住居跡、先史集落跡の発見では次のような発掘があった。

今帰仁村西長浜原遺跡、本部町屋比久原遺跡、与那城町シヌグ堂遺跡、同町仲原遺跡、高嶺遺跡、

勝連町平敷屋トウバル遺跡、宜野湾市喜友名ヌバタキ遺跡、同市安座間原第一・第二遺跡、浦添市嘉門貝塚などでは竪穴式を中心とした住居跡の集合が発見され、先史時代の住居やムラの様子が具体的にイメージできるようになった。

宮古島浦底遺跡では大量の焼石遺構が見つかり、南方世界とのつながりとムラの生活のようすがうかがえる。

葬送・墓制に関しては次の発見があった。

読谷村渡具知木綿原遺跡では九州弥生文化と関係する箱式石棺墓と人骨、宜野湾市安座間原遺跡ではさまざまな形態をもつ墓群と人骨および副葬品が、伊是名村具志川島遺跡群では改葬や焼骨を伴う崖墓が発見された。特に具志川島の腕に貝輪を着装した人骨は沖縄唯一の発見例として注目された。北谷町クマヤ洞穴遺跡では数百体の埋葬先史・グスク時代人骨が発見された。久米島のカンジン地区では石灰岩洞穴内に蔵骨器（厨子ガメ）に収納されて葬られた大量の人骨が調査され、近世から近代にかけての久米島における葬送墓制の状況が把握された。

交流・交易に関しては次のようなことがわかってきた。

九州の弥生時代遺跡から発見される腕輪の一種が従来オニシとされていたが、実は南海産のゴホウラ貝であることがわかった。その後の発掘の増加で沖縄の先史後期遺跡から、九州との交易に備えた大量のゴホウラ貝やイモガイの集積およびそれらを素材とした貝輪が続々と確認された。これによって、弥生時代並行期を中心として九州方面との貝交易ルートが存在したことが明らかになった。また、その後はヤコウガイの交易が展開されていたことが次第に判明しつつある。

これらの貝交易に伴って、九州産およびその影響を受けた地元産の弥生土器も沖縄の貝塚から続々と見ついている。また、弥生時代文化のもう一つの特徴である鉄器や青銅器も少量だが発見されている。ただ、最大の特質である稲作については受容した証拠はまだ確認されてなく、沖縄ではおそらくかなり遅い時期すなわちグスク時代直前までは稲作を受け入れなかったものと考えられる。

中国の五銖銭、開元通寶などの発見例も増えてきている。とくに後者は石垣島の崎枝赤崎貝塚と読谷村連道原貝塚では集中して出土している。従来も奄美徳之島の面縄貝塚および嘉手納町野国貝塚などから複数出土する傾向があり、これらがもたらされた経緯をめぐって、中国との直接的な交流か、九州などを仲立ちとするのか、さらに遣唐使かあるいは海洋商人が関わっているのかなど、研究者間で現在も盛んに議論が続けられている。また、同様にヤコウガイ（夜光貝）を集中して出土する遺跡が奄美を中心に知られていて、この種の貝交易についても壮大な範囲の交易ルートを想定する調査研究が進められている。

土器については、わずかながら韓国南部につながる型式が見つかり、注目されている。沖縄最古の爪形文土器と日本縄文草創期の爪形文土器とは「他人の空似」だとする異論があり、現在その位置づけをめぐっては揺れている。石器のうち黒曜石製のヤジリおよびその素材が、縄文時代の終末期にほぼ限定されて出土する例も増えているが、その産地がほとんど佐賀県の腰岳に由来するとともに、沖縄先史時代文化と九州縄文時代文化と関係のあり方が、九州から次第に離れて独自色の強い文化を形成しながらも、断続的につながりをもっていたことを示している。

域内交流・交易については、石器や粘土材料の入手などで島の南北あるいは島々の間を自由に往来し、「海の道」が近隣間でも盛んに活用されていたことがわかる。それを示すように島々の同一土器型式は区別がつかないほどソックリであり、その移り変わりもほぼ同じ調子で展開していることが数多くの発掘成果に示されている。

一方、生活文化の内容も多彩であったことが明らかになってきている。北谷町の伊礼原遺跡ではク

シが、宜野座村の前原遺跡では籠とドングリが原形と色を保って発見された。ジュゴンやイノシシ骨製の獣形垂飾、サメ歯製やサメ歯状貝・石製品など、ある種の精神文化の存在を想定させる装身具の発見も増加している。久米島清水貝塚では、沖縄で初めて種子島広田遺跡下層タイプが複数出土した。沖縄では上層タイプが主であるが、この貝札も何らかの精神生活と関連する可能性をもっている。

北谷町クマヤ洞穴遺跡では長期にわたる時期の土器や多彩な石器、貝製品、骨器のほかにヒスイの管玉があり、どのような交流・交易によってもたらされたのか注目されている。

また、琉球列島独自の物質文化の存在もわかってきた。スイジガイ突起部の1本だけを研磨する貝器は南北琉球列島先史時代に共通して存在し、そのさらに南北いずれにも類例は発見されていない。

前原遺跡では独木舟の舳先とみられるものも検出された。沿岸で漁をしたり、近隣の島々を往来する先史人の姿を彷彿とさせる。

グスク時代遺跡の調査はかなり多く実施されてきた。復元事業および公園整備事業にともなって発掘が続けられている首里城跡では、正殿遺構が複数の時期にわたり、それが概ね文献記録と対比できることが判明した。城郭内外の石造を中心とした大規模な城壁、施設などが確認され、陶磁器など多彩・多量の出土品が得られている。とくに京の内地区からは集中して舶来陶磁器が発見され、その場の機能を理解する上で重要である。また、中国陶磁器だけでなく、タイ陶磁もかなりもたらされていることがわかった。

勝連城、今帰仁城、座喜味城、山田城、糸数城、大里城、喜屋武グスク、越来グスク、中城、浦添城、北谷城、久米島宇江城などで大規模あるいは部分的な発掘が続けられたが、城郭の構造、機能、範囲の捉え方、时期的な相違、城郭内外の様相などの把握が進められてきた。そして、14世紀の半ば頃には大型のグスクでは基壇を造成して、その上に礎石式建物を造り、前庭部をもつようになることがさらに明確になってきた。建物の屋根材については主要グスクで瓦が使用されているが、その系譜は高麗系瓦と大和系瓦に大別され、詳細な研究が深められている。さらにグスク時代の集落とみられる遺跡の調査も増加し、集落とグスクの成立・展開をどう理解するかという研究も深まってきている。

陶磁器の研究は近年さらに盛んになり、グスク時代の対外交易の展開・交渉圏の様相が詳細になりつつある。中国や東南アジアの陶磁器産地との具体的な比較研究も進み、さらに雑器扱いされてきた国内産近世陶磁器についても深く研究されつつある。従来不明とされてきたいわゆる類須恵器の窯跡が徳之島で発見されて、カメヤキと称されるようになり、その生産と流通の研究は琉球圏の形成、グスクの成立期をめぐる議論にも重要な要素となっている。

近世の遺跡は県庁建設にともなって大規模に発掘された湧田古窯跡が特筆される。窯場で、平窯、土取り場、廃棄場、工房、生産物置き場、井戸などの遺構と瓦、窯道具を中心とする多彩な遺物が検出され、その後の壺屋焼の伝統につながる17世紀の沖縄における窯業成立期の具体的な姿を明らかにした。近世から近代にかけての発掘では古墓群の調査がある。北谷町、宜野湾市、那覇市、浦添市、久米島町などを中心にその発掘が実施され、墓の形態、蔵骨器、副葬品、人骨の研究が進展してきている。なかでも、那覇市の銘苺古墓群と久米島カンジン地区の洞穴風葬墓では大規模な調査と大量の蔵骨器、人骨が注目された。

近代以降の戦争遺跡に関する調査も進められている。軍事施設だけでなく、住民の避難場所や、軍隊の施設ともなったガマと呼ばれる自然あるいは人工の壕・洞穴などを中心に、考古学的な手法による発掘がいくつか試みられている。また、昭和戦前期に沖縄県人が移住した旧南洋群島における関連遺跡の調査も、サイパン・テニアンなどでおこなわれている。

(あさと しじゅん：所長)

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
久米島北原貝塚	久米島町	1972	沖縄県教育委員会
仲泊遺跡	恩納村	1974	沖縄県教育委員会
平得仲本御嶽遺跡	石垣市	1975	沖縄県教育委員会
渡具知東原遺跡	読谷村	1975	読谷村教育委員会
仲泊遺跡	恩納村	1975	恩納村教育委員会
具志川島遺跡群	伊是名村	1975	伊是名村教育委員会
室川貝塚	沖繩市	1975	沖縄国際大学考・古学研究室
浜屋原貝塚	読谷村	1975	沖縄国際大学考・古学研究室
津堅キガ浜貝塚	勝連町	1976	沖縄県教育委員会
県下の各遺跡	県下の各遺跡	1976	沖縄県教育委員会
首里城跡・久慶門	那覇市	1976	沖縄県教育委員会
伊江島ゴヘズ洞穴遺跡	伊江村	1976	伊江村教育委員会
ナガラ原西貝塚	伊江村	1976	伊江村教育委員会
渡喜仁浜原貝塚	今帰仁村	1976	今帰仁村教育委員会
仲泊遺跡	恩納村	1976	恩納村教育委員会
兼久原貝塚	本部町	1976	本部町教育委員会
渡具知東原遺跡	読谷村	1976	読谷村教育委員会
地荒原遺跡	具志川市	1976	具志川市教育委員会
苦増原遺跡	具志川市	1976	具志川市教育委員会
室川貝塚	沖繩市	1976	沖縄国際大学考・古学研究室
識名園	那覇市	1976	尚 裕
フルスト原遺跡	石垣市	1976	沖縄県教育委員会
カンドウ原遺跡	石垣市	1976	沖縄県教育委員会
北部の各グスク	沖縄本島北部	1977	沖縄県教育委員会
西長浜原遺跡	今帰仁村	1977	沖縄県教育委員会
知花遺跡群	沖繩市	1977	沖縄県教育委員会
津堅キガ浜貝塚	勝連町	1977	沖縄県教育委員会
カンドウ原遺跡	石垣市	1977	沖縄県教育委員会
竿若東遺跡	石垣市	1977	沖縄県教育委員会
石城山遺跡	石垣市	1977	沖縄県教育委員会
渡喜仁浜原貝塚	今帰仁村	1977	今帰仁村教育委員会
伊江島ゴヘズ洞穴遺跡	伊江村	1977	伊江村教育委員会
具志川島遺跡群	伊是名村	1977	伊是名村教育委員会
ナガラ原西貝塚	伊江村	1977	伊江村教育委員会
渡具知東原遺跡	読谷村	1977	読谷村教育委員会
座喜味城跡	読谷村	1977	読谷村教育委員会
渡名喜島遺跡群	渡名喜村	1977	渡名喜村教育委員会
室川貝塚	沖繩市	1977	沖縄国際大学考・古学研究室
熱田貝塚	恩納村	1977	沖縄県教育委員会
熱田第2貝塚	恩納村	1977	沖縄県教育委員会
具志川市の各遺跡	具志川市	1977	具志川市教育委員会
中部のグスク	沖縄本島中部	1978	沖縄県教育委員会
石垣島の遺跡	石垣島	1978	沖縄県教育委員会
神田貝塚	石垣市	1978	沖縄県教育委員会
大田原遺跡	石垣市	1978	沖縄県教育委員会
舟越貝塚	石垣市	1978	沖縄県教育委員会
ナガタ原貝塚	石垣市	1978	沖縄県教育委員会
具志川島遺跡群	伊是名村	1978	伊是名村教育委員会
伊是名貝塚	伊是名村	1978	伊是名村教育委員会
イヌガ原遺跡	伊江村	1978	伊江村教育委員会
喜如嘉貝塚	大宜味村	1978	大宜味村教育委員会
仲泊遺跡	恩納村	1978	恩納村教育委員会
座喜味城跡	読谷村	1978	読谷村教育委員会
長浜遺跡	読谷村	1978	読谷村教育委員会
読谷村の各遺跡	読谷村	1978	読谷村教育委員会
屋良グスク	嘉手納町	1978	嘉手納町教育委員会
室川貝塚	沖繩市	1978	沖縄市教育委員会
地荒原遺跡	具志川市	1978	具志川市教育委員会
苦増原遺跡	具志川市	1978	具志川市教育委員会
八重瀬グスク	東風平町	1978	東風平町教育委員会
宮元元島遺跡	上野村	1978	上野村教育委員会
阿波連浦貝塚	渡嘉敷村	1978	沖縄国際大学考・古学研究室
大原貝塚群	具志川村	1979	沖縄県教育委員会
仲宗根貝塚	沖繩市	1979	沖縄県教育委員会
百名第二貝塚	玉城村	1979	沖縄県教育委員会
竹富町・与那国町の各遺跡	竹富町・与那国町	1979	沖縄県教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
久原貝塚	伊平屋村	1979	伊平屋村教育委員会
浜崎貝塚	伊江村	1979	伊江村教育委員会
伊是名ウフジカ遺跡	伊是名村	1979	伊是名村教育委員会
宇堅貝塚群	具志川市	1979	具志川市教育委員会
アカジャンガー貝塚	具志川市	1979	具志川市教育委員会
宮元元島遺跡	上野村	1979	上野村教育委員会
佐敷グスク	佐敷町	1979	佐敷町教育委員会
座喜味城跡	読谷村	1979	読谷村教育委員会
久志貝塚	名護市	1979	名護市教育委員会
屋我グスク	名護市	1979	名護市教育委員会
仲筋遺跡	石垣市	1979	大浜 永亘
成星遺跡	竹富町	1979	青山学院大学
浦添市内分布調査	浦添市内	1979	浦添市教育委員会
城辺町保良地区分布調査	城辺町内	1979	城辺町教育委員会
与那城貝塚	西原町	1979	西原町教育委員会
仲原遺跡	与那城村	1980	沖縄県教育委員会
古座間味貝塚	座間味村	1980	沖縄県教育委員会
名蔵貝塚群	石垣市	1980	沖縄県教育委員会
伊武部貝塚	恩納村	1980	沖縄県教育委員会
野国貝塚群	嘉手納町	1980	沖縄県教育委員会
住屋遺跡	平良市	1980	沖縄県教育委員会
南部グスク分布調査	本島南部及び周辺諸島	1980	沖縄県教育委員会
大田原遺跡	石垣市	1980	石垣市教育委員会
久原貝塚	伊平屋村	1980	伊平屋村教育委員会
具志川島遺跡群	伊是名村	1980	伊是名村教育委員会
今帰仁城跡	今帰仁村	1980	今帰仁村教育委員会
成星遺跡	竹富町	1980	青山学院大学
名護市分布調査	名護市内	1980	名護市教育委員会
宜野座村分布調査	宜野座村	1980	宜野座村教育委員会
西原町分布調査	西原町内	1980	西原町教育委員会
糸満市分布調査	糸満市内	1980	糸満市教育委員会
苦増原遺跡	具志川市	1980	具志川市教育委員会
平安名貝塚	勝連町	1980	勝連町教育委員会
具志原貝塚	伊江村	1981	伊江村教育委員会
与那原遺跡	与那原町	1981	与那原町教育委員会
友利元島遺跡	城辺町	1981	城辺町教育委員会
古座間味貝塚	座間味村	1981	沖縄県教育委員会
漢那遺跡	宜野座村	1981	宜野座村教育委員会
親富祖遺跡	浦添市	1981	浦添市教育委員会
インジグスク	沖繩市	1981	沖縄市教育委員会
野国貝塚	嘉手納町	1981	沖縄県教育委員会
地荒原遺跡	具志川市	1981	沖縄県教育委員会
仲原遺跡	与那城村	1981	沖縄県教育委員会
宮元元島遺跡	上野村	1981	上野村教育委員会
稲福遺跡	上野村	1981	沖縄県教育委員会
我謝遺跡	西原町	1981	西原町教育委員会
伊部武貝塚	恩納村	1981	沖縄県教育委員会
阿良貝塚	伊江村	1982	沖縄県教育委員会
具志頭グスク	具志頭村	1982	沖縄県教育委員会
上原貝塚	竹富町	1982	竹富町教育委員会
我謝遺跡(地点)	西原町	1982	西原町教育委員会
住屋遺跡	平良市	1982	平良市教育委員会
古宇利原遺跡	今帰仁村	1982	今帰仁村教育委員会
浦添城跡	浦添市	1982	浦添市教育委員会
地荒原遺跡	具志川市	1982	具志川市教育委員会
ガジャンピラ丘陵遺跡	那覇市	1982	那覇市教育委員会
阿良建物散布地	伊江村	1982	伊江村教育委員会
ビロースク遺跡	石垣市	1982	石垣市教育委員会
内間遺跡	浦添市	1982	浦添市教育委員会
勢理グスク	東風平町	1982	東風平町教育委員会
仲泊遺跡	恩納村	1982	恩納村教育委員会
崇元寺跡	那覇市	1982	那覇市教育委員会
伊田慶名原遺跡	糸満市	1982	糸満市教育委員会
苦増原遺跡	具志川市	1982	具志川市教育委員会
山原貝塚	石垣市	1982	石垣市教育委員会
具志頭グスク	具志頭村	1982	具志頭村教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
ビンザブ遺跡	上野村	1982	沖繩県教育委員会
フルスト原遺跡	石垣市	1982	石垣市教育委員会
シメグ堂遺跡	与那城村	1982	沖繩県教育委員会
グスク跡分布調査	県全域	1982	沖繩県教育委員会
宮古詳細分布調査	宮古内	1982	沖繩県教育委員会
大宜味村分布調査	大宜味村内	1982	大宜味村教育委員会
今帰仁村分布調査	今帰仁村内	1982	今帰仁村教育委員会
伊是名村分布調査	伊是名村内	1982	伊是名村教育委員会
シメグ堂遺跡	与那城村	1983	沖繩県教育委員会
ビンザブ遺跡	上野村	1983	沖繩県教育委員会
下田原貝塚(大泊原)	竹富町	1983	沖繩県教育委員会
長間底遺跡	城辺町	1983	沖繩県教育委員会
カンドウ原遺跡	石垣市	1983	沖繩県教育委員会
トゥグル浜遺跡	与那国町	1983	沖繩県教育委員会
古我知原遺跡	石川市	1983	沖繩県教育委員会
知花遺跡	沖繩市	1983	沖繩県教育委員会
牧港・真久原遺跡	浦添市	1983	沖繩県教育委員会
与那良遺跡	竹富町	1983	沖繩県教育委員会
シメグ堂遺跡	与那城村	1983	沖繩県教育委員会
天山古墳	那覇市	1983	沖繩県教育委員会
上津覇遺跡	中城村	1983	中城村教育委員会
田場小学校南方遺跡	具志川市	1983	具志川市教育委員会
住屋遺跡	平良市	1983	平良市教育委員会
浦添城跡	浦添市	1983	浦添市教育委員会
阿部北上原遺跡	名護市	1983	名護市教育委員会
伊是名貝塚	伊是名村	1983	伊是名村教育委員会
山原貝塚	石垣市	1983	石垣市教育委員会
普天間宮洞穴遺跡	宜野湾市	1983	宜野湾市教育委員会
大兼久・根路銘遺物散布地	大宜味村内	1983	大宜味村教育委員会
具志堅貝塚	本部町	1983	本部町教育委員会
饒平名シマヌハー御嶽遺跡群	名護市	1983	名護市教育委員会
チヅフチャー古墳群	浦添市	1983	浦添市教育委員会
上勢頭下勢頭古墳群	北谷町	1983	北谷町教育委員会
上之島遺跡	名護市	1983	名護市教育委員会
喜友名山川北方遺跡・喜友名北方遺跡	宜野湾市	1983	宜野湾市教育委員会
真志喜蔵当原遺跡	宜野湾市	1983	宜野湾市教育委員会
港川越地原遺跡	浦添市	1983	浦添市教育委員会
伊是名・仲田貝塚	伊是名村	1983	伊是名村教育委員会
波那城古島遺跡	具志頭村	1983	具志頭村教育委員会
南山城跡	糸満市	1983	糸満市教育委員会
北谷地先海底座礁戦	北谷町	1983	北谷町教育委員会
熱田貝塚	恩納村	1983	恩納村教育委員会
サーク原貝塚	北谷町	1983	北谷町教育委員会
北谷グスク	北谷町	1983	北谷町教育委員会
屋比久グスク	佐敷町	1983	佐敷町教育委員会
与那原(ドゥナンバル)遺跡		1983	青山学院大学
掛保久371古墓	西原町	1983	沖繩県教育委員会
内間散布地 No1	西原町	1983	西原町教育委員会
具志原貝塚	伊江村	1984	伊江村教育委員会
具志原貝塚	伊江村	1984	沖繩県教育委員会
下田原貝塚	竹富町	1984	沖繩県教育委員会
浦添城跡	浦添市	1984	浦添市教育委員会
米須貝塚	糸満市	1984	糸満市教育委員会
石川遺跡(第1)	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
石川遺跡(第2)	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
グスクヌハナ遺跡	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
南山城跡	糸満市	1984	糸満市教育委員会
地荒原貝塚	具志川市	1984	具志川市教育委員会
大牧遺跡	城辺町	1984	城辺町教育委員会
北谷グスク	北谷町	1984	北谷町教育委員会
浦添原遺跡	浦添市	1984	浦添市教育委員会
ウイヌズ遺跡	石垣市	1984	沖繩県教育委員会
仲尾古村遺跡	名護市	1984	名護市教育委員会
喜友名西原遺跡	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
喜友名下原遺跡	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
ビンザブ遺跡	上野村	1984	沖繩県教育委員会
具志堅貝塚	本部町	1984	本部町教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
知場塚原遺跡	本部町	1984	本部町教育委員会
仲間遺跡	名護市	1984	名護市教育委員会
東原貝塚	伊平屋村	1984	伊平屋村教育委員会
瀧川原貝塚	伊平屋村	1984	伊平屋村教育委員会
北上原石嶺ピラ遺跡	中城村	1984	沖繩県教育委員会
名蔵貝塚群	石垣市	1984	沖繩県教育委員会
名護貝塚(国道側)	名護市	1984	名護市教育委員会
名護貝塚(県道側)	名護市	1984	沖繩県教育委員会
溝原貝塚	名護市	1984	名護市教育委員会
松田遺跡	宜野座村	1984	沖繩県教育委員会
地荒原貝塚	具志川市	1984	沖繩県教育委員会
シメグ堂遺跡	与那城村	1983	沖繩県教育委員会
ビンザブ遺跡	上野村	1983	沖繩県教育委員会
下田原貝塚(大泊原)	竹富町	1983	沖繩県教育委員会
長間底遺跡	城辺町	1983	沖繩県教育委員会
カンドウ原遺跡	石垣市	1983	沖繩県教育委員会
トゥグル浜遺跡	与那国町	1983	沖繩県教育委員会
古我知原遺跡	石川市	1983	沖繩県教育委員会
知花遺跡	沖繩市	1983	沖繩県教育委員会
牧港・真久原遺跡	浦添市	1983	沖繩県教育委員会
与那良遺跡	竹富町	1983	沖繩県教育委員会
シメグ堂遺跡	与那城村	1983	沖繩県教育委員会
天山古墳	那覇市	1983	沖繩県教育委員会
上津覇遺跡	中城村	1983	中城村教育委員会
田場小学校南方遺跡	具志川市	1983	具志川市教育委員会
住屋遺跡	平良市	1983	平良市教育委員会
浦添城跡	浦添市	1983	浦添市教育委員会
阿部北上原遺跡	名護市	1983	名護市教育委員会
伊是名貝塚	伊是名村	1983	伊是名村教育委員会
山原貝塚	石垣市	1983	石垣市教育委員会
普天間宮洞穴遺跡	宜野湾市	1983	宜野湾市教育委員会
大兼久・根路銘遺物散布地	大宜味村内	1983	大宜味村教育委員会
具志堅貝塚	本部町	1983	本部町教育委員会
饒平名シマヌハー御嶽遺跡群	名護市	1983	名護市教育委員会
チヅフチャー古墳群	浦添市	1983	浦添市教育委員会
上勢頭下勢頭古墳群	北谷町	1983	北谷町教育委員会
上之島遺跡	名護市	1983	名護市教育委員会
喜友名山川北方遺跡・喜友名北方遺跡	宜野湾市	1983	宜野湾市教育委員会
真志喜蔵当原遺跡	宜野湾市	1983	宜野湾市教育委員会
港川越地原遺跡	浦添市	1983	浦添市教育委員会
伊是名・仲田貝塚	伊是名村	1983	伊是名村教育委員会
波那城古島遺跡	具志頭村	1983	具志頭村教育委員会
南山城跡	糸満市	1983	糸満市教育委員会
北谷地先海底座礁戦	北谷町	1983	北谷町教育委員会
熱田貝塚	恩納村	1983	恩納村教育委員会
サーク原貝塚	北谷町	1983	北谷町教育委員会
北谷グスク	北谷町	1983	北谷町教育委員会
屋比久グスク	佐敷町	1983	佐敷町教育委員会
与那原(ドゥナンバル)遺跡		1983	青山学院大学
掛保久371古墓	西原町	1983	沖繩県教育委員会
内間散布地 No1	西原町	1983	西原町教育委員会
具志原貝塚	伊江村	1984	伊江村教育委員会
具志原貝塚	伊江村	1984	沖繩県教育委員会
下田原貝塚	竹富町	1984	沖繩県教育委員会
浦添城跡	浦添市	1984	浦添市教育委員会
米須貝塚	糸満市	1984	糸満市教育委員会
石川遺跡(第1)	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
石川遺跡(第2)	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
グスクヌハナ遺跡	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
南山城跡	糸満市	1984	糸満市教育委員会
地荒原貝塚	具志川市	1984	具志川市教育委員会
大牧遺跡	城辺町	1984	城辺町教育委員会
北谷グスク	北谷町	1984	北谷町教育委員会
浦添原遺跡	浦添市	1984	浦添市教育委員会
ウイヌズ遺跡	石垣市	1984	沖繩県教育委員会
仲尾古村遺跡	名護市	1984	名護市教育委員会

遺跡名	所在地	調査年	調査主体者
喜友名下原遺跡	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
ビンザアブ遺跡	上野村	1984	沖縄県教育委員会
具志堅貝塚	本部町	1984	本部町教育委員会
知場塚原遺跡	本部町	1984	本部町教育委員会
仲間遺跡	名護市	1984	名護市教育委員会
東原貝塚	伊平屋村	1984	伊平屋村教育委員会
瀧川原貝塚	伊平屋村	1984	伊平屋村教育委員会
北上原石嶺ピラ遺跡	中城村	1984	沖縄県教育委員会
名蔵貝塚群	石垣市	1984	沖縄県教育委員会
名護貝塚(国道側)	名護市	1984	名護市教育委員会
名護貝塚(県道側)	名護市	1984	名護市教育委員会
溝原貝塚	名護市	1984	名護市教育委員会
松田遺跡	宜野座村	1984	沖縄県教育委員会
地荒原貝塚	具志川市	1984	沖縄県教育委員会
北谷グスク	北谷町	1984	北谷町教育委員会
新垣A遺跡	糸満市	1984	糸満市教育委員会
真栄平西方遺跡	糸満市	1984	糸満市教育委員会
赤道渡呂寒原遺跡	宜野湾市	1984	宜野湾市教育委員会
竹下遺跡	沖繩市	1984	沖縄県教育委員会
真久原遺跡	浦添市	1984	沖縄県教育委員会
具志原貝塚	伊江村	1984	沖縄県教育委員会
内間散布地 No 1	西原町	1984	西原町教育委員会
伊原遺跡	糸満市	1984	沖縄県教育委員会
石川貝塚	石川市	1984	石川市教育委員会
石グスク	西原町	1984	沖縄県教育委員会
野城遺跡	城辺町	1984	城辺町教育委員会
多田名城跡	具志頭村	1984	具志頭村教育委員会
拝山遺跡	浦添市	1984	沖縄県教育委員会
具志堅ウージ洞穴遺跡	知念村	1984	知念村教育委員会
棚原グスク	西原町	1984	西原町
棚原貝塚	西原町	1984	西原町
備瀬貝塚	本部町	1984	本部町教育委員会
新里元鳥遺跡	上野村	1984	上野村教育委員会
白川屋取集落跡	沖繩市	1984	沖縄県教育委員会
宇地泊兼久原遺跡	宜野湾市	1984	沖縄国際大学 高宮廣衛
大山水賀志原遺跡	宜野湾市	1984	沖縄国際大学 高宮廣衛
シタダ遺跡		1985	東海大学 茂在寅男
宇地泊兼久原遺跡	宜野湾市	1985	沖縄国際大学 高宮廣衛
慶田崎遺跡	与那国町	1985	与那国町教育委員会
清水貝塚	具志川村	1985	具志川村教育委員会
知場塚原遺跡	本部町	1985	本部町教育委員会
伊波東貝塚	石川市	1985	石川市教育委員会
伊良波先祖原遺跡(西遺跡)	豊見城村	1985	豊見城村教育委員会
北谷グスク	北谷町	1985	北谷町教育委員会
真志喜荒地原遺跡	宜野湾市	1985	宜野湾市教育委員会
地荒原貝塚	具志川市	1985	具志川市教育委員会
真志喜石川遺跡	宜野湾市	1985	宜野湾市教育委員会
大里和解名森遺跡	糸満市	1985	糸満市教育委員会
美原遺跡	石川市	1985	石川市教育委員会
田井等遺跡	名護市	1985	名護市教育委員会
フガヤ遺跡	名護市	1985	名護市教育委員会
羽地間切番所跡	名護市	1985	名護市教育委員会
下田原貝塚	竹富町	1985	竹富町教育委員会
伊良波先祖原遺跡(東遺跡)	豊見城村	1985	豊見城村教育委員会
クジナ墓	宜野座村	1985	宜野座村教育委員会
伊原遺跡	糸満市	1985	糸満市教育委員会
崎枝赤崎貝塚	石垣市	1985	石垣市教育委員会
安室散布地No 1～No 2	西原町	1985	西原町教育委員会
グンサナ森遺跡	伊平屋村	1985	伊平屋村教育委員会
ウンナ原遺跡	伊平屋村	1985	伊平屋村教育委員会
石蔵川貝塚	伊平屋村	1985	伊平屋村教育委員会
地荒原貝塚	具志川市	1985	具志川市教育委員会
川田原貝塚	糸満市	1985	糸満市教育委員会
久志古鳥遺跡	名護市	1985	名護市教育委員会
浦添原遺跡	浦添市	1985	浦添市教育委員会
溝原貝塚	名護市	1985	名護市教育委員会
新里元鳥遺跡	上野村	1985	上野村教育委員会
安波茶橋及石畳	浦添市	1985	浦添市教育委員会

遺跡名	所在地	調査年	調査主体者
サーク原貝塚	北谷町	1985	北谷町教育委員会
真志喜大川原第一遺跡	宜野湾市	1985	宜野湾市教育委員会
山田グスク	恩納村	1985	恩納村教育委員会
越来グスク	沖繩市	1985	沖縄県教育委員会
高腰城跡	城辺町	1985	城辺町教育委員会
安部貝塚	名護市	1985	名護市教育委員会
大堂原西遺跡	名護市	1985	名護市教育委員会
大西区遺物散布地	名護市	1985	名護市教育委員会
今帰仁城跡周辺遺跡	今帰仁村	1985	今帰仁村教育委員会
前項原遺跡	具志川市	1985	具志川市教育委員会
阿波連浦貝塚		1986	沖縄国際大学 高宮廣衛
下地洞穴遺跡		1986	国立科学博物館
砂辺貝塚	北谷町	1986	北谷町教育委員会
宇佐浜遺跡		1986	沖縄県教育委員会
屋比久原遺跡	本部町	1986	本部町教育委員会
真志喜安座間原第一遺跡	宜野湾市	1986	宜野湾市教育委員会
新里元鳥遺跡	上野村	1986	上野村教育委員会
喜屋武グスク	具志川市	1986	具志川市教育委員会
羽地間切番所跡	名護市	1986	名護市教育委員会
砂川元鳥遺跡	城辺町	1986	城辺町教育委員会
山田グスク	恩納村	1986	恩納村教育委員会
与那原遺跡	与那国町	1986	与那国町教育委員会
砂辺貝塚	北谷町	1986	北谷町教育委員会
西底原遺跡	渡名喜村	1986	渡名喜村教育委員会
山川原古墓群	北谷町	1986	北谷町教育委員会
新里村遺跡		1986	沖縄県教育委員会
真志喜安座間原第一遺跡	宜野湾市	1986	宜野湾市教育委員会
安波貝塚	国頭村	1986	国頭村教育委員会
崎枝赤崎貝塚群	石垣市	1986	石垣市教育委員会
真志喜グスクスハナ東遺跡	宜野湾市	1986	宜野湾市教育委員会
クマイー洞穴遺跡	北谷町	1986	北谷町教育委員会
田茂原貝塚	伊平屋村	1986	伊平屋村教育委員会
浜貝塚	勝連町	1986	勝連町教育委員会
湧田古窯跡		1986	沖縄県教育委員会
山川原古墓群	北谷町	1986	北谷町教育委員会
高嶺遺跡		1986	沖縄県教育委員会
クジナ墓	宜野座村	1986	宜野座村教育委員会
高腰城跡	城辺町	1986	城辺町教育委員会
チザフチャー洞穴遺跡	浦添市	1986	浦添市教育委員会
真志喜グスクスハナ東遺跡	宜野湾市	1986	宜野湾市教育委員会
津堅第二貝塚	勝連町	1986	勝連町教育委員会
長嶺城跡	豊見城村	1986	豊見城村教育委員会
保栄茂城跡	豊見城村	1986	豊見城村教育委員会
平良城跡	豊見城村	1986	豊見城村教育委員会
仲尾次上グスク	名護市	1986	名護市教育委員会
北谷グスク	北谷町	1986	北谷町教育委員会
阿波連浦貝塚		1987	沖縄国際大学 高宮廣衛
ウエスアタイ貝塚	宜野座村	1987	宜野座村教育委員会
高嶺遺跡	与那城村	1987	沖縄県教育委員会
西底原遺跡	渡名喜村	1987	渡名喜村教育委員会
嘉門貝塚	浦添市	1987	浦添市教育委員会
城間遺跡	浦添市	1987	浦添市教育委員会
南風原古鳥遺跡	勝連町	1987	勝連町教育委員会
南風見貝塚	竹富町	1987	竹富町教育委員会
若松遺跡	北中城村	1987	北中城村教育委員会
山田グスク	恩納村	1987	恩納村教育委員会
喜屋武グスク	具志川市	1987	具志川市教育委員会
砂辺貝塚	北谷町	1987	北谷町教育委員会
伊原伊礼原遺跡	糸満市	1987	糸満市教育委員会
久志古鳥遺跡	名護市	1987	名護市教育委員会
宇江城古鳥遺跡	糸満市	1987	糸満市教育委員会
高腰城跡	城辺町	1987	城辺町教育委員会
ホハラ遺跡	城辺町	1987	城辺町教育委員会
浦底遺跡	城辺町	1987	城辺町教育委員会
真志喜石川第一遺跡	宜野湾市	1987	宜野湾市教育委員会
新里村遺跡	竹富町	1987	沖縄県教育委員会
真志喜石川第二遺跡	宜野湾市	1987	宜野湾市教育委員会
真志喜グスクスハナ東遺跡	宜野湾市	1987	宜野湾市教育委員会

遺跡名	所在地	調査年	調査主体者
クマヤ洞穴遺跡	北谷町	1987	北谷町教育委員会
友利元島遺跡	城辺町	1987	城辺町教育委員会
マーガス殿遺跡	具志頭村	1987	具志頭村教育委員会
吹出原遺跡	読谷村	1987	読谷村教育委員会
大久保原貝塚	読谷村	1987	読谷村教育委員会
与那覇遺跡	下地町	1987	下地町教育委員会
若松遺跡	北中城村	1987	北中城村教育委員会
真志喜安座間原第二遺跡	宜野湾市	1987	宜野湾市教育委員会
東原貝塚	伊平屋村	1987	伊平屋村教育委員会
石蔵川貝塚	伊平屋村	1987	伊平屋村教育委員会
湧田古窯跡	那覇市	1987	沖縄県教育委員会
北谷城	北谷町	1987	北谷町教育委員会
大当原貝塚		1988	沖縄国際大学 文学部
真志喜安座間原第2遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
真志喜荒地原古窯群	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
安座間原第1遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
真志喜荒地原第2遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
浜貝塚	勝連町	1988	勝連町教育委員会
喜屋武グスク	具志川市	1988	具志川市教育委員会
真志喜安座間原第1遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
真志喜安座間原第1遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
与那覇遺跡	下地町	1988	下地町教育委員会
吹出原遺跡	読谷村	1988	読谷村教育委員会
西底原遺跡	渡名喜村	1988	渡名喜村教育委員会
宇茂佐古島遺跡	名護市	1988	名護市教育委員会
若松遺跡	北中城村	1988	北中城村教育委員会
上村遺跡	竹富町	1988	沖縄県教育委員会
クマヤ洞穴遺跡	北谷町	1988	北谷町教育委員会
大久保原遺跡	読谷村	1988	読谷村教育委員会
東原遺跡	伊平屋村	1988	伊平屋村教育委員会
伊礼原B遺跡	北谷町	1988	北谷町教育委員会
友利遺跡	城辺町	1988	城辺町教育委員会
高嶺古島遺跡	豊見城村	1988	豊見城村教育委員会
黒石川窯跡遺跡	石垣市	1988	石垣市教育委員会
真志喜大川原第4遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
大山富盛原北方遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
喜友名東原遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
長老山遺跡	北谷町	1988	沖縄県教育委員会
ナイクブ古墓群	那覇市	1988	那覇市教育委員会
安座間原第1遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
喜友名東原ヌバタキ遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
真志喜大川原第2遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
真志喜大川原第2遺跡	宜野湾市	1988	宜野湾市教育委員会
壺川古窯遺跡	那覇市	1988	那覇市教育委員会
箕島遺跡	城辺町	1988	沖縄県教育委員会
伊波城跡	石川市	1988	石川市教育委員会
仲間第1貝塚	竹富町	1988	沖縄県教育委員会
阿波根古島遺跡	糸満市	1988	沖縄県教育委員会
久茂地1丁目再開発地区内古井戸遺跡	那覇市	1988	那覇市教育委員会
喜友名東原ヌバタキ遺跡	宜野湾市	1989	宜野湾市教育委員会
友利遺跡	城辺町	1989	城辺町教育委員会
天界寺跡	那覇市	1989	沖縄県教育委員会
宇堅貝塚	具志川市	1989	具志川市教育委員会
西底原遺跡	渡名喜村	1989	渡名喜村教育委員会
黒石川窯跡	石垣市	1989	石垣市教育委員会
高知口原貝塚	読谷村	1989	読谷村教育委員会
壺川古窯遺跡群I遺跡	那覇市	1989	那覇市教育委員会
漢那福地川水田社遺跡	宜野座村	1989	宜野座村教育委員会
具志川島遺跡群	伊是名村	1989	沖縄県教育委員会
室川貝塚	沖縄市	1989	沖縄市教育委員会
屋嘉貝塚	金武町	1989	金武町教育委員会
カラ岳東貝塚	石垣市	1989	沖縄県教育委員会
名護城	名護市	1989	名護市教育委員会
名護城	名護市	1989	名護市教育委員会
八重島貝塚	沖縄市	1989	沖縄市教育委員会
ナイクブ古墓群	那覇市	1989	那覇市教育委員会
野国貝塚	嘉手納町	1989	沖縄県教育委員会
船浦すら所跡	竹富町	1989	沖縄県教育委員会

遺跡名	所在地	調査年	調査主体者
湧田古窯跡	那覇市	1889	沖縄県教育委員会
国学・孔子廟	那覇市	1889	沖縄県教育委員会
隅原遺跡(F地点)	具志川市	1889	具志川市教育委員会
フチサ古墓群	那覇市	1889	那覇市教育委員会
具志原貝塚	伊江村	1889	伊江村教育委員会
室川貝塚	沖縄市	1889	沖縄市教育委員会
馬上原貝塚	沖縄市	1889	沖縄市教育委員会
石垣貝塚	石垣市	1889	石垣市教育委員会
クマヤ洞穴遺跡	北谷町	1889	北谷町教育委員会
住屋遺跡	平良市	1889	平良市教育委員会
平敷屋古島遺跡	勝連町	1889	勝連町教育委員会
喜屋武グスク	具志川市	1889	具志川市教育委員会
安謝西原古墓群遺跡	那覇市	1889	那覇市教育委員会
中川原貝塚	読谷村	1889	読谷村教育委員会
大久保原遺跡	読谷村	1889	読谷村教育委員会
宮崎貝塚	石垣市	1889	石垣市教育委員会
隅原遺跡	具志川市	1990	具志川市教育委員会
上村遺跡	竹富町	1990	竹富町教育委員会
宇茂佐古島遺跡	名護市	1990	名護市教育委員会
銘苅古墓群	那覇市	1990	那覇市教育委員会
ヒヤジョー毛遺物散布地	那覇市	1990	那覇市教育委員会
安仁屋トウンヤマ遺跡	宜野湾市	1990	沖縄県教育委員会
具志川島遺跡群	伊是名村	1990	沖縄県教育委員会
漢那福地川水田社遺跡	宜野座村	1990	宜野座村教育委員会
黒石川窯跡	石垣市	1990	石垣市教育委員会
石垣貝塚	石垣市	1990	石垣市教育委員会
平敷屋古島遺跡	勝連町	1990	勝連町教育委員会
湧田古窯跡	那覇市	1990	沖縄県教育委員会
アカドヌ屋敷跡	城辺町	1990	城辺町教育委員会
久良波貝塚	恩納村	1990	沖縄県教育委員会
昆布貝塚	具志川市	1990	具志川市教育委員会
喜屋武グスク	具志川市	1990	具志川市教育委員会
平川貝塚	石垣市	1990	石垣市教育委員会
屋宜平原遺跡	中城村	1990	中城村教育委員会
久場台城原遺跡	中城村	1990	中城村教育委員会
和宇慶上登原遺跡	中城村	1990	中城村教育委員会
安里後原遺跡	中城村	1990	中城村教育委員会
尻川原遺跡	那覇市	1990	那覇市教育委員会
首里汀良町三丁目古井戸遺跡	那覇市	1990	那覇市教育委員会
谷茶貝塚	恩納村	1990	恩納村教育委員会
恩納古島遺跡	恩納村	1990	恩納村教育委員会
玉代勢原遺跡	北谷町	1991	北谷町教育委員会
上原同原遺跡	宜野湾市	1991	宜野湾市教育委員会
具志川島遺跡群	伊是名村	1991	伊是名村教育委員会
御宿井	南風原町	1991	南風原町教育委員会
ふえーぬみー	南風原町	1991	南風原町教育委員会
安平田御嶽	南風原町	1991	南風原町教育委員会
川花遺跡群	石垣市	1991	石垣市教育委員会
具志川グスク	具志川市	1991	具志川市教育委員会
友利遺跡	城辺町	1991	城辺町教育委員会
コンドイ貝塚	竹富町	1991	沖縄県教育委員会
熱田貝塚	恩納村	1991	恩納村教育委員会
報得橋	糸満市	1991	糸満市教育委員会
志喜根貝塚	恩納村	1991	恩納村教育委員会
安幸地原貝塚	恩納村	1991	恩納村教育委員会
宇茂佐古島遺跡	名護市	1991	名護市教育委員会
塩川井(ジャガーガー)遺跡	多良間村	1991	多良間村教育委員会
石垣貝塚	石垣市	1991	石垣市教育委員会
平敷屋古島遺跡	勝連町	1991	勝連町教育委員会
首里旧寒川村跡	那覇市	1991	那覇市教育委員会
中城候殿跡	那覇市	1991	沖縄県教育委員会
喜友名東原ヌバタキ遺跡	宜野湾市	1991	宜野湾市教育委員会
連道原貝塚	読谷村	1991	読谷村教育委員会
真志喜森川原遺跡	宜野湾市	1992	宜野湾市教育委員会
首里旧金城村跡	那覇市	1992	那覇市教育委員会
ンブフル遺跡	竹富町	1992	竹富町教育委員会
前原第二遺跡(E地点)	宜野座村	1992	宜野座村教育委員会
部瀬名貝塚	名護市	1992	名護市教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
喜納焼古窯跡	読 谷 村	1992	読谷村教育委員会
大原貝塚	具 志 川 村	1992	具志川村教育委員会
山城古島遺跡	糸 満 市	1992	糸満市教育委員会
佐慶グスク	糸 満 市	1992	糸満市教育委員会
友利遺跡	城 辺 町	1992	城辺町教育委員会
識名貝塚	那 覇 市	1992	那覇市教育委員会
カイジ浜貝塚	竹 富 町	1992	沖縄県教育委員会
大川東ノハカ遺跡	石 垣 市	1992	石垣市教育委員会
北谷城	北 谷 町	1992	北谷町教育委員会
伊佐前原遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
具志川島遺跡群	伊 是 名 村	1992	伊是名村教育委員会
高知口原遺跡	読 谷 村	1992	読谷村教育委員会
那崎原遺跡	那 覇 市	1992	那覇市教育委員会
宜野湾市クシヌウタキ遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
喜友名東原ヌバタキ遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
友利遺跡	城 辺 町	1992	城辺町教育委員会
カラ岳東貝塚	石 垣 市	1992	石垣市教育委員会
内間西原古墓群	浦 添 市	1992	浦添市教育委員会
喜如嘉貝塚	大 宜 味 村	1992	沖縄県教育委員会
平敷屋トウバル遺跡	勝 連 町	1992	沖縄県教育委員会
大山岳之佐久原北方遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
新城古集落遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
具志川グスク遺跡	具 志 川 市	1992	具志川市教育委員会
志喜屋グスク遺跡	知 念 村	1992	知念村教育委員会
阿波根古島遺跡	糸 満 市	1992	糸満市教育委員会
下上原貝塚	知 念 村	1992	知念村教育委員会
辺野古の一里塚	名 護 市	1992	名護市教育委員会
上原風葬墓群	竹 富 町	1992	竹富町教育委員会
牧志御願東方遺跡	那 覇 市	1992	那覇市教育委員会
真嘉比・古島古墓群(Ⅰ地区)	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
宇地泊兼久原第三遺跡	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
宇地泊兼久原第二遺跡	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
奥間ノ口墓	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
住吉遺物散布地(洞穴)及び古墓群	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
小城盛遺跡	竹 富 町	1993	竹富町教育委員会
嘉手納貝塚	嘉 手 納 町	1993	嘉手納町教育委員会
屋良グスク	嘉 手 納 町	1993	嘉手納町教育委員会
与那覇クボ御嶽遺跡	南 風 原 町	1993	南風原町教育委員会
野底遺跡	石 垣 市	1993	石垣市教育委員会
渡嘉敷後原古墓群	豊 見 城 村	1993	豊見城村教育委員会
仲栄真グスク	玉 城 村	1993	玉城村教育委員会
船越グスク	玉 城 村	1993	玉城村教育委員会
野嵩ウガンスカタ遺跡	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
谷茶貝塚	恩 納 村	1990	恩納村教育委員会
恩納古島遺跡	恩 納 村	1990	恩納村教育委員会
玉代勢原遺跡	北 谷 町	1991	北谷町教育委員会
上原同原遺跡	宜 野 湾 市	1991	宜野湾市教育委員会
具志川島遺跡群	伊 是 名 村	1991	伊是名村教育委員会
御宿井	南 風 原 町	1991	南風原町教育委員会
ふえーぬみー	南 風 原 町	1991	南風原町教育委員会
安平田御嶽	南 風 原 町	1991	南風原町教育委員会
川花遺跡群	石 垣 市	1991	石垣市教育委員会
具志川グスク	具 志 川 市	1991	具志川市教育委員会
友利遺跡	城 辺 町	1991	城辺町教育委員会
コンドイ貝塚	竹 富 町	1991	沖縄県教育委員会
熱田貝塚	恩 納 村	1991	恩納村教育委員会
報得橋	糸 満 市	1991	糸満市教育委員会
志喜根貝塚	恩 納 村	1991	恩納村教育委員会
安幸地原貝塚	恩 納 村	1991	恩納村教育委員会
宇茂佐古島遺跡	名 護 市	1991	名護市教育委員会
塩川井(ジャガーガー)遺跡	多 良 間 村	1991	多良間村教育委員会
石垣貝塚	石 垣 市	1991	石垣市教育委員会
平敷屋古島遺跡	勝 連 町	1991	勝連町教育委員会
首里旧寒川村跡	那 覇 市	1991	那覇市教育委員会
中城候殿跡	那 覇 市	1991	沖縄県教育委員会
喜友名東原ヌバタキ遺跡	宜 野 湾 市	1991	宜野湾市教育委員会
連道原貝塚	読 谷 村	1991	読谷村教育委員会
真志喜森川原遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
首里旧金城村跡	那 覇 市	1992	那覇市教育委員会
ンブフル遺跡	竹 富 町	1992	竹富町教育委員会
前原第二遺跡 (E地点)	宜 野 座 村	1992	宜野座村教育委員会
部瀬名貝塚	名 護 市	1992	名護市教育委員会
喜納焼古窯跡	読 谷 村	1992	読谷村教育委員会
大原貝塚	具 志 川 村	1992	具志川村教育委員会
山城古島遺跡	糸 満 市	1992	糸満市教育委員会
佐慶グスク	糸 満 市	1992	糸満市教育委員会
友利遺跡	城 辺 町	1992	城辺町教育委員会
識名貝塚	那 覇 市	1992	那覇市教育委員会
カイジ浜貝塚	竹 富 町	1992	沖縄県教育委員会
大川東ノハカ遺跡	石 垣 市	1992	石垣市教育委員会
北谷城	北 谷 町	1992	北谷町教育委員会
伊佐前原遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
具志川島遺跡群	伊 是 名 村	1992	伊是名村教育委員会
高知口原遺跡	読 谷 村	1992	読谷村教育委員会
那崎原遺跡	那 覇 市	1992	那覇市教育委員会
宜野湾市クシヌウタキ遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
喜友名東原ヌバタキ遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
友利遺跡	城 辺 町	1992	城辺町教育委員会
カラ岳東貝塚	石 垣 市	1992	石垣市教育委員会
内間西原古墓群	浦 添 市	1992	浦添市教育委員会
喜如嘉貝塚	大 宜 味 村	1992	沖縄県教育委員会
平敷屋トウバル遺跡	勝 連 町	1992	沖縄県教育委員会
大山岳之佐久原北方遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
新城古集落遺跡	宜 野 湾 市	1992	宜野湾市教育委員会
具志川グスク遺跡	具 志 川 市	1992	具志川市教育委員会
志喜屋グスク遺跡	知 念 村	1992	知念村教育委員会
阿波根古島遺跡	糸 満 市	1992	糸満市教育委員会
下上原貝塚	知 念 村	1992	知念村教育委員会
辺野古の一里塚	名 護 市	1992	名護市教育委員会
上原風葬墓群	竹 富 町	1992	竹富町教育委員会
牧志御願東方遺跡	那 覇 市	1992	那覇市教育委員会
真嘉比・古島古墓群(Ⅰ地区)	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
宇地泊兼久原第三遺跡	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
宇地泊兼久原第二遺跡	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
奥間ノ口墓	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
住吉遺物散布地(洞穴)及び古墓群	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
小城盛遺跡	竹 富 町	1993	竹富町教育委員会
嘉手納貝塚	嘉 手 納 町	1993	嘉手納町教育委員会
屋良グスク	嘉 手 納 町	1993	嘉手納町教育委員会
与那覇クボ御嶽遺跡	南 風 原 町	1993	南風原町教育委員会
野底遺跡	石 垣 市	1993	石垣市教育委員会
渡嘉敷後原古墓群	豊 見 城 村	1993	豊見城村教育委員会
仲栄真グスク	玉 城 村	1993	玉城村教育委員会
船越グスク	玉 城 村	1993	玉城村教育委員会
野嵩ウガンスカタ遺跡	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
真栄里貝塚	糸 満 市	1993	糸満市教育委員会
友利元島遺跡	城 辺 町	1993	城辺町教育委員会
友利古墓群	城 辺 町	1993	城辺町教育委員会
野嵩長迫原古墓群	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
南山城跡	糸 満 市	1993	糸満市教育委員会
真志喜蔵当原遺跡	宜 野 湾 市	1995	宜野湾市教育委員会
伊佐前原第二遺跡	宜 野 湾 市	1995	宜野湾市教育委員会
伊佐前原第一遺跡	宜 野 湾 市	1995	宜野湾市教育委員会
真志喜森川原第二遺跡	宜 野 湾 市	1995	宜野湾市教育委員会
真志喜森川原第二遺跡	宜 野 湾 市	1995	宜野湾市教育委員会
クニンドー村遺跡	南 風 原 町	1995	南風原町教育委員会
北谷城	北 谷 町	1995	北谷町教育委員会
シーマ御嶽遺跡	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
喜屋武グスク	具 志 川 市	1993	具志川市教育委員会
安里神無良川古墓群	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
波上遺跡	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
クニンドー遺跡	南 風 原 町	1993	南風原町教育委員会
上原濡原遺跡	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
阿波根古島遺跡 (I地点)	糸 満 市	1993	糸満市教育委員会
北谷城	北 谷 町	1993	北谷町教育委員会
首里旧金城村跡	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
首里旧金城村跡	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
内間西原古墓群	浦 添 市	1993	浦添市教育委員会
平屋敷トウバル遺跡	勝 連 町	1993	沖縄県教育委員会
スグルスガール北西遺跡	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
安謝前東原遺跡	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
ナーチャー毛古墓群	那 覇 市	1993	那覇市教育委員会
喜友名東原ヌバキ遺跡	宜 野 湾 市	1993	宜野湾市教育委員会
谷茶貝塚	恩 納 村	1994	恩納村教育委員会
野嵩ウガンスカタ遺跡	宜 野 湾 市	1994	宜野湾市教育委員会
大山マヤーガマ第二洞窟遺跡	宜 野 湾 市	1994	宜野湾市教育委員会
石嶺フクヰ山古墓群	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
伊祖のいめ御拝領墓	浦 添 市	1994	浦添市教育委員会
沢岫端川原古墓群北側1号墓	浦 添 市	1994	浦添市教育委員会
沢岫古墓群東1号墓	浦 添 市	1994	浦添市教育委員会
上勢頭区古墓群	北 谷 町	1994	北谷町教育委員会
黄金森遺跡	南 風 原 町	1994	南風原町教育委員会
北谷城	北 谷 町	1994	北谷町教育委員会
中城御殿跡	那 覇 市	1994	沖縄県立博物館
里東原遺物散布地	糸 満 市	1994	糸満市教育委員会
与那堀遺跡	糸 満 市	1994	糸満市教育委員会
慶来慶田城翁屋敷跡	竹 富 町	1994	沖縄県教育委員会
大里城跡	大 里 村	1994	大里村教育委員会
伊波古島遺跡	石 川 市	1994	石川市教育委員会
壺屋古窯群	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
安謝前原遺跡	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
クニンドー遺跡	南 風 原 町	1994	南風原町教育委員会
奥間ノロ墓遺跡	宜 野 湾 市	1994	宜野湾市教育委員会
志堅原遺跡	玉 城 村	1994	玉城村教育委員会
喜屋武グスク	具 志 川 市	1994	具志川市教育委員会
八重山蔵元跡	石 垣 市	1994	石垣市教育委員会
保栄茂西原古墓群1号墓	豊 見 城 村	1994	豊見城村教育委員会
真嘉比・古島古墓群(2地区)	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
安謝西原古墓群	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
識名堂第二貝塚	仲 里 村	1994	仲里村教育委員会
旧天界寺跡	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
添道遺跡	多 良 間 村	1994	多良間村教育委員会
新城古集落遺跡	宜 野 湾 市	1994	宜野湾市教育委員会
上原濡原遺跡	宜 野 湾 市	1994	宜野湾市教育委員会
安謝東原南遺跡	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
我那覇後原遺物散布地	豊 見 城 村	1994	豊見城村教育委員会
平敷屋古島遺跡	勝 連 町	1994	勝連町教育委員会
旧天久村古井戸遺跡	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
首里城跡	那 覇 市	1994	沖縄県教育委員会
湧田古窯跡	那 覇 市	1994	沖縄県教育委員会
湧田古窯跡	那 覇 市	1994	沖縄県教育委員会
上の毛遺跡	那 覇 市	1994	沖縄県教育委員会
安謝前東原遺跡	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
首里旧金城村跡	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
壺屋古窯跡	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
銘苅古墓群 C	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
ナーチャー毛古墓群(北)	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
銘苅古墓群 D	那 覇 市	1994	那覇市教育委員会
伊礼伊森原古墓群	北 谷 町	1994	北谷町教育委員会
野底遺跡	石 垣 市	1994	石垣市教育委員会
友利元島遺跡他友利古墓	城 辺 町	1994	城辺町教育委員会
テイルラフク遺跡	平 良 市	1994	平良市教育委員会
溝原貝塚	名 護 市	1994	名護市教育委員会
アナバク貝塚	名 護 市	1994	名護市教育委員会
墨屋原浜崎遺跡	名 護 市	1994	名護市教育委員会
屋部貝塚	名 護 市	1994	名護市教育委員会
安和貝塚	名 護 市	1994	名護市教育委員会
喜納焼古窯跡	読 谷 村	1994	読谷村教育委員会
小城盛遺跡	竹 富 町	1994	竹富町教育委員会
前川貝塚	玉 城 村	1995	玉城村教育委員会
溝原貝塚	名 護 市	1995	名護市教育委員会
友利元島遺跡	城 辺 町	1995	城辺町教育委員会
伊礼伊森原遺跡	北 谷 町	1995	北谷町教育委員会
旧天界寺跡	那 覇 市	1995	那覇市教育委員会
湧田古窯跡	那 覇 市	1995	沖縄県教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
湧田古窯跡	那 覇 市	1995	沖縄県教育委員会
慶来慶田城跡	竹 富 町	1995	沖縄県教育委員会
大里城跡	大 里 村	1995	大里村教育委員会
真壁グスク	糸 満 市	1995	糸満市教育委員会
字水釜下のカー	嘉 手 納 町	1995	嘉手納町教育委員会
溝原貝塚	名 護 市	1995	名護市教育委員会
江洲グスク	具 志 川 市	1995	具志川市教育委員会
兼筒段古墓群	具 志 川 市	1995	具志川市教育委員会
首里旧金城村跡	那 覇 市	1995	那覇市教育委員会
首里旧金城村跡	那 覇 市	1995	那覇市教育委員会
壺屋古窯群	那 覇 市	1995	那覇市教育委員会
壺屋古窯群	那 覇 市	1995	那覇市教育委員会
石蔵貝塚	石 垣 市	1995	石垣市教育委員会
旧天界寺跡	那 覇 市	1995	那覇市教育委員会
具志頭グスク	具 志 頭 村	1995	具志頭村教育委員会
銘苅古墓群南地区	那 覇 市	1995	那覇市教育委員会
渡嘉敷後原遺跡(渡嘉敷グスク)	豊 見 城 村	1995	豊見城村教育委員会
(仮)真栄里・新川線埋蔵文化財	石 垣 市	1995	石垣市教育委員会
真嘉比・古島遺跡群	那 覇 市	1995	那覇市教育委員会
与那堀遺跡	下 地 町	1995	下地町教育委員会
松尾原洞穴遺跡	粟 国 村	1995	粟国村教育委員会
西御願貝塚	粟 国 村	1995	粟国村教育委員会
前原遺跡	宜 野 座 村	1995	宜野座村教育委員会
ミーキ原第三遺跡	宜 野 座 村	1995	宜野座村教育委員会
大度貝塚	糸 満 市	1996	糸満市教育委員会
新城グスク	具 志 頭 村	1996	具志頭村教育委員会
旧天界寺跡	那 覇 市	1996	那覇市教育委員会
首里金城村跡	那 覇 市	1996	那覇市教育委員会
後兼久原遺跡	北 谷 町	1996	北谷町教育委員会
前原遺跡	宜 野 座 村	1996	宜野座村教育委員会
斎場御嶽	知 念 村	1996	知念村教育委員会
カンチャ古島遺跡	知 念 村	1996	知念村教育委員会
翁長原遺跡散布地A地点	豊 見 城 村	1996	豊見城村教育委員会
サーターヤースヒラ	豊 見 城 村	1996	豊見城村教育委員会
アカジャンガー貝塚	具 志 川 市	1996	具志川市教育委員会
クニンドー遺跡	南 風 原 町	1996	南風原町教育委員会
南風原陸軍病院壕	南 風 原 町	1996	南風原町教育委員会
西御願貝塚	粟 国 村	1996	粟国村教育委員会
慶来慶田城	竹 富 町	1996	沖縄県教育委員会
大里城跡	大 里 村	1996	大里村教育委員会
真栄里貝塚	糸 満 市	1996	糸満市教育委員会
津嘉山古島遺跡	南 風 原 町	1996	南風原町教育委員会
津嘉山古島遺跡	南 風 原 町	1996	南風原町教育委員会
仲間村跡	南 風 原 町	1996	南風原町教育委員会
津嘉山クボ遺跡	南 風 原 町	1996	南風原町教育委員会
喜名番跡	読 谷 村	1996	読谷村教育委員会
大謝名カンジャーマガマ洞穴遺跡	宜 野 湾 市	1996	宜野湾市教育委員会
真志喜蔵当原遺跡	宜 野 湾 市	1996	宜野湾市教育委員会
松尾原洞穴遺跡	粟 国 村	1996	粟国村教育委員会
安波茶橋及び浦添街道	浦 添 市	1996	浦添市教育委員会
銘苅古墓群南地区	那 覇 市	1996	那覇市教育委員会
銘苅古墓群南地区	那 覇 市	1996	那覇市教育委員会
真嘉比・古島古墓群	那 覇 市	1996	那覇市教育委員会
那覇港周辺遺跡群旧東村地区	那 覇 市	1996	那覇市教育委員会
真久原遺跡	浦 添 市	1996	浦添市教育委員会
渡嘉敷後原遺跡	豊 見 城 村	1996	豊見城村教育委員会
尻並遺跡	平 良 市	1996	平良市教育委員会
当山の石畳	浦 添 市	1996	浦添市教育委員会
大山マヤーガマ第二洞窟遺跡	宜 野 湾 市	1996	宜野湾市教育委員会
首里金城村跡	那 覇 市	1996	那覇市教育委員会
荷川取海崖古墓群	平 良 市	1997	平良市教育委員会
伊是名古島遺跡	伊 是 名 村	1997	伊是名村教育委員会
経塚子ノ方原古墓群第1地区	浦 添 市	1997	浦添市教育委員会
字地泊兼久原第二遺跡	宜 野 湾 市	1997	宜野湾市教育委員会
ナガラ原東貝塚	伊 江 村	1997	伊江村教育委員会
大山マヤーガマ第二洞窟遺跡	宜 野 湾 市	1997	宜野湾市教育委員会
津嘉山古島遺跡	南 風 原 町	1997	南風原町教育委員会
津嘉山古島遺跡	南 風 原 町	1997	南風原町教育委員会
南風原陸軍病院壕	南 風 原 町	1997	南風原町教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
真栄里貝塚	糸 満 市	1997	糸満市教育委員会
大里城跡	大 里 村	1997	大里村教育委員会
崎原遺跡	今 婦 仁 村	1997	今婦仁村教育委員会
花城村跡遺跡	竹 富 町	1997	竹富町教育委員会
西御願貝塚	粟 国 村	1997	粟国村教育委員会
銘苅原遺跡	那 覇 市	1997	那覇市教育委員会
真嘉比・古島古墓群	那 覇 市	1997	那覇市教育委員会
トゥグル浜遺跡	与 那 国 町	1997	沖縄県教育委員会
大山前門原第二遺跡	宜 野 湾 市	1997	宜野湾市教育委員会
伊是名古島遺跡	伊 是 名 村	1997	伊是名村教育委員会
山嶺毛	糸 満 市	1997	糸満市教育委員会
喜友名泉	宜 野 湾 市	1997	宜野湾市教育委員会
宇地泊兼久原第一遺跡	宜 野 湾 市	1997	宜野湾市教育委員会
安謝西原古墓群	那 覇 市	1997	那覇市教育委員会
首里旧金城村跡 (I)	那 覇 市	1997	那覇市教育委員会
上原風葬墓群15号墓	竹 富 町	1997	竹富町教育委員会
ナガラ原東貝塚	伊 江 村	1997	伊江村教育委員会
首里崎山古墓群	那 覇 市	1997	那覇市教育委員会
銘苅原南遺跡	那 覇 市	1997	那覇市教育委員会
当山後原遺跡	浦 添 市	1997	浦添市教育委員会
(仮)川平地内陶磁器出土地点	石 垣 市	1997	石垣市教育委員会
阿良東貝塚	伊 江 村	1997	伊江村教育委員会
北谷城	北 谷 町	1997	北谷町教育委員会
川平ザンドウ原第二貝塚	石 垣 市	1997	石垣市教育委員会
大山マヤーガマ第二洞穴遺跡	宜 野 湾 市	1997	宜野湾市教育委員会
大泊浜貝塚	竹 富 町	1997	小田静夫・安里 進
ガルマンドウ原洞穴遺跡	具 志 頭 村	1997	上井+浜人+藤+ミューザ74編長松下幸
仲間村跡	南 風 原 町	1998	南風原町教育委員会
仲間村跡	南 風 原 町	1998	南風原町教育委員会
内間西原古墓群	浦 添 市	1998	浦添市教育委員会
宇地泊兼久原第一遺跡	宜 野 湾 市	1998	宜野湾市教育委員会
宮平遺跡(南風原間切番所跡)	南 風 原 町	1998	南風原町教育委員会
伊佐前原第一遺跡	宜 野 湾 市	1998	沖縄県教育委員会
伊佐前原古墓群	宜 野 湾 市	1998	沖縄県教育委員会
喜友名泉	宜 野 湾 市	1998	宜野湾市教育委員会
当間クボウ遺跡	中 城 村	1998	中城村教育委員会
ナルカー	北 谷 町	1998	北谷町教育委員会
名護松尾原南遺跡	那 覇 市	1998	那覇市教育委員会
伊是名古島遺跡	伊 是 名 村	1998	伊是名村教育委員会
真志喜石川第一遺跡	宜 野 湾 市	1998	宜野湾市教育委員会
真志喜石川第一遺跡	宜 野 湾 市	1998	宜野湾市教育委員会
大道遺跡	多 良 間 村	1998	多良間村教育委員会
崎山御嶽遺跡	那 覇 市	1998	那覇市教育委員会
首里旧金城村跡 (I)	那 覇 市	1998	那覇市教育委員会
伝ベーミシユク村跡遺跡	竹 富 町	1998	竹富町教育委員会
大地原遺跡	今 婦 仁 村	1998	今婦仁村教育委員会
南風原陸軍病院群	南 風 原 町	1998	南風原町教育委員会
真嘉比・古島古墓群	那 覇 市	1998	那覇市教育委員会
大里城跡	大 里 村	1998	大里村教育委員会
宇地泊兼久原第三遺跡	宜 野 湾 市	1998	宜野湾市教育委員会
北谷城	北 谷 町	1998	北谷町教育委員会
銘苅直禄原遺跡	那 覇 市	1998	那覇市教育委員会
喜屋武グスク	具 志 川 市	1998	具志川市教育委員会
西御願貝塚	粟 国 村	1998	粟国村教育委員会
渡り地原遺跡	伊 江 村	1998	粟国村教育委員会
長根原遺跡	今 婦 仁 村	1998	今婦仁村教育委員会
港川フィッシャー遺跡	具 志 頭 村	1998	具志頭村教育委員会
ヤッチのガマ・カンジン原古墓群	具 志 川 村	1998	沖縄県教育委員会
浦添貝塚	浦 添 市	1998	浦添市教育委員会
大原第2貝塚	具 志 川 村	1998	具志川村教育委員会
桃原帆原水田遺跡	国 頭 村	1998	国頭村教育委員会
花城村跡遺跡	竹 富 町	1998	竹富町教育委員会
伊波前原古墓群	石 川 市	1998	石川市教育委員会
上田古島遺跡	豊 見 城 村	1998	豊見城村教育委員会
銘苅直禄原遺跡	那 覇 市	1998	那覇市教育委員会
銘苅原南遺跡	那 覇 市	1998	那覇市教育委員会
崎枝赤崎貝塚	石 垣 市	1998	石垣市教育委員会
前里貝塚関連生産遺跡	糸 満 市	1998	糸満市教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
砂川元島遺跡	城 辺 町	1998	城辺町教育委員会
佐敷グスク	佐 敷 町	1998	佐敷町教育委員会
野甫貝塚	伊 平 屋 村	1998	伊平屋村教育委員会
照原散布地	中 城 村	1998	中城村教育委員会
壺川原散布地	中 城 村	1998	中城村教育委員会
真尻原散布地	中 城 村	1998	中城村教育委員会
糸甫遺跡	中 城 村	1998	中城村教育委員会
ナガラ原東貝塚	伊 江 村	1998	熊本大学考古学研究室
カヤウチバンタ遺跡	国 頭 村	1998	安里嗣淳
ガルマンドウ原洞穴遺跡	具 志 頭 村	1998	上井+浜人+藤+ミューザ74編長松下幸
崎原遺跡	今 婦 仁 村	1999	今婦仁村教育委員会
仏ン当遺跡	今 婦 仁 村	1999	今婦仁村教育委員会
伊佐前原第一遺跡	宜 野 湾 市	1999	沖縄県教育委員会
ヤッチのガマ・カンジン原古墓群	具 志 川 村	1999	沖縄県教育委員会
当山東原遺跡	浦 添 市	1999	浦添市教育委員会
壺屋古窯跡	那 覇 市	1999	那覇市教育委員会
綾門大道	那 覇 市	1999	沖縄県教育委員会
伊良波先祖原遺物散布地A地点	豊 見 城 村	1999	豊見城村教育委員会
崎山古墓群	那 覇 市	1999	那覇市教育委員会
伊是名古島遺跡	伊 是 名 村	1999	伊是名村教育委員会
伊波前原古墓群	石 川 市	1999	石川市教育委員会
屋比久グスク	佐 敷 町	1999	佐敷町教育委員会
前原貝塚	宜 野 座 村	1999	宜野座村教育委員会
北谷城	北 谷 町	1999	北谷町教育委員会
大里城跡	大 里 村	1999	大里村教育委員会
銘苅港川原遺跡	那 覇 市	1999	那覇市教育委員会
仲間村跡B地点	南 風 原 町	1999	南風原町教育委員会
新城下原第二遺跡	宜 野 湾 市	1999	沖縄県教育委員会
上村遺跡	竹 富 町	1999	竹富町教育委員会
港川フィッシャー遺跡	具 志 頭 村	1999	具志頭村教育委員会
安次嶺地嶽野尾原古墓群	那 覇 市	1999	那覇市教育委員会
新里元島上方台地遺跡	上 野 村	1999	沖縄県教育委員会
真志喜ノロ殿内拝所遺跡	宜 野 湾 市	1999	宜野湾市教育委員会
山川原古墓群	北 谷 町	1999	北谷町教育委員会
花城村跡遺跡	竹 富 町	1999	竹富町教育委員会
前田真知堂原古墓群	浦 添 市	1999	浦添市教育委員会
喜屋武グスク	具 志 川 市	1999	具志川市教育委員会
宇佐敷下代原遺跡	佐 敷 町	1999	佐敷町教育委員会
仲間グスク	糸 満 市	1999	糸満市教育委員会
部瀬名貝塚	名 護 市	1999	名護市教育委員会
宇地泊兼久原第二遺跡	宜 野 湾 市	1999	宜野湾市教育委員会
根間・西里遺跡	平 良 市	1999	平良市教育委員会
西御願貝塚	粟 国 村	1999	粟国村教育委員会
銘苅古墓群北地区	那 覇 市	1999	那覇市教育委員会
(仮称)仲間グスク北西土盛	糸 満 市	1999	糸満市教育委員会
南風原陸軍病院壕	南 風 原 町	1999	南風原町教育委員会
ナーラディー山遺跡ほか	多 良 間 村	1999	多良間村教育委員会
ナガラ原東貝塚	伊 江 村	1999	熊本大学考古学研究室
新生遺跡	城 辺 町	1999	沖縄国際大学
牧港上野原古墓群	浦 添 市	2000	浦添市教育委員会
当山東原遺跡	浦 添 市	2000	浦添市教育委員会
宇地泊兼久原第一・第二遺跡	宜 野 湾 市	2000	宜野湾市教育委員会
仲間村跡B地点	南 風 原 町	2000	南風原町教育委員会
仲間村跡B地点	南 風 原 町	2000	南風原町教育委員会
津嘉山クボ遺跡	南 風 原 町	2000	南風原町教育委員会
熱田原貝塚	知 念 村	2000	知念村教育委員会
内間遺跡	浦 添 市	2000	浦添市教育委員会
名蔵瓦窯跡	石 垣 市	2000	石垣市教育委員会
旧小禄村跡	那 覇 市	2000	那覇市教育委員会
砂川元島遺跡	城 辺 町	1998	城辺町教育委員会
佐敷グスク	佐 敷 町	1998	佐敷町教育委員会
野甫貝塚	伊 平 屋 村	1998	伊平屋村教育委員会
照原散布地	中 城 村	1998	中城村教育委員会
壺川原散布地	中 城 村	1998	中城村教育委員会
真尻原散布地	中 城 村	1998	中城村教育委員会
糸甫遺跡	中 城 村	1998	中城村教育委員会
ナガラ原東貝塚	伊 江 村	1998	熊本大学考古学研究室
カヤウチバンタ遺跡	国 頭 村	1998	安里嗣淳

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
ガルマンドウ原洞穴遺跡	具志頭村	1998	土井+高橋+藤原+ミュージアム+龍谷+下幸
崎原遺跡	今帰仁村	1999	今帰仁村教育委員会
仏ン当遺跡	今帰仁村	1999	今帰仁村教育委員会
伊佐前原第一遺跡	宜野湾市	1999	沖縄県教育委員会
ヤッチのガマ・カンジン原古墓群	具志川村	1999	沖縄県教育委員会
当山東原遺跡	浦添市	1999	浦添市教育委員会
壺屋古窯跡	那覇市	1999	那覇市教育委員会
綾門大道	那覇市	1999	沖縄県教育委員会
伊良波先祖原遺物散布地A地点	豊見城村	1999	豊見城村教育委員会
崎山古墓群	那覇市	1999	那覇市教育委員会
伊是名古島遺跡	伊是名村	1999	伊是名村教育委員会
伊波前原古墓群	石川市	1999	石川市教育委員会
屋比久グスク	佐敷町	1999	佐敷町教育委員会
前原貝塚	宜野湾市	1999	宜野湾市教育委員会
北谷城	北谷町	1999	北谷町教育委員会
大里城跡	大里村	1999	大里村教育委員会
銘苅港川原遺跡	那覇市	1999	那覇市教育委員会
仲間村跡B地点	南風原町	1999	南風原町教育委員会
新城下原第二遺跡	宜野湾市	1999	沖縄県教育委員会
上村遺跡	竹富町	1999	竹富町教育委員会
港川フィッシャー遺跡	具志頭村	1999	具志頭村教育委員会
安次嶺地獄野尾原古墓群	那覇市	1999	那覇市教育委員会
新里元島上方台地遺跡	上野村	1999	沖縄県教育委員会
真志喜ノロ殿内拝所遺跡	宜野湾市	1999	宜野湾市教育委員会
山川原古墓群	北谷町	1999	北谷町教育委員会
花城村跡遺跡	竹富町	1999	竹富町教育委員会
前田真知堂原古墓群	浦添市	1999	浦添市教育委員会
喜屋武グスク	具志川市	1999	具志川市教育委員会
宇佐敷下代原遺跡	佐敷町	1999	佐敷町教育委員会
仲間グスク	糸満市	1999	糸満市教育委員会
部瀬名貝塚	名護市	1999	名護市教育委員会
宇地泊兼久原第二遺跡	宜野湾市	1999	宜野湾市教育委員会
根間・西里遺跡	平良市	1999	平良市教育委員会
西御願貝塚	粟国村	1999	粟国村教育委員会
銘苅古墓群北地区	那覇市	1999	那覇市教育委員会
(仮称)仲間グスク北西土盛	糸満市	1999	糸満市教育委員会
南風原陸軍病院壕	南風原町	1999	南風原町教育委員会
ナーラディー山遺跡ほか	多良間村	1999	多良間村教育委員会
ナガラ原東貝塚	伊江村	1999	熊本大学考古学研究室
新生遺跡	城辺町	1999	沖縄国際大学
牧港上野原古墓群	浦添市	2000	浦添市教育委員会
当山東原遺跡	浦添市	2000	浦添市教育委員会
宇地泊兼久原第一・第二遺跡	宜野湾市	2000	宜野湾市教育委員会
仲間村跡B地点	南風原町	2000	南風原町教育委員会
仲間村跡B地点	南風原町	2000	南風原町教育委員会
津嘉山クボ遺跡	南風原町	2000	南風原町教育委員会
熱田原貝塚	知念村	2000	知念村教育委員会
内間遺跡	浦添市	2000	浦添市教育委員会
名蔵瓦窯跡	石垣市	2000	石垣市教育委員会
旧小禄村跡	那覇市	2000	那覇市教育委員会
喜田盛遺跡	石垣市	2000	石垣市教育委員会
新城下原第二遺跡	宜野湾市	2000	県立埋蔵文化財センター
佐敷グスク	佐敷町	2000	佐敷町教育委員会
砂元元島遺跡	城辺町	2000	城辺町教育委員会
安謝西原古墳群	那覇市	2000	那覇市教育委員会
大里城跡	大里村	2000	大里村教育委員会
山嶺毛頂部北側古墓群	糸満市	2000	糸満市教育委員会
楚辺ウガンヒラー北方遺跡	読谷村	2000	読谷村教育委員会
志堅原遺跡	玉城村	2000	玉城村教育委員会
識名原遺跡	那覇市	2000	那覇市教育委員会
大作原古墓群	北谷町	2000	北谷町教育委員会
首里旧真和志村跡	那覇市	2000	那覇市教育委員会
後兼久原遺跡	北谷町	2000	県立埋蔵文化財センター
部瀬南遺跡	名護市	2000	名護市教育委員会
喜佐真御嶽遺跡	下地町	2000	下地町教育委員会
真志喜森川原第一遺跡	宜野湾市	2000	宜野湾市教育委員会
花城村跡遺跡	竹富町	2000	竹富町教育委員会
旧山川村跡	那覇市	2000	那覇市教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
根間・西里遺跡	平良市	2000	平良市教育委員会
港川フィッシャー遺跡	具志頭村	2000	具志頭村教育委員会
宮国元島遺跡	上野村	2000	上野村教育委員会
バリマガー遺跡	多良間村	2000	多良間村教育委員会
前田真知堂古墓群等	浦添市	2000	浦添市教育委員会
壺屋古窯群I	那覇市	2000	那覇市教育委員会
仲間後原遺跡	浦添市	2000	浦添市教育委員会
浦添番所跡	浦添市	2000	浦添市教育委員会
旧末吉村跡	那覇市	2000	那覇市教育委員会
旧神応寺跡	那覇市	2000	那覇市教育委員会
大度貝塚	糸満市	2000	糸満市教育委員会
玉那覇村跡	南風原町	2000	南風原町教育委員会
松山御殿跡	那覇市	2000	那覇市教育委員会
南風原陸軍病院壕群	南風原町	2000	南風原町教育委員会
真手川原遺物散布地	大里村	2000	大里村教育委員会
後兼久原遺跡	北谷町	2000	県立埋蔵文化財センター
真嘉比・古島古墓群	那覇市	2000	那覇市教育委員会
島仲村跡遺跡	与那国町	2000	与那国町教育委員会
ナガラ原東貝塚	伊江村	2000	熊本大学文学部
アカジャンガー貝塚	具志川市	2000	沖縄国際大学文学部
新生遺跡	城辺町	2000	沖縄国際大学文学部
基地内文化財分布調査	宜野湾市	2000	沖縄県教育委員会
戦争遺跡詳細分布調査	本島中部地区	2000	沖縄県教育委員会
御茶屋御殿遺構確認調査	那覇市	2000	沖縄県教育委員会
御茶屋御殿遺構確認調査	那覇市	2000	那覇市教育委員会
北谷城ほか範囲確認調査	北谷町	2000	北谷町教育委員会
伊礼原B遺跡ほか範囲確認調査	北谷町	2000	北谷町教育委員会
大渡貝塚ほか範囲確認調査	糸満市	2000	糸満市教育委員会
与那国町島仲区遺跡詳細分布調査	与那国町	2000	与那国町教育委員会
佐敷グスク範囲確認調査	佐敷町	2000	佐敷町教育委員会
志堅原遺跡発掘調査	玉城村	2000	玉城村教育委員会
沖縄市内遺跡詳細分布調査	沖縄市	2000	沖縄市教育委員会
町内遺跡発掘調査	勝連町	2000	勝連町教育委員会
港川フィッシャー遺跡発掘調査	具志頭村	2000	具志頭村教育委員会
名蔵窯跡ほか発掘調査	石垣市	2000	石垣市教育委員会
市内遺跡発掘調査	宜野湾市	2000	宜野湾市教育委員会
尻川遺跡ほか発掘調査	平良市	2000	平良市教育委員会
大里城跡発掘調査	大里村	2000	大里村教育委員会
首里旧金城村跡発掘調査	那覇市	2000	那覇市教育委員会
花城村跡遺跡ほか発掘調査	竹富町	2000	竹富町教育委員会
喜屋武グスクほか発掘調査	具志川市	2000	具志川市教育委員会
上里グスクほか発掘調査	糸満市	2000	糸満市教育委員会
塩川御嶽遺跡ほか発掘調査	多良間村	2000	多良間村教育委員会
村内遺跡発掘調査	読谷村	2000	読谷村教育委員会
首里城跡(守礼門周辺地区)	那覇市	2000	県立埋蔵文化財センター
伊佐前原第一遺跡	宜野湾市	2000	県立埋蔵文化財センター
ヤッチのガマ・カンジン原古墓群	具志川村	2000	県立埋蔵文化財センター
新里元島上方台地遺跡・新里元島遺跡	上野村	2000	県立埋蔵文化財センター
大堂原貝塚	名護市	2000	名護市教育委員会
部瀬名貝塚	名護市	2000	名護市教育委員会
牧港宜野湾ノロ墓	浦添市	2000	浦添市教育委員会
銘苅原遺跡	那覇市	2000	那覇市教育委員会
崎山古墓群	那覇市	2000	那覇市教育委員会
安次嶺地獄野尾原古墓群	那覇市	2000	那覇市教育委員会
山川原古墓群(2)	北谷町	2000	北谷町教育委員会
東宇地原古墓群	北谷町	2000	北谷町教育委員会
桃園帆原水田遺跡	国頭村	2000	国頭村教育委員会
熱田原貝塚	知念村	2000	知念村教育委員会
佐敷下代原遺跡	佐敷町	2000	佐敷町教育委員会
上村遺跡	竹富町	2000	竹富町教育委員会
平良川原遺跡	佐敷町	2001	佐敷町教育委員会
喜友名後原・勢頭原古墓群	宜野湾市	2001	宜野湾市教育委員会
真志喜森川原第一遺跡	宜野湾市	2001	宜野湾市教育委員会
大渡貝塚	糸満市	2001	糸満市教育委員会
浦添番所跡ほか	浦添市	2001	浦添市教育委員会
ワイトウイの構築築(東)	糸満市	2001	糸満市教育委員会
御茶屋御殿跡	那覇市	2001	県立埋蔵文化財センター
内間カンジャンヤーガマ遺跡	浦添市	2001	浦添市教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
大堂原貝塚	名 護 市	2001	名護市教育委員会
宜保古島遺跡	豊見城村	2001	豊見城村教育委員会
佐敷グスク	佐 敷 町	2001	佐敷町教育委員会
当山東原遺跡	浦 添 市	2001	浦添市教育委員会
尻並遺跡	平 良 市	2001	埋蔵文化財センター
ミーグスク	大 里 村	2001	大里村教育委員会
拜山遺跡	浦 添 市	2001	浦添市教育委員会
新城下原第二遺跡	宜野湾市	2001	埋蔵文化財センター
港川フィッシャー遺跡	具志頭村	2001	具志頭村教育委員会
島宜原集落跡遺跡	佐 敷 町	2001	佐敷町教育委員会
稲マタ原古墓群	浦 添 市	2001	浦添市教育委員会
前田・経塚古墓群	浦 添 市	2001	浦添市教育委員会
屋部前田原貝塚	名 護 市	2001	名護市教育委員会
大作原古墓群	北 谷 町	2001	北谷町教育委員会
東宇地原古墓群	北 谷 町	2001	北谷町教育委員会
嘉数テラガマ洞穴遺跡	宜野湾市	2001	宜野湾市教育委員会
古宇利原遺跡	今 婦 仁 村	2001	今婦仁村教育委員会
仲間後原古墓群5号墓	浦 添 市	2001	浦添市教育委員会
前田真知堂古墓群	浦 添 市	2001	浦添市教育委員会
首里旧大中村跡	那 覇 市	2001	那覇市教育委員会
タカマサリ古墓群	那 覇 市	2001	那覇市教育委員会
新生（アラフ）遺跡	城 辺 町	2001	江上幹幸
ナガラ原東貝塚	伊 江 村	2001	熊本大学考古学研究室
アカジャンガー貝塚	具志川市	2001	沖縄国際大学
浦底遺跡	城 辺 町	2001	土肥直美
東宇地原古墓群	北 谷 町	2002	北谷町教育委員会
真手川原遺物散布地	大 里 村	2002	大里村教育委員会
銘苅古墓群北E地区	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
御茶屋御殿跡	那 覇 市	2002	埋蔵文化財センター
前田近世古墓群	浦 添 市	2002	浦添市教育委員会
識名原遺跡	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
シナグスク	今 婦 仁 村	2002	今婦仁村教育委員会
屋部前田原貝塚	名 護 市	2002	名護市教育委員会
久志大川上流域生産遺跡	名 護 市	2002	名護市教育委員会
銘苅古墓群北F地区	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
嘉田地区古墓群	与 那 国 町	2002	埋蔵文化財センター
佐敷上グスク	佐 敷 町	2002	佐敷町教育委員会
栄野比安城原古墓群	具志川市	2002	具志川市教育委員会
宜野座ス古島遺跡	宜野座村	2002	宜野座村教育委員会
ナカンダカリヤマの古墓群	那 覇 市	2002	埋蔵文化財センター
銘苅古墓群北地区	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
嘉数テラガマ洞穴遺跡	宜野湾市	2002	宜野湾市教育委員会
新城下原第2遺跡	宜野湾市	2002	埋蔵文化財センター
城岳古墓群	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
前田・経塚近世古墓群	浦 添 市	2002	浦添市教育委員会
古宇利原A遺跡	今 婦 仁 村	2002	今婦仁村教育委員会
浦添原遺跡・浦添番所跡	浦 添 市	2002	浦添市教育委員会
玉城朝薫の墓	浦 添 市	2002	浦添市教育委員会
大度貝塚	糸 満 市	2002	糸満市教育委員会
アンチの上貝塚	本 部 町	2002	本部町教育委員会
首里旧金城村跡	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
安謝前原北遺跡	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
安謝東原北遺跡	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
首里旧金城村跡	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
当山宗地原古墓群1号墓	浦 添 市	2002	浦添市教育委員会
前田真知堂古墓群	浦 添 市	2002	浦添市教育委員会
南風原陸軍病院壕跡	南 風 原 町	2002	南風原町教育委員会
野嵩タマタ原遺跡	宜野湾市	2002	宜野湾市教育委員会
当間古墓群・当間溝江原遺跡	那 覇 市	2002	那覇市教育委員会
真志喜白台原遺跡	宜野湾市	2002	宜野湾市教育委員会
アカジャンガー貝塚	具志川市	2002	上原 静
ナガラ原東貝塚	伊 江 村	2002	木下 尚子
浦底遺跡	城 辺 町	2002	土肥 直美
新生（アラフ）遺跡	城 辺 町	2002	江上 幹幸
網取遺跡	竹 富 町	2002	北條 芳隆
今婦仁城跡周辺遺跡	今 婦 仁 村	2003	今婦仁村教育委員会
津堅貝塚	勝 連 町	2003	勝連町教育委員会

遺 跡 名	所在地	調査年	調査主体者
安謝東原北遺跡ほか	那 覇 市	2003	那覇市教育委員会
喜名焼古窯跡	読 谷 村	2003	読谷村教育委員会
普天間宮跡	宜野湾市	2003	宜野湾市教育委員会
前田・経塚近世墓群	浦 添 市	2003	浦添市教育委員会
前原貝塚	宜野座村	2003	宜野座村教育委員会
真手川原遺物散布地	大 里 村	2003	大里村教育委員会
役場壕跡	佐 敷 町	2003	佐敷町教育委員会
御茶屋御殿跡	那 覇 市	2003	埋蔵文化財センター
屋部前田原貝塚	名 護 市	2003	名護市教育委員会
仲間遺跡	浦 添 市	2003	浦添市教育委員会
嘉数テラガマ洞穴遺跡	宜野湾市	2003	宜野湾市教育委員会
クニンドー遺跡	南 風 原 町	2003	南風原町教育委員会
松尾古墓群	那 覇 市	2003	那覇市教育委員会
仲間後原遺跡	浦 添 市	2003	浦添市教育委員会
とどうまり浜遺跡	竹 富 町	2003	竹富町教育委員会
旧垣花村跡	那 覇 市	2003	那覇市教育委員会
佐敷上グスク	佐 敷 町	2003	佐敷町教育委員会
古宇利原A遺跡	今 婦 仁 村	2003	今婦仁村教育委員会
南風原陸軍病院壕群	南 風 原 町	2003	南風原町教育委員会
当山東原遺跡	浦 添 市	2003	浦添市教育委員会
首里旧金城村跡	那 覇 市	2003	那覇市教育委員会
大山富盛原第二・第三遺跡	宜野湾市	2003	埋蔵文化財センター
普天間カンジャヌウイ古墓群	宜野湾市	2003	宜野湾市教育委員会
城岳古墓群	那 覇 市	2003	那覇市教育委員会
喜屋武グスク	具志川市	2003	具志川市教育委員会
古宇利原B遺跡	今 婦 仁 村	2003	今婦仁村教育委員会
ナガラ原東貝塚	伊 江 村	2003	木下尚子
浦底遺跡	城 辺 町	2003	土肥直美
新生（アラフ）遺跡	城 辺 町	2003	江上幹幸
網取遺跡	竹 富 町	2003	大塚淑夫
カトゥラ貝塚	竹 富 町	2003	北條芳隆

琉球考古学文献散歩（3）

Book Review on Ryukyu Archaeology (3)

安里 嗣淳
ASATO shijun

多和田真淳

『琉球列島の貝塚分布と編年の概念』『文化財要覧』1956年版、琉球政府文化財保護委員会
影印復刻版 『沖縄文化財調査報告』沖縄県教育委員会監修、那覇出版社、1978年

この文献（以下、主題の論考と言う）は、沖縄考古学の開拓者多和田真淳による最初の本格的な琉球考古学に関する論考であると同時に、初めて沖縄先史古代の編年の体系をまとめ、その後の沖縄考古学研究の道標となった古典的論考である。この論考発表以後、琉球考古学研究の進展によって、さらに古い時期が発見されるなどの追加はあったが、多和田が設定した各時期の前後関係は未だに不動である。新たな証拠の検証によってよりいっそう強化されることはあっても時期の前後の入れ替えはないのである。多和田はどのようにして、このすぐれた論考を生み出すに至ったのだろうか。

多和田は1907年1月7日、首里の崎山で父真徳・母ウトの三男として生まれた。祖父真拳は首里士族で、三線芸能をたしなむとともに財務に通じ、王府にあって経済官僚として出世していった。ある年、上役の薩摩（鹿児島）行に随行して薩摩・琉球間の積荷運賃問題で重要な手柄を挙げたが、上役に横取りされてしまった。後に真拳の手柄であることが判明し、あらためて王府に厚遇され清国への朝貢の一員として遣わされることとなっていたが、準備の途中で廃藩のため取りやめとなってしまった。この無念の思いは明治・大正期になっても消えることなく、真淳は父からその話をよく聞かされたようである。なお、多和田の現在の屋敷はかつての崎山の御殿の一角にあるが、そこは奇しくも祖父の真拳が出世の縁にもなったある祝宴の際に、組踊「村原」を演じた場所であるという。この地は御茶屋御殿のあたりで、別名東苑とも称していた。多和田がこの論考の前身となる新聞投稿（後述）で、「東苑随想」と題しているのはこのことによるが、この由緒ある地に居していることをちょっぴり誇りにし、気取ってみたのかも知れない。

多和田の心象には、この祖父の生涯のことが焼きついていたように思われる。「科（採用試験）を当てて立身したのではなく、粒々辛苦実績によって歩一歩と築いていった」（真淳筆）祖父への尊敬と同情がうかがわれるのである。父の真徳も同じ心情であったようで、真淳が師範学校二部を卒業して晴れて国頭の安田小学校の教員として赴任したときに、首里には下に病気がちの幼い子がいながら、真淳について行って村の人たちに三線を教えながら息子の面倒を見ている。おそらく、真徳のように官員として成功して欲しいという願いを込め、その出発を喜んでいたものと思われる。しかし不幸にも首里に残した幼な子（真淳の弟）は病で夭折し、父は急ぎ首里へ戻る。

多和田は最初から考古学を目指したのではなく、植物学が本来の専門領域であった。その意識は生涯持ちつづけており、退職後は後進の活躍に期待するとして考古学研究にはあまり参画せず、一方では退職間近に一ヶ月分の給料にも相当する高価な外国の植物学文献を購入するなど、植物学研究には生涯を通して情熱を燃やしつづけた。一方で多和田は県立一中、沖縄師範学校本科第二部卒業という立派な学歴を有しながら、不思議なことに自分には学者としての学歴がないと意識していたようである。一中の恩師の言葉「学歴はどうしてもよい勉強さえしておけばいつか役に立つ」を信じ、「・・・

山々をさまよい、植物を観察し実験し標本を作った。学歴はなくともいつかにそなえて、ただあてどもなく、しかしそこには師の面影があった」と後に述懐している。

1926（大正15）年に師範学校卒業後宮崎県の都城歩兵第四十三連隊の一カ年現役入隊中だった多和田は教員採用の通知を受け、国頭村の安田小学校へ赴任した。さらに1928年には中頭美里村の美里尋常高等小学校へ異動となった。私事だが、このとき私の父嗣樽は同校に在学していて、多和田の博物の授業を受けている。多和田はこの地で教師をしていた平田家の娘と知り合い、結婚した。夫人は学問への理解が深く、多和田の植物採集調査に同行し、山野にテントを張って一緒に泊まったという。

（なお、この夫人との娘がさきの那覇市長親泊康晴氏の夫人である。）

1930（昭和6）年、多和田は具志川村（現具志川市、4月よりうるま市）の天願尋常小学校へ異動した。ここで初めて考古学と出会うことになる。1931年のある日同僚の新垣文吉教諭とテニスの後に茶のみ話をしていたら、新垣が「この学校は貝塚の上に建っているらしい」ということを言った。多和田はこのとき貝塚という用語についても知らなかったという。すると新垣は学校の本棚に、大山柏という学者が寄贈した『伊波貝塚発掘報告』という本があるということを見せてくれた。こうして多和田は初めて考古学という学問に出会ったのである。なぜ、この小学校に伊波貝塚の発掘報告書があったかということ、大山は美里村伊波（現石川市、4月にうるま市）の貝塚を調査した際、天願を訪れて小学校保管の石斧を貰い受け、これを同報告書に付録として実測図を掲載したという経緯があったからである。多和田はこの報告書をむさぼるように読み、しばらくは夢にまで石器や土器のことが出てきたという。そして夏休み前のある日、子どもたちと運動場で体操をしているときに、土手の赤土断面の中に黒い帯の層があることに気づき、その中から土器片を発見したのである。子どもたちと一緒に貝塚を見つけたと大騒ぎになり、もはや授業にならなかったというが、すでに当時から天願貝塚は残っていないといわれていたのが、まだ残っていることを確認したのである。

こうして多和田の沖縄考古学研究への関心はさらに高まった。戦後になって、多和田は自分が考古学を始めたのは昭和7年頃だとよく話していたが、『沖縄県史』の「考古学」の項で高宮廣衛が、そのことを示す「徴すべき史料はない」と記したように、戦前期には考古学に関する論考は執筆されていない。1956年に執筆した標記の論考に長浜貝塚の発見年が昭和7年となっているが、同時代史料ではない。ところが当時の新聞記事が発見され、確かに多和田がその頃植物採集のかたわら考古学研究をしていたことが判明した。ただし、長浜貝塚の発見年は多和田の記憶違いで、昭和8年の10月28日である。いずれにせよ、多和田は1931（昭和6）年に天願小学校在勤時に考古学に関心をもちはじめ、翌年に美東小学校に異動となってから自転車で勝連城跡に、さらに翌年には具志川や宮城島にも赴いて遺跡を発見している。そういうなかで1933（昭和8）年に読谷村の長浜貝塚を同地の与古田幸吉訓導（教諭）とともに発見し、県立図書館の宮里栄輝の世話で当時の新聞11月7日号に大きく報道された。このことがきっかけとなって、同年12月12日（日曜日）に沖縄の教育・文化界の有志に生徒を加えて、約20人が大挙して長浜貝塚の発掘をおこなったのである。

多和田はその後はるか遠くの八重山西表島の小学校へ異動している。1937（昭和12）年の夏休みに3回目の西表島植物調査をおこなった多和田は、現地に長期滞在して研究したいと考え、同地への転任を希望していたのが実現したのである。ただし、それは教育界で起こった事件の巻き添えを食った形の「島流し」であったが、多和田は晴の栄転となったと回顧している。多和田はいささか負けん気の強い性格で、この事件から派生して勤務校で「乱闘劇のしゅう態を演じた揚句の果」（多和田筆）の転勤だったようだ。私の親戚から聞いた話だが、多和田が美里小学校勤務の頃に、知花の白川屋取（ヤードゥイ）のある父兄宅で口論となり、突然天井の電灯を飛び蹴りで割って父兄を唾然とさせた

という。血気盛んな青年教師であったようだ。負けん気の強さは、後に西表島から首里の県立第一中学校の教諭として迎えられたときにも発揮されている。当時一中の生徒だった沖縄考古学の確立者高宮廣衛は、ある日生徒の授業態度に怒った多和田が突然机の端を素手で叩き割って生徒を震え上がらせたというエピソードを私たちに語ったことがある。

また、1966年頃宇佐浜遺跡の発掘の際、多和田の勤務先である琉球政府文化財保護委員会の真栄田義見委員長が現地視察に見えたときに、多和田の負けん気に直接接する機会があった。多和田が土器を手にとって「これは焼きがキジャクです」と説明したところ、漢学者の真栄田委員長が「ゼイジャク（脆弱）」と読むんですよ」と返したので、多和田の立場がなくなってしまった。その日はずっとそのことを気かけ、本当にキジャクではないのかと自問し続けていた。そして晩になって、多和田の指示で当時学生の私は大学寮で同室の学生、辺戸出身の新垣君の家から辞書を借りてきた。辞書でやはりゼイジャクだと知った多和田は盛んに悔しがり、側で高宮がなぐさめていた光景を覚えている。

話は元に戻るが、多和田の八重山転勤は確かに本人の望むところであったろう。もともと植物調査ですでに三度も訪れた地であり、3回の八重山行と西表の小学校勤務の体験は、多和田の学問の裾野をさらに広げることになった。当時石垣島には八重山の歴史・民俗学者喜舎場永珣や气象台の岩崎卓二らがいた。多和田はすでに調査旅行時からかれらと盛んに交流し、八重山に出入りする本土の研究者とも接触していた。この八重山での体験が、多和田に歴史・民俗の分野にも関心と知識を深めさせたものとみられ、後に多岐の分野にわたる論文を生み出すこととなった。しかし、主題の文献によると、多和田が長期に滞在した戦前期には意外にも考古学的な遺跡はほとんど発見していない。この頃は八重山においては県外からの学者も含めて「あの頃、日本生物学界の八重山研究熱ははげしいもので」（多和田筆）あったようで、多和田の関心はもっぱらその植物学方面に向いていたのであろう。多和田には同じく小学校教師の夫人も同行している。

半ば処分のごとき西表小学校赴任であったわりには、早や一年後の1939（昭和14）年には教頭に昇任している。その後1943（昭和18）年に長男の県立一中受験の引率で同校を訪れたところ校長から生物教師として請われ、4月に首里第一国民学校訓導の籍で県立一中の植物学嘱託教授となったのである。夫人は西原国民学校へ異動となった。このときに先述したように高宮廣衛と師弟として出会うのであるが、すでに戦時体制下のことであり、もっぱら防空壕掘りばかりだったとのことである。

多和田の戦前における八重山行を整理してみる。

1933（昭和8）年（第1回調査） 1936（同11）年（第2回調査）
1937（昭和12）年（第3回調査） 1938（同13）年～1943（同18）年3月（勤務）

沖縄戦に巻き込まれた多和田は家族のうち7名も失い、本人は東風平の八重瀬で米軍に捕らえられ、さらに玉城村百名に収容された。このときかなり衰弱し、死をまつばかりの身であったと述懐している。一命をとりとめた多和田は知念ハイスクール（当時はそう呼んだ）の新設に参加し、教官となった。しかし翌1946年には早くも植物研究を再開し、民政府に移って沖縄の牧野富太郎ともいわれる園原咲也の沖縄植物誌編集を助けた。同年秋には首里ハイスクールの教官となったが、戦禍の沖縄の生活は苦しかった。こういう時に多和田は、「天地総べてが無精に好きで無限の愛着を感じてならない」「第二の故郷たる八重山」（本人筆）への移住を思い立つ。当時の沖縄民政府でも八重山移住計画がもちあがり、多和田は移住地視察団の一員として早くも戦後1948年に八重山を再訪することができた。

八重山への移住を決意した多和田であったが、状況は変わり農務部長の当間重剛に誘われて農務課技師となり、自分自身ではなく農業開拓移住者を送り出す側の担当となった。こうして教員生活23年の幕を閉じ、技術分野の行政官へと転身したのである。移住担当者として多和田は単身で石垣島西部

(いわゆる裏石垣)の山野をかきわけ、海岸で野宿をしながら移住適地の調査をした。

ところが1949年、小禄(現在の那覇空港近く)に琉球林業試験場ができると、苗畑勤務の兼務職となった。1950年からは専任の林業技術員養成所技官となり、1953年には林業試験場長となった。そして1959年に琉球政府文化財保護委員会主事、後に専門官となるのだが、この林業関係の職にあった1956年に主題の「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」が発表されたのである。なぜ多和田はその後の文保委事務局勤務中でなく、その前にこの論考をまとめることができたのだろうか。実は多和田はこの林業職にあった頃に奄美から八重山までの調査旅行を行っているのである。1951年には3ヶ月間にわたって米国スミソニアン研究所のオーカー博士のガイドとして沖縄本島から与那国島に至るまで植物採集調査をおこない、1952年には発足間もない琉球大学の高良鉄夫を主班とする尖閣列島生物調査団の一員として1ヶ月間参加し、石垣島での船待ちの日々は八重山の喜舎場永洵を訪ね文献を渉猟している。

多和田は1953年の暮れの12月に約1ヶ月間、奄美の島々の調査旅行をおこなった。林業試験場長の身分で林業調査であったことから、奄美の各地で林業関係者の歓迎と世話を受け、植物調査の傍ら遺跡調査をおこなった。この時の訪問地は次のとおりである。多和田の主題の論考の生まれた経緯としてあえて詳細を記す。

1953年12月2日 那覇港を午後1時に出港したが波が高く、8時間半も航行の末途中から引き返して瀬底島の東側に避難。

3日 午後3時瀬底東岸を出港

4日 午前11時半名瀬港着・名瀬泊

5日 午前9時に名瀬を立ち、12時半に新村着。八野国有林調査

6日 12時半新村発、午後4時古仁屋着

7日 海津崎で植物採集

8日 雨天で調査できず 夜7時半出帆、夜9時篠川着

9日 篠川発新村に向かう。途中杉苗畑を視察。新村着

10日 新村発湯湾へ向かう。植物調査

11日 湯湾発、湯湾岳の植物調査、夕方福本移住集落に行き、住民と懇談し、開拓民の苦労話を聞く

12日 福本発、大兼久・音勝着

13日 岩崎山で植物採集、川岸で1 m50cm大のハブをしとめる

14日 音勝発名瀬着、後に自動車で名瀬発赤木名着、郷土博物館の山下氏も同行、宿泊

15日 赤木名から宇宿へ、さらに笠利へ。宇宿貝塚で土器発掘。

宇宿小学校長松田氏の好意を受け、宿では名瀬警察署長と同宿。村の有志も集まって酒宴。

16日 笠利発、用、佐仁調査。佐仁小学校長安田氏の世話になる

17日 宇宿貝塚発掘、宇宿小学校長・職員の助けを得る。

18日 赤木名発名瀬着、大島支庁の林務課訪問、郷土博物館で考古資料を撮影。夜は職員の下山氏宅で夕食と資料閲覧。山下氏は熱心なる郷土研究者也との印象を受ける

19日 午前9時の船で名瀬発、喜界島着。菅原神社一帯に貝塚を発見。

- 20日 湾発小野津へ向かう。途中伊佐根久集落が貝塚らしく感ずるが確認できず
- 21日 中里集落の砂丘貝塚調査。帰途再び菅原神社貝塚を調査
- 22日 (この日に関する記事不明、安里注)
- 23日 午前10時喜界島発(天神丸)、午後2時名瀬着、名瀬の苗畑視察
夜は博物館の山下氏と11時まで歓談
- 24日 午前10時名瀬港発、夜8時半亀徳港着
- 25日 営林所はクリスマスのため電話不通、人伝に所長の宮古氏を訪問。午後所長と米田氏の案内で徳和瀬苗畑を視察。
- 26日 亀津小学校長、中学校社会科教員、米田氏らと面縄貝塚調査、喜念県道筋古墓発掘跡を見学
- 27日 三京(みきよ)へ向かう。徳之島営林所長、米田、福富、玉本、小中学校教員らと山野を調査。夜は三京の老人の郷土音楽とシイタケ料理のもてなしを受ける
- 28日 シイタケ人工栽培視察、母間へ向かいながら林道で植物採集。母間から四分の三トラックで亀津へ帰る。夜は忘年会に招かれる
- 29日 午前中、亀津小学校・中学校の植物鑑定。午後5時半亀徳港出港
沖繩へ。30日朝7時半那覇の安謝港に入港。帰任

この奄美調査行の経緯と遺跡分布の記録は、奄美からの帰任9日後の1954年1月8日に沖繩の地方紙に発表されたものである。内容は一、筆を執る様になった動機、二、旅日記、三、貝塚分布となっている。帰任直後にすぐ発表したのには理由がある。当時沖繩と同様に米軍の統治下にあった奄美諸島が、「クリスマスプレゼント」だとして、1953年末に返還され、その後鹿児島県側から復帰後すぐに奄美諸島の文化財調査を実施すべしという動きが見られたからである。このことを報じた新聞記事を読んだ多和田は「大なるショックを受け、矢も盾もたまらず筆を執った」のだという。おそらく多和田としては自分が先に調査をしたという記録を公にしたかったのであろう。これは多和田が植物学者であったこととも関係しているとみられる。植物学の場合新種発見は大きな功績であり、発見者の名が冠せられることもある。いわゆる功名心も働いたと思うが、先鞭をつけた人すなわち発見者を重視する姿勢は、主題の文献に各遺跡ごとに発見者名が付されていることから頷ける。多和田はこの奄美調査記録を「東苑随想」と題し、副題に「奄美大島の貝塚分布」としている。なお、同年3月10日に掲載した副題「沖繩列島の貝塚分布」も主題は「東苑随想」で、その二としている。

多和田はこうして林業試験場長の立場で各地をまわり、ついでに遺跡も探訪して沖繩・八重山・奄美の先史古代のイメージを形成していくのだが、一方では関連文献も調べていたことは、主題の論考に掲載された各遺跡について、古い文献に拠る鳥居龍蔵、国吉真哲、大山柏等、戦前に発見した人の名が記されていることから知ることができる。

一方、この論考には宮古諸島の遺跡はたった一カ所しか挙げられていない。これまでの記録を追う限り、どうやら多和田はこの論考発表までは宮古諸島に足を踏み入れていなかったようである。その理由を考えると、ここでも多和田が植物学者であることが関係しているようだ。植物学の宝庫たる八重山諸島には強い関心を示したが、主に石灰岩地帯の植相からなり、深い山地にも乏しい宮古諸島には、研究上も林業試験場の業務上も訪問踏査する機会があまりなかったのではないかと。宮古の遺跡について多和田はさきの新聞投稿記事で「宮古諸島は地下水が極端に低いため調査は困難を極めるのは必定である」と述べている。石灰岩地帯の陥没ドリーネに見られる宮古特有の「降井＝ウリガー」のことを指しているのであろうか？。いずれにしても戦前期における多和田の最大の関心は植物学にあ

り、遺跡探訪は読谷村長濱貝塚以外はほとんど植物調査のついでだったとみられる。

さて、多和田の論考の内容に移ろう。論考の前文（または総説）に首里王府編纂の正史『球陽』にみられる太古混沌たる時代、東の海の波は西の海へ、西の海の波は東の海へ越えていったという記述は作りごとではなく、地殻変動のことを表しているとする書き出しがある。これはこの論考が最初ではなく、さきに紹介した奄美調査記録の新聞発表の三、貝塚分布の書き出しに同様の主旨の記述がみられる。『球陽』から説きおこすところは、さきに述べたように八重山調査や在勤時代に歴史・民俗分野の学者とも交流し、幅広い知識と関心をもっていたことに根ざすものであろう。

また、沖縄の先史文化については日本の縄文文化に含まれるべきもので、一括して琉球式縄文土器と総称したうえで、各土器型式を設定するとしている。さらに農耕の問題については植物学を専門とする立場から、先史時代に稲作以前にヤムイモ系の栽培植物があったと推定している。この説は今日でも魅力的な仮説であるが、未だに解決をみていない。

ところで、多和田のこれらの前文はさきに紹介した新聞投稿「東苑随想」の「奄美大島の貝塚分布」（1954年1月8～14日・沖縄タイムス）と、「東苑随想 その二」「沖縄列島の貝塚分布」（1954年3月10～14日・沖縄タイムス）に同様の主旨の表現がある。『球陽』に関することは前者の記事に、縄文土器に関することは後者の記事にある。したがって、1956年発表の主題の論考は1954年春の時点ですでに準備されていたもので、それをふまえて一部手直しや追加のうえ、あらためて『文化財要覧』に掲載したものであることは明らかである。

本文の前ページには自ら設定した14の土器型式を写真によって示し、時期区分（編年）表を遺跡例とともに掲げている。さきの奄美調査報告の記事と沖縄の遺跡分布の記事には土器の型式や時期区分のことはふれていない。そうすると1954～1956年の間に、多和田は土器型式と時期区分の概念を構築した可能性がある。ここで想起されるのが、1954年の金関丈夫・国分直一らの波照間島調査への同行である。多和田が本格的な考古学者による発掘調査に参加するのはこのときが初めてであり、寝食と発掘を共にしながら、おそらく層位学や型式学などの考古学の方法をかれらから学んだのではないか。層位学については、1955年2月26～27日に『沖縄タイムス』に掲載された「祖先の足跡—琉球の貝塚について」の投稿記事で「貝塚の遺物は下になる程時代が古いのでありますから之を発掘する場合極めていねいに注意深くやらねばなりません」ということを述べていることから窺える。型式分類はかれらからひとたび方法を学び取ると、多和田の植物分類学に裏打ちされた観察眼によって、比較的容易に把握できたことだろう。多和田にとって土器のそれぞれの特徴を捉えることは、植物学の延長上に位置するものであった。

多和田は戦前期の1933（昭和8）年に読谷村長濱貝塚を沖縄の教育・文化関係者とともに踏査したとき、参加者が手当たりしだいに貝塚を掘るのを制し、専門的な調査法があるはずだとして途中で止めている。多和田には考古学の方法を尊重する姿勢がすでに当初からあったのである。したがって、波照間島の調査で金関・国分らと接した期間に、積極的に考古学の方法を学んだであろうことは十分に推察できる。したがって、多和田が本格的に考古学の論考を著す契機となった交流としての意義をもっているといえる。

なお、多和田が幅広い学問分野に関心を寄せたのは、戦前の八重山における歴史、民俗分野の人々との交流が影響していることは先述したとおりだが、この戦後最初の沖縄考古学の出発点となった波照間島調査における交流体験も、ますますその傾向を強めたものとみられる。それは、金関丈夫・国分直一両名とも、周知のようにグローバルな学者であり、多和田はそれを身近に感じたはずである。多和田が金関・国分両学者の沖縄考古学への貢献を高く評価していたことは、私が同席した体験から

も指摘できる。1970年代前半のある日、沖縄考古学会月例研究会の席で、学生を含む数名の若い会員が「ヤマト学者の侵略発掘反対」を唱え、単なる資料提供者として扱われている沖縄側の我々はこれに抗議すべきだと主張して紛糾したことがあった。その時、それこそヤマトから来た考古学者の案内役を務め、貴重な情報あるいは成果を惜しげもなく提供してきた多和田が、若者たちに向かって諭したのである。「たしかに見方によっては、私たちの努力の成果を奪われたという言い方もできる。しかしやはり考古学の方法を教えてもらったおかげで、地元の研究者も育ってきたのだ。ヤマトから来た考古学者の果たした役割を評価しなければならない」。

多和田は主題の論考で時期区分（編年）とともに、その基礎となる土器型式を設定しているが、さきに紹介したその2年前の新聞投稿では各遺跡と伴出土器の特徴には気づきながらも、土器型式の設定には至っていない。例えば奄美の喜念貝塚の項では土器の特徴を「口縁が丸くて厚く殆ど現在琉球で使用されている那覇市壺屋製の壺の口を思わせるもの」

と表現しているが、主題の論考では「宇佐浜式」の表現となっている。（現在では宇宿上層式が妥当であろう。）また、沖縄地域の先史土器についても「琉球普通の縄文土器」という表現になっているが、主題の論考では川田原式・伊波式・萩堂式・平安名式などの型式名を使用している。これらのことからすると、主題の論考の基礎になったのは2年前の新聞投稿記事だが、時期区分や土器型式の設定にいたったのは、その後ということになる。主題の論考では琉球最古の先史文化は萩堂式・伊波式土器などを主とする前期となっている。周知のように当時は未だそれ以前の時期の発見はなく、日本の縄文後期に相当する時期が最古とされていた。一方で多和田は「萩堂式は九州の曾畑式に似通った所がある」とも記している。幾何学文様の印象からの印象であろう。

弥生文化との関連については、後期上半期の宇佐浜式土器文化期に、九州方面から新たな稲作農耕文化を携えた集団が沖縄に渡来してきたという理解をしている。そのような認識が前提になって多和田の「後期」の概念が存在するのである。多和田は沖縄先史文化の流れを大きくふたつにとらえ、萩堂・伊波式土器文化は縄文文化の系譜に属し、大山式土器文化まで続き、宇佐浜式土器文化期からは弥生文化期に相当するという認識のように理解される。そして丘の上に立地する宇佐浜式土器文化期を後期「上半」に、砂丘に展開する時期を「下半」に位置付けたのである。これはその後1961年に高宮廣衛が『沖縄文化』第4号の「沖縄本島の先史文化」のなかで多和田編年の後期上半を中期にし、さらに後に日本縄文時代の晩期に平行する時期として、沖縄先史時代を大きく区分する時代の終末に位置づけたのとは認識が異なる。多和田は新しい時代の開始期とし、高宮は古い時代の終末期としたのである。

ところで、多和田が宇佐浜期に農耕がもたらされたとするのは想定にすぎず、沖縄の稲作の開始あるいはそれ以前に想定されているヤムイモ栽培の存在については、実際には未だに証拠に乏しく解決されていない。農耕の問題に関しては、多和田が主題の論考でしばしば触れているが、根拠に乏しい推論もみられるのである。しかし、そのような問題を含みながらも、今日の研究成果からみて、多和田が後期「上半」から後期としてくくったことは再評価されねばならない。遺跡の立地、集落の規模、構成、土器型式などにそれ以前との相違や、それ以後との類似がみられるのである。

主題の論考で多和田は遺跡をほとんどを貝塚と称している。グスク跡の遺跡も貝塚としている。多和田の編年はこれらの「貝塚の編年体系」であって、先史時代とその後を分けた時期区分ではなさそうである。したがって、遺跡のすべてを貝塚と捉える以上、貝塚編年の一時期としてグスク時代は晩期という概念になるのである。一方で貝塚土器なる用語が出てくるが、それは先史土器を意味しているようである。また、土器型式を写真で示しながら、その概念規定をしていない。これが後の研究者

を悩ませることとなり、いくつかの型式は使用されなくなってしまった。このような混乱やあいまいさは、当時の沖縄考古学界の水準を示すものかもしれない。

高宮が1961年に多和田編年を修正したのは上述のとおりだが、多和田がこれを認知していなかったのは、1967年『考古学ジャーナル』第15号「沖縄の先史時代」で、自己の編年体系を使用していることから窺える。それから数年後に多和田は考古学研究の一线から退いているので、おそらく生涯その考え、とくに「後期」の上半・下半の括り方、分け方はゆずれないものだったのであろう。

(あさと しじゅん：所長)

紀要

沖繩埋文研究 3

発行年 2005年(平成17)3月30日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

印刷 (株)東洋企画印刷
〒900-0024 沖縄県那覇市古波蔵4-1-1
TEL 098-831-7404 FAX 098-931-9958

BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL STUDY OF OKINAWA No.3

Original Articles

- Compilation of Stone Clusters in Okinawa Shell-mound PeriodAzama Mitsuru (1)
Bone Arrowhead-like Objects of the Gusuku Period in
Miyako and Yaeyama ArchipelagoesMORIMOTO Isao (15)
Bone Artifacts from Sakishima DistrictKUGAI Mitsugu (29)

Reports

- Compilation of Excavated Dugong Bones (Supplement 1)MORIMOTO Isao (39)
Primary Investigation into discovering Sunken Ships in the Southwest Island (II)
-Underwater artifacts and marine transportation
.....MIYAGI Hiroki KATAGIRI Chiaki · HIGA Naoki · SAKIHARA Tsunehisa (43)
A Stone Anchor Found Underwater Near the Anchi Beach in Sesoko Island,
Motobu-choKATAGIRI Chiaki · HIGA Naoki · SAKIHARA Tsunehisa (61)
Possible 'Haji Ware' Found in Kobiki-mon Sector in Shuri Castle Site
.....SETO tesuya (71)
New Perspective on Chinese Ceramics Unearthed in Okinawa of the 14-16c
.....ARAKAKI Tsutomu · SETO Tetsuya (79)
Settlement Sites in Tarama IslandYAMAMOTO Masaaki (99)
The Archaeological Excavations on Okinawa islands During 1972~2005
.....ASATO shijun (107)
Book Review on Ryukyu Archaeology (3)ASATO shijun (121)

2005

OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER